

3.000 社会通 河原書店 53.11.9  
オフ・レ

地域研究第20集



# 峡谷と高原の生活

— 岡山県川上郡川上町 —

361.7

C

21101170630

岡山大学附属図書館

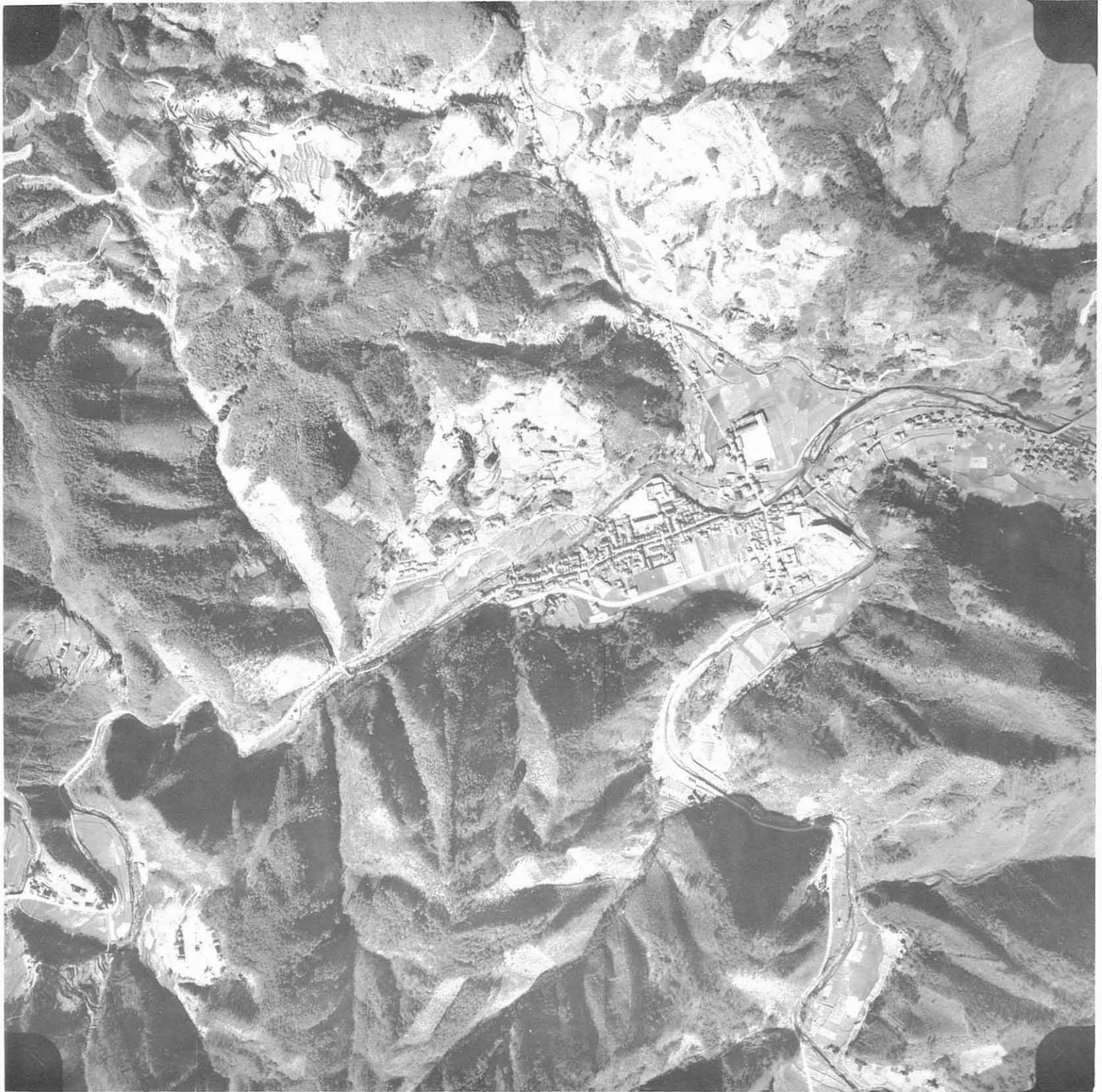
ソ一6602

岡山大学教育学部社会科教室内地域研究会

# 川上町全図









大賀の押被（仁賀 小谷ヶ市）



弥高の雲海（高山市）



ブドウ畑（下大竹）



煙 草 畑 （ 下大竹 ）



育牛センター（ 高山 ）



育雛センター（ 上大竹 ）



川 上 町 役 場



川上町山村開発センター



コミュニティハウス



備中神楽（文化庁選定の無形文化財）



穴門山神社（県指定名勝）



川上中学校



## は し が き

岡山大学教育学部地域研究会の第20集の調査報告書として「峡谷と高原の生活——岡山県川上郡川上町——」を公刊する。

調査地域は吉備高原の一部をなす川上町である。本町は、昭和29年4月1日、旧手荘町、大賀村および高山村の3ヶ町村が合併し、川上町として発足した。われわれ地域研究会は、この地域の人々がその自然的・社会的条件の中でどのような生活を営んできたか、また現在どのような生活を営んでいるかを、地理・歴史・地方自治・経済・社会・文化・教育等の諸分野から総合的に研究してきた。特定の地域をこうした研究方法によって調査するようになったのは、戦後、ミシガン大学の日本研究所のブランチが岡山に設立されたこともあって、アメリカの共同研究が高く評価されたこと、社会科の発足と共に調査・見学等のフィールド・ワークが採用されたことなどによるところが大きい。今回の調査は、「地域研究」が実施されるようになってから20年目に当り、その間を回顧するとき、まことに感慨無量なものがある。

川上町を調査対象地域として決定したのは、昭和50年5月ごろであり、実際に調査したのは同年7月24日から28日までの4泊5日間である。参加したのは、主として3年次学生39名、卒業生2名、教官9名（内1名は非常勤講師）、計50名である。調査終了後、報告書の標題についていろいろと討議してきたのであるが、川上町を地域全体として特徴づける言葉として「峡谷と高原の生活」が最も適しているということになり、このとおり決定したわけである。なお、「地域研究」という題目は、学生にとっては必修であり、かれらに調査の理論と実践とを体得させることを目的としている。学生たちは、炎暑にもかかわらずよく頑張り、調査および資料研究を行なった。調査終了後もかれらは必要に応じて再度現地におもむくなどして、補足調査を試みた。

本調査は学生にとってはじめての共同研究であり、未熟な点もあって必ずしも十分とはいえないが、川上町の調査報告書がここにできあがったのは、三宅忠雄町長、吉本孝也元町長、三村治男元助役、三村義弘教育長をはじめ、役場・教育委員会・公民館・山村開発センター・小学校・中学校等関係各位ならびに町民各位の温いご協力の賜と深く感謝している次第である。本書が将来町史編集その他において何らかの役に立つことがあれば、望外の喜びである。

## 発刊に よ せ て

川上町長 三 宅 忠 雄

昭和50年7月から2年余の歳月をかけ、わが川上町の歴史的変遷および現在の情勢を岡山大学教育学部社会科教室の地域研究班の方々によって、ここに「峡谷と高原の生活 ―岡山県川上郡川上町―」が発刊の運びになりましたことは、喜びに堪えません。関係者に対し衷心より敬意と感謝を申し上げたいと存じます。

世は国際時代となり、国の内外に数々の問題をなげかけていますが、こうした視野にたって広く情報を求め推移を見守る時代であります。一方又ふるさとを探究し、先人の歩んだ産業文化を知りたいという複雑な両面的時代であります。こうした時に私たちの町の伝統と歴史を通じて町民各位にふるさと川上町を紹介し、現状をとらえ、将来に向ってよりよき町を発展させたいものと念願致します。産業を興し、教育を振興し、福祉を充実しながらお互になごみ、はぐくみあい、うるわしい郷土を築き上げたいものであります。こうした意味で本書がより多くのかたがたに愛読され、健康で豊かな郷土を築く心の糧ともなれば幸と存じます。関係者各位のご協力に感謝申し上げ、発刊のことばといたします。

## 調 査 参 加 者

### 参 加 指 導 教 官

三 浦 道 三 郎

米 村 昭 二

高 重 進

高 橋 達 郎

行 安 茂

田 中 史 郎

山 内 峰 行

宗 田 克 己

中 野 美 智 子

### 参 加 卒 業 生

森 元 辰 昭

在 間 宜 久

### 参 加 学 生

上 野 保 穂

太 田 郁 子

尾 銭 晴 子

小 野 尚 代

加 賀 み どり

春 日 素 子

岸 本 公 江

佐々間 妙 子

佐々木 喜 美 子

佐々野 啓 子

貞 頼 恭 子

佐 藤 元 美

砂 山 い づ み

田 中 洋 子

谷 口 正 子

中 島 英 喜

中 村 由 美 子

鍋 谷 洋 子

浜 崎 安 子

林 和 子

林 亨

平 松 寿 美

藤 井 三 子

二 岡 潤 一

光 藤 五 月

村 上 玲 子

山 崎 由 利 江

吉 尾 恵 子

今 城 雅 洋

丸 尾 幸 一

今 井 史 苗

金 盛 孝 泰

佐々木 純 二

谷 本 幸 代

近 廣 和 恵

永 山 由 紀 恵

房 宗 幸 子

山 根 順 子

渡 辺 武 仁

# 峡谷と高原の生活 — 川上町 — 目次

第 1 章	自 然 環 境	1
1	川上町の概観	1
2	川上町のカルスト地形	6
3	大賀デッケン — 複雑な地質構造 —	14
4	山砂利層と高原上の孤立峰	20
第 2 章	人 口	25
1	人口構成	25
2	人口異動	46
第 3 章	原始・古代・中世の川上町	65
1	原始・古代の開発	65
2	土豪勢力の動き	71
第 4 章	近世の川上町	79
1	領主の系譜と支配	79
2	地方支配の機構と機能	89
3	地方支配の展開	95
4	農民の生活 (1)	107
5	農民の生活 (2)	131
第 5 章	地方自治の展開	159
1	川上町の沿革	159
2	町政の変遷	163
3	財政の消長	170
第 6 章	交通と通信	185
1	交 通	185
2	郵便と電信	208

第 7 章	経 済 構 造	219
1	農業生産力の発展と農民層の分解	219
2	戦後における農業の動き	265
3	特殊作物と畜産の動き	281
4	川上町の林業とその歴史的発展過程	291
5	農業団体	305
6	鉱工業	317
7	商 業	335
第 8 章	社 会 構 造	385
1	家族構成	385
2	家族の役割分担と権威構造	387
3	家族をめぐる問題	403
4.	同 族	408
5.	村 落	414
第 9 章	宗 教 と 民 俗	423
1	社 寺	423
2	民俗と年中行事	436
3	伝 説	442
第 10 章	川上町教育	447
1	近代小学校の成立	447
2	現代川上町の学校教育	459
3	社会教育	470



## 第1章 自然環境

### 1 川上町の概観

#### (1) 地形・地質の概観

夜明けの高原は夏でもひんやりしている。弥高山ロッジを出発し、露深い草を踏み分け真黒なクロボクの道をたどり、渦巻き状に山をめぐって15分も登ると、小さな広場にたどりつく。弥高山山頂653.6mである。ここが川上町で最も高い。見はるかすと、黎明に浮かびあがるのは、薄曇をはいたかのような山山の連なりと、それらをへだてて谷あいから立ちこめるしらじらとした霧である。山なみと朝霧とが幾重にも重なって、そのさまは一幅の墨絵を見るようである。朝の冷気が汗ばんだ肌にこころよい。

日がさしのはると、弥高山からの眺めはまたたくまに現実にひきもどされる。波うつように連なり広がる吉備高原の山なみがその容貌をあらわす。波浪状の高原上に、高山、七地、野呂、神野、仁賀など、ふりかえっては高山市などの集落と畑地とが散在している。川上町の大部分は、まさに吉備高原にある。一方、高原のなだらかさとは対照的に、高原を刻む谷々は深い。その急な谷の斜面は森林に覆われている。谷間の低地の多くは、この山頂からは見えないが、そこには水田が開け集落がある。それらの谷が集って領家川の谷底平野がやや広くなるところに、川上町の中心集落である地頭が位置する。

岡山県川上郡川上町は北緯 $34^{\circ}40'50'' \sim 34^{\circ}46'32''$ 、東経 $133^{\circ}21'12'' \sim 133^{\circ}31'57''$ の間に位置する。行政区画からみると、岡山県の西端の一区を占め、南は後月郡芳井町に接し、北は川上郡備中町、東は川上郡成羽町に接する。西端は広島県との県境に接している。面積は87km<sup>2</sup>である。高度別概算面積をみると、200～400mは49km<sup>2</sup>(6割近く)で最も広く町域の南東半分を占め、次いで400～600mが28km<sup>2</sup>(約3割)で北西側の高原である。100～200mの地域は10km<sup>2</sup>で1割にすぎない。領家川の谷底平野のほとんどはこの高さに位置する。600m以上では小さな孤立峰の弥高山(653.6m)と高山市の西から県境につづく小起伏面の尾根部の僅かな部分とがある。

この町域で、吉備高原は西部で高く、杖立付近の県境一帯や高山市付近には海拔500～600mの波浪状の浸蝕小起伏面があるが、東にむかって低くなり、高山、神野、高瀬、佐屋、七地などで450m前後に浸蝕小起伏面が広がる。岡田篤正(1966)の地形面区分に従えば、前者は吉備高原面、後者は瀬戸内Ⅰ面となる。これらの浸蝕小起伏面の形成については次項でのべる。

川上町域の水を集め、吉備高原を下刻する水系は、成羽川の支流で、そのうち領家川(大竹川、三沢川などを集める)の水系が町域の大部分を占める。領家川は、川上町北東端をかすめて東流する成羽川に、東町で合流する。川上町北部は、2, 3の成羽川支谷の水系に属するところがある。

川上町の地質の概観は次の通りである。南部には三郡変成帯に属する準片岩類(千枚岩、黒色片岩、

緑色片岩など)がみられ、北部では、古生代後期の石灰岩、輝緑凝灰岩、粘板岩などが分布する。高山から高山市付近は石灰岩の台地であり、カルスト地形が認められる。カルスト地形の詳細については2で述べる。中部は中生代上部三疊紀層(成羽統)よりなる。大賀デッケンとして注目をあつめた古生層と中生層との構造に関しては、3で詳述する。新生代の地層としては、いわゆる山砂利層がいくつかの異なったレベルに分布している。高瀬層もその一つである。また、高原上に孤立峰をつくっている玄武岩がある。弥高山と須志山がそれである。山砂利層と玄武岩については、4で述べる。

## (2) 吉備高原の形成過程

吉備高原の形成過程については、いろいろ研究されてきたが、ここでは岡田篤正(1966)が調査し、吉川虎雄ら(日本地形論-1973)によって整理された見解を以下に紹介する。

広島・岡山県境付近の吉備高原から瀬戸内にかけては、4つの水準の浸蝕小起伏面に区分される。

①吉備高原面500~700m, ②瀬戸内Ⅰ面300~450m, ③瀬戸内Ⅱ面150~300m, ④瀬戸内Ⅲ面100m以下である。吉備高原中部は、新見東方から南南西にのびる線を境として、地形および高さのやや異なる2つの地域に分かれる。北西側の地域は500~700mの高原状の山地からなり、ここにひろがる浸蝕小起伏面が岡田の命名するところの吉備高原面である。南東側の地域には300~450mの浸蝕小起伏面がひろがり、ところどころに500mを越える山地が散在するが、その南縁はかなり急に低くなって瀬戸内低地帯に降っている。この地域にひろがる浸蝕小起伏面を岡田は瀬戸内面群とよび上述の3つに細分した。吉備高原面と瀬戸内面群との境をなす北北東~南南西のやや傾斜の大きい地帯は、地殻変動によってつくられたものではなく、浸蝕によって形成されたものと考えられている。

この地域の地形発達は次のように考えられる。吉備高原面形成後、吉備高原は曲隆して開析されたが、その後、谷は礫層によって埋積され、さらに玄武岩が流出した後に削剝されて瀬戸内Ⅰ面が形成された。瀬戸内Ⅰ面形成後、吉備高原は、井原の北方の東北東~西南西の線にそう撓曲をともなって隆起し、その結果、瀬戸内Ⅰ面は開析され、深さ100m以上の谷が刻まれ、瀬戸内Ⅰ面形成期までは現水系と交差していたかつての水系は、この時期に、河川の争奪などによって変化し、ほぼ現状に近いものとなった。その後、この谷は厚さ50m以上の礫層に埋積され、これを削剝して瀬戸内Ⅱ面が形成された。再び中国山地の隆起にともない、瀬戸内Ⅱ面は開析され、その南縁に瀬戸内Ⅲ面が形成されて、ほぼ現状に近い地形となった。

このように、岡田のいう吉備高原面形成後、この山地は、その南縁における撓曲をともなって曲流し、瀬戸内面群が形成されるとともに、瀬戸内低地帯の概形もつくられてきた。この過程において、少なくとも2回深さ100mの谷の下刻と、礫層による埋積がくり返しおこっている。その時代についてはまだよくわかっていないが、第三紀末から最新世前期ではなかろうかと考えられている。

(高橋達郎・山根順子)

### (3) 高原の地形とくらし

弥高山の山頂から西のふもとを望むと、西にのびる一本道にそって細長くのびた集落がある。これがかつて高原の市として栄えた高山市である。隆起準平原といわれる吉備高原上には、老年期的な山と旧輪廻の浅い皿状の谷とが波浪状に広がっている。平地に乏しい谷間よりはこの高原の広い緩傾斜面を耕すことによって、人々はそこに住みつき集落ができた。「一布賀二神野三高原四高山」という言葉がある。比較的豊かな村々であったことのいいであろう。これらはみな高原上の村である。こうしたはやし言葉があるのは、これらの集落が石灰岩台地上にあり、土壌にめぐまれ、畑作物がよくとれるところであったからと思われる。同じ吉備高原上においても、地の利の上下があり、日南（日名・日向）<sup>おんじ</sup>陰地という地名がいたるところにある。日南とは陽表の意で、南面する微高地にあり、日射も朝早くから受けられ、さらに冬の季節風もいくらか軽減でき、農業にも生活にもめぐまれた位置にある。これに対して、陰地とは、北に面した山の斜面で、陽裏にあたり、日光にめぐまれない。川上町では、弥高山のふもとの南斜面に日向という地名があり、これに対して、谷をへだてて飯え越の北側が陰地にあたる。日向の農家では、夏は日ざしが強烈で作物がやけるけれども水が少ないから水をやれないと、水が得にくいという高原の生活での悩みを聞く。作物は、大豆、小豆、つくねいも、いんげん豆、えんどう豆などであるが、いんげん豆、えんどう豆を出荷する他は自給作物だそうである。陰地では雪がとけない、冬は住むところではないなどという言葉が聞かれた。

石灰岩台地である高原上の集落は水に乏しく、種々な工夫がなされてきた。神野を例にすると、飲料水はドリーネの湧き水を、周囲の家23軒で共同利用していたという。水汲みは重労働であるため、男の仕事であった。写真1-1-1は井戸と、ドリーネの底の水田の写真である。現在はこの井戸水をポンプで村の高台へあげ、各家庭に水道で送っている。この湧水は夏でも水温19℃以上にはならず、また、冬は温かい。陰地の人の話しでは、湧水は凍らないので、雪をとかす役目もするという。雨水は水の少ない高原の村にとって貴重な水資源である。水道がひかれる以前は、各家で4畳半から6畳の



写真1-1-1 神野台のドリーネと井戸

広さの地下を掘り、コンクリートで固めて、降水を樋で受けてためていたという。貯めた水は貴重であり、一度使った風呂の水は洗濯用となり、畑から帰った足洗いの水ともなり、また灌漑用水に利用するというように、一滴も無駄にしなかったということである。

神野には「<sup>いわなに</sup>岩谷の水」とよばれる伏流水が噴き出しているところがあり、この水を利用して、水田が作られている。

このような湧水による井戸はところどころで見ることができ、水に乏しい高原の集落にとって貴重な水資源となっている。

#### (4) 佐屋、高梁、笠岡の気象資料

川上町において、気象の資料が得られなかったため、岡山県気象月報（昭和46～50年）によって、佐屋、高梁、笠岡の資料について考察することにした。この付近の吉備高原上の気候は川上町と芳井町との境界付近の佐屋のもので代表させ、谷間の気候を高梁のものを借りて考察してみることにする。これらの特徴を瀬戸内海型の笠岡の気候と比較しながらつかんでみたい。

中国地方の気候区は気温、降水量から見て図1-1-4のように分けられているが、佐屋、高梁は山陽気候区に、笠岡は瀬戸内気候区に含まれる。各観測地点の位置は次のようである。



図1-1-4 中国地方の気候区

（和達清夫監修：「日本の気候」より）

佐屋 北緯  $34^{\circ}41'11''$   
東経  $133^{\circ}26'8''$   
海拔  $390\text{ m}$

高梁 北緯  $34^{\circ}47'5''$   
東経  $133^{\circ}36'8''$   
海拔  $70\text{ m}$

笠岡 北緯  $34^{\circ}30'2''$  東経  $133^{\circ}30'6''$  海拔  $4\text{ m}$

(a) 気温 月別平均気温、最高気温、最低気温を表1-1-1に、年較差、月別日較差の平均を表1-1-2に表わした。これにより、月別平均気温においては、佐屋は笠岡より $2.0\sim 3.3^{\circ}\text{C}$ 低く、高梁よりは $1.3\sim 2.4^{\circ}\text{C}$ 低い。これは佐屋が海拔 $390\text{ m}$ という高原上にあるため、比較的冷涼な気候を示しており、温暖な瀬戸内気候との差がみられる。谷間である高梁と笠岡は月別平均気温で $0.2\sim 1.7^{\circ}\text{C}$ の差があるが、その差は冬に大きく夏に小さい。佐屋と高梁は平均気温で各月毎に $1.3\sim 2.4^{\circ}\text{C}$ の差があり、夏に差が大きい。最暖月と最寒月の差で示される年較差は、佐屋 $23.2^{\circ}\text{C}$ 、高梁 $24.2^{\circ}\text{C}$ 、笠岡 $23.3^{\circ}\text{C}$ であり、谷間である高梁が大きく夏の暑さと冬の寒さが厳しいと思われる。月

別日較差の平均では、高梁は $9.0 \sim 12.6^{\circ}\text{C}$ の差がみられる。これは佐屋が $7.3 \sim 11.3^{\circ}\text{C}$ 、笠岡が $8.4 \sim 11.1^{\circ}\text{C}$ の差であるのにくらべて大きい値を示し、一日においても、気温の変化が比較的大きいことを示している。

表1-1-1 月別平均・最高・最低気温 (昭和46～50年平均) (°C)

月別 平均 気温	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
	佐屋	2.0	2.1	4.8	11.7	15.9	19.6	24.3	24.7	20.3	14.2	8.3	3.5	12.6
月別 最高 気温	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
	佐屋	6.4	6.4	10.1	17.3	21.3	24.4	28.5	29.4	24.7	18.8	13.3	7.9	17.4
月別 最低 気温	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
	佐屋	-2.4	-2.3	-0.5	6.0	10.0	14.8	20.0	20.0	15.8	9.4	3.4	-0.6	7.8
月別 最高 気温	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
	高梁	8.5	9.1	12.7	19.8	23.7	27.1	31.2	32.0	27.3	21.2	15.5	10.0	19.8
月別 最低 気温	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
	高梁	-1.7	-1.4	0.3	7.2	11.5	16.7	22.2	22.1	18.0	11.2	4.8	-0.5	9.2
月別 最高 気温	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
	笠岡	10.0	9.6	12.9	19.0	23.5	26.6	31.2	32.5	28.1	22.4	17.1	11.8	20.4
月別 最低 気温	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
	笠岡	-0.2	0.3	1.9	8.5	12.4	17.5	22.8	23.3	18.8	12.5	6.1	1.2	10.4

表1-1-2 月別平均日較差、年較差 (昭和46～50年平均) (°C)

日 較 差	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年較差
	佐屋	8.8	8.7	10.6	11.3	11.3	9.6	8.5	9.4	8.9	9.4	9.9	7.3	23.2
日 較 差	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年較差
	高梁	10.2	10.5	12.4	12.6	12.2	10.4	9.0	9.9	9.3	10.0	10.7	10.5	24.2
日 較 差	地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年較差
	笠岡	10.2	9.3	11.0	10.5	11.1	9.1	8.4	9.2	9.3	9.9	11.0	10.6	23.3

(b) 降水量 昭和46～50年の月別平均降水量は、次の表のようである。

表1-1-3 月別降水量 (昭和46～50年平均) 単位 mm

地点	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年合計
佐屋	1	56	60	55	132	104	198	226	136	225	126	59	38	1415
	2	51	57	57	128	112	217	287	136	205	125	45	40	1460
高梁	1	40	54	46	111	82	178	241	115	180	121	46	35	1249
	2	40	54	46	111	82	178	241	115	180	121	46	35	1249
笠岡	1	40	54	46	111	82	178	241	115	180	121	46	35	1249
	2	40	54	46	111	82	178	241	115	180	121	46	35	1249

佐屋、高梁、笠岡の年降水量はそれぞれ1415mm、1460mm、1249mmであり、笠岡は雨量の少ない瀬戸内気候を示す。佐屋と高梁は降水量においてあまり差はみられない。全体を通じて、6、7月の梅雨、9月の台風時において降水量が多く、それらと比べて8月の降水量は3地点とも少ない。

(c) 気象日数 次に大気現象日数を表1-1-4に示す。雨、雪の日数とも佐屋が多いが、霧の発生日数では高梁が99日であり、他とくらべて著しく多い。これは放射霧で、移動性高気圧におお



表 1-1-4 大気現象日数  
(昭和46～50年平均、積雪の深さはその間の最大)

	佐 屋	高 梁	笠 岡
大 雨	1 2 9	1 0 7	1 2 1
気 雪	2 5	1 3	8
象 ひょう	1	0	0
日 霧	7	9 9	2
数			
降 $\geq 1$ mm	1 2 3	1 0 3	1 0 1
水 $\geq 1.0$	4 3	4 6	4 1
日 $\geq 3.0$	1 1	1 3	1 1
数			
降 $\geq 1.0$ cm	2	0	0
雪 $\geq 2.0$	0	0	0
日 $\geq 3.0$	0	0	0
数			
積 最大 cm	2 6	1 6	5
雪 の (起白)	(4 6. 1. 5)	(4 6. 1. 5)	(4 6. 1. 5)
の 深 さ			
初 日	11. 2 7	12. 8	12. 2 2
雪 終 日	3. 2 5	3. 1 6	3. 1 2

計値を示した。

現象日数：その月の雨、雪、ひょう、霧の現象日数（量、階級に関係なく現象を認めた日数）を掲げた。

積雪月表：9時における積雪の深さを1cmで示した。

（山根順子）

われていて、風が弱い明け方に内陸で発生し、河の流域などに多く発生する。高梁の町を高梁川が流れていることが作用している。

吉備高原には野呂雨、谷霧という言葉がある。霧は谷間の特色である。

注) 以上の資料となった各気象の測定方法は次のとおりである。

平均気温：下記の日最高気温と日最低気温との平均値を日平均気温とし0.1℃単位で示した。

最高気温：当日9時から翌日9時までの日最高気温を0.1℃単位で示した。

最低気温：前日9時から当日9時までの日最低気温を0.1℃単位で示した。

降水量：当日9時から翌日9時までの日降水量を1mm単位で示し、月の欄にはそれぞれ合

## 2 川上町のカルスト地形

川上町には、県下の二大カルスト地形の1つ、大賀台カルストがあり、阿哲台カルストと共に有名である。川上町には、350～450mの石灰岩の台地があり、台地上にはドリーネなどのカルスト景観がみられる。一般的には、標高は、350～450mであるが、弥高山の西の高山市付近の台地は、標高550～600mである。

上大竹神野を中心とする石灰岩台地を神野台あるいは大賀台（狭義の）と呼んでいるが、一般的に大賀台とは、川上町を中心として備中町南部、芳井町北部にまたがるカルスト地域をさしていると思



図1-2-1 石灰岩（黒塗り部分）および輝緑凝灰岩（斜線部分）の分布

われる。阿哲台と同様にカルスト景観のみられる地域が分散している。それは、大賀デッケンや断層などの様々な地盤運動に加えて、河川の侵蝕がかなり進んだ結果といえよう。

5万分の1の地形図では、窪地は全くみられない。2.5万分の1の地形図でも、2～3個の小凹地がみられるだけであるが、実際には、神野をはじめ、野呂、穴迫で、ドリーネを観察することができ

る。その意味では、地形図からドリーネ列，ウバーレ列をよみとれる阿哲台とはかなり趣を異にしているといえることができる。

代表的なカルスト地域としては、神野台、高山市カルスト、巖谷溪、穴門山神社、西谷峽があげられる。以下各々について略述する。記述にあたっては、川上町教育委員会編「かわかみの自然」に負うところが多い。

#### (1) 神野台

＜地形＞ 地頭より、大竹川ぞいにさかのぼり、正寺からは谷斜面の急坂を登りつくと、急峻な谷斜面と違って、波浪状地形が目の前に広がる。ここは神野台とよばれ、神野台は、海拔400～450m、東西2km、南北1.5kmの石灰岩台地である。正寺からの比高は160～180mであるが、台地面の起伏は20～50mで小起伏面とよぶにふさわしい。台地面は、火山灰で覆れている。この火山灰について「かわかみの自然」では弥高山、須志山の火山活動に起因すると想像しているが、証拠はみつかっていない。西の高山台地と東の八久保とは、深い谷で隔てられており、孤立した台地といえよう。

＜地質＞ 神野台に分布する石灰岩は、高山石灰岩層とよばれている。高山石灰岩層は、準秋吉層群に相当すると考えられている二疊紀の石灰岩である。石灰岩に含まれるフズリナによってこの高山石灰岩は、次の4帯に区分されている。Lepidolina multisepta帯、Parafusulina cf V Japonica帯、Shwagerina vulgaris帯、Fusulina帯である。岩谷においては、この高山石灰岩と褐色の輝緑凝灰岩は、互層をなしている。

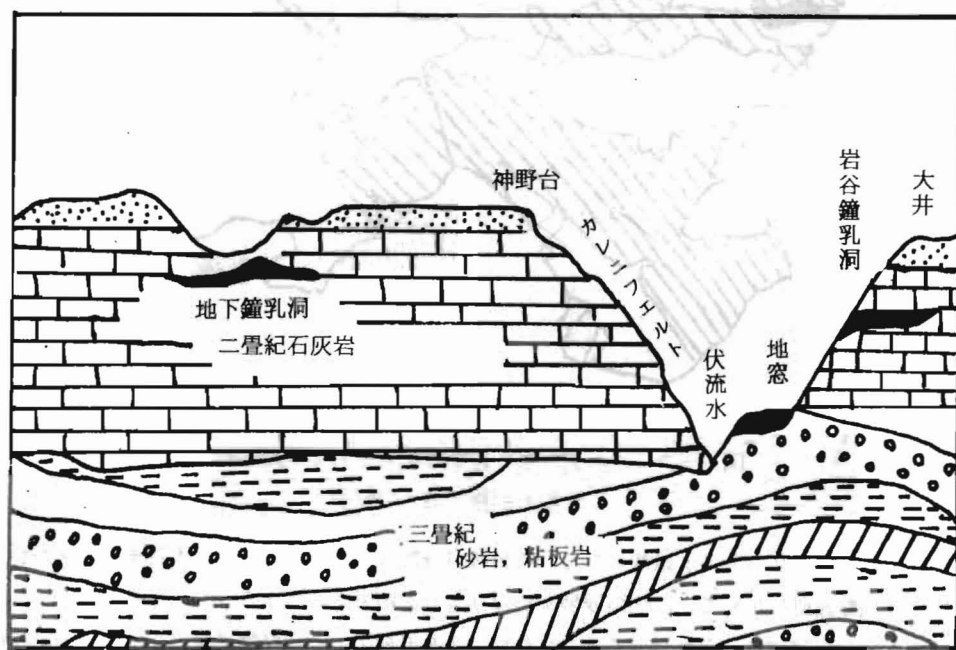


図1-2-2 神野台の地形・地質

この輝緑凝灰岩中には、多数の海百合の化石が含まれており、まるで梅の花をちりばめたような様相を呈している。そのため、梅花岩あるいは梅林石と呼ばれ、最近のブームにもものって、庭石として珍重されている。

＜カレン＞ 「かわかみの自然」には、「神野、下大竹には、雨水の溶蝕作用の結果形成されたカレンがみられるが、フズリナ、海百合等の化石を含んでいる」と記載されている。下大竹のは現地に行っていないので何とも言えないが、神野では、わずかに路肩から道路傍の斜面に見られた程度で、ドリーネ内部には、全く存在しなかった。

しかしながら、カレンがほとんどみられないからといって、被覆カルストであると判断してよいかわからない。ドリーネ内にあったと思われるカレンは、農耕の際、破壊された可能性が考えられる。

＜ドリーネ＞ 石灰岩地方にはCO<sub>2</sub>を含む雨水により、すり鉢状の穴（ドリーネ）が形成される。この地方ではこれを「クボ（窪）」と呼んでいた。神野台には、石丸川ドリーネと八窪ドリーネの2つが存在する。

石丸川ドリーネは、深さが100メートルもある陥没ドリーネである。南側の内壁斜面は10段の棚田（約50a）となっている。これは、神野台唯一の水田である。ドリーネ底には、湧泉がある。飲んでみたが、真夏でも19℃である上、硬水でなかなかおいしかった。簡易水道ができるまでは、ここを利用していた。

ドリーネ北東の最深部は、調査当時がまが繁茂していたが、その中に吸入穴があ

った。吸入穴のまわりには、排水溝もみられる。その吸入穴は、「かわかみの自然」によると、「かなり大きな地下鍾乳洞に続らしく、石を落とすと地下に響く音がする。又、平常は、この穴から風がふきあげるので別名風穴とも言われている」と書かれている。

八窪ドリーネは、約15aの畑地化された溶蝕ドリーネで、石丸川ドリーネの東に接近して開口している。平面形は、ほぼ円形で、その表面は、赤ちゃけた残滓土で覆われている。吸入穴は、畑地化の際、埋めてしまったらしく、その正確な位置はわからない。ドリーネの底から斜面にかけては、野菜が植えられていた。



写真1-2-1 沢樹の滝

＜鍾乳洞＞ 岩谷には、権現穴と呼ばれる鍾乳洞がある。その名の通り鍾乳洞内部の石段を登りつめると、石柱が垂下し、その下には祠が建てられ、調刻された石神がある。石柱の奥は、やや高い所に小穴となっていて通行できないが、ずっと奥まで続いているらしい。現在、この鍾乳洞内部に流水はみられない。

＜地窓＞ 神野の岩谷谷は、谷の周囲が古生層の石灰岩であるのに対して、谷底は、中生層の成羽統である。褶曲あるいは土地が飛び、その後さらに侵蝕されたものと考えられている。こうした現象のみられるところは地窓と呼ばれている。

## (2) 伏流水と沢柳の滝

岩谷の谷の上流、土川の付近で谷川の水が山の横腹に開いた穴の中に流れ込み、下流100メートル位は、平常石ころだけの水無し川原になっている。さらに下って、鍾乳洞下の谷に伏流水のわきいでる泉がある。(宗田克己著「吉備高原」による「岩谷の噴泉」)。この伏流水は、神野台の地下鍾乳洞を通過したものに、高山、大久保からの伏流水が合流したものと考えられている。この流れは、郷田を潤し、下流1kmの所で高さ25メートルの沢柳の滝をつくっている。全体の岩盤が後退して、古生代の石灰岩、中生代の成羽層、古生代の粘板岩の三層の硬度差による三段階の滝であり、四季水が絶えない。滝の下には直径10メートル位の極めて大きい滝壺がある。伏流水による滝は全国でも珍しいということである。

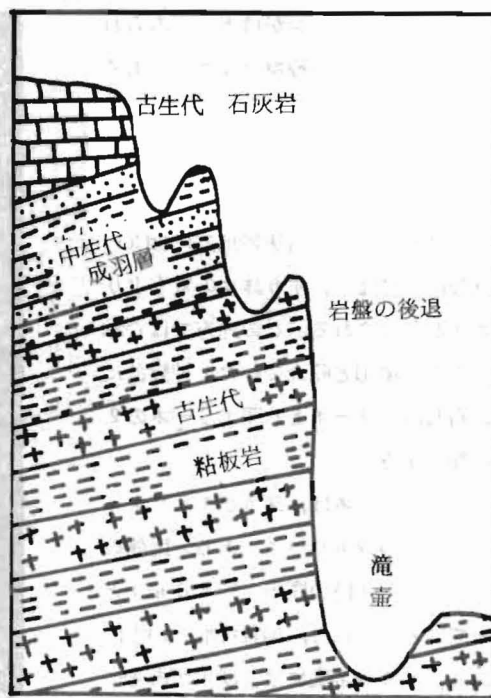


図1-2-3 沢柳の滝

## (3) 穴門山神社

穴門山神社は、成羽川の上流長谷川が硯石統群を侵蝕してできた深い谷にある。この神社は、昔の式内古社で「名方山赤浜宮」と称され、天照大神と豊愛大神を祀っている。延喜式にも記載されている。

＜神社付近の地質＞ 穴門山神社付近の地質は、非常に複雑で最下部に古生代の砂岩、粘板岩、その上に火山活動を示す輝緑凝灰岩、さらにその上に衝上断層のためと思われる石灰岩が重なっている。これらの古生層の上には、硯石統群とよばれる礫岩、赤色凝灰岩がみられる。なお当地の石灰岩は二疊紀の石灰岩で豊富なサンゴやフズリナの化石を含んでいる。

＜鍾乳洞＞ 穴門山の名前は、鍾乳洞より命名されたと思われる。社殿の背後には、二次生成物（鍾乳石、石筍）のよく発達した鍾乳洞が開口している。入口から67m付近までは入ることができるが、伏流水が多量に湧出しているので奥まで実測できない。しかしながら、相当続いているようで



ある。この鍾乳洞は、深い谷の中腹部に開口し、伏流水が多量に湧出しているところから吐出口ではないかと思われる。

#### (4) 横松谷の圀穴

横松谷には、二畳紀石灰岩でできており、兩岸には溶蝕作用による奇岩、絶壁が至るところにあり、大小の鍾乳穴が見られる。また小石が回転して石灰岩を削ってできた圀穴は見事である。

#### (5) 巖谷溪



写真 1-2-2 巖谷溪屏風岩

成羽川の支流巖谷川が石灰岩と角岩より成る台地を侵蝕した谷を巖谷溪とよんでいる。川上町と備中町の境界付近に位置している。ここには、高さ60メートル余りの屏風をたてたような絶壁が連なり、白嶽、神楽嶽、打嶽、継子嶽、六十落し、健児落しなどと呼ばれている。これらは、いずれも石灰岩の断崖である。高山石灰岩と大岳角岩との間の断層によって生じ、流水の侵蝕作用の結果現在の断崖になったと考えられる。

＜ダイヤモンドケイブ＞ 「打嶽」別名「天の岩屋」の麓の鍾乳洞（入口の高さ9メートル、奥行30メートル）の奥を爆破したところ、南へ400メートルの大鍾乳洞が発見され、昭和43年の夏、愛媛大学の山内浩らによって探検され、ダイヤモンドケイブと命名された。この洞について山内浩は次のように紹介している。

「ダイヤモンドケイブは、日本に数少ない閉塞型鍾乳洞で、この型の鍾乳洞としては日本最大である。また鍾乳洞の形成を示す断層が垂直な一枚板のように洞の中央を一直線に走っているのが観察され、日本の代表的な断層鍾乳洞でもある。最大の特色は、二次生成物で、これは、閉塞型鍾乳洞の特徴を最大限に表現している。これを構成しているカルサイト（方解石）の結晶が大きく透明で、不純

物で汚染されてなく、開放型鍾乳洞でよく見られるような風化失透の現象が見られない。鍾乳管の長さ1メートル35は日本最長であり、中央部上層にあるクリスタルポットは、これも日本で一番見事なものである。しかし、どれにもまして最大の特徴はヘリグマイト、ヘリグタイト群である。ヘリグタイトは小規模なものは日本各地の鍾乳洞でも観察されるが、発達程度、数量、結晶の美しさ、どれをとっても日本の他の鍾乳洞に比肩できるものはない。ヘリグマイトは一層珍しいもので外国の文献にも極めてまれである（中略）日本で最も美しい結晶で飾られた鍾乳洞という意味でダイヤモンドケイブと命名する。」

入口から300メートル付近には、天井に直径3メートル、高さ十数メートルもある垂直の空洞があり、そのやや手前には、流水の水準が変化し、侵蝕した結果と思われる巾1〜2メートルの2段のノッチや摩滅した小石、粘土が堆積した断面もみられる。一番奥は砂の床と石灰岩の天井の間に数センチのすき間があり、そこから伏流水が流れており、洞窟はさらに奥に続いているものと思われる。前述のごとく透明の二次生成物の発達が非常に良い、美しい鍾乳洞である。奥では気温も12〜13℃（7月末日）であり、真夏にもかかわらず、涼しいというより寒い感じがした。洞内における、気温の変化の幅は、大変小さいように考えられる。

#### (6) 西谷峽

地頭の西の西谷には、古生層の石灰岩が侵蝕作用の結果極めて深い峽谷がつくられている。西谷峽と呼ばれるここにも鍾乳洞が開口している。

＜地質＞ 大賀デッケン構造により新しい中生層の上に古生層の石灰岩がのっている。石灰岩層の中には、火山活動で貫入したと思われる玢岩がみられる。ここ西谷の石灰岩は七地、三沢にもみられる宇治層とよばれる石灰岩である。宇治層は、Yabeina帯、Parafusulina帯、Schwagerina帯、の3帯に区分されている。従って、宇治層は前述の高山石灰岩よりも上部に位置すると考えられている。玢岩は、国古城および、八十石の山道にもみられる。玢岩に接触する石灰岩は熱変成作用を受けて結晶質石灰岩となっている。

＜鍾乳洞＞ 西谷峽に開口する鍾乳洞は入口の高さは10メートル、幅6メートルで奥行は50メートルである。この鍾乳洞の下にやや小さい鍾乳洞がある。高山からの流水が流れていたが、ダムにより埋もれて中には入れない。

#### (7) 馬渡しの滝

地頭から高山に至る途中の馬渡しの溪谷には、高さ10メートル余りの滝がある。この滝は、断層によって形成されたと考えられている。この滝を少し登ったところには、かつての滝が後退してつくった3つの連続した滝壺跡がみられる。この馬渡し付近には、鉱床がある。戦争中に亜鉛、銅を掘った跡がみられる。

#### (8) 高山市カルスト

高山市付近は、500〜600メートルの高い小起伏面である。畑地化されており、カレンはほとんど見られない。家々の石垣に石灰岩がみられるだけである。この小起伏面は谷状の緩斜面をなして松節に至る。この緩斜面の畑の中あるいは道端に、石垣のようにカレンが存在するが、その数は少な



写真1-2-3 松節でみられるカレン

い。また、ここでは、お茶の木を畑の境に植えているが、その木に囲まれるようにして、湧泉が1つ存在している。かつては飲料水、現在は畑に利用しているのであろう。湧泉のそばに、木製のひしゃくが1つ置いてあった。この緩斜面も畑地化されており、キャベツなどの野菜が植えられていた。背丈をこす位のかやをおしわけ、谷を下り、松節に至ると、山の斜面の雑草、かん木の中にカレンが非常によく発達しているのがみられる。このカレンは、稜線の鋭いカレンである。

#### (9) 石灰岩台地の利用と問題点

神野台では、その下にあると思われる地下鍾乳洞に降水がぬけてしまうが故に石丸川ドリーネを除いては米作はできない。しかも、その米作は、ドリーネ肩に溜め池を作っておこなっているのが現状である。台地表面は、残滓土で覆われており、畑作中心の農業を営んでいる。かつては、水不足を反映して、乾燥に強いタバコやコンニャクを栽培していたが、コンニャクは植えつけてから4年たたないと収穫できないため、減少傾向にあるという。その代わりに、トマト、ブドウなどの栽培が盛んになってきている。

水不足は、石灰岩台地ではかなり深刻である。神野台では、井戸も利用できないので、石丸ドリーネ底の湧泉を23軒で利用したり、木を組み、しっくい固めて天水を貯めたりしていた。また、風呂の水をためておき、野良の仕事着を洗い、さらにそれを畑にまくということもしていたという。現在では簡易水道が発達し、湧泉は3軒がポンプアップして利用しているにすぎない。水温は、ほぼ19℃位で一定であり、冬季でも水は絶えることはない。ただ硬水なので洗濯には適当でない。

#### (10) カルスト地形に関連する地名

高原地形に関連する地名として、「野」は神野、菅野、野呂の3つ、「原」は名原、大原の2つが

ある。石灰洞より命名されたものに、穴迫、権現穴がある。地名ではないが、穴門山神社も石灰洞に関連する。カレンに関係があると思われるものとしては、岩谷、岩神、八十石がある。凹地形に関連する名称としては、八久保、八窪、大久保がある。現在凹地はドリーネと呼ばれているが、かつては“クボ”と呼ばれていた。

岡山県のもう1つのカルスト地形である阿哲台と比較してみると、「台」が全くみられないが、「原」、「野」、「岩」、「石」が多い点で一致している。西隣り帝釈台に多い「野呂」は1例見られる。(中村 由美子)

### 3 大賀デッケン ー複雑な地質構造ー

#### (1) 川上町に見られるデッケン構造

堆積岩の地層は、新旧の地層が順序正しく堆積しているのが普通である。ところが、デッケンは、新しい地層の上に古い地層がのっていて順序が逆になっている。つまり、横臥褶曲(ふつう、軸がほとんど水平の褶曲のこと)とか衝上断層(上盤側が下盤側の岩層に緩い傾斜でのし上げた断層)によって、もともとあったところから押し出され、水平に近い基盤上を移動してもとの基盤をおおうようになった異地性の大きな岩体が大賀デッケンであり、デッケンが重なり合ってきた構造をデッケン構造という。そして、このデッケン構造が侵蝕作用を受けると、クリッペ(根無し岩塊)とフェンスター(地窓)ができる。クリッペとは、上層の古い地層が侵蝕されて下層の新しい地層の上に孤立して残されたもので、フェンスターとは、古い地層の中に下層の新しい地層がのぞいているものである。

川上町では、大賀デッケンと天王デッケンの二ヶ所で、押し被せ状態に新旧の二層が接しているのを見ることができる。大賀デッケンは、小谷ヶ市の最上山と南天山の間の大竹川の河原に、古生代の石灰岩と中生代の砂岩(成羽統)が押し被せの状態で接しているのが見られる。二層の境界線を測定すると、走向はN40°E、二層の接する傾斜は5°であった。この大賀デッケンは、文部省の天然記念物に指定されており、中国地方の地質構造を解明していく上で重要なものである。天王デッケンは、古生代同志の衝上で、天王集落付近の県道高山～地頭線の路上に、砂岩・粘板岩の上に石灰岩が衝上した面が見られる(図1-3-1)。この天王デッケンは大賀デッケンと一連のものである。また、地頭北西方の西谷の谷でも、衝上面が見られる。この他にも露頭はないが弥高山の地下には古生

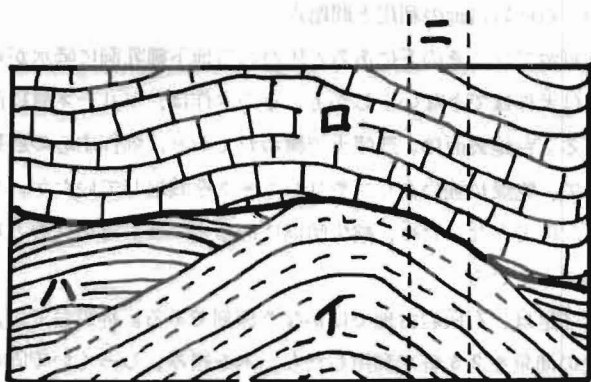
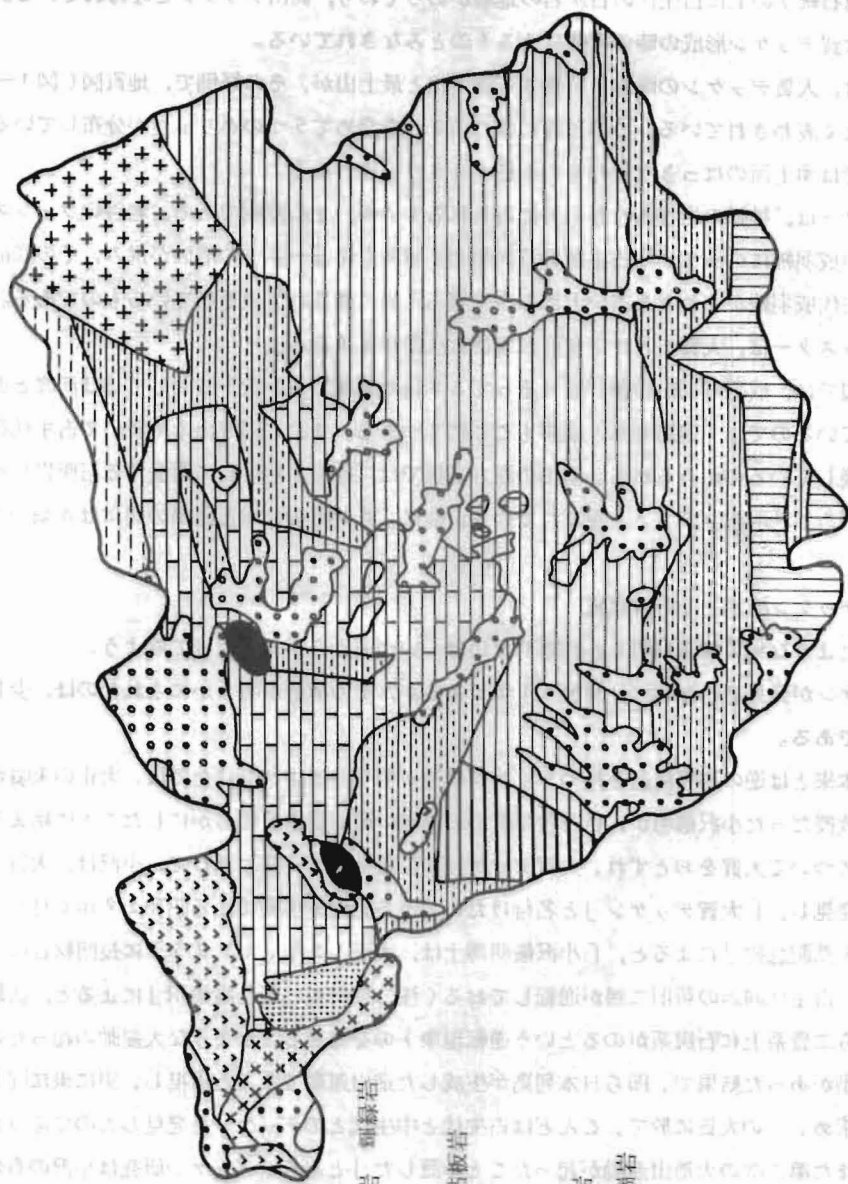


図1-3-1 天王デッケン説明図

- イ 砂岩・粘板岩(古生層)
- ロ 高山石灰岩(古生層)
- ハ 成羽統(中生層)
- ニ 道路より見られる部分



- 石灰岩  
 輝綠凝灰岩  
 チャート  
 千枚岩  
 砂岩  
 三疊紀層  
 赤色凝灰岩  
 黒雲母花崗岩  
 石英斑岩  
 玢岩  
 玄武岩  
 山砂利層  
 第三紀層

図 1-5-2 川上町の地質図（「かわかみの自然」より）



代の地層（硯石統）の上に古生代の石灰岩の地層がのっており、高山デッケンと呼ばれている。これも、やはり大賀デッケン形成の時の褶曲によるものとみなされている。

クリッペは、大賀デッケンの南北に位置する南天山と最上山が、その好例で、地質図（図1-3-2）にもそれがよく表わされている。この付近にはこの2つを含めて5つのクリッペが分布している。また、下手谷では衝上面のはっきりしたものが見えるクリッペがある。

フェンスターは、神野の岩谷あたりの谷にみられるものが、その好例である。岩谷のフェンスターは、中生代の成羽統にのっている古生層の石灰岩のくぼみ（ドリーネ）の溶蝕が進み、その底面に広く下部の中生代成羽統がまわりを古い上部の古生層石灰岩に囲まれてのぞいているものである。このようなフェンスターは、大賀デッケン付近および大久保にもある。

川上町周辺では、成羽町羽山の深い谷にそって3.5 kmの間衝上面が若干波曲してほぼ河底と道路との間を通っているのでよく追跡でき、地窓もここに2つある。また、同町山本や新山で古生代石灰岩が成羽統と接しているのがみられる。羽山の西方羽根では、砂岩・粘板岩に衝上する石灰岩に被われているものがあり、羽根スラストと呼ばれている。他に、芳井町の日南と島串の間には8個のクリッペがある。

## (2) 大賀デッケン発見とその研究史

(1)で述べたような地質構造が明らかにされたのは、いつ頃からかふり返ってみよう。

大賀デッケンが発見されたのは、明治41年であるが、その構造が明らかにされたのは、少し後になってからである。

日本で、本来とは逆の層序構造を持つデッケン構造が明らかにされかけたのは、大正の末頃からで、当時東大助教授だった小沢儀明が、秋吉台で新旧の地層の逆転現象を明らかにしたことに始まる。小沢は、山口について大賀をおとずれ、大賀デッケンの位置を見ている。そして、小沢は、大賀でも地層の逆転を発見し、「大賀デッケン」と名付けたのである。佐藤清明による昭和29年6月の調査報告「川上の天然記念物」によると、「小沢儀明博士は、大正12年（1923）に長門秋吉の於福台という所で、古生代同志の新旧二層が逆転しておる（注、宗田克己著「高梁川」によると、紡錘虫による帯分から二疊系上に石炭系がのるという逆転現象）のを発見し、かような大変動の起ったのは、一大造山運動があった結果で、即ち日本列島が生成した造山運動であると重視し、更に東に同じ石灰岩の続きを求め、この大賀に於て、こんどは古生代と中生代とのデッケンを発見したのであった。そしてこれもまた第二次の大造山運動が起ったことを証した」とある。デッケン研究は小沢の有名な業績のひとつになった。しかし、小沢は昭和4年に31才の若さで亡くなった。その後、昭和10年代になって、大賀デッケンの名がかなり知られるようになった。昭和11年には、文部省史蹟名勝天然記念物調査委員脇水鉄五郎、岡山県史蹟名勝天然記念物調査委員井上清一が実地調査しており、昭和12年6月15日には、文部省の天然記念物に指定されるに至った。また昭和12年、中国から日本に留学していた張麗旭が、大賀を特に取り上げて研究し、「大賀地域の地質」の卒業論文を書いた。こういうわけで、張の恩師である小林貞一が、大きくとり上げて構造史的に解明し、それによって大賀デッケンはかなり大規模なものであることが知られ、そこから大賀造山運動という名が生れた。他

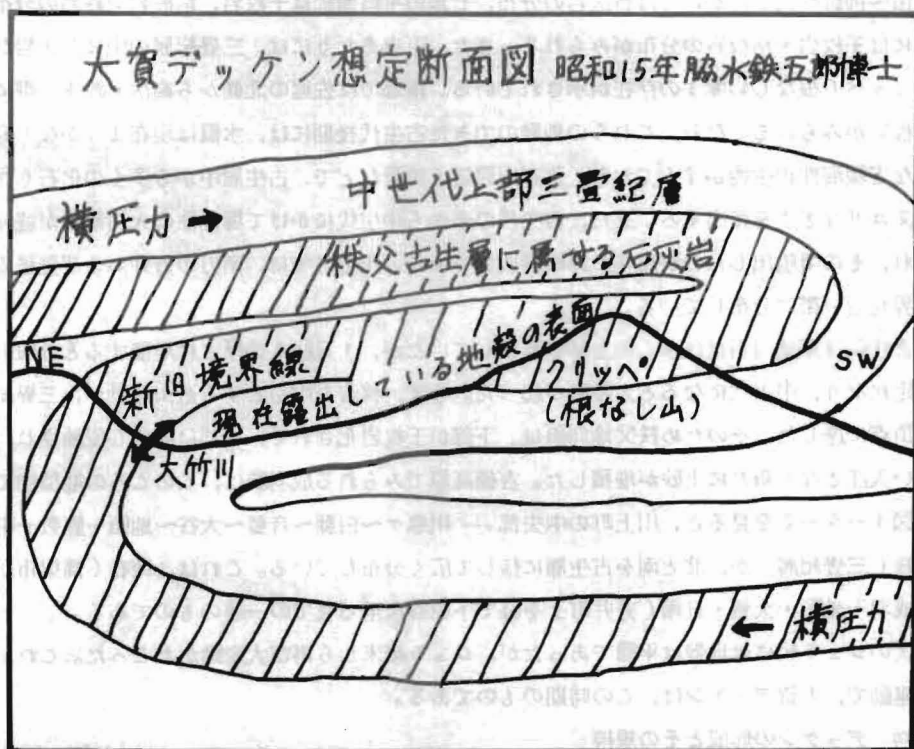


図1-3-3 脇水鉄五郎の大賀デッケン想定断面図

(脇水鉄五郎博士が現地視察の折、鉛筆書きで書き残されたもの(松井節夫氏蔵)を書写した。)

にも数多くの学者が研究しており、戦後は広島大学の楠見久らによって研究されている。

### (3) 大賀デッケンの形成

川上町にみられるような堆積岩の地層の新旧の逆転は、いつどのように起ったのであろうか。表1-3-1を参考にして川上町の地史を概観しながら考えてゆこう。

### (4) デッケン形成前の地史

先カンブリア代～古生代前期の地層・岩石は、日本では今のところ見つかっていないので明確には何もわかっていないが、古生代後期になるとかなりはっきりしてくる。その頃中国地方は、アジア大陸の東のなだらかな傾斜をもった浅い海(秩父地面向斜)に位置し、大陸からの土砂が堆積していた。こうして堆積した古生層は石灰岩の少ない山口層群と石灰岩の多い秋吉層群に分けられる。山口層群は、現地性の堆積物で広く分布しているが、秋吉層群は、山口層群の上に押し被せてきたものである。吉備高原に見られるような秋吉層群は、石灰岩層と砂岩・頁岩・角岩が交互しており、秋吉台にみられる全部石灰岩の秋吉層群と区別して、準秋吉層群と呼ばれている。

図1-3-2を見ると、川上町では、古生層は、北部と南部にかなり広く分布している。高山市～



高山～神野～天王にかけては石灰岩の分布、七地の平坦面には千枚岩、粘板岩や砂岩の分布、上谷の北には千枚岩・粘板岩の分布がみられる。また、正寺あたりには、三疊紀層の中に石灰岩がみられ、クリッペ（根なし岩塊）の存在が示されている。南部では佐屋の北側から高岳・鈴木一帯に千枚岩・粘板岩がみられる。なお、これらの地層のできた古生代後期には、水温は現在よりかなり高く、サンゴなど暖海性の生物がすんでおり、弥高山周辺・神野などで、古生層中から多くの化石（フズリナ、ウミユリなど）を産出する。また、古生代の末から中生代にかけて塩基性の火山活動が盛んにおこなわれ、その頃噴出したのが現在の輝緑凝灰岩である。川上町では、南方の芳井および美星の両町との境界付近一帯に分布している。

古生代後期地面向斜には多くの土砂が堆積していたが、1万kmもの厚さに堆積すると地殻の厚さが不安定になり、中生代になると大変動が起った。まず、秋吉を中心とする造山運動が、三疊紀中・後期に頂点に達した。そのため秩父地面向斜は、下部が千枚岩化されて、一部は陸化し侵蝕され、一部は細長い入江となり新たに土砂が堆積した。吉備高原でみられる成羽統は、このころの堆積物である。

図1-3-2を見ると、川上町の中央部——川原ヶ～白藤～音藤～大谷～地頭～瓢箪一帯——に成羽統（三疊紀層）が、北と南を古生層に接して広く分布している。これは、東春（高梁市）の北東から成羽・地頭・大賀・日南（芳井町）を経て下原谷に至るまでの一連のものである。

次のジュラ紀には地殻は平穏であったが、ジュラ紀末から再び大変動がおこった。これが、大賀造山運動で、大賀デッケンは、この時期のものである。

#### (ロ) デッケンの形成とその規模

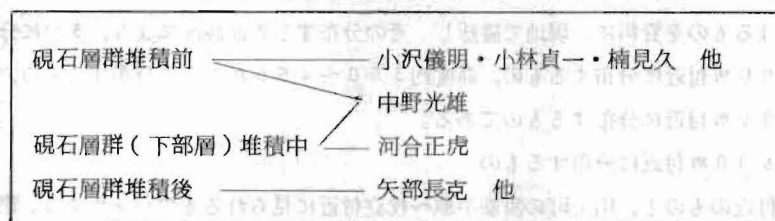
平穏なジュラ紀に堆積した土砂は厚くつもり不安定になった。深部では、非常な圧力と熱で変成したり、花崗岩漿が進入してきて、領家変成帯が形成されていた。一方、地表に近い浅い部分の地層では、秋吉造山帯が二次的に変形し、それを被覆していた堆積層（成羽統など）も、はげしく褶曲し、そこへ横圧力により準秋吉古生層群が押し被せてきた。

この水平移動は、いったいどのくらいの規模で起ったのであろうか。小林貞一は、初め（1941）デッケンの根元は、サハリン（樺太）に求められると考えていたが、その後の研究により、一般に現地性の石灰岩が水平移動したものと考えられている。

新旧の地層の逆転の境界面は、西は広島帝釈峡から東は京都の丹羽山地まで続くと考えられている。ここの大賀デッケンは、芳井町日南から北東方向約20kmの高梁市難波江にまでのびているのが認められる。張麗旭（1939）によると、「上部秩父古生層が千枚岩類及三疊紀上に衝上している事実は不鮮明の部分もあるが、広島県深安郡矢川北方より岡山県川上郡成羽北方難波江に至る迄は追跡出来、その間15の Klippen 及6～7の Fenstern 乃至 Half fenstern が認められる」となっている。この衝上面の代表例が、小谷ヶ市の大竹川河原にみられるもので、その断面は脇水鉄五郎（1940）が図1-3-3のように想定している。また、押し被せの幅は4里（約14km）もあると考えられており、現地性の石灰岩の水平移動によるといってもかなり大規模で、このときの変動で現在の日本の地形が完成したとされている。

#### (ハ) デッケンの形成時期

ジュラ紀末からの大賀造山運動によりできた造山帯のくぼみに硯石統（関門層群）が堆積している。この硯石統の下部には、陸化していた石灰岩層がこわされてできた砂礫が堆積した石灰角礫岩層があり、この上層には、火山灰が水底で堆積した赤色凝灰岩の層がのっている。従って、大賀デッケンがいつ形成されたのかというカギは、この硯石統が握っていることになるが、この扱いがなかなかむずかしい。だから、今までなされた多くの研究も、大賀デッケン形成時期は、硯石統の堆積前か堆積中か堆積後かと三つに見解が分かれているし、同一者でも発表時により見解がちがっている。楠見久・吉村典久・片山貞昭の「岡山県成羽町北西地域の地質…Ⅱ大賀衝上の時期について」によると、下図のように大賀衝上期の諸見解が整理されている。



次にこれらの見解は何を根拠にしているのか、楠見久らの前述の論文からあげてみよう。

硯石層群堆積前に大賀衝上が起ったとする説の根拠は以下のようなものがある。

①成羽川北西で成羽層群上に石灰岩が列状に点在しているが、これは硯石統を不整合におおうものである（小沢 1925）。

②難波江の北西の谷に分布する硯石統の礫岩は、石灰岩のCaveを埋めるCave-fillingである。（小林 1955）

③衝上線付近では硯石層群は石灰岩と成羽層群の両方をおおっている。（楠見 1950）

なお、楠見久は、1952年硯石層群の石灰岩礫が、基盤に石灰岩のないところでは、成羽層群の基盤直上でなくてやや上位に発達していることをみつけ、1955年に硯石層群堆積初期にも小さな衝上があったと考え“硯石衝上”を提唱している。

硯石層群堆積中に大賀衝上がおこったとする河合正虎は、いろいろの立場から考えて、大賀衝動の終熄を硯石層群堆積中と考えると硯石層群が大賀衝上線を被覆する事実と矛盾はないとしている。（1950）

硯石層群堆積後に大賀衝上が起ったとする矢部長克は、硯石層群と成羽層の不整合線にならぶ礫は大きすぎるので、硯石層群以後衝上断層があり、現在のところと並んでいると考えている。

このように見解が分かれるのは、堆積層の時代を決めるのに重要な手がかりとなる化石が、この地域の硯石層群から見つからず、地質時代や他地域との対比を困難にしているためである。

だが、このデッケンの構造や形成時代も研究が進むにつれてますますはっきりしてくるであろう。そうすれば、中国地方の構造発達史ひいては日本列島の形成の研究に大いに役に立つものである。

（林 和子）

#### 4 山砂利層と高原上の孤立峰

これまで述べてきた地質は、いずれも古生代・中生代のものである。ここでとりあげる山砂利および玄武岩丘は新しい時代の地層である。

##### (1) 山砂利層

山砂利の存在については、吉備高原中部の川上町・成羽町周辺の中・古生界を研究した研究者等により、古くから報告されてきた。この新しい堆積物である山砂利が吉備高原における侵蝕面・準平原問題の最も重要な問題であるとして、その解明を試みたものに、岡田篤正(1966)の研究がある。

川上町における山砂利層の分布は、20万分の1地質図(内外出版)、20万分の1ボーリングデータよりの地質図などによるものを資料に、現地で確認し、その分布する表面高度により、3つに分けた。高度約550~600m付近に分布するもの、高度約350~450m付近に分布するもの、および高度約280~300m付近に分布するものである。

##### (a) 高度約550~600m付近に分布するもの

これには、弥高山山麓付近のものと、川上町の西端芋原~杖立付近に見られるものが該当する。礫層は、弥高山東麓では石英斑岩・古生層・中新統泥岩などであり、南麓でも、石英斑岩を主としたものである。いずれも垂角礫ないし角礫であり、大きさは1~30cmのものと様々である。これらについては、岡田(1966)は次のように考えた。「礫種が周辺の基盤を構成する岩石と同じものであり、礫の円形度からみても、遠方から運ばれてきたものではない。したがって扇状地的な河川堆積物の可能性が強い。」この礫層よりなる地表の高度は、550~600mで、岡田のいう“吉備高原面”の一部にあたる。

##### (b) 高度約350~450m付近に分布するもの

これは“高瀬層”と呼ばれているものである。分布は、東から成羽町との境界付近、畑日名、搦粟付近、円丸、下大竹、神野、野田恵迫、光安、高瀬付近となっている。特に高瀬付近に発達のようにことから、河合(1957)が高瀬層と呼んだものを、寺岡(1959)、吉村(1961)、楠見(1965)らが継承し、岡田(1966)もそれを再定義して用いている。

礫種は石英斑岩が主で他に花崗岩、斑れい岩、玢岩、粘板岩、チャートなどを含んでいる。神野~正寺付近では、石英斑岩が非常に多く、他に粘板岩、玢岩、花崗岩があり、紫っぽいチャートも一部に含んでいる。正寺~藍坪間では、すぐ近くに千枚岩の露頭がみられ、やはり石英斑岩の礫が卓越している。また、須志~野田恵迫付近では(写真参)緑・赤などの緑色片岩、チャートが多く見られる。全体的に見ると、垂円礫の部分が多いが、一部に角礫の層も含んでいる。風化度は、それぞれの場所でもちまちである。分級度は、全体的に見ると礫の大きさは様々であり、あまり良いとはいえない。洪水的な突発的な出水で流された様相を呈している。主体となっている礫は、20~30cm位の大きさの礫である。この砂礫層は、aの砂礫層が吉備高原面にあるのに比べ、一段低い侵蝕面である瀬戸内I面の小起伏山地上に分布しており、これらの分布する地域は帯状に連なっている。岡田(1966)は、これらの砂礫層を古高瀬川と呼ぶべき旧河川の河床堆積物として取り扱っている。

(c) 高度約280~300m付近に分布しているもの

大谷付近に分布しているもので、現在の谷の斜面に分布している。高田(1974)によると、高瀬層よりも一段低い面に堆積しているものとしている。

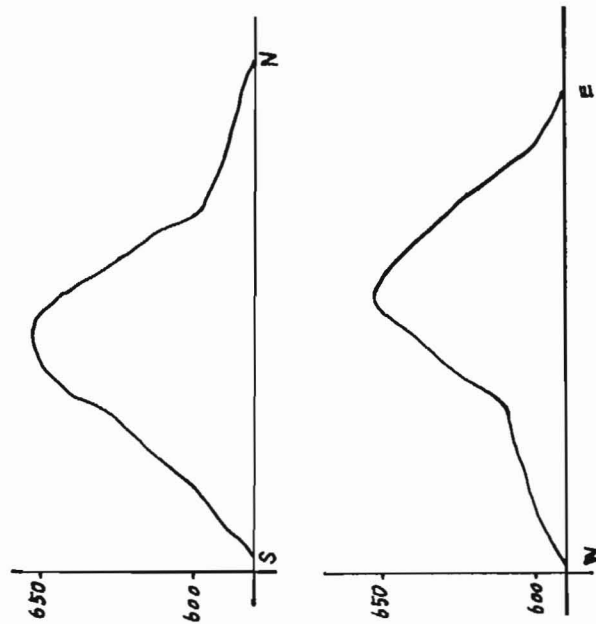
これらの砂礫層の堆積した時代についてであるが、高瀬層については、赤木健(1930)、佐藤源郎(1938)、小倉勉(1921)らは、第三紀層としているが、化石の産出が見られないのではっきりとした推定はできない。しかし、河合(1957)は、高瀬層は中新統を不整合に被覆していること、旧大賀村高瀬において高瀬層を貫く玄武岩があることを報告しているので、中新統よりもあとで玄武岩の流出よりは前に堆積したと言えるのではないだろうか。岡田(1966)は、高瀬層に対比される門田礫層が大戸礫層(鮮新世後半のもので、第二瀬戸内海前期の湖沼性堆積物ではないかと推定している)を不整合に覆っていることから、鮮新世後期から更新世前期の堆積物ではないかと推定している。また、(a)の砂礫層の堆積時代について、高瀬層との高度差、層相の相違、両層間に変位が認められないことより、岡田(1966)は、(a)の礫層は高瀬層よりもかなり古い堆積物であるとしている。そして、中新統への混入も可能(馬淵(1934)は、杖立の砂礫層が第三紀中新統上に不整合に乗るとしているが、岡田はこの礫層が断片的に分布していることもあり、中新統の基底岩との区別がきわめて困難なため、この可能性を示唆している)であるとしている。(c)の砂礫層について、分布範囲が小さいため、高瀬層との関係も玄武岩との関係もはっきりつかめなかったが、ほぼ現在の河床に沿っていることから、岡田(1966)の青野礫層(更新世の礫層と岡田は考えている)に相当するのではないだろうか。

## (2) 高原上の孤立峰

この地域には、玄武岩丘が多数分布する。川上町に見られる玄武岩丘のうち主なものは弥高山(654m)と須志山(522m)である。これら二つの断面形は、図1-4-1のとおりである。これを見ると弥高山の方が南北断面図を見る限り鐘状をなしており、須志山の方は、凹型の急斜面をもっていることがはっきりわかる。これらの玄武岩丘について、小倉(1930)らは、その山容が玄武岩の火山の一般的形態であるトロイデになっているため鐘状火山としているが、三野(1961)は、これらを噴出後表面が侵蝕された古いものであると述べている。岡田(1966)は、これらの玄武岩丘が、直径数100m以下のものが多いこと、凹型斜面をもつものがあること、点的に多数分布することより、熔岩円頂丘といった噴出当時の形態を残しているものではなく、侵蝕され残った残丘的性格の岩類であろうと言っている。この玄武岩の噴出した時代については、岡田(1966)は、「芳井町下鴨において高瀬相当層の礫層中に玄武岩が貫入し、両側の礫層に巾約10cmの熱変成を与えているのが観察される。また、この礫層の上部を聖山玄武岩が被覆しているらしい」ということより、高瀬層堆積以後の貫入によるものと考えている。

また、川上町およびその周辺の玄武岩丘は、この地域の中央を走る千峯坂断層の線上に見い出すことができる。これは、これらの玄武岩丘が、古い断層線の弱いところに沿って噴出したことを示している。

弥高 山



須志 山

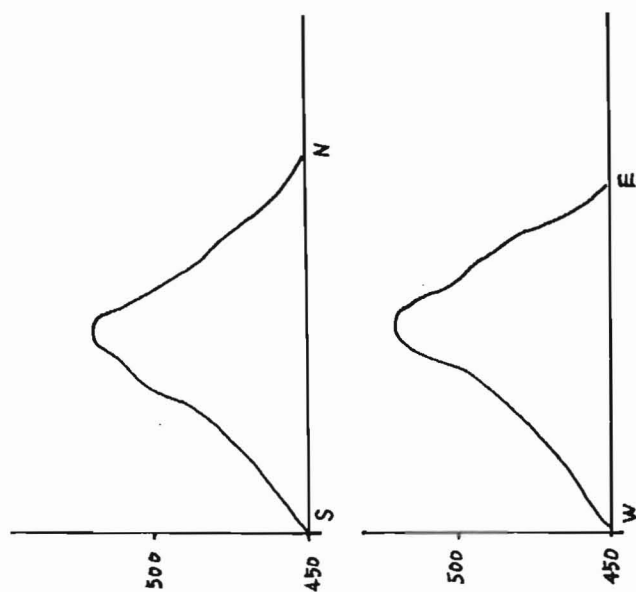


図 1-4-1 弥高山・須志山の地形断面図  
(5 千分の 1 地形図より作成)



### (3) 山砂利層と玄武岩との関係

山砂利層（特に高瀬層）と玄武岩丘との関係は、図1-4-2のようなものと岡田（1966）は考えている。高瀬層との関係は前述のとおり、一部において玄武岩が高瀬層を覆っているため、玄武岩の方が新しいものとしてとり扱ってきたのであるが、三野（1935）が野外調査の結果、高瀬層中に玄武岩の礫が含まれていると報告している。この礫について詳しいことがわからないので、もしこの礫の供給が、これらの玄武岩丘によるものとする、砂礫層堆積前にも玄武岩の噴出があったとすべきであろう。しかし、今回の調査の限りでは、玄武岩の礫は、崖錐的なものしか見出し得なかったもので、いまのところ山砂利層の堆積の方が古いものと考えている。

（浜崎 安子）

### 引用文献・参考文献（第1章）

- 赤木 健（1930）：7万5千分の1地質図幅「府中」および同説明書。地質調査所  
岡田篤正（1967）：吉備高原中部の地形発達。東大修士論文（1966年度）  
小倉 勉（1921）：7万5千分の1地質図幅「庄原」および同説明書。地質調査所  
小沢儀明（1925）：中国準平原及びカルストと居住関係。地理教育1  
河合正虎（1957）：岡山県川上郡吹屋地域の地質。広大教育学部紀要2-6  
川上町教育委員会（1970）：かわかみの自然  
楠見 久・吉村典久・片山貞次（1964）：成羽町北西地域の地質。広大地学研究報告14  
小林貞一（1950）：日本地方地質誌 中国地方。朝倉書店  
佐藤源郎（1938）：7万5千分の1地質図幅「高梁」および同説明書。地質調査所  
佐藤清明（1954）：川上の天然記念物（ソノ）。謄写印刷  
宗田克己（1974）：高梁川。日本文教出版  
宗田克己（1975）：吉備高原。日本文教出版  
高田哲史（1974）：  
寺岡易司（1959）：岡山県成羽南域の中・古生代層特に上部三疊系成羽層群について。  
吉川虎雄・杉村 新・貝塚爽平・阪口 豊（1973）：日本地形論。東大出版会  
吉村典久（1961）：中国地方中部大賀台地の古生層の層序と構成。広大地学研究報告10  
和達清夫監修（1966）：日本の気象



## 第2章 人 口

### 1 人口構成

川上町は、昭和29年、手荘村・大賀村・高山村の三ヶ村が合併してできた町である。以下においては、旧三ヶ村の資料や合併後の川上町の資料をもとにして、人口構成における特徴を描こうと思う。分類上、(1)人口・世帯数の推移 (2)年令別人口構成の推移と比較 (3)産業別人口構成の推移の三つに分け、それぞれについて述べよう。

#### (1) 人口・世帯数の推移

旧三ヶ村及び合併後の川上町の世帯数・男女別人口・総人口・性比・一世帯あたり人員を示したものが、表2-1-1で、総人口の推移をグラフで示したものが図2-1-1である。これによって、総人口の推移、性比の推移、世帯数と一世帯あたり人員の推移を見てみよう。

##### (イ) 総人口の推移

図2-1-1から明らかなように、旧三ヶ村の総人口は、手荘村・大賀村・高山村の順で多く、合併までこの順位は変化していない。以下合併までの旧三ヶ村の人口について少し詳しく述べよう。手荘村は三ヶ村の中心村落であり、人口も三ヶ村中最も多く、一番少ない年が昭和16年の3,604人、一番多い年が昭和22年の4,936人となっている。またそのために人口の変動も大きくなっている。逆に高山村は人口の変動が小さく、第二次大戦の影響を受けた年時を除いては2,000～2,500人の間でなだらかな線を描いている。川上町全体としては、大正15～昭和4年にわずかの増加、第二次大戦後の昭和20年に急激な増加を示しているのみで、これらの時期以外は全て減少を示している。昭和20年には、終戦による外地からの引き揚げ・軍人の復員・都市からの疎開があり、これらが農村の人口を急激に増加させたからである。昭和20～25年の間は、上述の人々がひき続き農村に留まり、一方で「ベビーブーム」が起ったため人口が減少しなかった。25年から合併の29年に至るまではわずかの減少を示しているものの、総人口数は10,000人を割っていない。

次に三ヶ村が合併した昭和29年以降の人口について述べよう。昭和20～25年の急激な人口増加は農村の人口を飽和状態にさせ、昭和30年代より都市への著しい人口流出を招いた。昭和29年の川上町の総人口は10,233人で、これを100とした時の人口指数は30年では97.7を保っているものの、35年には89.6、40年には74.4、45年には63.2に達している。また35～40年の減少は著しく、その割合は17%になる。この5年間に、川上町全体としては14%、成羽町12.9%、備中町12.2%の減少率を示しており、川上町の減少率が最も高かったことを示している。40～45年の5年間では、川上町15.1%、川上郡全体16.8%、成羽町13.1%、備中町23%となっており、この時期では備中町の減少率が最も高かったものの依然高率を示している。このように昭和35～45年の10年間に特に人口減少が著しかった理由としては、昭和30年代の高度経済政策の進展に伴ない農村の労働力が都市に流出したからである。昭和45～50年の減少率は6.1%で、過去の5年毎のそれに比べかなり低くなっている。その背景としては、高度経済政策のひずみと

表 2 - 1 - 1 旧手荘村・大賀村・高山村の世帯数と人口

	大正元年	2	3	4	5	6	7	8	9	10
<手荘村>										
世 帯 数		( 849)	809	800						
男		(2,572)	2,349	2,313						
女		(2,330)	2,237	2,214						
総 人 口		(4,902)	4,586	4,527					4,206	
性 比		(110.4)	105.0	104.5						
一世帯あたりの人員			5.67	5.66						
<大賀村>										
世 帯 数	602	609	604	589	588	584	584	620	589	587
男	1,716	1,718	1,721	1,697	1,858	1,860	1,754	1,719	1,716	1,635
女	1,724	1,720	1,705	1,672	1,787	1,755	1,714	1,696	1,679	1,635
総 人 口	3,440	3,438	3,426	3,369	3,645	3,615	3,468	3,415	3,395	3,270
性 比	99.5	99.9	100.9	101.5	104.0	106.0	102.3	101.4	102.2	100.0
一世帯あたりの人員	5.71	5.65	5.67	5.72	6.20	6.19	5.94	5.51	5.76	5.57
<高山村>										
世 帯 数	384	385	386	381	387	384	378	380	386	377
男	1,125	1,145	1,163	1,172	1,197	1,211	1,221	1,207	1,217	1,199
女	1,166	1,166	1,193	1,213	1,219	1,214	1,228	1,213	1,212	1,183
総 人 口	2,291	2,311	2,356	2,385	2,416	2,425	2,449	2,420	2,429	2,382
性 比	96.5	98.2	97.5	96.6	98.2	99.8	99.4	99.5	100.4	101.4
一世帯あたりの人員	5.97	6.00	6.10	6.26	6.24	6.32	6.48	6.37	6.29	6.32
三ヶ村合計										
世 帯 数			1,799	1,770						
男			5,233	5,182						
女			5,135	5,099						
総 人 口			10,368	10,281					10,030	
性 比			101.9	101.6						
一世帯あたりの人員			5.76	5.81						

現勢調査簿・手荘村統計ニ関スル編冊による。( )は本籍人口を示す。空白部分は資料の欠如を示す。

	大正11年	12	13	14	15	昭和2年	3	4	5	6
<手荘村>										
世帯数	783	778	782	782	797	788	785	788	777	772
男	2,397	2,363	2,346	2,337	2,078	2,097	2,102	2,113	2,067	2,017
女	2,252	2,262	2,461	2,241	2,102	2,151	2,134	2,145	1,945	1,989
総人口	4,649	4,625	4,807	4,578	4,180	4,248	4,236	4,258	4,012	4,006
性比	106.4	104.5	95.3	104.3	98.9	97.5	98.5	98.5	106.3	101.4
一世帯あたりの人員	5.94	5.94	6.15	5.85	5.24	5.39	5.40	5.40	5.16	5.19
<大賀村>										
世帯数	583	580	581	582	581	580	577	576	580	578
男	1,643	1,728	1,735	1,730	1,701	1,791	1,798	1,760	1,656	1,630
女	1,787	1,760	1,757	1,752	1,671	1,630	1,640	1,690	1,644	1,650
総人口	3,430	3,488	3,492	3,482	3,372	3,421	3,438	3,450	3,300	3,280
性比	91.9	98.2	98.7	98.7	101.8	109.9	109.6	104.1	100.7	98.8
一世帯あたりの人員	5.88	6.01	6.01	5.98	5.80	5.90	5.96	5.99	5.69	5.67
<高山村>										
世帯数	379	375	375	365	375	377	375	386	382	378
男	1,140	1,084	1,092	1,084	1,092	1,098	1,084	1,092	1,092	1,070
女	1,145	1,060	1,077	1,053	1,077	1,069	1,071	1,106	1,078	1,066
総人口	2,285	2,144	2,169	2,137	2,169	2,167	2,155	2,198	2,170	2,136
性比	99.6	102.3	101.4	102.9	101.4	102.7	101.2	98.7	101.3	100.4
一世帯あたりの人員	6.03	5.72	5.78	5.85	5.78	5.75	5.75	5.69	5.68	5.65
三ヶ村合計										
世帯数	1,745	1,733	1,738	1,729	1,753	1,745	1,737	1,750	1,739	1,728
男	5,180	5,175	5,173	5,151	4,871	4,986	4,984	4,965	4,815	4,717
女	5,184	5,082	5,295	5,046	4,850	4,850	4,845	4,941	4,667	4,705
総人口	10,364	10,257	10,468	10,197	9,721	9,836	9,829	9,906	9,482	9,422
性比	99.9	101.8	97.7	102.1	100.4	102.8	102.9	100.5	103.2	100.3
一世帯あたりの人員	5.94	5.92	6.02	5.90	5.55	5.64	5.66	5.56	5.45	5.45

現勢調査簿による。

	昭和7年	8	9	10	11	12	13	14	15	16
<手莊村>										
世帯数	774	787	782	781	780	779	779	779	766	761
男	2,071	1,972	1,998	1,998	1,986	1,930	1,895	1,904	1,982	1,761
女	1,941	1,963	2,014	2,014	2,014	1,890	1,895	1,878	1,934	1,843
総人口	4,012	3,935	4,012	4,012	4,000	3,820	3,790	3,782	3,916	3,604
性比	106.7	100.5	99.2	99.2	98.6	102.1	100	101.4	102.5	95.6
一世帯あたりの人員	5.18	5.0	5.13	5.14	5.13	4.90	4.87	4.85	5.11	4.74
<大賀村>										
世帯数				567					556	
男	(2,182)	(2,208)	(2,225)	1,571 (2,225)	(2,243)				1,550	
女	(2,136)	(2,154)	(2,162)	1,545 (2,151)	(2,144)				1,499	
総人口	(4,318)	(4,362)	(4,387)	3,114 (4,376)	(4,387)				3,049	
性比				101.8					103.4	
一世帯あたりの人員				5.49					5.48	
<高山村>										
世帯数	372		370			350	350	350	336	
男	1,077	1,071	1,064	1,007	982	930	925	902	849	842
女	1,062	1,049	1,049	1,044	993	903	908	931	852	860
総人口	2,139	2,120	2,113	2,051	1,975	1,833	1,833	1,833	1,701	1,702
性比	101.4	102.1	101.4	96.4	98.9	103.0	101.9	96.9	99.6	97.9
一世帯あたりの人員	5.75		5.71			5.24	5.24	5.24	5.06	
三ヶ村合計										
世帯数									1,658	
男				4,576					4,381	
女				4,601					4,285	
総人口	*9,223	*9,158	*9,246	9,177	*9,096				8,666	
性比				99.5					102.2	
一世帯あたりの人員									5.23	

現勢調査簿による。＊印は推定、( )は本籍人口を示す。

昭和15年は国勢調査報告書による。

	昭和17年	18	19	20	21	22	23	24	25	26
<手荘村>										
世帯数	758	757	756	892	914	933	910	938	897	889
男	1,905	1,850	1,745	2,332	2,279	2,376	2,412	2,422	2,359	
女	1,880	1,900	1,955	2,604	2,472	2,463	2,455	2,471	2,467	
総人口	3,785	3,750	3,700	4,936	4,751	4,839	4,867	4,893	4,826	4,799
性比	101.3	97.4	89.3	89.6	92.2	96.5	98.2	98.0	95.6	
一世帯あたりの人員	4.99	4.95	4.89	5.53	5.20	5.20	5.35	5.22	5.38	5.40
<大賀村>										
世帯数						613			628	
男						1,734			1,813	
女						1,810			1,804	
総人口						3,544			3,617	
性比						95.8			100.5	
一世帯あたりの人員						5.78			5.76	
<高山村>										
世帯数						362	367		367	
男	830	792	764	938	930	973	990		1,025	
女	875	859	863	1,057	1,043	993	1,006		981	
総人口	1,705	1,651	1,627	1,995	1,973	1,966	1,996		2,006	
性比	94.9	92.2	88.5	88.7	89.2	98.0	98.4		104.5	
一世帯あたりの人員						5.43	5.44		5.47	
三ヶ村合計										
世帯数						1,908			1,892	
男						5,083			5,197	
女						5,266			5,252	
総人口						10,349			10,449	
性比						96.9			99.0	
一世帯あたりの人員						5.42			5.52	

昭和22, 25年は国勢調査報告書, 他は現勢調査簿による。

表 2-1-1 合併後の川上町の世帯数と人口

	昭和29年 6月1日	30	31	32	33	35	37
世 帯 数		1,867	1,851	1,875	1,891	1,841	
男	5,056	4,929	4,977	4,975	4,962	4,467	4,303
女	5,177	5,066	5,088	5,075	5,060	4,701	4,603
総 人 口	10,233	9,995	10,065	10,050	10,022	9,168	8,906
性 比	97.7	97.3	97.8	98.2	98.1	95.0	93.5
一世帯あたりの人員		5.35	5.44	5.36	5.30	4.98	
人口指数(昭和29年を 100とする。)	100	97.7				89.6	86.9
5年毎の減少率(%)		—				8.3	

	昭和38年	39	40	41	45	49	昭和50年 6月 末
世 帯 数			1,711		1,608	1,561	1,556
男	4,150	3,948	3,680	3,670	3,086	2,951	2,923
女	4,440	4,243	3,930	3,938	3,378	3,187	3,149
総 人 口	8,590	8,191	7,610	7,658	6,464	6,138	6,072
性 比	93.5	95.4	93.6	93.2	91.4	92.6	92.8
一世帯あたりの人員			4.45		4.02	3.93	3.90
人口指数(昭和29年を 100とする。)	83.8	79.9	74.4	74.7	63.2	60.0	59.3
5年毎の減少率(%)			17.0		15.1		6.1

昭和29, 49, 50年は町役場資料による。

昭和30～33年は現勢調査簿による。

昭和35, 40, 45年は国勢調査報告書による。

昭和37, 38, 39, 41年は川上町統計台帳(川上町商工会所有)による。

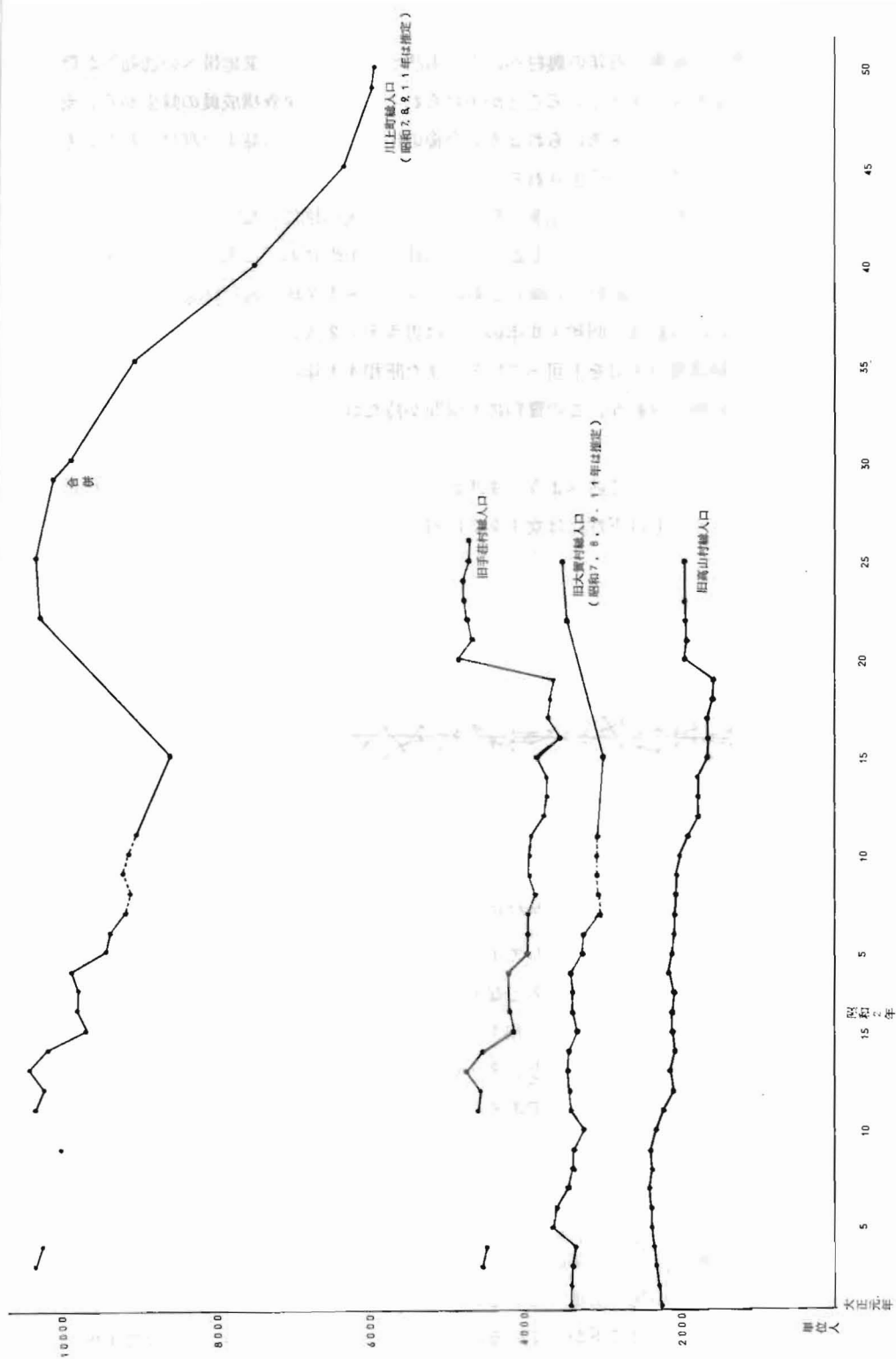


図2-1-1 川上町の人口の推移



して現れた都市の環境問題への配慮，近年の農村への小工場誘致，県南水島工業地帯への通勤等が農村から都市への労働力流出を若干おさえていることがあげられる。また一家族構成員の減少から，流出する若年層の絶対数が減少したこともあげられよう。今後の川上町は人口の減少は避けられないものの，その割合はかなり低くなることが予想される。

なお現勢調査簿によると，昭和31年は昭和30年より70名の人口増加となっていて，昭和33年まで総人口数は10,000人を越えている。しかしこの時期に川上町において人口増加を促す要因はなく資料に疑問がある。また，川上町統計台帳によれば昭和37～39年の人口は表2-1-1の通りである。しかし，同資料によれば，昭和40年の人口は男3,812人，女4,112人，総人口7,924人となっており，国勢調査の人口を上回っている。また昭和41年の人口は，同資料によれば，40年の国勢調査の人口を上回っており，この資料にも疑問が持たれる。

#### (ロ) 性比の推移

総人口のうち，男女別の割合について述べよう。まず表2-1-1と図2-1-2によって合併前の旧三ヶ村の性比を見てみよう。（以下性比は女100に対する男の割合で示す。）これによると，

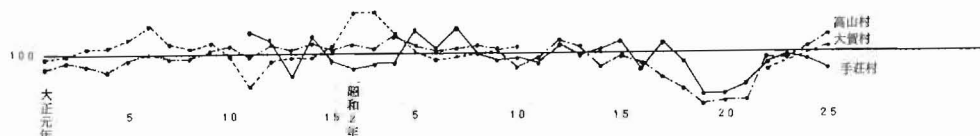


図2-1-2 旧三ヶ村における性比の推移

旧三ヶ村の性比は，岡山県や日本のそれと比較して不安定である。例えば岡山県の性比は，大正元年に103.7であり以下低下し大正8年に100.2となり，大正9年に初めて100を割り，以下昭和9年まで98～99の間ではほぼ一定している。昭和10年からはまた低下の傾向を示し，昭和15年に一時上昇したものの，16年からは90を割り，20年には87.1と最低となった。しかし22年には93.0に達し23～29年まではほぼ9.4である。また日本の場合，大正9年から昭和10年まではほぼ101で安定し，その後低下を示し，20年には89となった。しかし22年には95.4まで回復した。このように岡山県，日本とも一度100を割ると二度と回復していないが，旧三ヶ村の場合そのような傾向は見られない。

旧三ヶ村のうち，変動が比較的少ないのが高山村であり，特に大正12年から昭和9年までは，昭和4年を除いて，101～103の間で安定している。次に大賀村では，大正元～6年まで漸増を続けているが，大正11年には91.9まで下がっている。また昭和2～3年にはほぼ110まで上昇している。また手荘村は大正12～14年の間の性比が，104.5，95.3，104.3で一年間で10

近く変動しているし、昭和5年と7年には大賀村・高山村に比べかなり高い値を示しているのが特徴である。このように三ヶ村が各々の特徴を示し三ヶ村の相互の関係は把握し難い。昭和15年以降は、高山村・手荘村ともに漸減を示し、昭和19～21年に底辺を記録しているのは、日本・岡山県の資料と共通して第二次大戦の影響を表わすものである。（ただし手荘村では17年にかなりの上昇傾向が見られる。）

次に合併後の川上町の性比について述べよう。合併当時の昭和29年は97.7、30年に97.3で、35年には95となり漸減の傾向を示し、この傾向はさらに続き昭和45年には91.4となり最低を示している。これは先の総人口の推移で述べたように農村労働力の都市への流出を物語るものであるが、年令別人口構成の推移も考慮すると、若年男子人口の都市への流出が顕著であったことを示している。しかし49年にはこの傾向もわずかながら緩和され、今後は性比の上昇傾向を示すものと思われる。ただし岡山県全体では昭和30～40年の間で減少傾向を示し、40年には90.5まで下がったものの、45年には92.3、49年には93.6まで回復している。従って県水準と比較すれば、性比の低下から回復へはほぼ5年の遅れがあると言える。（岡山県の数値は「岡山県統計書」・「岡山県統計年報」、日本の数値は「国勢調査報告書」による。また昭和31・32・33・37・38・39年の数値は前述の通り信憑性に欠けるので参考としなかった。）

#### い) 世帯数と一世帯あたり人員の推移

まず世帯数の推移について簡単に述べよう。大正元年から10年までの大賀村・高山村の資料によればこの10年間でわずかの減少が見られるのみである。大正11～昭和9年までは多少の増減はあるものの三ヶ村ともほぼ一定している。続いて、資料が継続している手荘村に限って見ると、昭和15年から減少の傾向を示し、19年に最低数を示している。しかし翌20年には大幅に増加し24年にピークとなっている。これは明らかに第二次大戦による動員・出征から終戦後の復員・居留民の引揚げという一連の動きを表わすものである。

合併後の川上町の世帯数は昭和30～35年の5年間ではあまり減少していない。この期間、人口数では800人以上の減少があった事実と一世帯あたり人員の減少という事実は核家族化への徴候を示すものである。しかし35～40年にかけては130戸、40～45年にかけては103戸の減少があり、この期間家族ぐるみの転出がかなり多かったと考えられる。45～49年では47戸、49～50年ではわずか6戸の減少に留まっているので、上述の現象にも緩和の傾向が見られることは明らかである。

次に一世帯あたりの人員について述べよう。大正元年から11年までの大賀村と高山とを比較すると、高山村がずっと大賀村を上回る数値を示している。しかし翌12年からは逆転し大賀村が高山村を上回り、この傾向はずっと続いている。大賀村では大正9年から兼業農家が著しく減少し、専業農家の増加が見られ、11年にはこの現象が激しくなっている。数値の逆転はこの現象と関係があると思われる。手荘村は大正11～13年、昭和15年を除いて、三ヶ村中最も低い数値を示している。これは手荘村が農業に依存する度合が他の二ヶ村よりやや低い事実と関係している。（詳しくは産業別人口構成の項目を参照されたい。）しかし、岡山県や日本の数値と比べるとかなり高い。岡山県で

は、大正6年に5.19で最高を示し、9年には5を割り4.56まで下がっている。以下昭和30年までは4.6～4.85の間で大きな変動はない。日本全体では大正9～昭和30年まで4.97～5.1の間で安定している。これに対し、大賀村・高山村では表2-1-1に見られる限り5を割った年はない。手荘村では昭和12年に初めて5を割り、昭和15年を除いて、19年まで続いていて、第二次大戦の影響を示している。

合併後の川上町は昭和30年に5.35と岡山県の4.80、日本の4.97に比べかなり上回っている。しかし35年には5を割り、45年には4.02まで下がっている。45年の数値が、岡山県3.76、日本3.72なので接近の傾向がうかがわれる。これは、若年労働力の都市への流出と全国的に見られる核家族化によるものである。（岡山県の数値は「岡山県統計書」・「岡山県統計年報」、日本の数値は「日本帝国統計年鑑」・「国勢調査報告書」による。）

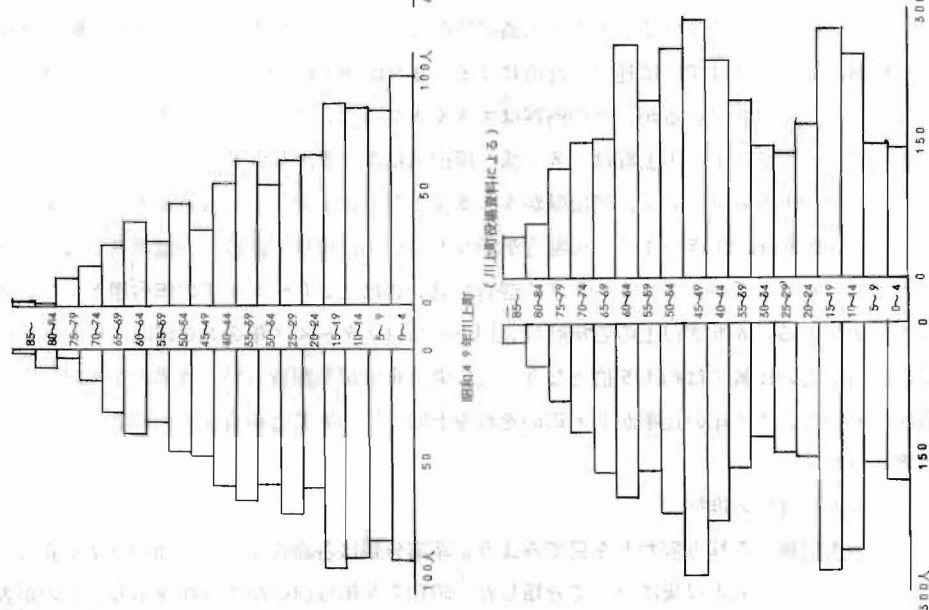
## (2) 年令別人口構成の推移と比較

年令別男女別人口構成の推移を示したものが、図2-1-3と表2-1-2である。まず明治26  
表2-1-2 年令別男女別人口の推移と比較 (構成比)

	明治26年高山村		昭和29年 川上町		昭和49年 川上町		昭和49年 岡山県	
	男	女	男	女	男	女	男	女
0～4才	5.3 %	5.7 %	4.9 %	5.7 %	2.9 %	2.3 %	4.4 %	4.2 %
5～9	4.8	4.8	6.3	6.6	2.6	2.4	3.8	3.5
10～14	5.3	4.9	6.0	5.9	4.1	4.0	3.6	3.4
15～19	5.5	5.0	4.6	4.3	4.5	4.5	3.7	3.8
20～24	3.5	3.7	4.2	3.5	2.4	2.7	3.5	3.9
25～29	4.1	3.6	3.4	3.2	2.3	2.2	4.0	4.3
30～34	3.4	3.0	2.8	3.4	2.1	2.4	3.8	3.9
35～39	3.8	3.6	2.6	2.6	2.7	3.2	3.5	3.6
40～44	3.4	3.0	2.7	2.9	3.6	3.9	3.7	3.8
45～49	2.7	1.9	2.4	2.3	4.5	4.6	3.4	3.5
50～54	2.6	2.3	2.1	2.1	3.4	4.2	2.4	0.3
55～59	1.8	1.6	2.2	2.0	2.7	3.2	2.0	2.5
60～64	2.1	2.0	1.8	1.7	3.2	3.8	2.1	2.5
65～69	1.5	1.5	1.5	1.6	2.7	2.5	1.8	2.0
70～74	0.7	1.0	1.1	1.3	2.0	2.4	1.4	1.7
75～79	0.2	0.7	0.7	1.0	1.4	2.0	0.9	1.2
80～84	0.5	0.1	0.4	0.5	0.8	1.0	0.4	0.6
85～	0.1	0.1	0.1	0.2	0.3	0.7	0.2	0.3
0～14才	30.8 %		35.3 %		18.2 %		22.9 %	
15～64	62.6 %		56.3 %		66.0 %		66.7 %	
65才以上	6.4 %		8.3 %		15.7 %		10.4 %	

高山村報告并諸表編冊，川上町役場年令別男女別人口統計表  
川上町役場資料，統計おかやま版257による。

明治24年高山村  
(高山役場報告并推定値による)



昭和27年川上町  
(川上町役場年令別男女別人口統計表による)

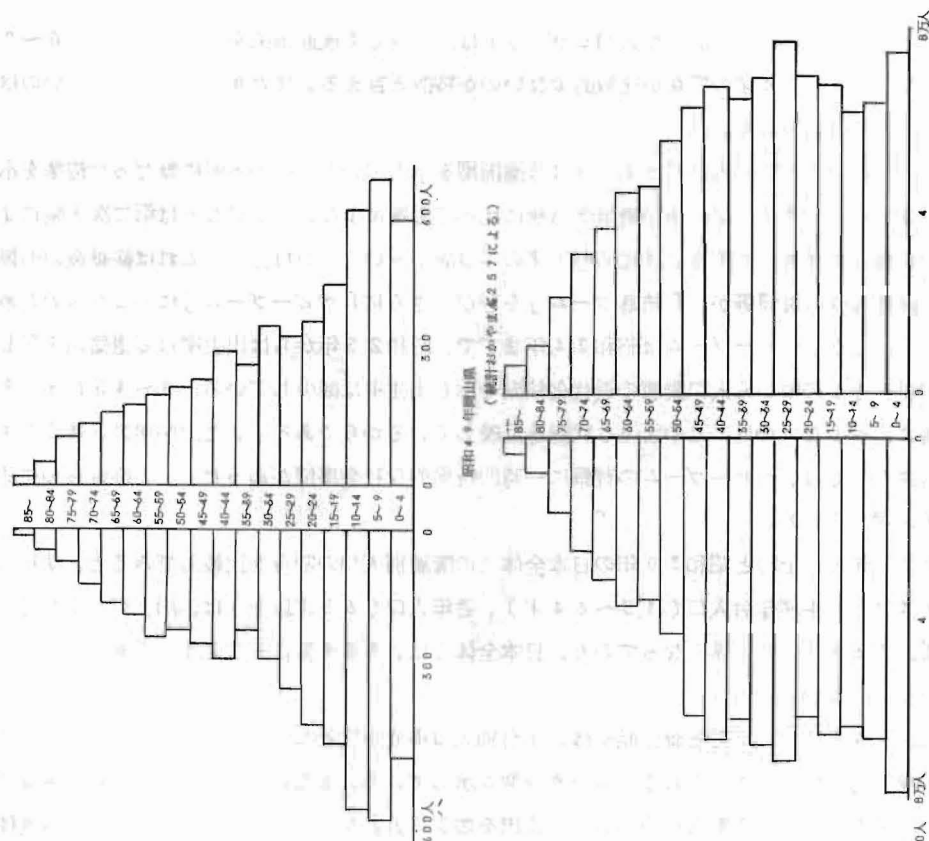


図 2-1-3 年令別構成の推移と比較

年の本籍生年別人口から作成した人口ピラミッドは、一見して後進国型を示している。20～24才の男子及び30～34才の男女が比較的少ないのが特徴と言える。また80才以上が少ないのは死亡率が高かったせいである。

昭和29年の川上町の人口ピラミッドは後進国型を示しているものの各所に際だった特徴を示している。まず35～39才の男子が隣接年令層に比べて極端に少ない。このことは第二次大戦による戦死者の影響を示すものである。次に5～9才の年令層が多いことが目立つ。これは終戦後の引揚げ・復員・疎開家族の復帰等が、「結婚ブーム」を呼び、さらに「ベビーブーム」につながったためと考えられる。しかしベビーブームは昭和24年までで、昭和25年からは出生率は減退傾向を示している。農村でもこの頃から人口動態の近代化傾向を示し出生率は減少している。0～4才が5～9才の年令層に比べ少ないのは、このような状況を反映しているからである。また出生率減退傾向を生み出した理由としては、ベビーブームの背景に一時的特異的な社会事情があったこと、終戦後の生活の苦しさ等が考えられる。

昭和29年の川上町と昭和30年の日本全体との階層別人口の割合を比較してみると、幼年人口(0～14才)、生産年令人口(15～64才)、老年人口(65才以上)は、川上町がそれぞれ、35.3%、56.3%、8.3%となっており、日本全体では、33.4%、61.3%、5.3%となっており大差は見られない。

次に昭和49年の川上町と岡山県全体の年令別人口構成を比較してみよう。川上町の人口ピラミッドは一見して農村によく見られるヒョータン型を示している。すなわち生産年令人口のうち20～34才の比較的若い層の極端な都市への人口流出を如実に表わしている。これに対して岡山県全体ではほぼ安定したツボ型を示している。両方に共通の特徴として55～59才の男子(川上町では女子も含む)が極端に少ないのはすでに述べた理由による。また階層別に両方を比較すると、生産年令人口の割合はほとんど一致しているが、その内容は大きく異なっている。生産年令人口のうち、15～39才の年令層を比較すると、川上町は29.2%、岡山県は38%となり9%近くの差がある。また20～39才では川上町が20.2%、岡山県が31.5%となり川上町における若年労働力の流出がよくわかる。10～14才、15～19才の割合がかなり高いのは中学・高校への就学者がほとんどであるためと考えられる。0～4才、5～9才の割合が低いのは、20～34才の年令層が少ないことと対応した現象である。65才以上の老年層は、川上町では29～49年の20年間に約2倍に達し、49年の岡山県との比較では約1.5倍となり、人口老令化の現象が著しい。さらに35才以上の全ての年令層において、49年の比率が29年のそれを上回っていることから人口の老令化は今後一層進むと考えられる。

### (3) 産業別人口構成の推移

次に産業別人口構成の移り変わりを見てみよう。産業分類は各調査年次で分類の基準が異なっているため、昭和25年以前と以後に分けて分類した。昭和25年以前の産業分類を示したものが表2-1-3である。まず、明治末の大賀村・高山村について述べよう。大賀村・高山村ともに農業が圧倒的多数を占めているが、注目されるのは大賀村における明治42年の現住人口職業別の変化であろう。

表2-1-3 a 高山村現住戸数職業別と現住人口職業別

[illegible]

		農 業		水産業		鉱 業		工 業		商 業		交通業		商業・その他		専業・その他		専業・その他		専業・その他		家事 無職業 使用人	合 計
		専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業		
大正8年	戸数	264	90								12			2	18								380
	人口	1,652	633					33			62			2	28								2,410
9 年	戸数	258	96					9	8	5				5	5								386
	人口	1,536	537					48	43	26				25	19								2,244
10年	戸数	214	111					3		17	2			9	21								377
	人口	1,263	682					17		102	12			17	67								2,160
11年	戸数	214	112					4	1	16	2		6			5	9	10					379
	人口	1,306	708					1	6	117	17		47			13	21	28					2,285
12年	戸数	216	103					4	2	17	5		4			6	8	11					375
	人口	1,253	625					21	9	97	28		21			11	18	61					2,144
13年	戸数	225	97					4	2	15	8		4			4	13	3					375
	人口	1,344	567					23	11	87	46		69			15	41	16					2,169
14年	戸数	176	140					1	5	1	11	10	2	3			12	4					365
	人口	1,058	868					5	16	4	42	49	10	19			49	17					2,137
15年	戸数	180	122					12	5	1	11	10	0	3			12	4					360
	人口	1,138	778					48	20	4	44	45	0	15			61	16					2,169
昭和2年	戸数	230	65					11	4	2	11	9	3	9			12	4					360
	人口	1,504	321					60	23	10	60	41	15	44			66	23					2,167
3 年	戸数	230	60					10	5	3	13	6	5	9			13	6					360
	人口	1,493	302					60	28	15	75	33	20	45			60	24					2,155
4 年	戸数	238	65						5	2	15	5	2	5			13	10					361
	人口	1,507	385					30	12	85	25	9	30				63	51					2,198
5 年	戸数	305	27					4	0	12	2	2	1			5	13	10					381
	人口	1,830	141					22	0	50	9	7	4			21	51	31					2,166
6 年	戸数	300	25					5	2	13	4	4	2			2	13	8					378
	人口	1,790	131					23	10	52	18	14	8			8	48	27					2,136

高山村諸表編冊・現勢調査簿による。







表 2-1-3 c 手在村現住戸数職業別と現住人口職業別

	農 業		水産業		鉱 業		工 業		商 業		交通業		公務及自由業		其の他の有業者		家事従事人		無職業		合 計		
	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	専業	兼業	男	女	男	女	男	女	
大正11年	戸数	375	280		1	12	25	25	20	10	6	15	5	3	5			3		783			
	人口	1,965	1,878		5	79	165	165	132	67	42	92	33	29	33			9		4,694			
12年	戸数	374	280		1	13	24	24	20	9	5	15	4	2	5			2		778			
	人口	1,964	1,850		2	77	143	155	143	68	45	89	25	25	30			9		4,625			
13年	戸数	380	283		1	12	25	26	22	7	4	13	2	1	4			2		782			
	人口	2,063	1,950		2	78	147	172	131	62	39	87	22	21	24			9		4,807			
14年	戸数	376	287		1	12	25	26	22	7	4	10	5	1	4			2		782			
	人口	1,944	1,869		2	71	131	175	123	61	41	88	22	20	23			8		4,578			
15年	戸数	376	285		1	13	24	36	25	7	8	10	5	1	5			2		798			
	人口	2,035	1,860		2	70	135	168	120	60	41	89	20	20	22			7		4,652			
昭和2年	戸数	375	283		1	3	4	54	24	34	1	32	9	1	4					788			
	人口	1,780	1,875		2	70	121	142	122	41	38	63	20	20	22			8		4,324			
3年	戸数	374	284		1	3	4	20	24	36	3	10	9	1	4					785			
	人口	1,782	1,746		2	6	76	133	148	145	37	30	45	30	29			7		4,236			
4年	戸数	376	283		1	3	4	22	26	32	5	10	12	9	4					788			
	人口	1,784	1,755		2	6	71	135	148	148	40	32	48	30	30			9		4,258			
5年	戸数	370	282		1	3	4	21	25	30	1	14	9	1	4					777			
	人口	1,961	1,475		2	6	20	105	139	22	18	48	30	5	21			10		4,012			
6年	戸数	374	267		1	3	4	22	25	35	1	14	9	1	4					772			
	人口	1,959	1,474		2	6	19	105	149	140	21	18	48	30	22			7		4,006			
22年		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	人口	878	1,007	88	10	37	41	32	45	9	78	30	30	30	30	484	736	2,376	2,463				

現勢調査簿による。

表 2 - 1 - 3 d 川上町現住戸数職業別と現住人口職業別（大正11年～昭和6年）

		農 業			水産業			鉱 業			工 業			商 業		
		専業	兼業	合計	専業	兼業	合計	専業	兼業	合計	専業	兼業	合計	専業	兼業	合計
大正11年	戸数	1,138	409	1,547				1		1	18	26	44	45	24	69
	人口	6,459	2,650	9,109				5		5	87	171	197	302	165	467
12年	戸数	1,136	400	1,536				1		1	19	26	45	45	27	72
	人口	6,535	2,569	9,104				2		2	105	152	257	274	183	457
13年	戸数	1,152	397	1,549				1		1	18	27	45	45	32	77
	人口	6,720	2,615	9,335				2		2	107	158	265	283	190	473
14年	戸数	1,100	444	1,544				1	1	2	19	26	45	41	34	75
	人口	6,313	2,830	9,143				2	5	7	94	135	229	242	188	430
15年	戸数	1,103	424	1,527				1	12	13	20	25	45	51	37	88
	人口	6,551	2,736	9,087				2	48	50	98	139	237	235	180	415
昭和2年	戸数	1,144	371	1,515				1	14	15	10	56	66	39	45	84
	人口	6,427	2,357	8,784				2	60	62	101	131	232	226	179	405
3年	戸数	1,135	367	1,502				1	13	14	11	23	34	41	44	85
	人口	6,425	2,211	8,636				2	66	68	111	148	259	248	194	442
4年	戸数	1,144	369	1,513				1	3	4	11	24	35	45	39	84
	人口	6,458	2,296	8,754				2	6	8	109	145	254	257	190	447
5年	戸数	1,201	331	1,532				1	3	4	10	21	31	42	35	77
	人口	6,808	1,776	8,584				2	6	8	50	105	155	228	169	397
6年	戸数	1,201	314	1,515				1	3	4	11	24	35	42	41	83
	人口	6,730	1,768	8,498				2	6	8	50	115	165	226	176	402

		交通業			公務及自由業			その他の有業者			家事使用人	無職業	総合計
		専業	兼業	合計	専業	兼業	合計	専業	兼業	合計			
大正11年	戸数	10	12	22	31	17	48	3	10	13		3	1,745
	人口	67	89	156	128	91	219	29	46	75		9	10,309
12年	戸数	9	9	18	30	17	47	2	11	13		2	1,735
	人口	68	66	134	122	106	228	25	41	66		9	10,257
13年	戸数	7	8	15	33	7	40	1	8	9		2	1,738
	人口	62	108	170	148	56	204	21	39	60		9	10,468
14年	戸数	9	7	16	29	11	40	1	4	5		2	11,729
	人口	71	60	131	166	55	221	20	23	43		8	10,153
15年	戸数	7	11	18	29	11	40	1	5	6		2	1,739
	人口	60	56	116	181	55	236	20	22	42		7	10,193
昭和2年	戸数	4	41	45	47	15	62	1	4	5			1,728
	人口	56	82	138	181	60	241	20	22	42		8	9,912
3年	戸数	8	19	27	38	17	55	1	4	5			1,722
	人口	57	75	132	166	70	236	20	29	49		7	9,829
4年	戸数	7	15	22	40	21	61	1	4	5			1,725
	人口	49	62	111	174	96	270	22	30	52		9	9,906
5年	戸数	3	15	18	44	22	66	6	4	5			1,738
	人口	29	22	51	166	80	246	26	21	47		10	9,498
6年	戸数	5	16	21	44	19	63	3	4	5			1,728
	人口	35	26	61	165	73	238	14	22	28		7	9,422

まず農業では前年までは専業者がほとんどであったが、この年は兼業者数が前年比で約7倍に増えている。また工業・商業においても、兼業者数は前年比で両者とも約8倍に増えている。しかし翌43年には、農業では専業戸数・専業者数が前年とほぼ同じ割合で減少し、兼業戸数・兼業者数が若干増えているものの、工業・商業においては兼業戸数・兼業者数は大幅に減少している。さらに、明治41・42・43年の専業・兼業者数の合計は、それぞれ3,403人、4,721人、3,392人となっている。以上のことから明治42年の大賀村の産業上の変化はこの年限りのものであったが、農業における兼業化の傾向は大正8年頃まで続いている。高山村においても、明治41年は農業の専業者数は前年に比べ、444名減り、兼業者数は553名増え、工業・商業においても兼業者数の増加を見ている。

続いて大正元～10年の大賀村・高山村について述べよう。これまでの農業・工業・商業の三分類に大正元年から新たに庶務・その他が加えられたが、全産業に占める割合はごくわずかである。まず大賀村では、明治末に比べ農業における兼業者数がやや減り専業者数がやや増加しているが、他の産業においては顕著な相違は見られない。以後大正4年まで全産業においてほとんど変化は見られないが、大正5年の農業で兼業者数がやや増加している。しかし以後減少傾向を示し、大正9年には大きく減少している。またこの年工業専業者数がゼロになっているのも注目される。

次に高山村では、大正元年に比べ農業専業者数が大幅に増え、兼業者数が大幅に減少している。この減少は程度の差こそあれ両村に共通している。その後農業兼業者数は大正4年に大きく増加し、またこの年工業兼業者数、商業専業者数・兼業者数が大きく減少している。国際的には、大正3～7年は第一次大戦の最中であるが、大戦と農村産業構造との関係は把握しにくい。

大正11～昭和6年の分類基準はそれ以前のものと異なり、新たに交通業・公務及自由業・其の他の有業者・家事使用人・無職業が加わって、庶務・その他が除かれた。この時期手荘村の資料が加わるので、三ヶ村の合計を出し川上町の資料とした。まず各村の状況から述べよう。手荘村は大賀・高山の二村に比べ、農業において兼業者数がかなり高いことが目立つ。また他産業の全産業に占める割合が他の二村より若干高い。これは、手荘が川上町における中心村落であることと深く関係している。大賀村では、大正9年から続いた農業兼業者数の減少傾向が一層顕著になり、この傾向は昭和6年まで続いている。手荘・高山に比べ専業者数が圧倒的に多いことが目立つ。一方、工業・商業でも大正11年から専業・兼業者数ともに減少の傾向を見せている。高山村でも、大正11～15年にかけては、農業兼業者数に大きな変動は見られないが、昭和2年には前年の半分以上となり、昭和5年には著しく減少している。昭和5年の農業兼業者数の減少は手荘村にも見られ、農村共通の現象と考えられる。全国的には、昭和5年は金輸出解禁の第1年で緊縮政策による不況の時期であった。

昭和5年における職業別人口とその割合を比較したものが表2-1-4である。これによると、日本全体では農業従事者の全職業に占める割合は50%を割っているが、川上町では90%に達し、その内、大賀村では95%を越えている。川上町の生活基盤のほとんどが農業であることを示している。なお三村の内、手荘村が農業従事者の占める割合が低いのは、中心村落によるためである。

昭和25～45年の産業別人口構成の変化を示したものが表2-1-5であり、さらにそれを三大

表 2-1-4 職業別人口とその割合（昭和5年）

		農 業	水産業	鉱 業	工 業	商 業	交通業	公務・自由業	家事使用人	計 (其他共)
日 本	有業者数(千人)	14,140	547	251	5,700	4,478	1,108	2,044	7,881	29,620
	割合 (%)	47.7	1.8	0.8	19.2	15.1	3.7	6.9	2.6	100
岡山県	有業者数(人)	358,781	7,735	2,712	103,345	74,899	18,250	33,942	6,168	613,190
	割合 (%)	58.5	1.3	0.4	16.9	12.2	3.0	5.5	1.0	100
手莊村	専業・兼業者数	3,436	0	8	125	289	40	78	0	4,012
	割合 (%)	85.6	0	0.2	3.1	7.2	1.0	1.9	0	100
大賀村	専業・兼業者数	3,177	0	0	8	49	0	86	0	3,320
	割合 (%)	95.7	0	0	0.2	1.5	0	2.6	0	100
高山村	専業・兼業者数	1,971	0	0	22	59	11	82	0	2,166
	割合 (%)	91.0	0	0	1.0	2.7	0.5	3.8	0	100
川上町 (三ヶ村 合計)	専業・兼業者数	8,584	0	8	155	397	51	246	0	9,498
	割合 (%)	90.3	0	0.1	1.6	4.2	0.5	2.6	0	100

日本国統計年鑑，現勢調査簿による。

表 2-1-5 川上町産業別人口構成の変化（S25～S45）

		昭和 25年	30年	35年	40年	45年			昭和 25年	30年	35年	40年	45年
農 業	男	2,075	1,901	1,582	1,286	926	金 融 保 健 不動産業	男	5	12	9	15	6
	女	2,264	2,183	1,910	1,444	1,192		女	1	5	2	3	2
	総数	4,339	4,084	3,492	2,730	2,118		総数	6	17	11	18	8
林業及び 狩猟業	男	138	88	68	37	21	運 輸 通 信 業	男	66	64	62	76	133
	女	6	29	41	7	2		女	8	8	11	5	13
	総数	144	117	109	44	23		総数	74	72	73	81	146
漁 業 及 水産業	男	4	0	0	0	0	電 気 ガ ス 水 道 業	男			2	4	2
	女	0	0	0	0	0		女			0	0	0
	総数	4	0	0	0	0		総数			2	4	2
鉱 業	男	57	130	211	77	47	サ-ビス業	男	124	145	199	172	203
	女	4	24	31	18	11		女	86	95	127	131	159
	総数	61	154	242	95	58		総数	210	240	326	303	362
建 設 業	男	111	119	139	122	170	公 務	男	68	52	54	61	65
	女	1	2	4	3	12		女	6	20	19	27	28
	総数	112	121	143	125	182		総数	74	72	73	88	93
製 造 業	男	136	97	111	160	263	分類不能 の 産 業	男	1	0	0	0	0
	女	25	17	126	293	422		女	0	0	0	0	3
	総数	161	114	237	453	685		総数	1	0	0	0	3
卸 売 小 売 業	男	122	140	131	125	106	合 計	男	2,907	2,748	2,568	2,135	1,942
	女	86	80	114	107	100		女	2,487	2,463	2,385	2,038	1,944
	総数	208	220	245	232	206		総数	5,334	5,211	4,953	4,173	3,886



国勢調査報告書による。ただし、昭和25年は3ヶ村合計を示す。

昭和25・30年の電気・ガス・水道業は分類上運輸通信業に含まれる。

表2-1-6 産業三大分類人口の割合

岡山県

	昭和25年	30年	35年	40年	45年
第1次産業	56.0%	50.7%	43.1%	34.4%	25.6%
第2次産業	20.1%	20.8%	25.8%	29.7%	34.7%
第3次産業	23.9%	28.4%	31.1%	35.9%	39.7%
分類不能	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%

日本

	昭和25年	30年	35年	40年	45年
第1次産業	48.3%	41.0%	32.6%	24.6%	19.3%
第2次産業	21.9%	23.5%	29.2%	32.3%	33.9%
第3次産業	29.7%	35.5%	38.2%	43.0%	46.7%
分類不能	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

川上町

	昭和25年	30年	35年	40年	45年
第1次産業	84.1%	80.6%	72.7%	66.5%	55.1%
第2次産業	6.3%	7.5%	12.6%	16.1%	23.8%
第3次産業	10.7%	11.9%	14.7%	17.4%	21.0%
分類不能	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%

国勢調査報告書による。

合計が100%とならないのは四捨五入のためである。

分類別にしたものが表2-1-6である。それによると、昭和25～45年の間に農業従事者は半数以下となっている。林業及び狩猟業が35～40年にかけて半減したのは、薪炭の需要と生産の減少によるものである。鉱業は30～35年の間に一時的に増加しているが、45年には25年当時に戻っている。第二次産業の中では、製造業が40年頃から急に増加しているのが目立ち、また第三次産業の中では、運輸・通信業が40～45年の間に増加していることが注目される。また就業者数の減少は、35～40年の間が急激であったのに比べ、40～45年ではやや緩和している。さらに産業構造の高度化という側面から比較すると、45年の川上町の産業三大分類別の割合が25年の県平均とほぼ等しくなることから、川上町は県平均より約20年立ち遅れていると言える。

以上から次のような結論が導かれるであろう。1) 終戦後、一時的に増加した農業就業者は、農業可容人口の限界性から都市へ流出していった。2) 昭和30年代の高度経済成長政策や県南水島工業地帯の開発に伴ない、農業就業者は県南や他県の都市へ流出していった。3) 昭和40年代にもこの



傾向は続くが、一方でわずかながらではあるが、第二次・第三次産業への移行が見られる。しかしそれは製造業等の特定部門に限られている。特に45年以降、この地域では、水島工業地帯への通勤、小規模の縫製工場の創設が見られる。またこの現象は政府の減反政策と密接に関連していると考えられる。4) 今後も、農業就業者数は減少し、都市への流出と上述のような第二次・三次産業への移行というパターンをたどるであろう。

(金盛孝泰)

#### 参考文献

平凡社『人口大事典』

毎日新聞社人口問題調査会編『日本の人口』, 毎日新聞社, 1954

財団法人矢野恒太記念会編『日本国勢図会』, 国勢社, 1970

日本銀行統計局『本邦主要経済統計』, 1966

## 2 人口異動

以下は、「統計おかやま別冊号・岡山県人口の動き」を中心に、統計台帳、住民票、除票などによって、川上町における最近の人口異動の特徴を調べたものである。

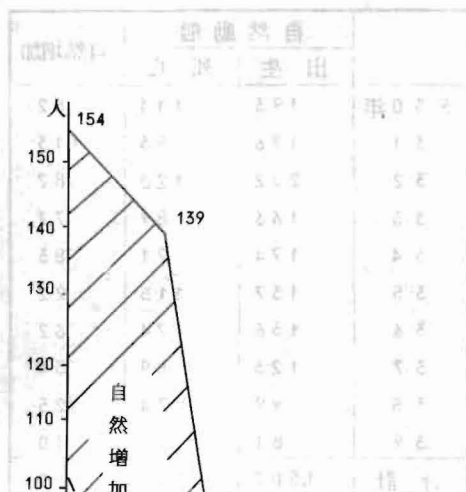
### (1) 自然動態

表2-2-1は川上町における和年40～49年度の出生・死亡の状況を、男女別人数、性比、自然的増減からみたもの、図2-2-1は出生・死亡総数の推移をグラフで表わしたものである。なお、自然増加とは「出生数－死亡数」が+の時、自然減少とはそれが－の時である。表2-2-2は当町における昭和30～39年の出生・死亡数であり、昭和40年代と比較するために用意した。これは

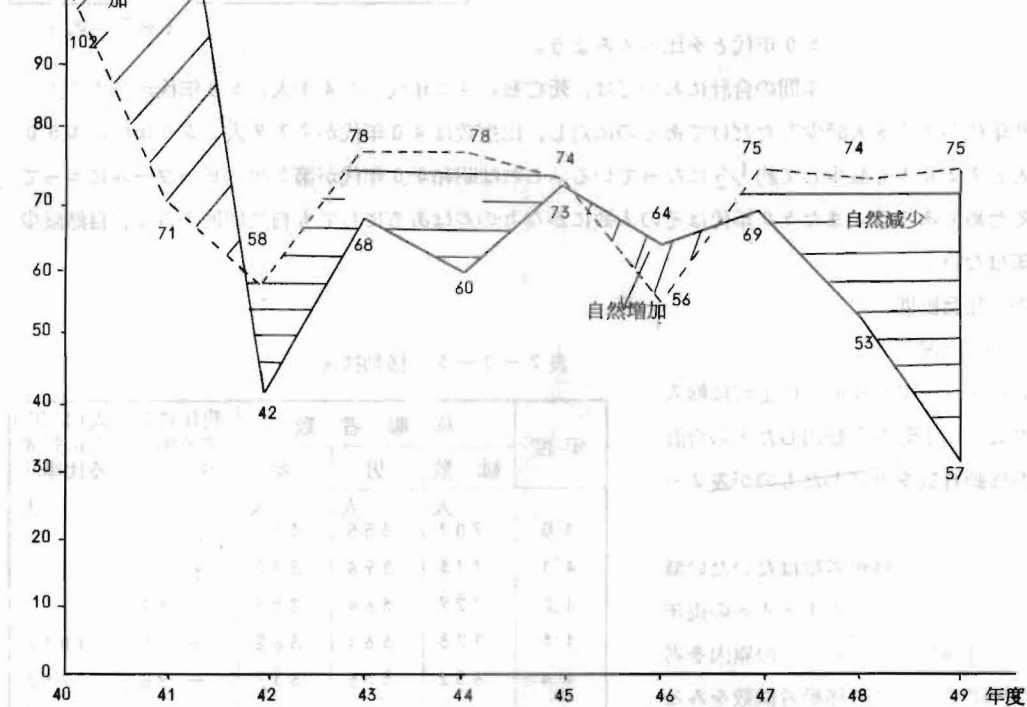
表2-2-1 昭和40年代における出生・死亡（「岡山県人口の動き」） △減少

年 度	出 生				死 亡				自 然 的 増 減		
	総数	男	女	女100人 に対する 男の割合	総数	男	女	女100人 に対する 男の割合	総 数	男	女
昭和40	154	85	69	123.2	102	54	48	112.5	52	31	21
41	139	67	72	94.4	71	30	41	73.2	68	37	31
42	42	21	21	100	58	32	26	123.1	△16	△11	△5
43	68	31	37	83.8	78	41	37	110.8	△10	△10	0
44	60	33	27	122.2	78	36	42	85.7	△18	△3	△15
45	73	40	33	121.2	74	40	34	117.6	△1	0	△1
46	64	37	27	137.0	56	32	24	133.3	8	5	3
47	69	40	29	137.9	75	35	40	87.5	△6	5	△11
48	53	25	28	89.3	74	39	35	111.4	△21	△14	△7
49	57	32	25	128	75	40	35	114.3	△18	△8	△10
合 計	779	411	368	111.7	741	379	362	104.7	38	32	6

表 2-2-1 自然動態 (単位: 人)



出生率は15.4‰、死亡率は3.4‰、自然増加率は12.0‰である。人口は154,000人、自然増加は102,000人である。



国 2-2-1 自然動態

統計台帳によったため、年度別の前者と異なり、年別になっている。

川上町では昭和40年代に自然増加と自然減少は交互に2回繰り返されているが、10年間を合計すれば38人の自然増加である。出生数・死亡数における男女の性比は「女100人に対する男」の割合で示したが、出生・死亡ともに女子より男子の方が多い年がほとんどで、41・43・48年度の出生、41・44・47年度の死亡において女子の方が男子より多くなっているのみである。この年度は自然減少の年度かその前年に当たっているの、自然減少は男子の出生・死亡数の減少が関係しているようだ。41年度から42年度にかけての出生数の大幅な減少が目立っている。

次に昭和40年代と30年代とを比べてみよう。

まず、それぞれの10年間の合計においては、死亡数は40年代が741人、30年代が917人と40年代が176人減少しただけであるのに対し、出生数は40年代が779人、30年代が1,507人と728人も減少して約 $\frac{1}{2}$ になっている。これは昭和30年代が第2次ベビーブームに当たっているためであろう。また30年代はその人数にかなりの差はあるにしても自然増加のみで、自然減少の年はない。

## (2) 社会動態

### (イ) 概況

昭和40～49年度に川上町に転入した人と川上町から転出した人の合計、即ち移動者数を表にしたものが表2-2-3である。

これによると移動者数はだいたい減少の傾向にあるが、41・46の両年度だけは増加している。この原因を考える前に46年度の移動者総数をみると638人で、前年度の610人に対しては確かに4.6%増となっているが、2年度前の652人に対しては2.1%減と増加率は小さい。従って、川上町における昭和40年代の移動状況を概

表2-2-2

昭和30年代における出生・死亡

	自然動態		自然増加
	出生	死亡	
S30年	193	111	82
31	196	83	113
32	202	120	82
33	166	89	77
34	174	91	83
35	137	115	22
36	136	74	62
37	123	89	34
38	99	74	25
39	81	71	10
合 計	1,507	917	590

(統計台帳)

表2-2-3 移動状況

年 度	移 動 者 数			前年に対する増加率	人口1000人に対する比率
	総 数	男	女		
	人	人	人	%	人
40	707	355	352		
41	773	396	377	+ 9.3	
42	729	364	255	- 5.7	
43	723	361	362	- 0.8	101.7
44	652	335	317	- 9.8	95.2
45	610	298	312	- 6.4	91.7
46	638	300	338	+ 4.6	100.0
47	573	262	311	-10.2	92.2
48	460	210	250	-19.7	76.9
49	442	190	252	- 3.9	75.7

(「岡山県人口の動き」)

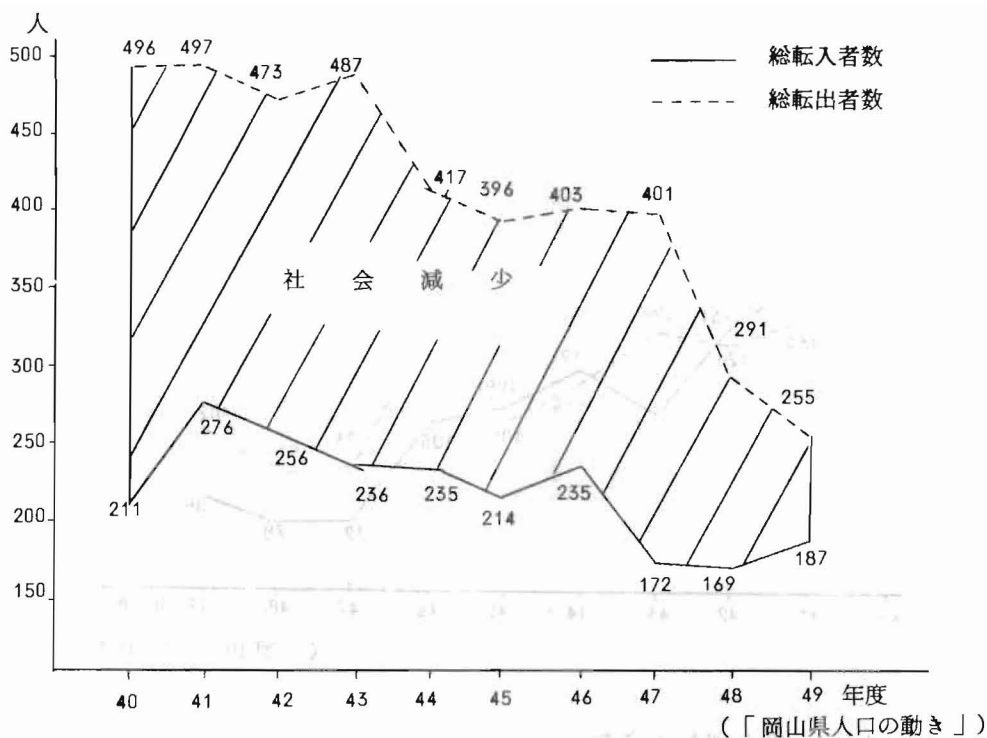


図2-2-2 社会動態

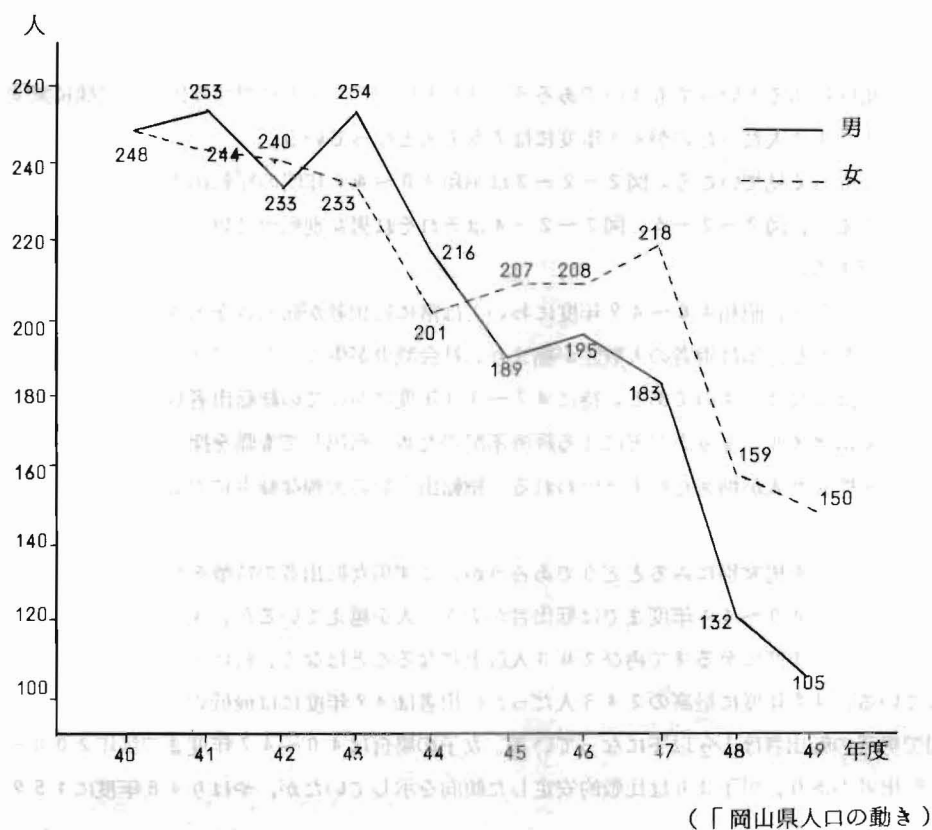


図2-2-3 男女別転出者数

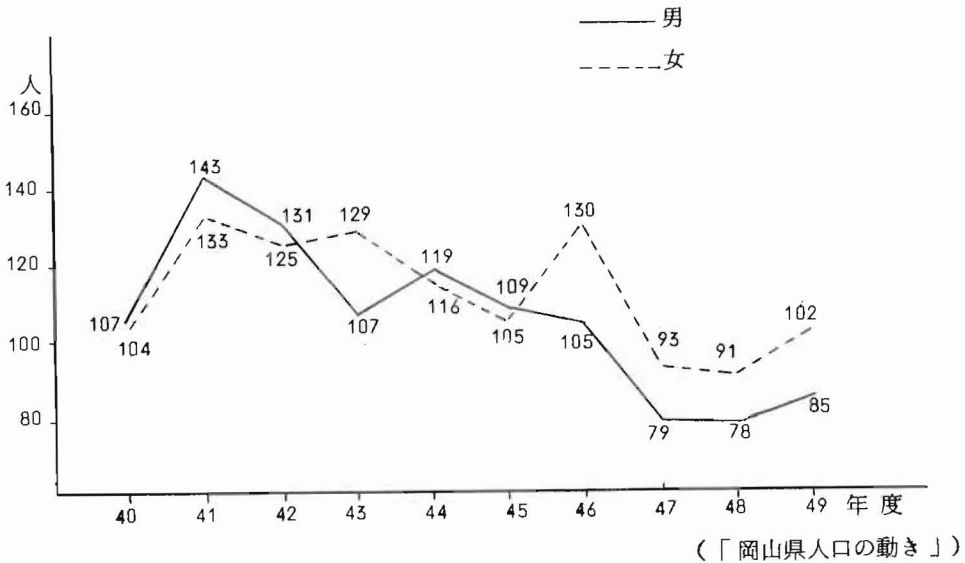


図2-2-4 男女別転入者数

観すれば減少の傾向にあるといってもよいであろう。また人口1,000人に対する比率も同様に減少し、43年度に101.7人だったのが49年度には75.7人となっている。

移動をもう少し詳しく見ていこう。図2-2-2は昭和40～49年度の総転出入者数より川上町の社会減少をみたもの、図2-2-3、図2-2-4はそれぞれ男女別転出者数、同転入者数の推移を表わしたものである。

図2-2-2をみると、昭和40～49年度においては常に転出者が転入者を大きく上回り社会減少が続いている。しかし近年は両者の人数差が縮まり、社会減少が少なくなっている。この傾向は主に転出者数の減少によるものである。特に47～48年度にかけての総転出者数が急激に減少しているが、この頃はオイルショックなどによる経済不況のため、転出しても職を探すことが困難な状況にあり、転出を控えた人が増えた結果と思われる。総転出者数の大幅な減少に対し、総転入者数は緩やかな減少に留まっている。

それでは転出入状況を男女別にみるとどうであろうか。まず男女転出者の特徴を図2-2-6でみると、男子の場合昭和40～44年度までは転出者が200人を越えているが、45年度に200人を割ってから後は49年度に至るまで再び200人以上になることはなく、特に48年度には急激な減少を示している。43年度に最高の248人だった転出者は49年度には最低の105人となり、ここ6年間で男子の転出者は $\frac{1}{2}$ 以下になっている。女子の場合は40～47年度まで毎年200～250人の転出者があり、男子よりは比較的安定した傾向を示していたが、やはり48年度に159

人と急激に減少している。

さて、このように男女ともかなりの人口流出が行なわれているが、男女別転入状況を図2-2-4でみてみよう。昭和40～45年度まではだいたいにおいて女子より男子の転入者が多く、43年度だけ女子が男子を上回っている。しかし46年度以降は常に女子の方が17～25人、男子より多くなっている。

転出入の理由については明らかにすることはできないが、転出の理由としては女子に就職と結婚の2つが考えられるのに対し、男子は就職がほとんどであろう。転入の理由としては、女子が結婚前の一時的就職を終えての帰郷と当町への嫁入りのため、男子は学卒者の帰郷と事業失敗者の帰郷などであろう。従って、特に男子の場合に都市の景気・不景気が転出入の増減に大きく影響してくる。46年度以降、転出・転入ともに男子が女子より少ないのはたぶん世の不景気のためであり、景気がかなりの回復を示さないとこの傾向は続くだろう。

以上の様に転出入を総数・男女別でみてきたが、昭和40～49年度の10年間を総計すると川上町では男子2,008人、女子2,108人、計4,116人が転出し、男子1,063人、女子1,128人、計2,191人が転入している。ゆえに男子945人、女子980人、計1,925人のかなり大きな社会減少をしたことになる。この社会減少と先に見た自然的増減とを合わせて人口の増減状態を表わした図が図2-2-5である。自然的増減においては増加と減少が繰り返されているが、これは少数の範囲内でのことである。これに比べると前述のように社会減少はその数が大きいので、結局、毎年当町の人口は減少しているのである。しかし、49年度は人口減少が初めて100人以下(86人)と

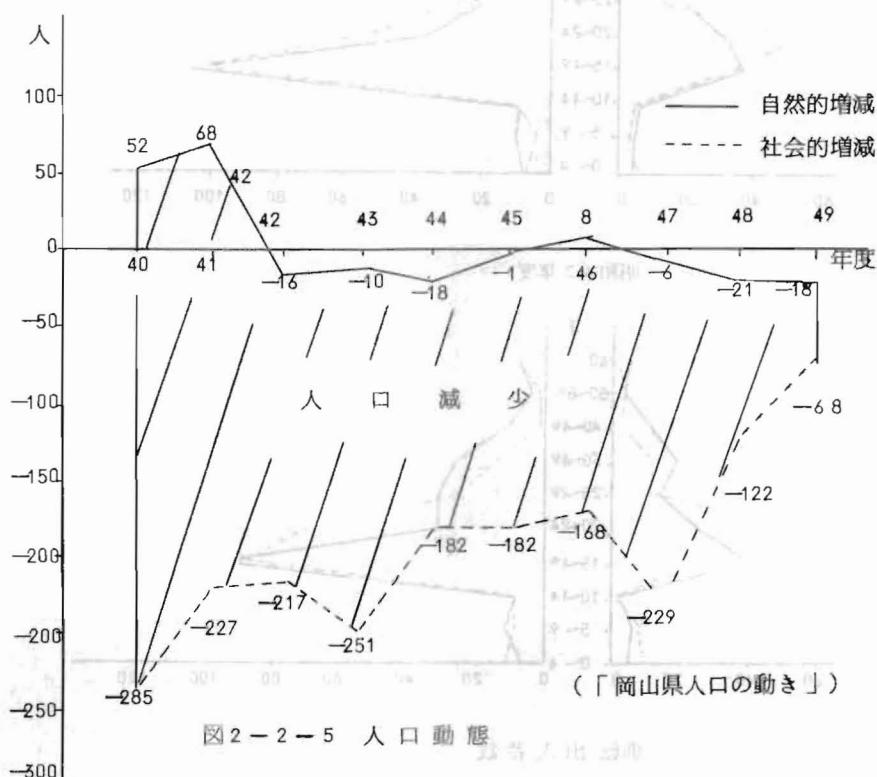
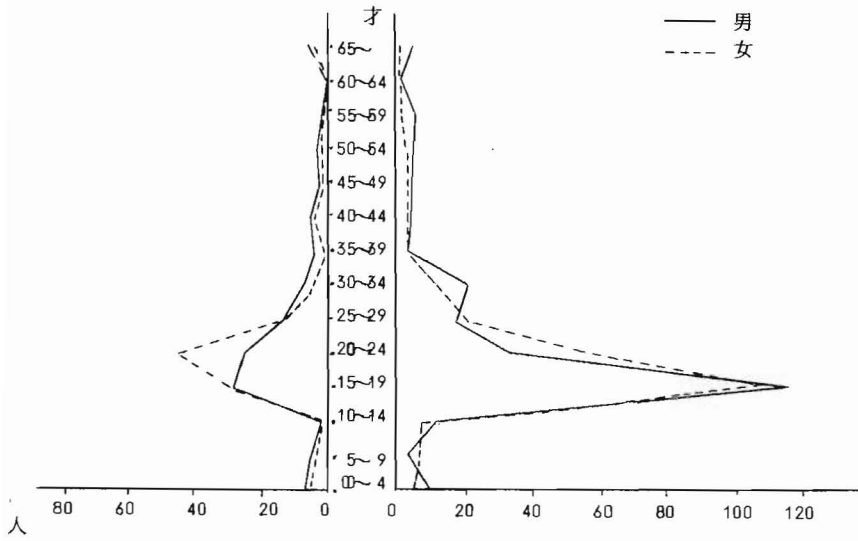


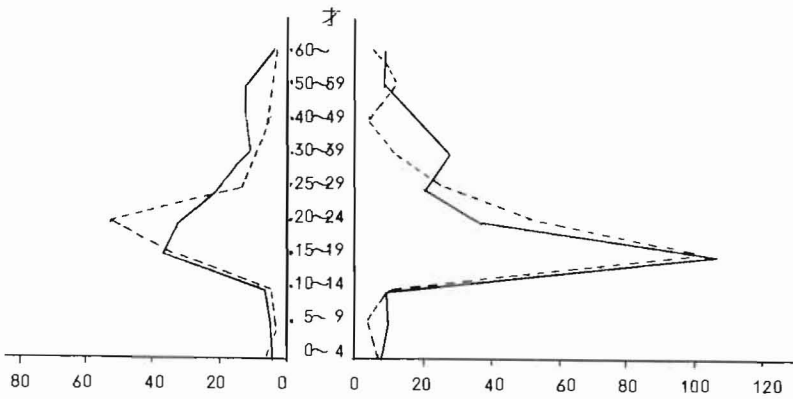
図2-2-5 人口動態

昭和40年度

(「岡山県人口の動き」)



昭和41年度



昭和42年度

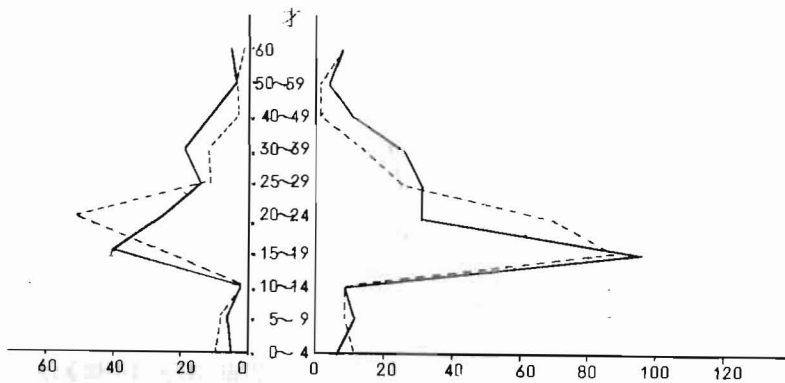


図2-2-6 年令別転出入者数



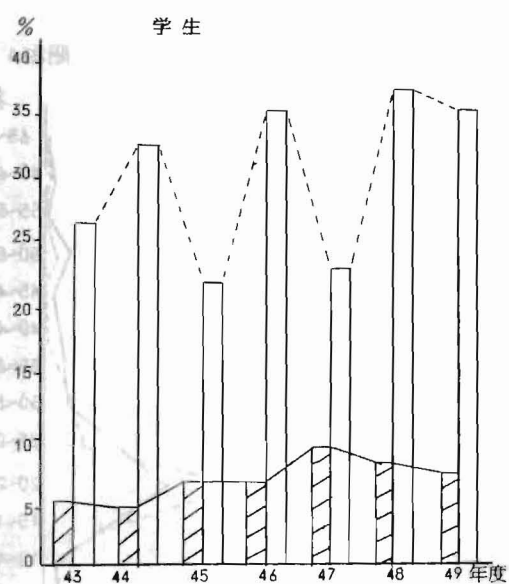
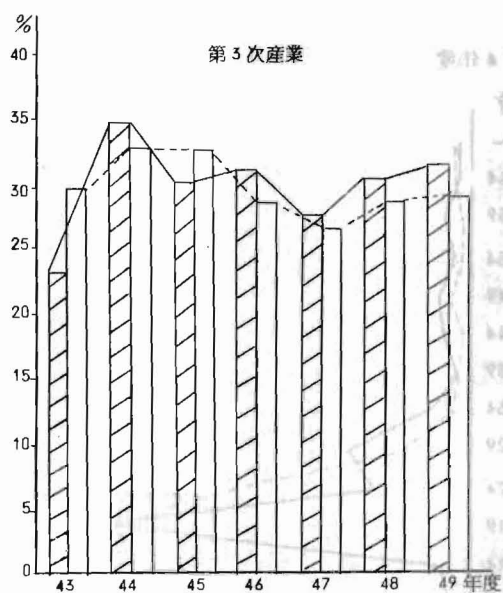
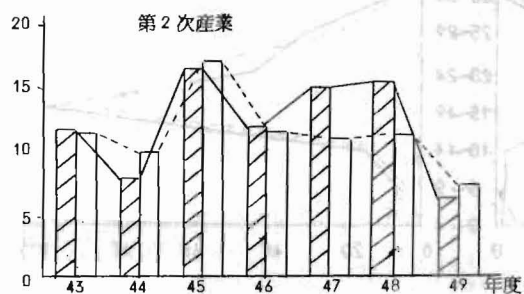
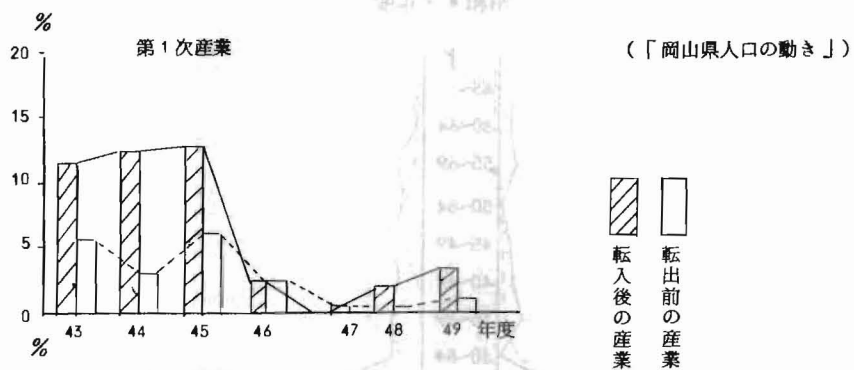
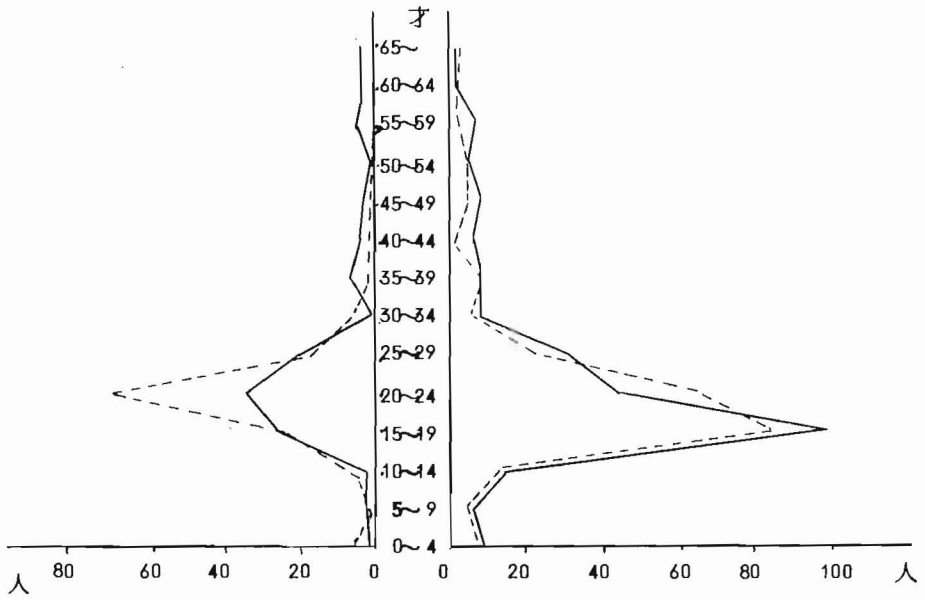
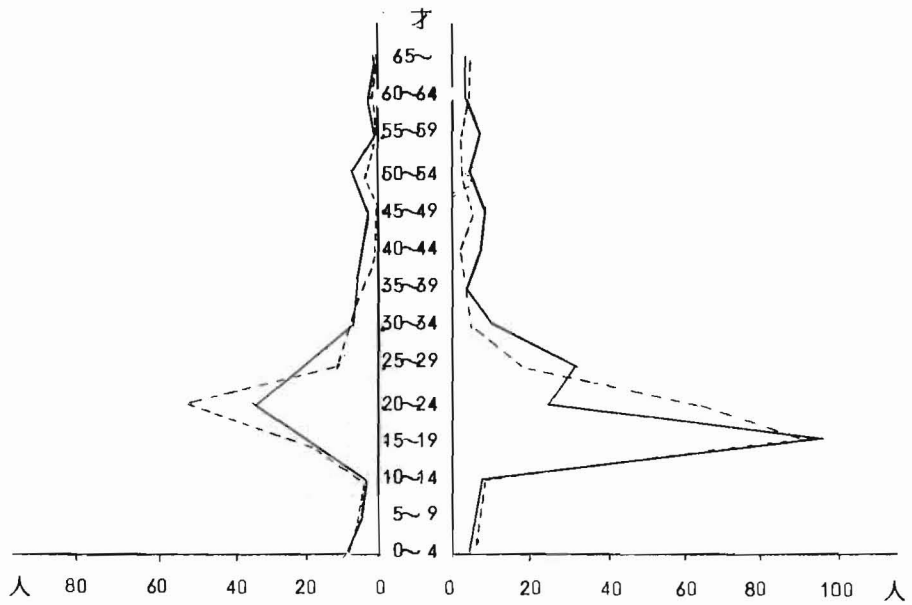


図2-2-7 産業別転出入者

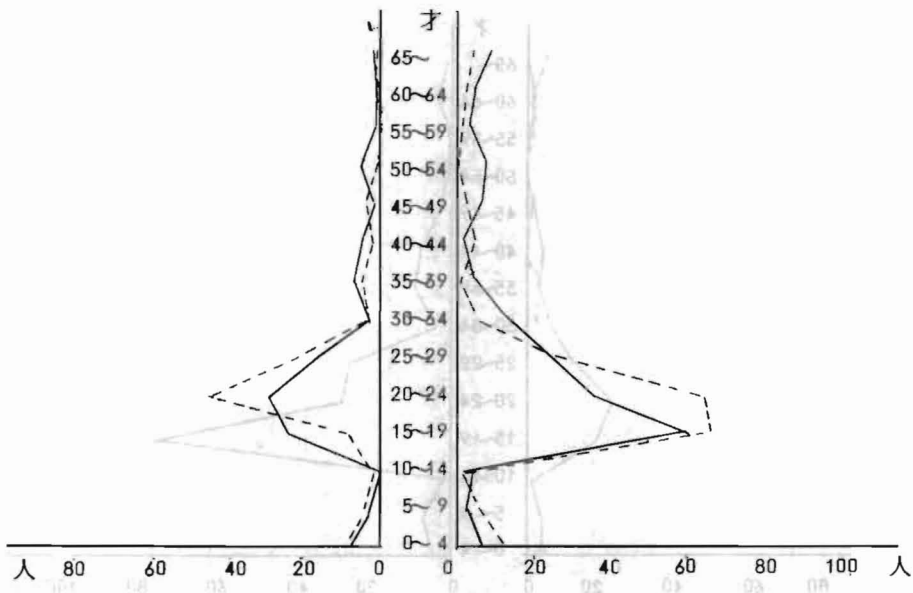
昭和43年度



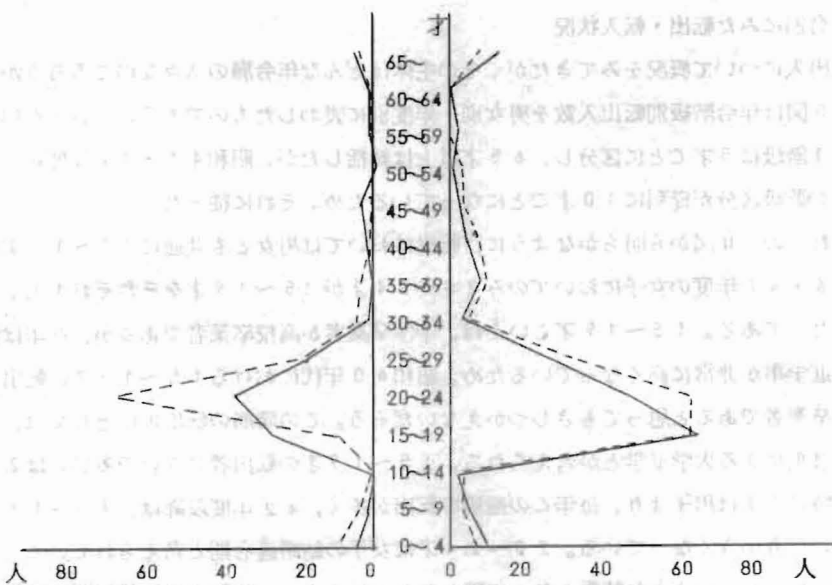
昭和44年度



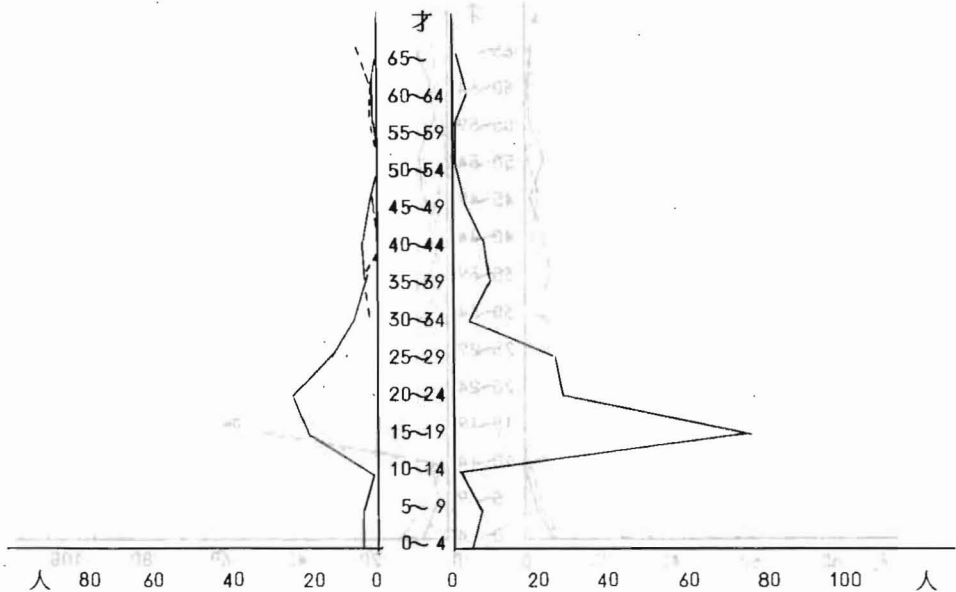
昭和45年度



昭和46年度



昭和47年度



なり、最も大きな人口減少を示した40年度の337人と比べると約 $\frac{1}{4}$ である。当町ではこの10年間に男913人、女974人、計1,887人の人口減少となっている。

#### (4) 年齢別にみた転出・転入状況

今まで転出入について概況をみてきたが、その主体はどんな年齢層の人々なのであろうか。図2-2-6の10図は年齢階級別転出入数を男女別・年度別に表わしたものである。(右一転出状況、左一転入状況)階級は5才ごとに区分し、65才以上は総括したが、昭和41・42年度については30~59才の階級区分が資料に10才ごとになっているため、それに従った。

さて、これらの10図から明らかなように、転出においては男女とも共通に15~19才が最も多く、ただ46・47年度の女子においてのみ20~24才が15~19才をそれぞれ1人、25人上回っているだけである。15~19才といえば、中学卒業者か高校卒業者であるが、近年は当町においても高校進学率が非常に高くなっているため、昭和40年代における15~19才の転出者のほとんどが高校卒業者であると思ってもさしつかえないだろう。この階層の転出理由としては、都市への就職と高学歴化による大学進学とが考えられる。15~19才の転出者に次いで多いのは20~24才である。特に女子は男子より、毎年この階層の転出が多く、42年度以降は、15~19才の転出者との差がかなり小さくなっている。20~24才は女子の結婚適令期と考えられていることから、結婚のための転出がこのような特徴となって現われたのであろう。昭和40年代初期に男子の30才、40才、50才代の転出者が割と多いのは、まだ世の中があまり不景気でなかったため、農村から都市へと転職していったためではなかろうか。また15才以上の生産年齢層は、女子より男子の転出が多いのが普通と考えられるが、46年度においてはわずかではあるが、20~54才までの年齢層で

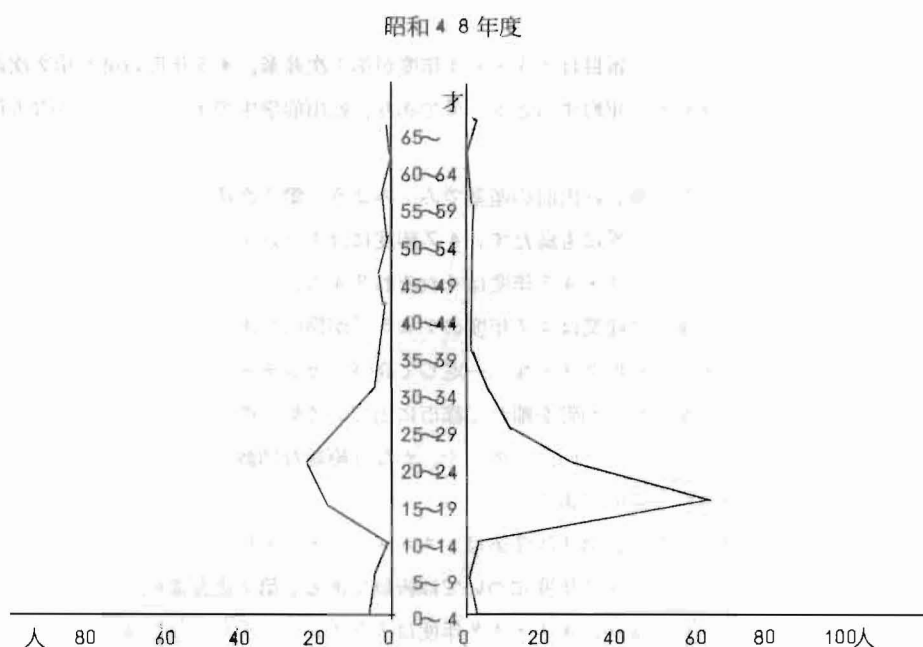
女子の転出者が男子を上回っている。

以上のように転出においては若い世代の転出が多いが、転入状況はどうであろうか。女子は常に20～24才の転入が最も多いが、男子は40～42年度は15～19才の転入が最も多く、43年度以降は女子と同様20～24才の転入が一番多くなっている。このように男子の転入年齢が43年度以降1階層高くなった理由としては、15～19才で当町を転出した人が、大学を終えて、あるいは就職に失敗して帰郷したことなどが考えられる。女子に20～24才の転入が多いことの理由は、転出理由とはほぼ同じであろう。

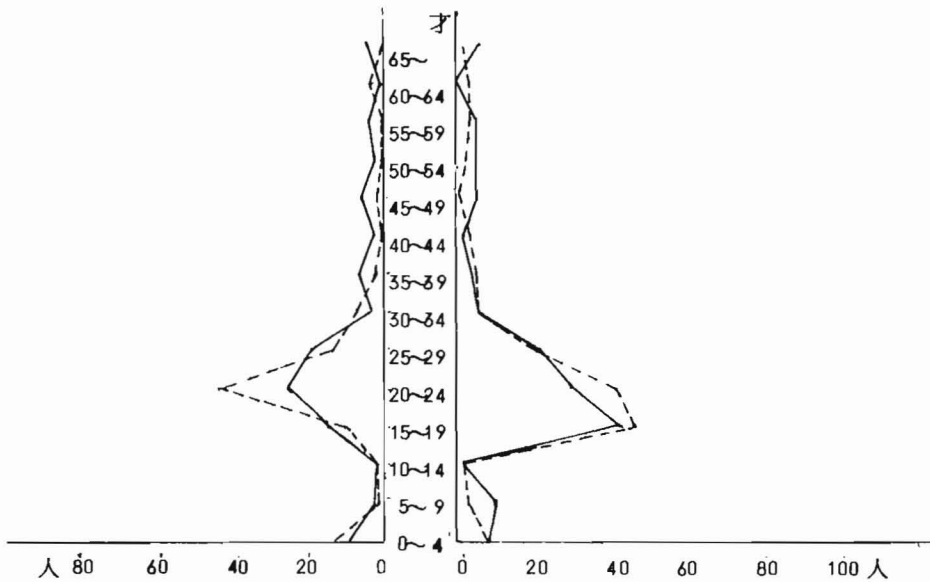
#### (ウ) 転出・転入前後の就業状態

川上町における昭和43～49年度の転出入者のうち、転出者については転出前の就業を、転入者については転入後の就業を産業別に見てみよう。このため、産業を第1次産業、第2次産業、第3次産業、学生、無職、その他の5種類に分け、年度別にそれぞれの占める割合を%で出したが、ここでは前4者についてのみグラフを書いた。そのグラフは図2-2-7であり、これによって転入前後の産業の特徴と年度別推移をみることにした。なお調査は就業状態についてであるため、対象は15才以上である。

図2-2-7によると、転出前の産業については例年第3次産業と学生が多く、この二者で過半数を占める。次いで第2次産業、第1次産業となっている。転入後の産業については第3次産業が常に



昭和49年度



最も多く（平均29.6%）、2番目は43・44年度が第1次産業、45年度以降が第2次産業である。転入後、学生となった人は平均すると6.7%であり、転出前学生であった人よりかなり低いパーセンテージとなっている。

昭和43～49年度の推移を、転出前の産業でみてみよう。第1次産業は43・45年度にわずかに5%を越えただけであとは5%にも満たず、47年度には1%以下となった。第2次産業はだいたい10%を維持しているが、44・49年度はそれぞれ9.4%、7.1%である。45年度は16.4%と最も多くなっている。第3次産業は47年度の26.3%が最低であるが、最も多い44年度の32.6%との差は6.3%であり、平均29.6%と一定して高パーセンテージを示している。学生も毎年20%を下ることとはなく、学卒者が当町を離れて都市に出ていく傾向の強いことがわかる。転出前の学生をグラフの折線でたどっていくと凹凸が激しく、かなり極端な増減を毎年くり返しているが、この現象が何によるものかは全く不明である。

転入後の産業の推移をみると、第1次産業は、43・45・46年度には10%を越えているが、46年度以降は急激に減少し、47年度については皆無である。第2次産業は転出前の産業と同じく、だいたい10%を維持しているが、44・49年度は7.5%、5.9%と10%を割っている。第3次産業は43年度から44年度にかけて11.4%も増加し、45年度には再び4.7%減少しているが、その他は比較的变化は少ない。学生においても最低4.5%から最高9.2%まで、その差は4.7%しかなく、推移にあまり変化はみられない。

## (二) 地域別にみた転入・転出の状況

転出者は川上町転出後の住居地を、転入者は川上町転入前の住居地を県外・県内別にみるとどうであろうか。図2-2-8によると昭和40～49年度においては、転出入者ともに県内が県外を上回り、特に転出者は大きくリードしている。個別にみていくと、転入者は県外からが毎年74～99人あり、40～47年度までは男子が女子を上回っているが、48・49年度は逆転して4～5人女子

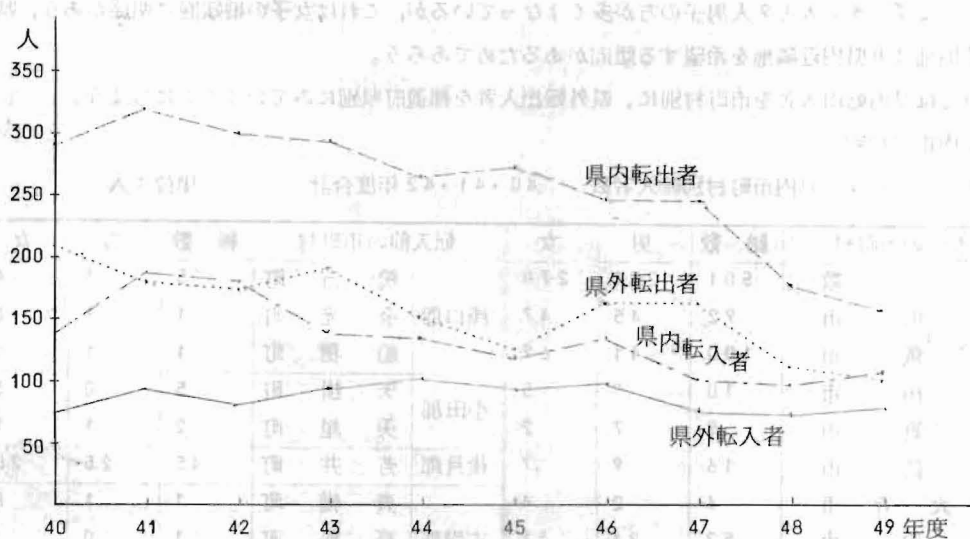


図2-2-8 県外・県内別転出入者数 (「岡山県人口の動き」)

表2-2-4 県外・県内別転出入者数

年 度	転 入 者						転 出 者					
	県 外			県 内			県 外			県 内		
	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女
40	74	50	24	137	57	80	209	118	91	287	130	157
41	89	57	32	187	86	101	177	99	78	320	154	160
42	79	43	36	177	88	89	173	95	78	300	138	162
43	94	52	42	142	55	87	191	113	78	296	141	155
44	99	50	49	136	55	81	148	77	71	269	139	130
45	94	54	40	120	55	65	124	64	60	272	125	147
46	99	50	49	136	55	81	155	79	76	248	116	132
47	74	39	35	98	40	58	154	84	70	247	99	148
48	74	35	39	95	43	52	109	56	53	182	76	106
49	79	37	42	108	48	60	101	49	52	154	56	98

(「岡山県人口の動き」)



が男子を上回っている。県内からの転入者は47・48年度を除いては毎年100人以上あり、41・42年度は187人・177人と多くなっている。

次に転出者をみると県外へは最低101人～最高209人とその差は108人もあり、これは都市における景気・不景気はかなり影響していると思われる。県内へは41・42年度が300人以上、40年度と43～47年度が200～300人、48・49年度が100～200人と県外転出者同様なりの変化をみせている。

転出入者ともに県内関係は毎年度女子が男子よりもかなり多く、(ただし44年度転出者は男子139人、女子130人と9人男子の方が多く)なっているが、これは女子の婚姻圏に関係があり、県外の遠隔地より県内近隣地を希望する傾向があるためであろう。

それでは県内転出入者を市町村別に、県外転出入者を都道府県別にみていくことにしよう。

#### a. 県内市町村別

表2-2-5 県内市町村別転入者数 40・41・42年度合計 単位：人

転入前の市町村			総数	男	女	転入前の市町村			総数	男	女
総数			501	231	270	鴨方町			5	1	4
岡山市			92	45	47	浅口郡 金光町			1	1	0
倉敷市			100	41	69	船穂町			1	1	0
津山市			10	5	5	小田郡 矢掛町			5	0	5
玉野市			9	7	2	美星町			2	1	1
笠岡市			16	9	7	後月郡 芳井町			45	25	20
西大寺市			6	2	4	吉備郡 真備町			1	1	0
井原市			52	21	31	高松町			1	0	1
総社市			8	3	5	足守町			1	0	1
高梁市			22	10	12	上房郡 北房町			2	1	1
新見市			7	4	3	賀陽町			6	5	1
御津郡 一宮町			1	1	0	有漢町			2	1	1
加茂川町			1	1	0	川上郡 成羽町			37	17	20
赤磐郡 山陽町			1	0	1	備中町			26	8	18
赤坂町			1	0	1	阿哲郡 哲多町			1	0	1
和気郡 和気町			2	2	0	大佐町			1	1	0
日生町			1	1	0	真庭郡 勝山町			1	0	1
邑久郡 邑久町			1	0	1	久世町			2	0	2
上道郡 上道町			2	1	1	八束村			1	1	0
児島郡 灘崎町			2	1	1	湯原町			4	3	1
興除村			1	0	1	英田郡 作東町			1	6	1
東児町			1	1	0	旭町			1	6	1
都窪郡 早島町			5	2	3	久米郡 中央町			4	2	2
吉備町			3	2	1	中央米町			2	2	0
茶屋町			2	1	1						

(「岡山県人口の動き」)

表2-2-6 県内転出者数 40・41・42年度合計

単位：人

転出後の市町村			総数	男	女	転出後の市町村			総数	男	女
総数			907	422	485	都窪郡	吉備町		2	2	0
岡山市			227	110	117		茶屋町		7	4	3
倉敷市			203	99	104		庄入村		2	0	2
津山市			5	4	1		山手村		1	1	0
玉野市			12	8	4		鴨方町		4	1	3
笠岡市			11	5	6	浅口郡	金光町		3	2	1
西大寺市			6	2	4		里庄町		4	0	4
井原市			115	37	78	小田郡	矢掛町		5	1	4
総社市			54	33	21		美星町		13	2	11
高梁市			50	18	32	後月郡	芳井町		43	24	19
新見市			7	6	1		真備町		2	1	1
御津郡	一宮町		6	2	4	吉備郡	高松町		1	0	1
	加茂川町		1	1	0		昭和町		1	1	0
赤磐郡	赤坂町		1	0	1		北房町		2	1	1
	瀬戸町		2	1	1	上房郡	賀陽町		5	3	2
							有漢町		2	0	2
和気郡	和気町		1	1	0		成羽町		39	17	22
	備前町		3	3	0	川上郡	備中町		23	13	10
	日生町		1	1	0						
	吉永町		1	1	0	阿哲郡	哲多町		1	0	1
邑久郡	邑久町		1	0	1		勝山町		3	0	3
	長船町		1	1	0		久世町		3	1	2
上道郡	上道町		4	1	3	真庭郡	八束村		7	3	4
							中和村		1	0	1
児島郡	灘崎町		6	2	4	英田郡	作東町		2	1	1
	興除村		5	4	1	久米郡	柵原町		1	0	1
	藤田村		1	0	1	苫田郡	加茂町		2	0	2
	妹尾町		5	4	1						
	早島町		1	0	1						

(「岡山県人口の動き」)

表2-2-5は県内から川上町への転入者を市町村別に集計したもの、表2-2-6は川上町から県内への転出者を同様に集計したものである。なおこの数字は40～42年度の3ヶ年を合計したものである。

まず転入状況を見ると岡山市の92人と倉敷市の100人が目をひき、二市で全体の約38.3%を占めている。その他では井原市が52人、高梁市22人、後月郡芳井町が45人、川上郡内の成羽町が37人、備中町が26人と川上町に隣接する市町村からの転入が多く、これらで約36.3%となっている。隣接市町村でも小田郡矢掛町・美星町はあまり多くない。

県内転出者も転入者と同様の傾向を示し、岡山市の227人と倉敷市の203人とで全体の約47.

4 %を占め、隣接の井原市の115人、高梁市の50人、後月郡芳井町43人、川上郡内成羽町の39人、備中町の23人とで約29.8%である。加えて、転入ではあまり特徴的ではなかった総社市が54人とかなりの転出数を示している。

b. 県外都道府県別

表2-2-7 県外転入者数

40・41・42年度合計

単位：人

転入前の都道府県	総数	男	女	転入前の都道府県	総数	男	女
総数	242	150	92	京都府	18	10	8
北海道	1	1	0	大阪府	71	43	28
宮城県	2	1	1	兵庫県	32	17	15
福島県	1	1	1	奈良県	3	2	1
茨城県	3	2	1	和歌山県	1	1	0
千葉県	5	5	0	鳥取県	5	2	3
東京都	8	4	4	島根県	5	3	2
神奈川県	6	6	0	広島県	41	24	17
静岡県	3	2	1	山口県	3	2	1
新潟県	1	1	0	香川県	3	2	1
長野県	2	2	0	高知県	3	0	3
愛知県	17	14	3	愛媛県	2	1	1
三重県	1	1	0	鹿児島県	5	3	2

(「岡山県人口の動き」)

表2-2-8 県外転出者

40・41・42年度合計

単位：人

転出後の都道府県	総数	男	女	転出後の都道府県	総数	男	女
総数	559	312	247	滋賀県	3	1	2
北海道	1	1	0	京都府	32	19	13
福島県	1	1	0	大阪府	184	83	101
茨城県	1	0	1	兵庫県	85	48	38
栃木県	1	1	0	奈良県	4	1	3
山形県	2	1	1	鳥取県	1	0	1
群馬県	5	2	3	島根県	1	0	1
埼玉県	5	4	1	広島県	112	66	46
千葉県	7	5	2	山口県	2	0	2
東京都	37	26	11	香川県	16	15	1
神奈川県	13	9	4	徳島県	2	2	0
静岡県	5	3	2	高知県	4	1	3
新潟県	1	1	0	福岡県	4	2	2
石川県	1	0	1	熊本県	1	0	1
愛知県	18	15	3	大分県	1	1	0
三重県	7	3	4	鹿児島県	1	1	0

(「岡山県人口の動き」)

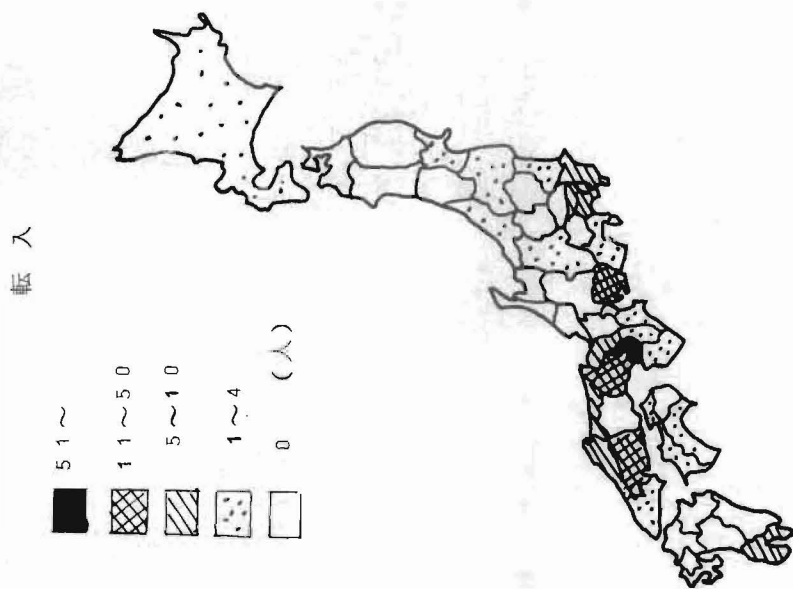
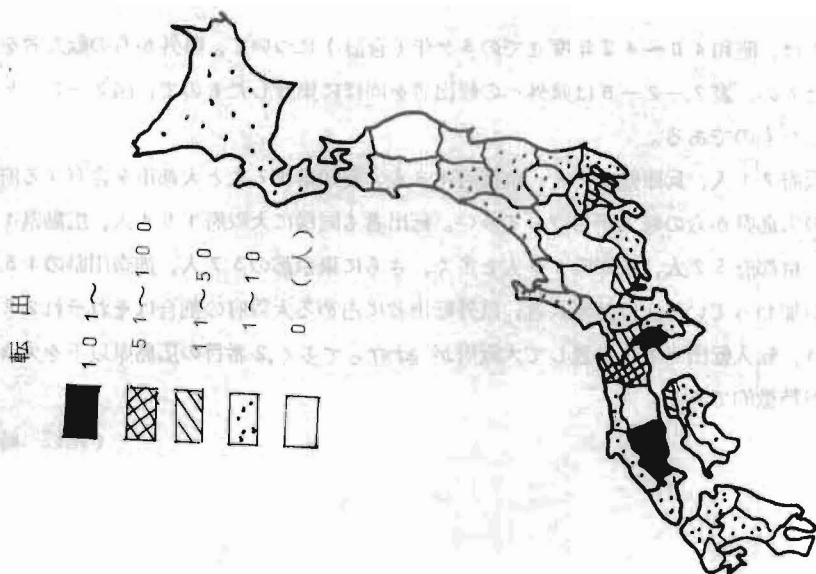


図2-2-9 県外転出者

表2-2-7は、昭和40～42年度までの3ヶ年（合計）について、県外からの転入者を都道府県別に集計したもの、表2-2-8は県外への転出者を同様に集計したもので、図2-2-9はそれらを地図で示したものである。

転入者は大阪府71人、兵庫県32人、京都府18人、愛知県17人と大都市を含有する府県からの転入と隣接の広島県からの転入が目立って多い。転出者も同様に大阪府184人、広島県112人、兵庫県85人、京都府32人、愛知県18人と多く、さらに東京都の37人、神奈川県13人、香川県の16人が加わっている。県外転入者、県外転出者に占める大阪府の割合はそれぞれ29.3%、32.9%であり、転入転出ともに共通して大阪府が目立って多く、2番目の広島県以下を大きく引き離しているのが特徴的である。

（尾銭 晴子）

### 第3章 原始・古代・中世の川上町

#### 1 原始・古代の開発

##### (1) 遺跡からみた原始・古代

川上町は、早くから開発の手がのびされていた吉備の国のほぼ中央部に位置している。この吉備の国は、古代における大国であり、造山古墳をはじめ作山古墳・両宮山古墳と、畿内の天皇陵に匹敵するほどの巨大墳が数多く造られている。しかし、大国吉備のイメージは南部の一部の地域に限られており、一歩その地域からはずれると、現在でも棚田や段々畑のひしめき合っている谷あいが続いている。ここが吉備高原であり、当時の先進地域のバックに位置しながら、原始・古代の遺跡・遺物が意外と少ない。川上町もその例にもれず、数基の古墳の存在を除いて、先土器・縄文・弥生時代の遺跡・遺物はあまり発見されていない。

先土器時代、吉備の人々は、河や沼に集まってくる獣を狩るため、当時草原であった瀬戸内海およびその周辺に住みついていた。この時代の遺跡の分布が、現在の地形の島とか海に面した所に多いということは、そこが生活するのに最も好条件を備えていて、吉備高原など他の地域に進出する必要もなかったであろうと思われる。ところが、最後の氷河期が終わり、温暖な後氷期がおとずれると、海進が起こり、縄文時代早期を通じて海面が現在の平野の奥深くまで入り込んできた。

『岡山県の歴史』には、「縄文後期の遺跡の位置する場所は、前の時代（縄文前・中期）とあまり変わっていない。しかし特に注意しなければならぬことは、いままで遺跡のほとんど発見されていなかった北部地区に、わずかではあるが遺跡が発見されることで、苫田郡・真庭郡・川上郡・赤磐郡に知られている。」と書かれてあり、縄文時代も後期になって初めて川上郡の名が登場してくる。その遺跡については何も記録が残っていないので、特にとりたてるとはならないと思われるが、遅くとも縄文時代後期には、川上郡に人々が住んでいたというのは明らかである。縄文時代後期の遺物というと、これまであまりみられなかった土隔・耳飾り・腕飾り・腰飾りなどの呪術的なものがめだってくる。これは採集生活が発達の頂点に達し、やがてその生活がいきづまってき<sup>1)</sup>だしたため、生活全般にきびしい規制が必要になってきたことを示していると考えられている。事実、幼獣の骨さえも発見されることから、人々の狩猟は苦しいものになっていたに違いない。そして獲物を追って、必然的に山林へ進出しなければならなかったであろう。

先土器時代から縄文時代の吉備高原において特に注目されるのは、広島県の帝釈峡の遺跡である。馬渡岩陰遺跡からは、先土器時代のスクレイパー（搔器）や剝片および縄文時代各期の土器、寄倉岩陰遺跡からも同様のもの、名越岩陰遺跡からは、加えて縄文人骨が出土されているのは驚くべきことである。岩陰遺跡は保存がよいということを考えれば、吉備高原の他の地域においても、遺跡こそあまり発見されていないが、わずかながら人々が生活していたと思われる。帝釈峡の溪谷地帯でさらに興味深いことは、名越遺跡の縄文晩期後半の層から、靱の痕のついた土器が出土したこと

である。うっそうとした森林の茂る深い峡谷の地でイネが栽培されたとは考えがたく<sup>2)</sup>、そうすると他の地域から運ばれたことになり、縄文時代の終末にすでにイネに着手していた先進地域という、当然吉備南部であろう。高梁川から成羽川・東城川・帝釈川を経てもたらされたのであろうと考えられている。それが事実であれば、川上町のすぐ北を、当時としては進歩的な人々が行き来したことになり、川上町の谷あいからもっと縄文時代の遺跡・遺物が発見されてもよさそうに思われる。

弥生時代になると、水稻耕作の開始によって人々は定住化し、やがてムラができ、ムラから地域集団へ、そして政治的地域集団へと移り変わっていく。『岡山県の歴史』には、「弥生文化時代中期の遺跡は（中略）備中北部の地区も、大型の遺跡はまだ注意されていないが、阿哲郡・新見市・高梁市・上房郡・川上郡に点々として遺跡が報告されている。」と書かれてあるし、吉備高原のいたる所に遺跡が存在しているところから、この時代の人々の山林開発がめざましかったことがうかがわれる。広島県油木町高水池遺跡のように、人跡未跡だった地にさえも勇敢に入り込み、谷水田を営み始めた人々もいた。「大型の遺跡はまだ注意されていない」ということから、水田と居住地の拡大をめざして南部から進出してきた人々は、世帯共同体（農業経営の基礎単位と認められ、いくつかの世帯を含んだ血縁関係の強い集団<sup>3)</sup>）ごとに分散して、川のほとりや谷を利用して農業を営んだのであろう。川上町では、人々は日当たりのよい緩やかな斜面上に竪穴式住居をつくって生活の場とし、領家川に沿ったわずかの平地（当時は沼地であったかもしれない）を農業生産の場としたと考えられるが、遺跡の調査報告書を伴うような報告はされていないので、想像の域を出ない。この世帯共同体が、やがていくつか集まって農業共同体を形成し、灌漑水利の協業や鉄器の入手を通じて規制を受けるようになってくる。農業共同体は、最初世帯共同体の各家長からなる家長会議の形をとったと考えられるが、そのうち家長会議を主宰する特定の家長（農業共同体首長）が出現してきて力をもつようになる<sup>3)</sup>。川上町の可耕地の狭さとか、古墳時代前半期古墳の存在がほとんど知られていないことから、世帯共同体から農業共同体へ、そして首長の出現という進展は、吉備南部の先進地域に比べてかなり緩やかであったろうと思われる。

先土器時代から弥生時代まで具体的な遺跡・遺物なしで述べてきたが、古墳時代に入って初めて現存する古墳をもって、川上町の古代を考えることができる。しかし、考察の対象となる古墳は後半期古墳がわずか2基しかなく、また副葬品も不明なことから十分な考察は不可能である。

まず2基の古墳、大杉塚古墳・九門大塚古墳の現状をみると、以下のようである。どちらも破壊が著しく、横穴式石室の内部は盗掘を受けている。

(a) 大杉塚古墳（以下の現状調査は筆者による）

(イ) 位置・立地 手荘大字地頭名原の領家川に向かう斜面上の、標高200m、国道313号線からの比高100m付近に立地している。領家川への見晴らしがよい。

(ロ) 外部構造 円墳であるが、現在周囲半分を舗装道路が取り巻いていて、墳丘はもちろん周囲の地形も削られて、かなり変形していると思われる。特に東から南にかけての現状の墳端は、1m前後の切り口が露出している。現状の測値は、径15.8m（N60°W）、高さ5.1m（N60°W南）・1.0m（N60°W北）である。『岡山県通史』には、大正8年以後の調査によって、径





写真

3-1-1

大杉塚古墳

(天井石と  
奥壁の一部  
が露出して  
いる)

9.0尺(2.73m), 高さ2.5尺(7.6m)と記されている。〔( )内のmへの換算は筆者による〕

(ハ) 内部構造 横穴式石室の開口部と奥壁の一部が露出している。玄室内は、比較的大きな石は面取りされているが、その他は自然石に近い石が使用されており、羨道部は土砂が埋没している。主軸方向はN15°Eで、南開口である。

(b) 九門大塚古墳

(3.17mの長さ) 国史館蔵の古墳大塚



写真

3-1-2

九門大塚古  
墳

(羨道部が  
破壊され玄  
室の天井石  
が露出して  
いる)

(3.17mの長さ) 国史館蔵の古墳大塚

(イ) 位置・立地 手荘大字領家九門の領家川に向かう緩やかな斜面上の、標高120m、国道313号線からの比高10m付近に立地している。大杉塚古墳より約3km北にある。

(ロ) 外部構造 円墳であるが、南は舗装道路によって、北は墓地の石垣によって削られている。現状の測値は、径11.2m(N25°E)、高さ3.8m(N25°E北)・1.0m(N25°E南)であり、『岡山県通史』には、径66尺(20.0m)と記されている。

(ハ) 内部構造 横穴式石室の羨道部および開口部は破壊されている。大杉塚古墳よりも面取りされた石が多く、積み方も整然としている。主軸方向はN60°Wで、南開口である。

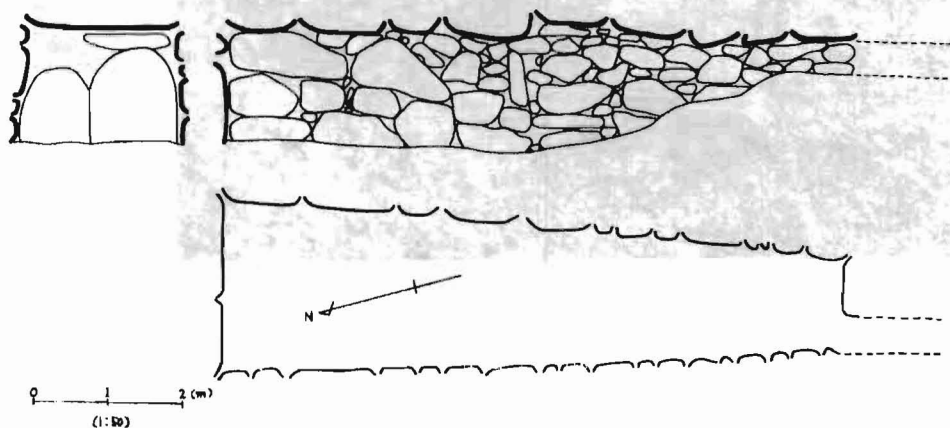


図 3-1-1 大杉塚古墳の石室模写図 (筆者の作成による)

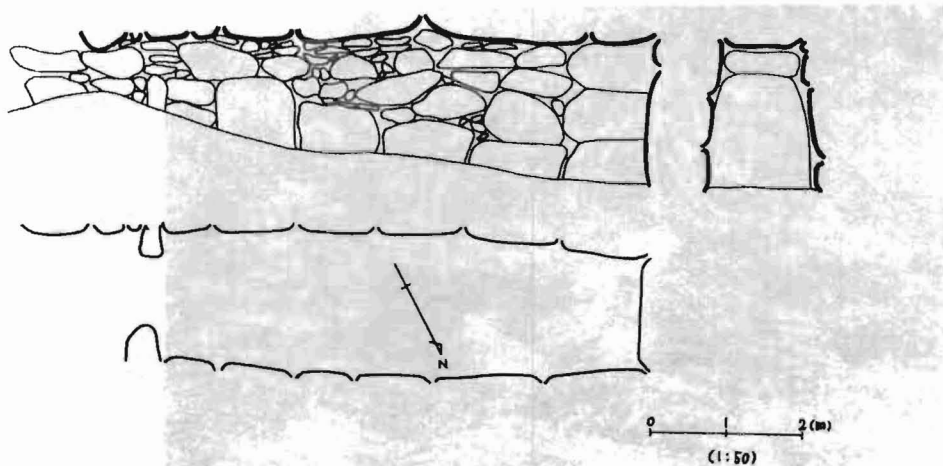


図 3-1-2 九門大塚古墳の石室模写図 (筆者の作成による)

ここで気づくのは、大杉塚古墳と九門大塚古墳とが共通点を多くもっていることである。まず立地をみると、どちらも領家川を望む斜面上にあり、領家川に向かって開口している。外形や石室の規模、石の積み方(図3-1-1・3-1-2参照)も似ており、距離も近い。よって、この2基の古墳は、だいたい同時期に造られ(石の積み方が比較的整然としていて、面取りされた石も多いことから、九門大塚古墳の方が新しいと思われる)、同等の勢力をもった首長の系列としてとらえてもよいように考えられる。それでは、この首長達はどのくらいの範囲を掌握していたのだろうか。限定するのは不可能であるが、成羽川沿いの地域には別の農業共同体の存在が考えられるし、領家川沿いの地域以外はさらに農業生産性が低かったと思われるので、やはり中心となったのは領家川沿いの一連の地域であつたろう。

次に古墳の築造時期の問題であるが、2基とも横穴式石室を伴なうところから古墳時代後半期ということはいえるが、さらに詳しいことを知るために、横穴式石室の編年を考えてみたい。しかし吉備では、まだ編年として位置づけられていないので、白石太一郎氏の論文「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」を参考にすることにした。もちろん、畿内における横穴式石室の編年をそのまま吉備にあてはめることには無理があるだろう。が、変化の過程が築造の技術的發展に従っていることから、ある程度は参考にしてよいのではないと思われる。白石氏は、大和・河内を中心とする畿内の横穴式石室の変遷を7期に分け、それを整理して5型式に分類している。構造上の変化の傾向をたどってみると次のようになる。第1に石材の巨石化に伴って、持ち送りが急角度であつたのがしだいに緩やかになり垂直化してくる。第2に玄室が正方形に近い形から、その長さを増し長大化している。第3に羨道部がごく簡単なものから、その長さや幅を増し、玄室の長さを越えるまでに発達している。第4に、第2・第3の結果として、石室が正方形プランからタテ長プランへと長大化している。川上町の2基の古墳は、玄室の形・石の積み方などから第5期に属すると考えられ、築造時期は6世紀後半から末葉と推定される。なお第5期の特徴としては、玄室の長大化は一応第4期で頂点に達し、羨道はいよいよその長さや幅を増す、石材も巨石化し、石室の側壁は3〜4段積みに、羨道は1〜2段積みが普通となる、などがあげられている。

6世紀後半というと、一般的に古墳が爆発的に出現してくる時期である。これは生産力の発展により、首長層だけでなく、その支配下にあった階級の民衆も古墳を築造する力をもつようになった結果である。ところが、川上町では群集墳の出現は認められない。それどころか、前半期の古墳の存在さえ明らかでないことから、吉備南部に比べてかなり民衆の成長が遅れていたことがうかがわれる。これはやはり、領家川沿いのわずかの水田と緩やかな斜面を利用したわずかの畑にしか、農業を営めなかったという生産力の低さをあらわしていると思われる。西川宏氏は、後半期の首長墓を分類し、川上町の2基の古墳を「手荘の地域に最初に出現した首長墓」とし、この地域を後進地域ととらえている。(['吉備の国'])

川上町に存在するその他の古墳については、『岡山県通史』に以下のように記されている。これは、大正8年以後の調査によるものである。

名 称	所 在 地	備 考
九門の大塚(天井石4枚)	手荘村大字領家字九門	石室行18尺
同 上 (天井石2枚)	同 上	石室行17尺5寸
塚 址	同 上	荒蕪地、高6尺、径30尺、塚石累々
竹林中の塚	同 上	竹林中平夷なる円丘あり、南面して路傍に開口す。
大塚(境塚)	手荘村大字領家及七地境上山頂	円丘径48尺、石室全長23尺、幅4尺5寸
尾領の大塚	同 上	大正10年土器を出すという。

## (2) 地名からみた古代

『和名抄』の諸国郡郷考をみると、備中には72郷あり、そのうち川上郡に属するものは5郷である。5郷とは、すなわち近似郷・成羽郷・弟翳郷・穴田郷・湯野郷である。これらの郷のうち、弟翳郷・穴田郷が現川上町にあたり、昭和29年の合併前の手荘村・大賀村が弟翳郷、高山村が穴田郷に含められる。『和名抄』の5郷に対し、吉田東伍氏の『大日本地名辞書』は、『風土記』の説をとって、5郷に呈妹郷を加えて6郷としている。

弟翳郷は、『和名抄』の高山寺本には読み方が「弓」、刊本には「勢」とあり、どちらが本当かわからないが、吉田氏は「弓」の方を用いている。今日「手」荘という地名が残っていることや、成羽郷と穴田郷との間に位置するという高山寺本の記述に地形的に合っていることから、弟翳郷が後の手荘にあたることは疑いないようである。またこの地にある地頭は、『大日本地名辞書』に山中の小駅であったと記されている。

ところで、『和名抄』が穴田郷のみをとりあげているのに対し、『備中府誌』は穴田郷と穴門郷とをとりあげている。そのことについて、吉田氏は成羽郷宇治村に大字穴田という地名があることから、穴田郷はそこにあたるとして、穴門郷の方が『和名抄』の穴田郷に一致するとしている。

『和名抄』の穴田郷を穴田(安奈多)といわずに、俗に穴門(奈加止)ということや、旧記に穴田郷は承久年間赤木太郎忠長の所領であり、穴門郷は建武3年(1336)平川高親の所領であった(旧富家村が建武3年平川高親の所領となる)という記載があることから、『和名抄』の穴田郷と『備中府誌』の穴門郷とが結びつく。藤井駿氏は、平安の後期から鎌倉時代にかけてのころ、川上郡が下道郡から独立した際に、近似・成羽・弟翳・穴田・湯野の5郷に加えて穴門郷が成立したのであろうとしている。すなわち、穴門郷は比較的后代に開拓され、集落が形成され、やがて独立した新郷である。<sup>4)</sup>

それでは、古代の郷名が中世になってどのように変化したかという問題について考えてみたい。古代的郡郷から中世的郡郷への移行は、郡と郷との錯綜を伴うとされているが、川上町においてはそのような現象はみられない。ただ、弟翳郷が手荘になり荘園化したようである。仁和寺の荘園であつたらしいということだが、真実のほどはわからない。しかし、仁和寺が鎌倉時代の初めから南北朝時代に至るまで、吉備津神社を荘園としていたことから、仁和寺と備中国との関係がうかがわれる。また、手荘のなかに「領家」「地頭」「九門(公文)」という地名があり、これらの地名<sup>5)</sup>

をみるにつけても荘園の存在が推定される。「領家」に並んで「地頭」という地名も残っているということは、かつてこの地に設置されていた地頭職がしだいに力をもつようになり、ついには領家をしのぐほどの勢力、あるいは領家と土地を分領し、地頭分・領家分とするに至るほどの勢力をもつまでに成長していったのであろう。地域性の強かった古墳時代に、先進地域に比べて民衆の成長が遅れていた川上町も、畿内政権の全国統一後、中央集権化が進むにつれて、一般の風潮に支配されるようになり、地域差が少なくなっていくようである。

その他、地名については御名代によるといわれるものがあるが、周知のように、御名代とは、上天皇・皇后・皇子などの名前を後世に伝えようと、その名前または住んでいた地名をつけて定置させた部民のことをいう。部民の名が転じて地名になったというのであろう。御名代による地名は、まさに全国各地津々浦々にあり、大和政権がいかに権力を誇示しようとしていたかがうかがわれる。川上町にも、2、3の例がある。日本武尊を表わす「建部」につながるといわれる、旧大賀村大字上大竹・下大竹の「大竹」とか、允恭妃の住んでいた大和国高市郡の地名にちなんでいるとか、同村大字仁賀字藤原の「藤原」もこの種のものであるといわれている。（『岡山県通史上』）前者すなわち、建部を日本武尊の名代とすることについては、津田左右吉の指摘以来、付会の説で、建部は軍事的職業部とみられている（『日本古代史事典』）。また旧手荘村大字地頭字松尾の「松尾」は、渡来人秦氏の祖神「松尾」神に由来し、旧大賀村大字上大竹字栗原の「栗」は、中国南方の「呉」の「遺称」とであると『岡山県通史上』は、推定している。

## 2 土豪勢力の動き

### (1) 国吉城と土豪勢力

国吉城は、旧手荘村大字七地城山の嶺にあった、鎌倉時代の終かりから戦国時代にかけての出城である。現在、わずか数カ所に円形城壁が残っているにすぎないが、『川上郡誌』をみると、東西150間（273m）・南北117間（213m）の規模をもっていたと記されている。動乱の時代に築かれた城にふさわしく、要塞堅固な山頂に立地し、北西の尾根を除いてあとはぐりと絶壁に囲まれている。そのため山頂からの見晴らしはよく、攻め来る敵の軍勢を目ざとく見つけられたのではないと思われる。ふもとからこの山を仰ぎ見ると、そびえ立つ台形といった感じで、その頂の平坦部は当時城があったという面影を後世に伝えている。人々は、国吉城主の支配下でわずかの水田と段々畑を耕し、ほそぼそと生活していたであろう。そして他国の動乱を聞くにつけ、不安な面持でこの山城を見上げたに違いない。中世の戦禍は、地方の小さな山城まで容赦なく巻き込んでしまったのである。この間のことを国吉城を中心に探り、川上町の中世をわずかでもたどってみることにしよう。

平安時代も終わりにになると、治安の乱れや生活の不安は日増しに高まっていき、地方政治は荒廃し、貴族は自己の利益追求だけに没頭した。そのような状況のなかで武士が台頭し、やがて武士団を結成するまでに至る。しかし、それはおもに東国が中心であり、川上町を含む備中やその西隣の



写真

3-2-1

国吉城址

(北西の尾根より望む)



写真

3-2-2

国吉城址に  
残る石垣

備後において、このころの武士団はほとんど知られていない。その後、鎌倉・南北朝・室町時代と武士の支配体制が続いていくわけだが、支配の手段として武力を用いたため、必然的に乱や戦が相次いで起こり、世の中は鎮まることがなかった。そして、ついには戦国時代と呼ばれる群雄割拠の時代に突入していくのである。この戦乱の渦は各地に広がっていき、川上町においても例外でなく、国吉城主はたびたび代わり、それに従って所属も代わっていった。元弘の頃は北条氏に属する安藤



元理、永正10年(1513)からは織田氏所属の三村政親、天正3年(1574)からは毛利氏所属の口羽春吉、そして戦国時代が終わると糟谷武則・安永らが在城していたようである。これらの移り変わりのみを見ても、当時の世の中がいかに不安定であったか容易に推察することができよう。

国吉城は、安藤太郎左衛門元理によって築かれたといわれている。築城の正確な年はわからないが、元理が元弘(1331-1333)の頃に城主であったということから、遅くとも鎌倉時代の終末には落成していたと思われる。元理がどのようないきさつから、この城を築くようになったのかは明らかでない。元理についてわかっていることは、歌道において優れていたということである。当時はあまり文学が重視されない時代であったにもかかわらず、元理は歌を好み、そのため六波羅探題北条仲時の寵任を得た。仲時は、しばしば元理に歌を詠ませて余暇を過ごした。しかし、そのような平和な日は長くは続かなかった。鎌倉幕府の執権北条高時は政治を顧みず、得宗専制体制のもとで内管領長崎高資が政治の実権をほしいままにしていたため、有力御家人の反感が高まっていた。この機に乗じて討幕をめざす武士勢力が大きくなり、元弘3年(1333)新田義貞によって鎌倉、足利尊氏によって京都の六波羅探題が攻め破られた。仲時は、尊氏の攻略によりたちまちのうちに敗将となり、元理を含む一部の家来達を連れて、命からがら京都を脱出し東へ逃げ落ちていった。途中仲時に見切をつけて逃げ出す家来が相次ぎ、一行はみるみるうちに少なくなっていた。そして江州の番場に來たとき、土地の人々が蜂起し、仲時らの行く手はふさがれた。一戦を交えても少人数では勝てる見込がないし、もし勝てたとしてもこの先どうせ果てる身だと思い、仲時はついに自刃して武士の最後を飾った。家来32人もまた殉死した。このとき元理は老齢で、しかも遁世の歌道者だったので、他の人が、自害の供はしなくてよいから、早くどこにでも身を隠し、残された人生を安らかに暮らすようにと勧めた。けれども、元理はその言葉に一向に応じようとしなくて次のように言った。「人道こそ、矢執る武士の群に入りて、より斯様の處にて死なんは年頃の願なり。」そして雄々しくも自害した。ここにおいて、北条氏の配下である元理の国吉城主の地位は終わったのである。

元理の死後の国吉城については、ほとんど明らかでない。北条氏が滅んだので、当然元理の一族とは無関係の新しい城主がたてられたであろう。次に文献に登場してくるのは、永年10年からの三村政親の在城であり元弘3年の元理の死から永正10年に至るまで180年という長い間、国吉城の事情が判然としない。この間世の中は鎌倉幕府滅亡からわずか2年の建武中興・南北朝・室町を経て戦国時代に入る。戦国時代突入のきっかけとなった応仁の乱を前後して、身分秩序が乱れ、下剋上の風潮が高まり、世の中は著しい動揺のさ中にあった。またそれ以前においても、建武新政の崩壊・南北朝の動乱・守護大名の抗争と、世の中の動きは安定するところを知らなかった。備中は、南北朝の動乱においては、伯耆の豪族名和氏の支配のもとに南朝に味方した。名和長年は、隠岐から脱出した後醍醐天皇を船上山にたてこもらせたこともあり、中国地方では備後の浅山氏とともに南朝側についたのである。この動乱は、足利義満が將軍となる頃には南朝の拠点もほとんど失われ、諸国は細川・斯波氏などの足利一門やその他の有力守護の手に帰した。備中は細川氏の支配を受けるようになる。



応仁1年(1467)応仁の乱が京都で始まり、やがて戦乱は各地に広がり、全国的規模に発展した。京都で守護が戦っている間に、その領国では守護代や国人・地侍などが着々と勢力を伸ばし、守護をしのぐ者が出てきた。乱後半世紀ほどのうちに、斯波・細川・山名・京極氏など有力な守護大名は、あるいは内部で分裂し、あるいは没落した。この間備中においては、高氏氏から秋庭氏へ、そして秋庭氏から上野氏・庄氏を経て三村氏へと複雑な抗争がくり広げられた。また備前では、赤松氏から浦上氏・松田氏・宇喜多氏へと興亡があり、美作では後藤・赤松が勢力を伸ばした。まさに下剋上の風潮がたけなわの時代であった。そして尼子氏と毛利氏、三村氏と宇喜多氏、最後に毛利氏と織田氏の攻争によって全国統一が促進されていったのである。このような状況のもとで、三村政親は永正10年より国吉城主となる。政親は、当時松山城主であった三村元親の一族であり、国吉城は松山城の砦的存在であったと思われる。だから、元親の動きはことごとく政親と関連をもっていたであろう。そのことを前提として元親の動きをとらえ、その背後の政親と国吉城のようすを想定してみる。

また鶴頭城(成羽町)主であった頃、元親は、父家親が永祿8年(1565)備前の宇喜多氏によって暗殺されて以来、その恨みが忘れられなくて、機会があるごとに仇を討とうと狙っていた。家親が宇喜多直家に暗殺されるに至った事情は次のようである。三村氏と宇喜多氏は数年来仲が悪く、互いに勢力を争っていた。その頃安芸の毛利元就によって、これまで美作にのびていた山陰の尼子氏の勢力が一掃されると、美作の至る所にある城は、毛利氏に従うものもあれば、宇喜多氏に従うものもあった。宇喜多氏は毛利氏の隙をうかがって、所々をきり従え備前側に奪い取っていった。その報を受けた毛利氏は、永祿8年5月配下の家親を遣わせて、宇喜多氏に従う城々を攻め落とさせた。当時家親は、宇喜多氏にとって大敵であったため、もし一戦を交えても長引いて不利であると考えた直家は、新参の兵連藤喜三郎の家親暗殺計画を受け入れた。さっそく喜三郎とその弟修理は美作に赴き、三村勢の本陣久米郡穂村興禅寺に忍び込み、軍談していた家親を射殺した。この時三村孫兵衛は困りの者を鎮めて、誰にも家親の急死を知られてはならないと主張し、翌日急病として軍勢は乱れもみせず、備中へ引きあげていった。これを聞いた直家が大喜びしたのはいうまでもない。おさまらないのは家親の遺子元親や庄実近の養子となった元祐(小田郡猿掛城主)らで、仇討の機会を狙っていたが、直家は勇猛で衰えるところを知らなかった。また国境には宇喜多氏の出城がたくさんあって、たやすく備前に攻め入ることは不可能であった。軽はずみに攻め入り、かえって動きがとれなくなり絶滅するのを恐れたのである。翌永祿9年(1566)10月上道郡沢田村にある宇喜多氏の出城明善寺城に、三村屈指の勇士が夜討ちをかけた。城中はふいの襲撃にあわててしまい、多くの者が討たれ、城は三村側に乗取られた。この報を受けた直家は、自ら出陣し三村勢を崩した。これを明善寺合戦という。

その後三村氏対宇喜多氏の抗争は解決がつかないまま、毛利氏や備中の将士は四国・九州に出陣して、中国は留守同然であった。そこへ宇喜多氏の備中侵入、織田信長の援助を得た尼子氏の出雲入り、尼子氏と宇喜多氏と豊後の大内氏の提携など、毛利氏にとって緊急事態が次々と勃発していた。毛利軍はただちに中国へ引き帰さざるを得ず、それに加えて備中回復の途中に、元就が死去し

た。しかし、その後大敗しながらも松山城と猿掛城を根拠地として、着々と勢力を取りもどしていった。この間の戦いで、庄実近と元祐（元資）は戦死し、毛利氏に背いた庄高資（松山城主）は松山城で攻略され討死した。こうして、松山城も猿掛城も元親の直轄となったのである。

一方京都では、13代將軍足利義昭が、しだいに勢いをもってきた信長に不満をもつようになった。そこで、義昭はついに京都を追われ、毛利氏を頼って西国に向かった。毛利氏や近国の諸氏のなかには御下知に背く者はなく、義昭帰洛の謀を企てた。これを聞いた信長は元親に使者を送り、備中備後兩國をあてがう約束で、織田家に忠節をつくし、義昭帰洛を妨げるように誘った。宇喜多氏攻略の機会を狙っていた三村一族にとって、この誘いは絶好の機会であり、信長の助力をもって宇喜多氏に対抗しようとした。しかし、成羽の城主親成・親宣親子が反対して一族は分裂し、身の危険を感じた親成は、天正2年（1574）11月元親謀叛を義昭に報告した。ここに、織田氏・三好氏・尼子氏・三村氏の四氏連合体が成立した。しかし、毛利氏と宇喜多氏の軍は諸城を陥落させ、ついに三村一族は滅亡の一途をたどることになるのである。

再び、舞台を国吉城に返してみたい。天正2年12月23日、毛利勢が国吉城に攻めてきた。毛利側は輝元をはじめ、小早川隆景、矢野安芸守隆家、その家来深瀬弾正忠一並びに中村刑部らであった。対する三村側は、政親、長子新四郎、七郎右衛門尉、弟大蔵助、元範、丹下興兵衛宗正、援兵として駆けつけていた三村越中守、比那因幡守などが、国吉城にこもっていた。三村側はその勢わずかに300余騎であったが、少しもひるまないうえで防戦した。しかし多勢の毛利側にはかなわず、ついに大手門が破られ、隆家の家来から城内に押し寄せてきた。やがて城内の勢力はつき、同年12月31日、政親父子はわずかの残兵と城を出て、元親のいる松山城へ逃げて行った。松山城に逃亡したものの、翌天正3年（1574）松山城は毛利勢によって陥落され、元親は阿部山に包囲され自刃した。そこで、政親父子は美作へ落ちのび、子孫はその地に住みついた。

三村氏滅亡後、国吉城には毛利氏より遣わされた口羽中務大輔春吉が在城した。しかし、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで勢力の衰えた毛利氏が備中から手を引くと、糟谷内膳正武則・同八兵衛尉安永が慶長7年（1602）から同15年（1610）までとどまった。翌16年（1611）に幕府の直轄地となり、城は荒れるにまかせられた。そして、今日に至っているわけである。（『岡山県通史』『岡山県の歴史』『川上郡誌』『備中誌』『地域研究矢掛町』『吉備群書集成』『中国資料集』を参考にした。）

## （2）石造文化財

中世を調べていくうえで、石造文化財は重要な史料となるのであるが、川上町における分布調査が不完全なことから、乱積みされて当時の形をそのまま残しているというものが少ないことのために、ここでは分布状態の一部を提供しておくだけにする。

川上町において一般的にみられるのは、五輪塔である。これは必ずしも墓塔ではなく、大部分は供養の塔婆として奉獻され、埋葬場所に建てられたものであり、宝篋印塔にしてもそうである。

（以下は筆者の調査による。）

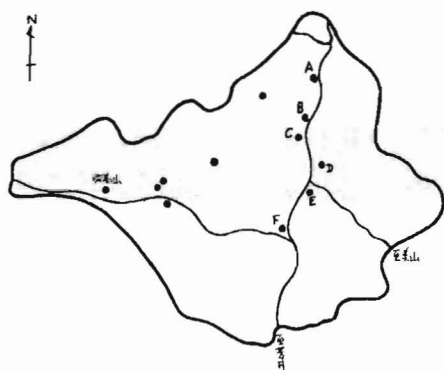


図 3 - 2 - 1

五輪塔・宝篋印塔の分布



写真 3 - 2 - 3 五輪塔

( ㊤地点の空風輪の損失した  
もの )

㊤ 俗に「五輪山」と呼ばれている所で、その名の通り何基もの五輪塔がばらばらに積み上げられている。その隣に空風輪の損失した五輪塔がある。( 写真 3 - 2 - 3 ) これは、空風輪

以外は完全に遺存していると思われる。

- ③ 白光山宝鏡禅寺の入口の道沿いに、乱積みされて並べられている。宝篋印塔は蓋の数から2基、五輪塔は数基認められる。火輪のひとつに、人物が彫られているのがある。
- ④ 八幡神社の境内の隅に、乱積みの五輪塔がある。
- ⑤ 高田八幡神社に宝篋印塔らしきものがみられるが、蓋が磨滅して形がはっきりしない。
- ⑥ 墓地に少なくとも30基の五輪塔が認められるが、はなはだしく乱積みされている。
- ⑦ 墓地に宝篋印塔が2基、五輪塔が10基ばかりあると思われるが、乱積みされているため、よくわからない。宝篋印塔の2個の塔身および1個の火輪に、人物が彫られている。

(山崎 由利江)

#### 引用文献

- 1) 潮見浩(1970年)「瀬戸内の夜明け」『古代の日本』4中国・四国
- 2) 春成秀爾(1969年)「中・四国地方縄文時代晩期の歴史的位置」『考古学研究』15-3
- 3) 都出比呂志(1970年)「農業共同体と首長権」『講座日本史』1古代国家
- 4) 藤井駿(1971年)「備中国穴斗郷の歴史」『吉備地方史の研究』
- 5) 藤井駿・水野恭一郎(1955年)『岡山県古文書集』第2輯P13-23

#### 参考文献

- 永山卯三郎(1930年)『岡山県通史』上編 第14・16・97・98章
- 岡山県(1962年)『岡山県の歴史』P1-271
- 私立川上郡教育会(1918年)『川上郡誌』P106-111, 149, 158-166
- 吉田徳太郎(1902年)『備中誌』川上郡巻之四
- 岡山大学教育学部社会科研究室(1975年)『地域研究矢掛町』中世
- 吉備群書集成刊行会(1921年)『吉備群書集成』(三)P315-346
- 『中国資料集』
- 西川宏(1974年)『吉備の国』
- 間壁忠彦・葭子(1972年)『古代吉備王国の謎』
- 赤星直忠(1967年)「石造墳墓」『日本の考古学』歴史時代下P374-379
- 考古学研究会(1973年)『新しい日本の歴史』第1編原始社会から古代国家へ

## 第4章 近世の川上町

### 1 領主の系譜と支配

#### (1) 封建支配の系譜

表4-1-1 文久元年(1861)における川上町地域の村別支配の状態

支配者	村名	石高
成羽藩 (山崎氏)	三沢村	530.0000
	上大竹村	574.0000
	大原村	34.0000
	下大竹村	391.0000
	臘教村	171.0000
撫川知行所 (戸川氏)	佐々木村	105.0000
	佐屋村	166.8070
福山藩 (阿部氏)	高山村	733.4230
	地頭村	613.3550
布賀知行所 (水谷氏)	領家村	325.9510
	七地頭村(一部)	} 754.1360
	高山市村	

川上郡誌(備中村鑑による)より転載

文久元年において、川上町地域は表4-1-1にみるように、2藩・2知行所の支配下にあった。それでは、江戸時代になってから支配者がどのように変遷して、この表にみるような形になっていったのであろうか。ここでは、慶長五年(1600)の関ヶ原の合戦以後から、明治維新に至るまでの各領主の変遷を見てみよう。

#### (a) 山崎氏成羽藩について

山崎氏の成羽藩の支配は、前期と後期にわかれており、その間の4年間<sup>みずのや</sup>は水谷氏・代官所によって支配されていた。以下に、山崎氏の系譜を前期・後期を通じて述べてみよう。なお、川上町でこの前期山崎氏に属するのは、地頭・領家・三沢・臘教<sup>しわす</sup>・佐々木村の内の吉木、上大竹、下大竹の各村であった。

「大阪の陣」にあって、当時姫路にいた岡山藩池田利隆は京都で没し、その子光政は幼少わず

か8才でその遺領42万石を継いだ。しかし、姫路という要地に外様大名をおくことを心よしとしなかった幕府は、元和3年(1617)3月6日光政の幼少を理由に因幡・伯耆あわせて32万石に減じて、国替を命じた。その当時、山崎家治は因州若桜城3万石を領していたが、光政の鳥取への入城とともに元和3年7月、備中成羽の古城地へ所替えとなった。そして、20年後の寛永15年(1638)天草に移封されるのであるが、この期間を普通前期山崎氏の時代とよんでいる。

(イ) 藩祖 家治(左近・甲斐守)

文祿3年(1594)対島に生れる。その妻は池田長吉の娘である。慶長19年(1614)遺領を継ぎ因幡国若桜城に居り3万石を領する。元和3年7月若桜を改めて備中国の内に移され成羽の城地を給わった。この間、大藩の開城引渡後の警備の大役、大坂城の石垣造営の大業といった大役を仰せつかり、完遂している。大坂城石垣普請の工事中、廃石を安治川に棄て、それが積み重って中洲(現中之島)となり、江戸期を通じて山崎氏の所領となった。寛永14年4月15日封を肥後国天草に移され、1万石を加えられる。これは、「天草の乱」のちょうど終息した後のことで、終戦処理・戦後経営の重要な役目を負ったものであった。同18年(1641)9月10日讃岐国豊多・多渡・三野3郡に移され、さらに1万石を加えて丸亀の城地を与えられあわせて5万石を領する。

この後、家治を継いだ俊家は病弱で35才で若死にし、これを継いだ治頼は明暦3年(1657)に夭折した。このため御家断絶・城地召し上げになったが、それまでの功績を考慮され、特に治頼の叔父豊治に名跡相続が許された。そして、万治元年(1658)20年ぶりにもとの領地成羽に5千石を賜って移封となり、明治維新に至るまで成羽の地を支配した。これを後期山崎氏といい、川上町では三沢・上大竹・下大竹・大原・<sup>しわす</sup>麿数・佐々木村がその支配下にはいった。

(ロ) 初代 豊治(千松 勘解由)

元和5年(1619)家治の二男として生れる。万治元年成羽に移封となった。成羽に入部した時、豊治は40才。油ののりきった時代であり、御殿造営・陣屋町の構築・連島干拓などの政策を行い、成羽の政治経済・伝統などをつくりあげていった。

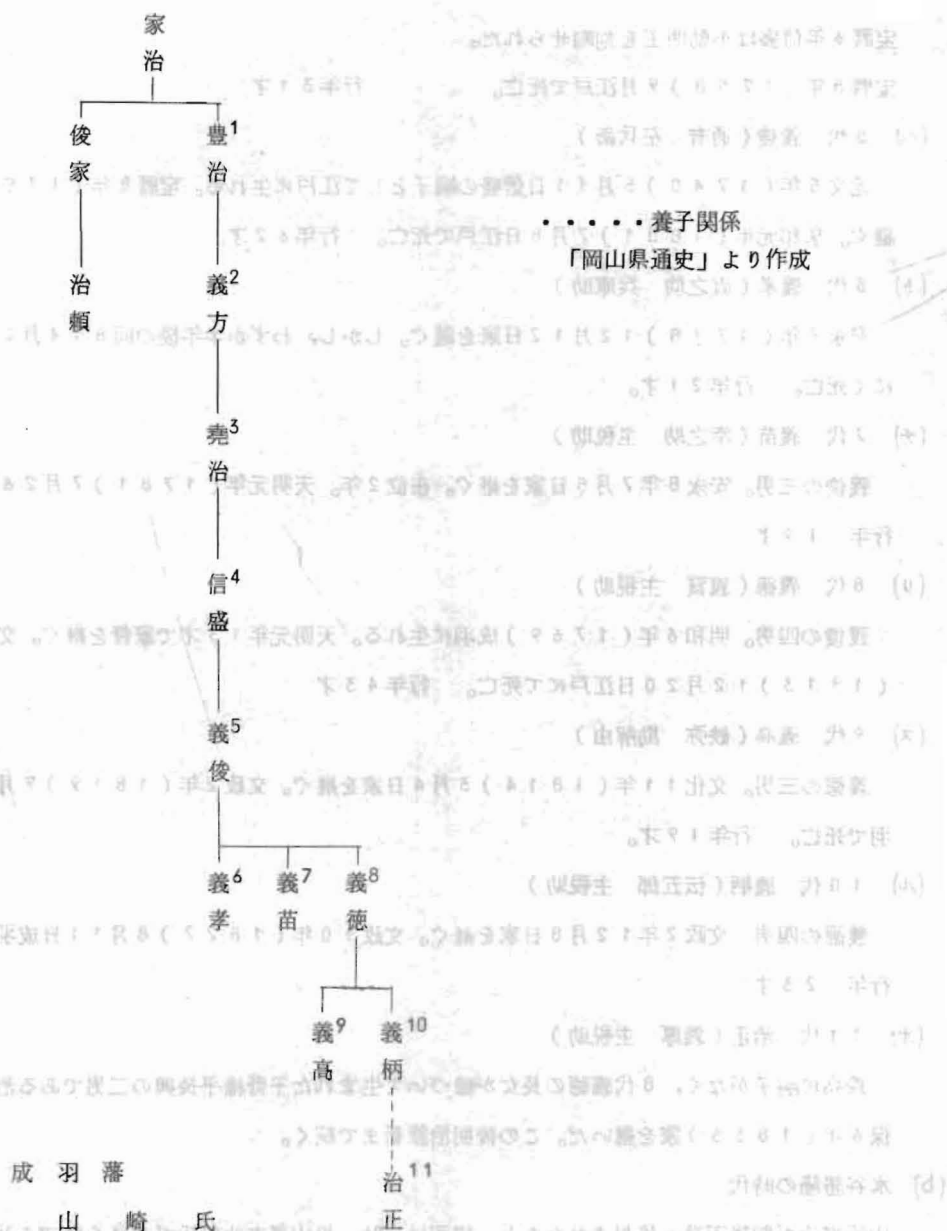
元祿元年(1688)長子義方に家督を譲り、同13年(1700)に死亡した。行年82才

(ハ) 2代 義方(三郎 主税助)

寛永7年(1630)豊治の三男として成羽に生れる。兄二人の早世によって元祿元年12月9日家督を継ぎ、主税助に任ぜられた。義方は豊治の業績を引き継いで文化・経済を発展させた。今日成羽に伝わる愛宕花火は、この義方の時に始められたという。

宝永5年(1708)6月6日大阪陣屋で死亡。行年43才

表 4-1-2



(=) 3代 堯治(亀之助 兵庫)

宝永5年8月15日家督を継ぐ。

延享2年(1745)12月18日江戸で死亡 行年58才

(ホ) 4代 信盛(鉄之助 兵部)

享保13年(1728)成羽に生れる。延享2年11月家を継ぐ。



宝暦6年信盛は不動明王を刻剛せられた。

宝暦8年(1758)9月江戸で死亡。

行年31才

(へ) 5代 義俊(通有 左兵衛)

元文5年(1740)5月11日信盛の嫡子として江戸に生れる。宝暦8年(1758)家を継ぐ。享和元年(1801)7月8日江戸で死亡。行年62才。

(ト) 6代 義孝(直之助 兵庫助)

安永7年(1778)12月12日家を継ぐ。しかし、わずか半年後の同8年4月22日江戸にて死亡。行年21才。

(チ) 7代 義苗(幸之助 主税助)

義俊の三男。安永8年7月5日家を継ぐ。在位2年。天明元年(1781)7月26日死亡。行年19才

(リ) 8代 義徳(義質 主税助)

義俊の四男。明和6年(1769)成羽に生れる。天明元年13才で家督を継ぐ。文化10年(1813)12月20日江戸にて死亡。行年43才

(ヌ) 9代 義高(鉄弥 勘解由)

義徳の三男。文化11年(1814)3月4日家を継ぐ。文政2年(1819)9月20日成羽で死亡。行年19才。

(ル) 10代 義柄(伝五郎 主税助)

義徳の四男 文政2年12月8日家を継ぐ。文政10年(1827)8月11日成羽で死亡  
行年23才

(オ) 11代 治正(義厚 主税助)

義高に嗣子がなく、8代義徳の長女が縁づいて生まれた平野権平長興の二男である治正が、天保6年(1835)家を継いだ。この後明治維新まで続く。

(b) 水谷勝隆の時代

山崎家治が肥後天草へ移封されたあと、成羽は一時、松山藩主池田氏が在藩を命ぜられた。そのうち、寛永16年(1639)6月5日、常州下館藩主水谷勝隆が池田氏から引継ぎをうけ成羽に入封した。しかし、在藩4年に絶家除封となった松山城主池田氏のあとをうけて、寛永19年(1642)松山城主として転封させられた。

(C) 代官所支配の時代

寛永19年水谷勝隆が松山城主として転封した後、旧山崎領・旧池田領のうち川上町は、そのすべてが徳川直轄地となった。そして、備中代官としてこの地にやってきたのが、米倉平太夫と小川

藤左衛門であった。両代官は幕領を折半して支配し、川上郡の天領地38ヶ村を19ヶ村宛にわけた。この後川上町の村々は、その支配者が成羽藩・布賀知行所・撫川知行所と分割されていくのである。また、地頭・領家の二村は長い間徳川直轄地のままであった。

(d) 水谷氏布賀知行所について

水谷勝隆が成羽から松山城主へと移ったのは先に述べたが、その3代目にあたる勝美は31才で死亡し、養子として手続中であった勝晴も夭折してしまったので所領没収となった。しかし、祖先の勲功を考慮にいれられて、勝美の弟勝時に布賀3千石が賜われ、陣屋を布賀に開いた。川上町でこの布賀知行所に属するのは、七地と地頭の一部、そして高山市である。

(イ) 初代 勝時(虎之助 主水)

元禄6年(1693)12月21日兄勝美が卒し、養子勝晴に遺領を賜うという恩免のない内にこれも卒したため、その所領を収められた。しかし、祖先の勲功を考慮されて勝時に、備中国川上郡のうちにおいて3千石を給付され、寄合に列せられた。

(ロ) 2代 勝英(半助 出羽守)

正徳3年(1713)4月23日家を継ぎ、同8年(1718)12月18日従5位下出羽守に叙任される。元文2年(1737)5月28日備中国後月郡のうちにおいて、新恩5百石を給付される。

(ハ) 3代 勝久(忠郷 左京亮)

宝暦2年(1752)11月3日遺跡を継ぐ。同7年(1757)12月18日従5位下出羽守に叙任される。

(ニ) 4代 勝政(忠孝 伊勢守)

天明7年(1787)8月3日家を継ぐ。

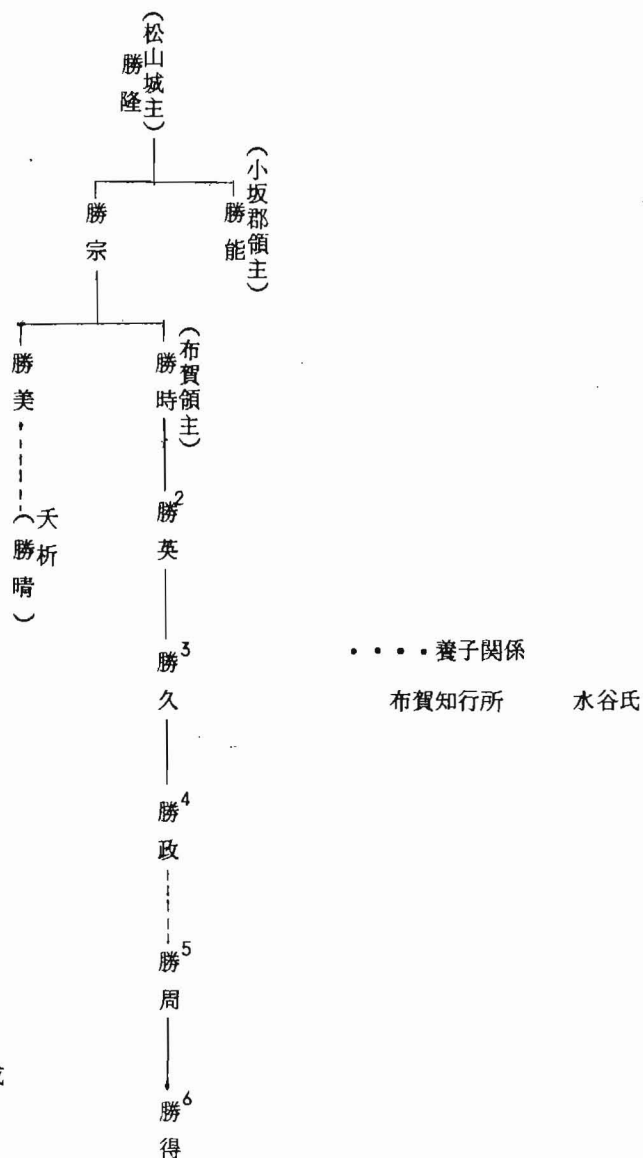
(ホ) 5代 勝周(勝民 左門)

勝政の養子となり寛政8年(1796)11月25日初めて將軍家に拜謁する。

(ヘ) 6代 勝得

弘化年中(1844~1847)陣屋を布賀郡より黒島に移す。

表 4 - 1 - 3

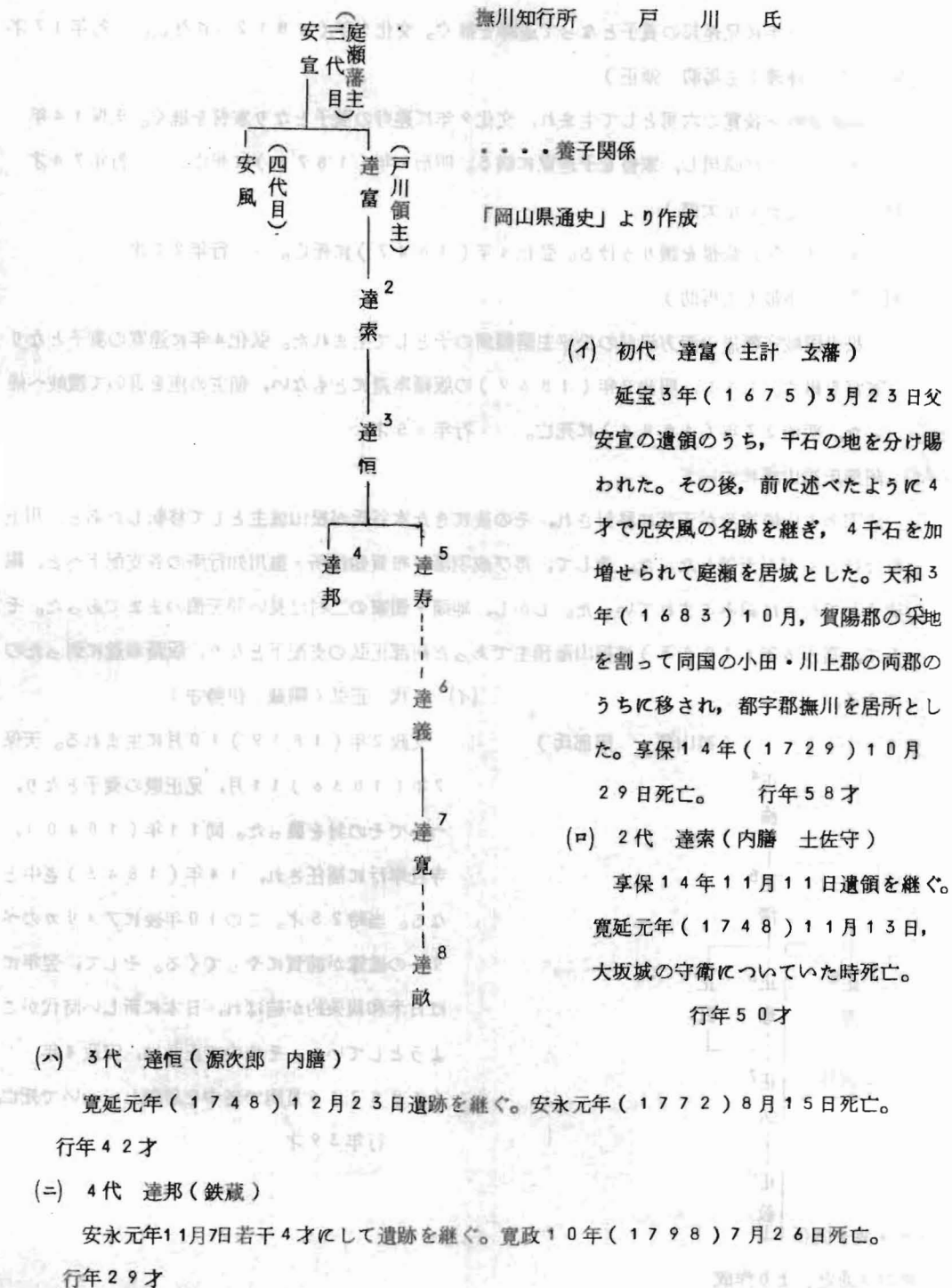


「岡山県通史」より作成

(c) 戸川氏撫川知行所について

庭瀬藩の4代目領主であった戸川安風は、若年9才にして卒し、跡継ぎのない戸川氏は領地を没収されてしまった。しかし、その弟達富に名跡を継ぐことが許された。達富は初め庭瀬におり、後撫川に移って撫川知行所を開いた。川上町内でこの知行所に支配されたのは、佐屋・二ヶ・高山の三村である。

表 4-1-4



(ホ) 5代 達寿(万蔵 達兼)

寛政10年に兄達邦の養子となって遺跡を継ぐ。文化9年(1812)に死亡。行年17才

(ヘ) 6代 達義(主馬助 弾正)

相良寺岐守長寛の六男として生まれ、文化9年に達寿の養子となり家督を継ぐ。天保14年(1843)に隠居し、家督を子達寛に譲る。明治7年(1874)に死亡。行年74才

(ト) 7代 達寛(定太郎)

天保14年に家督を譲りうける。弘化4年(1847)に死亡。行年22才

(チ) 8代 達敵(主馬助)

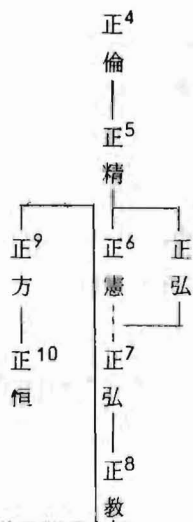
松平讃岐守頼胤の養方叔父の松平主膳頼周の子として生まれた。弘化4年に達寛の養子となり家督を継ぐ。しかし、明治2年(1869)の版籍奉還にともない、領主の座を退いて讃岐へ帰った。明治27年(1894)に死亡。行年65才

(f) 阿部氏福山藩について

成羽藩主山崎家治が天草に移封され、その後に来た水谷氏が松山城主として移転したあと、川上町はほとんどが天領となった。そして、再び成羽藩・布賀知行所・撫川知行所の各支配下へと、編成されて村々は組みこまれていった。しかし、地頭・領家の二村は長い間天領のままであった。そして、嘉永6年(1853)に福山藩預主であった阿部正弘の支配下となり、版籍奉還に到ったのである。

(イ) 7代 正弘(剛蔵 伊勢守)

表4-1-5 (福山藩 阿部氏)



...養子関係

文政2年(1819)10月に生まれる。天保7年(1836)11月、兄正憲の養子となり、ついでその封を襲った。同11年(1840)、寺社奉行に補任され、14年(1843)老中となる。当時25才。この10年後にアメリカのペリーの艦隊が浦賀にやってくる。そして、翌年には日米和親条約が結ばれ、日本に新しい時代がこうとしていた。その中で正弘は、安政4年(1857)6月病で老中を辞職し、ついで死亡。

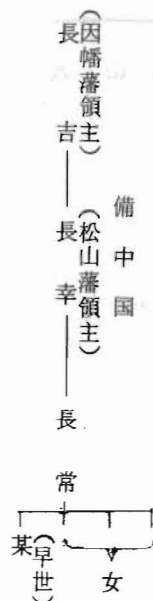
行年39才

「岡山県通史」より作成

(g) 池田氏松山藩について

川上町のうちの七地は、慶長16年(1611)より幕府の直轄となり、元和3年(1617)に、松山城主池田長幸がこれを領した。また、その子長常は、山崎家治が天草に移封された後の一年間、地頭、領家を治めた。

表4-1-6 (池田氏 松山藩)



「岡山県通史」より作成

(イ) 初代 長幸(次兵衛 備中守)

天正15年(1587)大坂に生まれる。慶長19年(1614)遺領を継ぎ、天和元年(1615)従5位下備中守に叙任される。同3年2月、鳥取を改めて備中国松山城を賜い、加恩されて6万5千石となる。寛永9年(1632)4月27日死亡。行年48才

(ロ) 2代 長常(猿 出雲守)

慶長14年(1609)鳥取で生まれる。元和元年従5位下出雲守に叙任される。寛永9年8月26日遺領を継ぐ。同15年(1638)備中成羽に在藩する。寛永18年(1641)9月6日死亡。行年32才

長常には跡継ぎがなく、また、末期養子も許されずその領地を没収せられて、家は絶えた。

(2) 近世における川上町内の村別支配の変遷

今までは封建領主の系譜をたどってきたのであるが、これを村別の領主変遷としてまとめたものが、表4-1-7である。

地頭・領家は寛永19年(1642)より幕府の直轄地となっていたが、文化10年(1813)から天保10年(1839)の間一時、作州津山藩の松平氏の預り地となった。しかし、再び幕府直轄地となった。

上大竹は、元は下大竹と一緒に村であったが、寛文3年(1663)の頃、すなわち山崎豊治の時代に二村にわかれた。

二ヶ村は、元は佐屋村と一緒にあったが、正徳元年(1711)4月、わかれて二村となった。これは戸川達富の時代である。

高山は寛文11年(1671)、高山市は元禄6年(1693)以前の支配状況は明らかではな

い。

大原は最初新見領であり、後に成羽領になったのであるが、そのはっきりした年代はわからない。ただ、「成羽史話」には、後期山崎氏の知行地として、万治時代の頃に、大原村27石1斗6升となっている。万治年間は3年間しかなく、おそらく山崎豊治が成羽領として授けられた最初からの知行地として、大原は含まれていたであろうと思われる。

表4-1-7 村別領主変遷表（川上町）

年代	村名	地頭	領家	七地	三沢, 臘敷 (佐々木村 の内)吉木	二ヶ, 佐屋	上大竹 下大竹	高山	高山市	大原
1611 慶長16		天	領	槽谷氏	天	領				新見領
1617 元和3		山崎家治 (成羽)	池田長幸 (松山)	山崎家治 (成羽)			山崎家治 (成羽)			
1639 寛永16		池田長常(松山)		水谷勝隆 (成羽)			水谷勝隆 (成羽)			
1641 " 18		水谷勝隆(成羽)								
1642 " 19										
		天	領							
1658 万治元				山崎豊治 (成羽)		山崎豊治 (成羽)				山崎豊治 (成羽)
1671 寛文11							天	領		
1683 天和3					戸川主計 (撫川)		戸川主計 (撫川)			
1693 元禄6			水谷勝時 (布賀)					水谷勝時 (布賀)		
1813 文化10		松平齊孝(津山)								
1839 天保10		頃り地								
1853 嘉永6		天	領							
		阿部正弘(福山)								

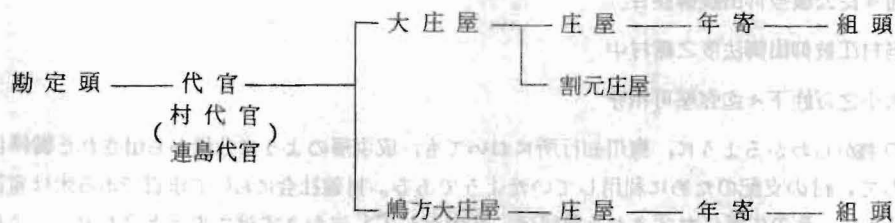


## 2 地方支配の機構と機能

川上町における支配の機構と機能は、現存する史料があまりなく、はっきりとしたことはわからない。その中でも、比較的是っきりしているのが、山崎氏成羽藩の支配の機構である。また、二ヶ村に現存する史料を使用して、支配の機構と機能について述べてみよう。

### (1) 地方支配の機構

表 4-2-1 成羽藩の職制



「成羽史話」より作成

図 4-2-8 は、山崎氏の地方支配の機構を図式化したものである。連島代官というのは、山崎氏は飛地として高梁川河口の連島を所有していたため、特別におかれた代官職である。嶋方大庄屋以下はこの連島代官の支配下にあった。

村には、大庄屋、庄屋、年寄があり、同じように、町にも年寄・組頭とよばれる役人がいた。庄屋は世襲制で、年貢の 5 % の手数料をもらい、苗守帯刀を大庄屋は中期、庄屋は後期ごろから許されている。

### (2) 地方支配の機能

#### (a) 成羽藩について

上に記した大庄屋・庄屋・年寄は、村の事務をほとんどすべて委任されており、村目付とよばれた代官は、時々巡回して彼らを監督するのみであった。春一回と夏の植付巡視、冬の小役割と称せられたのが、それである。この時、村代官は庄屋より組頭を集めて、一年中の村費を各戸に賦課させる場に立ち会ったのである。又、郡中割は大割と称して、村目付の立ち会いの上で郡夫その他の入費を各村ごとに賦課した。代官は、一般に毎年 11 月に各村々を巡回し、組頭を集めて、「公方様御定目」と称する幕府の式目、及び山崎家の定目等を説明して聞かせた。

このように、村内においては大庄屋・庄屋・年寄が、藩と村民との間のかけ橋のような役割を果たしており、すべてをとりしきっていたということがいえるであろう。しかも、かけ橋的な役割を越えるような権限はなく、権力の末端機制的な役割を果たしていたのであろう。

(b) 戸川氏撫川知行所について

実際には、庄屋・年寄などはどんなふうに動き、また、どんな「定」をもとに行動していたのであろうか。数少ない史料の中から、戸川氏知行所時代の二ヶ村について考察してみよう。

次にあげる「御仕置五人組帳」がそれである。五人組というのは、江戸幕府が村々の百姓・町々の地主・家主に命じて作らせた隣保組織である。近隣の5戸を1組とし、連帯責任を負わした。そして、五人組帳というのは、五人組に関する法令を列記し、村役人以下各5人の組員が連名連印して、違背なき旨を誓約した帳簿のことである。次にその内容をあげてみよう。

一 前々従公儀被仰出候御條目

当村江被仰出御法度之趣村中

大小之百姓下々迄弥堅可相守

この條からわかるように、撫川知行所においても、成羽藩のように公儀から出された御條目を主として、村の支配のために利用していたようである。封建社会において年貢である米は重要な財源であり、その生産にたずさわる農民は、武士をして「生かさず殺さず」と言わせたように、苛酷な労働と加えて厳しい行動の束縛とを課せられていた。そのため五人組帳には、衣・食・住のすべてにわたっての規制事項が設けられており、微に入り細にわたっての規制事項が列挙されている。たとえば、

一 毎年宗門帳三月迄之内可差出候

若御法度の宗門之者有之者

可申出候切支丹宗門之儀ハ・・・・・・

一 父母ニ孝行兄弟と睦敷可仕候若

親類と不知ニ而異見等も不用不

孝不儀之輩有之庄屋年寄

五人組吟味之上可申出事

一 常々耕作並売買等も不致家

職之稼無之者村中ニ有之ハ違吟

味其趣可訴出事

一 獵師之外為遊漁鳥獸不可取

雖為獵師鶴白鳥取候儀御停

止候若村中ニ而鶴白鳥売買致

候者有之ハ可訴出来事

この他にも衣服・田の売買・寺関係・能・相撲などの娯楽の禁止など、生活一般についての禁止事項が数多くある。また、積極的に密告することを奨励していることもみのがせない点である。

前にも述べたように、村々には大庄屋・庄屋・組頭などがおり、これらを総称して村役人といった。ふつう百姓代もはいるのであるが、この史料でみる限り、百姓代は出てこない。彼らは、「其支配町村の治安を図り、農工商業を勤め、富を保し、貧を恤み、貢租税を取り立て、小物成の運上より其外、用悪水・堤防・溜池・井堰・樋管等の工事に至るまで之を監督す」とあるように、すべてを掌っていた。

まず庄屋について述べてみよう。

一 庄屋ハ正直を専にして私欲を

不仕慈悲之心有之候普小百姓に

心を付身不成就者を成抱致ニ

不依儀事ニ村中公事出入有之時

庄屋年寄立会双方之趣意を

年届親類縁者 知音好嫌不選

理非良之別分致も顯依估

無翫取扱可相済勿論滞儀

有之ハ可訴出事

庄屋は、役料として給米あるいは年貢免除の特典をうけ、経済的にも他の村民より優越しており、権威も高いのが普通であった。上にあげた条文は、庄屋は公明正大で、公事は年寄と相談して行うようにと述べている。所によっては、庄屋はなるべき家柄があらかじめ決まっており、しかも勢力を持ちすぎないように、一年交代で順番に庄屋役が選ばれていたようである。二ヶ村においては、そのような世襲制であったのか、それとも公選制であったのかは、はっきりしていない。

上の条文で「年寄」とあるのは、組頭と同じような意味である。町において「年寄」と呼ばれるのであるが、ここでは村内の組頭のことを指すのであろう。組頭は、元々5人組の頭分であったが、後年には百姓の中で算筆などができ、人格も高かった人物が村の大小によって、3～5人程度選ばれていた。選ばれる方法は、公選あるいは惣百姓の相談などであった。その役目は庄屋の下役であったが、組頭は給米のない村が多く、10～5、8石位の年貢を免除されたが、定められたきまりのようなものはなかった。庄屋ほど有利な地位ではなかったのである。では、彼らがどのような役目をこなしていたか、例をあげてみよう。

一 当村ニ有之出家社人山伏行人

道心者店貸地之者并ニ非人等

穢多之類迄常々吟味致候而胡

乱成者住居仕せ間舗候庄屋

年寄江不相違・・・・

一 田畑山林屋敷境論無之様常々庄屋

年寄吟味仕可置事

一 御年貢米之儀庄や年寄立会青

米碎米糲糠等無之様随分致吟

味舛不切様俵入可念入事

一 五人組帳宗門帳押候外別印形拵置

申間舗若子細候而印形替候ハ、庄や

年寄ハ役所へ相届小百姓ハ庄屋年寄

可断名改候ハ、・・・・・・

このように、村以外の人物への対処・村内の争い・年貢米・五人組帳宗門帳に關することなど、種々雑多なことに庄屋年寄は権限を有し、また、村内の代表者として働いていたことがわかる。

では、次に文久元年（1861）当時の川上町内の村々における庄屋の名をあげておこう。

表4-2-2

村 名	庄 屋
三 沢 村	三 村 源 太 郎
上 大 竹 村	平 松 辨 三 郎
大 原 村	松 室 嘉 四 郎
下 大 竹 村	年 寄 同
臘 数 村	渡 辺 豊 作
佐 ☆ 木 村	平 松 萬 造
佐 屋 村	三 宅 幾 太 郎
高 山 村	三 宅 信 治
地 頭 村	足 助 虎 之 助
領 家 村	川 上 藤 九 郎
二 ケ 村	川 上 静 太
	赤 木 役 次
七 地 村 } 地 頭 村 }	川 上 濱 之 助
高 山 市 村	松 岡 八 寿 右 衛 門

「備中村鑑」より作成

七地村と地頭村が一緒になっているところは、おそらく、七地村と地頭村の一部ということであろう。

(c) 天領について

地頭・領家の二村は、寛永19年から嘉永9年まで天領であった。その間どのような支配が行なわれていたのか、残念ながら史料が現存しないので、はっきりしない。しかし、代官の名前が明らかであるので、以下にあげておこう。

表4-2-3

「川上郡誌」より作成

代官	年 代	西 暦
小川藤左衛門・米倉平太夫	寛 永 19年	1642
彦坂平九郎・同九平次 同孫三郎	正 保 3年	1646
都築長左衛門	延 宝 7年	1679
服部六左衛門	天 和 3年	1683
後藤覚左衛門	貞 享 2年	1685
平岡吉左衛門 山本惣右衛門		
遠藤新平衛	元 禄 5年	1692
平岡彦兵衛, 同次郎衛	宝 永 7年	1710
野田三郎右衛門, 川野弥市郎	正 徳 3年	1713
曾根茂右衛門 鈴木九郎太夫		
古部文左衛門 井戸平佐衛門		
窪島作右衛門 千種清右衛門		
(倉敷陣屋詰)	享 保 3年	1718
川田玄蕃(倉敷陣屋出張・笠岡陣屋詰)	同	〃
内方鉄五郎	寛 延 2年	1749
風奈甚三郎 竹垣庄蔵	宝 暦 10年	1760
渡辺半十郎	明 和 2年	1765
平岡彦兵衛 野村嘉衛門	明 和 5年	1768
武島左膳	安 永 7年	1778
万年七郎右衛門, 早川八郎左衛門		
蒲衣笠郎	天 明 4年	1784
早川八郎左衛門(作州久世陣屋詰)	同 8年	1788
重田又兵衛	享 和 元年	1801
山田常右衛門	文 化 2年	1805
高山又蔵 森八左衛門	天 保 10年	1839

( 太 田 郁 子 )

参 考 資 料

「岡山県通史」

「成羽史話」

「備中村 鑑」

「川上郡誌」

### 3. 地方支配の展開

#### (1) 検地

近世封建社会における領主の最大の関心は、農民から如何にして多くの年貢をとるかということろにあった。そのためには、領内の耕地とそれを所持する農民を、もらず把握する必要があった。

大開検地を上限とする近世初期の検地は、村落を単位として、村内一筆毎の耕地の所在地とその所有者つまり年貢を負担する責任のある農民を調査し、村落全体の生産量を村高とした。それらの結果をまとめたものが検地帳である。検地帳は領主にとっては、年貢収奪つまり財政の基礎を定めるものとして、また農民にとっては、名請人として記載されることは本百姓として土地所有を法的に確認されたということなどから近世において最も重要な土地台帳である。

備中における検地は、毛利輝元により、大開検地の一環として慶長3年(1598)から5年(1600)に高梁川以西に行なわれた検地(古検という)にはじまる。ついで、関ヶ原の合戦以後慶長6年(1601)より備中総代官松山城主小堀新助正次により備中全国が検地されている。その後も規模は様々であるが幾度かの検地が行なわれている。

#### (a) 延宝の検地

たびたび行なわれた検地の中で最も広範に行なわれたのが、延宝5年(1677)の検地である。

これは、当時の備中城主水谷左京亮が幕府の命令をうけて、新井助左衛門を検地惣奉行として行なったものである。川上町内においてどの程度の範囲で行なわれたか不明であるが、成羽史話によれば「成羽山崎領は元禄13年(1700)本多中務大輔(姫路藩主)によって検地され、延宝5年の水谷検地が修正された。」とあり、山崎領で延宝の検地が行なわれたことを示している。しかし三沢村の免状を見る限りでは、延宝年間に村高の変動はみられない。川上町内で現存する延宝の検地帳は二ヶ村の検地帳のみである。

この検地は、主に畿内・中部とさらに関東に施行された。延宝5年の検地条目には、

- ① 従来上・中・下の三等級の耕地を上々・下々を設けて5等級とし、さらに上畑なみであった屋敷を上々に位上げる。
- ② 見取地・永荒場や川欠・山崩れの耕地化
- ③ 30年以上の除地の高入れ
- ④ 規模の大きな百姓林への賦課
- ⑤ 朱印地以外の除地の整理

などがあげられており、これにより収奪の強化をはかろうとしたことがうかがえる。こうした規



定は、この検地条目によりはじめて定められたもので、以後の検地条目に引き継がれている。

ここでは、二ヶ村の検地帳をあげて延宝の検地の特徴を捉んでみることにしたい。

前田 古検三畝歩

一 下田 拾七間 四畝拾六歩 新七

八間

此分米 三斗六升三合 但斗代 8 斗

同所 古検拾五歩

一 下田 拾間 貳拾五歩 仁蔵

貳間半

此分米 六升七合 但斗代 8 斗

同所 古検三畝貳拾歩

一 中田 拾貳間 五畝貳拾四歩 与惣兵衛

拾四間半

此分米 六斗九升六合 但斗代壹石貳斗

同所 古検貳畝拾歩

一 下々田拾壹間半 三畝拾五歩 同人

拾間

此分米 壹斗五升三合 但斗代四斗

下ノ前 古検三畝歩

一 上田 拾壹間 四畝拾七歩半九郎兵衛

拾貳間半

此分米 六斗八升八合 但斗代一石五斗

( . . . . 中略 . . . . )

ごいノ向 古検七畝貳拾歩

一 中畠 拾貳間半 八畝拾歩 治兵衛

貳拾間

此分米 五斗八升三合 但斗代七斗

同所 古検六畝歩

一 上畠 三拾壹間 八畝八歩 与兵衛

八間

此分米 八斗貳升七合 但斗代壹石  
 同所 古檢四畝步  
 一 中畠 拾六間 五畝拾步 新七  
 拾間  
 此分米 三斗七升三合 但斗代七斗  
 同所 古檢七畝拾步  
 一 上畠 拾七間 九畝拾步半 吉兵衛  
 拾六間半  
 此分米 九斗三升五合 但斗代壹石  
 同所 新開古檢無之  
 一 下畠 七間 三畝四步半 吉兵衛  
 拾三間半  
 此分米 壹斗貳升六合 但斗代四斗

( . . . . 中略 . . . . )

古檢壹畝步  
 一 屋敷 五間 壹畝拾五步 清助  
 九間  
 此分米 壹斗五升 但斗代壹石  
 葎外裏七間幅壹間 七步 四壁除之  
 古檢壹畝步  
 一 屋敷 拾壹間四尺壹畝拾五步 喜右衛門  
 三間五尺  
 此分米 壹斗五升 但斗代壹石  
 葎外裏六間幅壹間 六步 四壁除之  
 古檢壹畝步  
 一 屋敷 五間 壹畝拾五步半 三四郎  
 五間六尺  
 此分米 壹斗五升貳合 但斗代壹石  
 葎外西脇五間幅壹間 五步 四壁除之

古檢壹畝步

一 屋敷 四間半 壹畝拾步半 与兵衛

九間

此分米 壹斗三升五合 但斗代壹石

四壁無之

新屋敷古檢無之

一 屋敷 四間 壹畝六分 新七

五間

此分米 壹斗貳升 但斗代壹石

四壁無之

( . . . . 中略 . . . . )

古檢拾八町八畝貳拾四步

田畠反合 貳拾八町三反六畝七步

分米 百九拾三石六斗九升五合

延宝五丁己年十二月 日

水谷左京亮内檢地役人

浅井 喜左衛門

同

德田 長十郎

同

中山 十兵衛

同惣奉行

新井 助左衛門

二箇村庄屋

庄兵衛

同村案内人

五左衛門

## 御勘定所

以上が検地帳の実際であるが、これを田畑の等級別にまとめたものが、表4-3-1である。

この表によれば、田の等級は延宝の検地条目では五等級となっているが、ここでは山田がくわわり6等級となっていること。そして畑が5等級となっていることである。

表4-3-1 二箇村、等級別田畑面積比較表

		古 検 (慶長年間)				延 宝				5 年 検				地	
		町 反 畝 歩				面 積				分 米				斗 代	
	上々田	1	1	5		1	8	71/2		3	1	0	3	1	7
	上田	8	1	29		1	2	4 13		18	8	3	8	1	5
	中田	2	1	5 27		3	2	8 29 1/2		4 0	2	2		1	2
	下田	3	1	4 9		4	8	2 9 1/2		3 8	7	1	9		8
	下々田	1	2	3 4		1	8	4 29		7	3	9	8		4
	山田	1	3	5		1	7	2		0	3	7	8		2
	上畠	1	5	2 12		2	0	0 71/2		19	8	4	7	1	0
	中畠	2	7	6 13		3	7	1 22 1/2		2 8	4	2	4		7
	下畠	3	4	9 9		4	8	5 16		19	2	2	3		4
	下々畠	1	8	0 2		2	2	7 31/2		3	4	8	6		2
	切畠	2	3	14		3	4	23		0	3	7	1		1
	屋敷	3	4	10		4	8	27 1/2		4	9	8	9	1	0
	小計	17	7	5 19		25	2	4 10 1/2		184	9	9	4		
新 開	上々田														
	上田														
	中田														
	下田							29		0.	0	7	7		
	下々田							15		0.	0	2			
	山田							12 1/2		0.	0	0	8		
	上畠							24 1/2		0.	0	8	2		
	中畠							6 11 1/2		0.	4	4	4		
	下畠							7 7 28 1/2		3.	1	5	1		
	下々畠					1	5	2 6 1/2		3.	0	4	9		
	切畠					2	6	6 1/2		0.	2	6	4		
	屋敷							4 11		0.	4	3	7		
	小計					2	6	9 25		7.	5	3	2		
	実合計 (合計)	17	7	5 19		2	7	94 51/2		192.	4	4	4		
		(18	0	8 245)		(2	8	36 7)		(193.	6	9	5)		

注) 実際の計算によるものを実合計、検地帳にある合計を(合計)として記入した。

延宝5年二ヶ村検地帳から作成

これを同じ水谷氏による延宝の検地が行なわれた他の村とくらべたのが、表 4-3-2 である。小田郡小田村では、山田切畠がないが上々畠が加わり、田 5 等級、畠 5 等級。後月郡築瀬村では、上々田、山田、上畠がなく田 4 等級、畠 5 等級にわかれている。また斗代に関しても必ずしも一様でないことがわかる。このようにいくら条目が定められていたとはいえ、かなりの柔軟性があり、地域に応じて、等級、斗代が決定されたのではないと思われる。

表 4-3-2

田畑の等級と斗代の比較

	二箇村	小田村	築瀬村	
	石 斗	石 斗	石 斗	
上々田	1 7	1 8		
上 田	1 5	1 6	1 5	
中 田	1 2	1 3	1 2	
下 田	8	9	8	
下々田	4	5	4	
山 田	2			
上々畠		1 3		
上 畠	1 0	1 0	1 0	
中 畠	7	7	7	
下 畠	4	4	4	
下々畠	2	2	2	
切 畠	1		1	
屋 敷	1 0	1 0	1 0	

注) 地域研究第 15 集「変貌する芳井町」P 65 および延宝 5 年二ヶ村検地帳から作成  
次に、古検において 17 町 7 反 5 畝 19 歩であった耕地面積が延宝 5 年では、27 町 9 反 4 畝 5 分半に増加している。この増加分 9 町 8 反 5 畝 11 歩のうち、新開分は、2 町 6 反 9 畝 25 歩に過ぎず残りの 7 町 1 反 5 畝 16 歩が竿先の出目となっている。竿先の出目とは同一面積の土地にもかかわらず竿の基準を短くすることによって生じる余剰反別のことである。つまり古検の耕地面積を 100 とすると、実際にはそれと同じ面積の耕地が 128.3 になるわけである。しかし農民の実収獲は変わっていないのである。竿の寸法 1 つでいかに収奪の強化がはかれるかということがうかがえる。

#### (b) 各領主の内検地

備中の諸領主は、封地に着任すると、だいたいその領内の村々を幕命によらず、自己の責任において検地した。それらを内検地と称しその石高は地高となった。領主の知行高は幕府から与えられ

た朱印高であったが、農民から取り立てる実際の年貢は内検地の結果による地高によってであった。  
川上町域で行なわれた内検地は「岡山県農業土木史」「成羽史話」によると次の如くである。

(ア) 寛永初年の成羽藩山崎領の内検地 元和3年(1617)に成羽に封じられた山崎家治は、  
寛永初年(1624)には領内の内検地をしたとのことである。しかし領地全体の地高は不明で  
ある。このときの領地に、地頭領家、三沢、上大竹、下大竹がふくまれている。

(イ) 寛永7年松山藩池田領の内検地 元和3年に備中に封ぜられ、寛永7年(1630)に領内  
の検地を行なった。七地村がこれにふくまれている。

(ウ) 寛永17年成羽藩水谷領の内検地 水谷勝隆は寛永16年(1639)に成羽に転封し、翌  
17年から領内の検地をおこなった。地頭、領家がふくまれる。

(エ) 万治の成羽藩山崎領の内検地 万治元年(1658)山崎豊治が成羽に入部すると、検地が  
おこなわれた。これにより三沢村の免状にある村高は、万治3年(1659)の258石1斗2  
升9合から万治4年(1660)には、644石3斗9升3合と2.5倍にもはねあがっている。

(オ) 元禄13年の成羽藩山崎領の内検地 「岡山県農業土木史」によれば山崎主税助義方は、  
元禄13年(1700)に一斉に領内の内検地を行い、これにより朱印高の5000石が、  
8200石8斗の地高になったとあるが、「成羽史話」によればこのときの検地は姫路城主本多  
中務大輔によりなされたとある。しかし三沢村の免状でみるかぎり、元禄年間に村高の変化はみ  
られない。

## (2) 地頭村の村方騒動

天保末期から弘化にかけて、地頭村では庄屋の年貢勘定面での不正の解明要求と庄屋跡役決定問  
題とがからみあい、ついには村内を二組に分けるという事件がおこっている。これは庄屋源内の病  
死に伴い、その養子良太を跡役に推す連印方に対し落印方村内惣百姓の25%にあたる31人の百  
姓が庄屋源内の不正が解明されない限り庄屋跡役に良太を推すことはできないと庄屋跡役決定にか  
らみ、源内の不正をただそうとしておこした一件である。これを岡山大学附属図書館所蔵平川家文  
書によりみていくことにしよう。なお、地頭村は、文化10年(1813)から津山藩の預り地で  
あったが、天保10年(1839)徳川氏の直轄地となり、倉敷代官高山又藏、森八左衛門に治め  
られていた。

乍恐以書附奉申上候

当御支配所備中国川上郡地頭村百姓万吉外二十八人惣代百姓京右衛門常病ニ付代兼基助半右衛門奉申上  
候、当村庄屋源内病死仕ルニ付同人養子良太ヲ諸役奉願上度段村方百姓連印之者惣代として百姓市左衛  
門数平ヲ落印百姓共江御利解被為成下様御願申上候旨ニて今般御差紙ヲ以右万吉外二十八人之者御召出被  
仰付承知奉畏右名前惣代として罷出御届奉申上候処諸役取究方之儀御守御座候段恐入奉存候、然ル処右

源内勤役中去ル天保四巳年己以来御年貢勘定向不審之廉々有之候ニ付突合勘定致度旨毎々申出候得共、  
彼は等閑ニ致無據去卯年春以来度々及催促候得共、其後病氣〇〇〇能申粉し兎角時日差送り候迄ニ而、  
訳立不申罷在候内承合候へは如何敷勘定合有之同人養子良太義者、源内病中代勤引請居候ニ付、右良太江  
も当春以来度々申出候得共、是又屯着不仕然ル処右源内義去月十八日病死仕候ニ付、〇年来之手續を以  
尚良太江掛合候者、勘定向不審之廉々も相見江候間、去天保四巳年より去卯迄十一ヶ年間御免状并御年  
貢皆済目録勘定帳面夫々熟読為致候上、突合勘定致候様申出候共、同人相答候者、養父源内勤役中諸  
勘定合之義者一切不存旨ニ而更屯着不仕候ニ付、無余儀恐も不顧不審之廉々左ニ申上候

一 天保四巳年御年貢私共より源内江取定候十分、十三分一御値段者、御上様御定ニ相成候御直段と相  
違仕候趣相聞甚々不審至極不義、疑惑不相晴候間、御免状并皆済目録共差出為突合候様ニ致度奉存  
候事

一 天保七申年同九戌年右二ヶ年御触御直段を以御年貢源内取定居候処、諸国米価高値ニ付格別之以御  
慈悲右申年之義者、前十五ヶ年、戌年者十ヶ年平均御直段被仰付候趣ニ御座候処源内より仕渡し候算用  
面ニ而者、御直段相違有之成ニ被存不審ニ奉存候事

一 天保七申年稀成凶年ニ付夫食代御下渡、尚又同八酉年夫食代、積代共御下ケ渡被仰付候趣承知罷  
在候処、夫々割府方如何之耳斗ニいたし不審ニ奉存候事

一 天保七申年稀成大凶年ニ付村方郡役人江助積として、村内身元相応之者共より出之宛差出候米、麦、  
金、銀并川上郡吹屋村大塚定三郎、小田郡笠岡村亀川屋又左衛門当時改名平助右兩人より差出候分者、  
津山御預り御役所江差上候ニ付郡中村々江御下ケ渡被仰付候分共、郡役人共割賦帳面及見度奉存候間  
右割賦帳面熟読為致候被仰付候被為下度候奉願上候

一 御年貢算用状、源内勤役中去ル寅年、去ル卯年二ヶ年分とも未相渡不申候間、早々仕渡候様被仰付  
被為下度も、三〇〇義者、天保九戌年より去卯年迄六ヶ年之間相渡不申甚々難渋仕候間、早々仕渡突  
合勘定いたし候様被仰付被為下度奉願上候

前書奉申上候通ノ源内勤役中如何之取斗品々有之積之掛合中、同人義病死仕候ニ付養子良太より再応  
御年貢勘定諸帳面及見度掛合候得共、源内存命中之義者、相弁不申由ニ而病死致候を申立一切取扱不  
申何共迷惑難渋仕不審至極ニ奉存候間、前〇之始末被為聞右訳格別之以御慈悲、当立入小家村主屋 喜  
右衛門、同塩田村庄屋孝左衛門等立会、源内勤役中天保四巳年より卯年迄十一ヶ年之間御免状、皆済  
御目録相見〇致候上御年貢勘定帳面熟読為致夫々突合勘定〇ニ仕ル様被御付被為下度、右御聞済旨為  
下可難有仕合ニ奉存候、依而乍恐以書付奉申上候己上

川上郡地頭村

天保十五辰年十月



百姓

万吉 太吉  
丹平 惣治郎  
鶴吉 小十郎  
又吉 茂三郎  
梅吉 芳右衛門  
馬吉 庄五郎  
為助 長作  
彦十郎 直次郎  
弥次郎 忠次郎  
治次郎 近藏  
市治郎 伊三郎  
孫三郎 万吉  
沢藏 末吉  
直次郎 養藏

長百姓

郡右衛門  
ノ二十八人

惣代

京右衛門常病ニ付  
代 兼  
甚 助  
半右衛門

倉敷

御役所

つまりこれは、跡役庄屋に良太を推さなかった落印方百姓に対する倉敷御役所からの呼び出しに対して出された願書である。ここで落印方百姓は、庄屋源内に年貢勘定面で5項目の不正の疑いがあるとし、源内生前より再々諸帳面を見せてくれる様かけあっている間に源内が病死し、生前源内の手伝いもしていた養子の良太に同様のことを申し出たが、源内から何も聞いていないと一切とりあわなかったもので、源内勤役中の天保4年(1833)～天保15年(1843)まで11年間の免状、皆済目録等により勘定を突き合わせる様申し付けてほしい。またこの一件が落着するまでは、庄屋跡役に良

太を推せないと主張している。同じく天保15年の11月には、倉敷村、丈平、光右衛門が和解の尽力をしてくれるので、裁断を12月5日まで日延してほしいとの願いが出されている。しかし、これは結局失敗に終わっている。その後も倉敷表での吟味や、村内での双方による熟談がなされたが、思う様に話し合いは、はかどらなかった様子である。翌弘化2年(1844)11月になり、平川村庄屋助左衛門、吹屋村庄屋要助の2人に取扱い人が命じられ、仲介にはいることになった。そして翌弘化3年5月この二人の尽力により、やっとのことで決着がつくことになるのである。解決策は、趣意金30両を、連印方が落印方へ渡すことで内済にし、落印方は、それまで代官所へ提出した願書類の願下げを申し出るというものである。次に示すのは、その際落印方に渡された覚である。

覚

先庄屋源内勤役中諸勘定向之儀此度取扱ニ依而無勘定と相成候ニ付右年々不納之儀は、拙者ともり立替候而も取立之沙汰ニおよび申間敷候、依而一書如件

弘化三年年五月

取扱人吹屋村

要助印

同断平川村

助左衛門印

地頭村

落印惣代

甚助殿

同

半右衛門殿

同

京右衛門殿

この結果、空席であった庄屋役については、落印、連印双方の言い分をくんで、次の様な願いが、差し出されている。

閏五月八日願書差出

乍恐以書附奉願上候

私共村方庄屋源内死去已来、跡庄屋役取極奉願上候迄、立入庄屋塩田村孝左衛門、小家村喜右衛門江被仰附是迄相勤罷在候処、右源内之相続人養子良太并百姓郡右衛門儀、実跡正路のものニ附、右兩人江跡庄屋役被仰付度、右者村方取締えた免此度庄屋兩人ニ奉願候義ニ御座候、尤給米等之儀者、先庄屋請取来り候通差出、別段餘〇之入用相掛り候義ニ無御座、万一兩人御年貢引請等仕候ハ、惣小前江引請弁納仕様御差支無御座候様可仕候間、何卒願之通御〇済被下候ハ、難有仕合ニ奉存候、依而乍恐惣小前一同連印を以〇〇奉願上候以上

川上郡地頭村惣百姓

弘化三年年

五月

倉敷御役所

前書之通奉願上候故奥印仕奉差上候已上

右村立入庄屋塩田村

孝左衛門印

同 小家庄屋

喜右衛門印

早々御〇〇被仰附午年閏五月九日願之通役請被仰付候

このようにして、願いの出された翌日、良太と郡右衛門が庄屋役に仰付られ、地頭村は2つの組に分かれることとなったのである。

以上がこの一件の経過である。これらの文書からわかることは、源内が庄屋であったとき、何らかの不正があったであろうということである。これは落印方に、趣意金30両が支払われていることからうかがえる。つまり、趣意金と良太の外に落印方の郡右衛門を庄屋役に推し、村内を二組に分けるということで、代官所へは、願下げ願書にあるごとく「悉疑念相晴候」と報告し、源内の不正、跡役庄屋、をめぐる争いを一切水に流した訳である。この結末をむかえるまでに、落印方が源内に免状等の公開をせまってから実に4年、代官所に持ち込まれてからでも2年半の歳月が過ぎていた。

表4-3-3 嘉永2年 地頭村、持高階層表

村 全 体			落 印 方	
持 高 区 分	戸 数	戸数比率%	戸 数	戸数比率%
100石以上				
50～100	1 (1)	0.5		
30～50				
20～30				
10～20	5	2.4		
5～10	15 (5)	7.1	4	17.3
1～5	103 (15)	48.8	13	56.5
1石未満	87 (30)	41.2	6	26.2
無 高	不 明			
合 計	211	100	23	100

注) 嘉永2年 地頭村、東組、名寄帳

嘉永2年 地頭村、西組、名寄帳 より作成

ただし( )は入作

では、この落印方百姓は、どういう階層の人々であろうか。表4-3-3は、嘉永2年(1849)の東西2組の名寄帳から作成したものである。尚この名寄帳で確認できたのは、落印方31名のうち23名である。この表から見る限り、落印方百姓の持高は最高丹平の8石5斗8升9合、最低梅吉の5斗8升9合で、持ち高に極端なカタヨリがなく、ある程度の分散がみられる。また地頭村全体の持高戸数比率とも大きな差はないといえよう。

また、1石未満のものまで庄屋の不正糾弾に参加しており、村政に対する関心の深さを知ることができよう。

結局この騒動は、先に述べた如く、村を二つの組に分けることで結着するわけであるが、4年という長い期間不正を糾明し続けた持続性と、ついに、農民にとって信用のおける人物を庄屋に決定させるなど、農民の村政に対する関心の深まりと、意識のたかまりを知ることができよう。

(近 広 和 恵)

#### 参 考 文 献

岡山県農業土木史

成羽史話

久世町史

郷土史研究法 近世

## 4 農民の生活(1)

### (1) 農業生産条件

現在の川上町を構成した近世村落は備中国の中部西辺に位置し、地頭村・領家村のごとく一部の平坦地を除いて、ほとんどが標高500mの吉備高原上に立地している。

以下、史料的には制約されているが、耕地条件、農業生産条件の概況を具体的にみていく。

まず耕地立地条件は、明治13年の三沢村「村誌」によれば、「土地高低一ナラズ四五歩ハ高燥多クハ天受ノ地ナリ」とあるように、土地の起伏が激しく、40～50%はいわゆる「高燥」の地で水利の便が悪く、必然的に「早害ヲ被ル」結果を招くような悪条件であった。

しかも地味は「真土赤土混淆」した比較的肥沃な土質は30～40%にすぎず、60～70%の大部分は「塩土」(腐植土…20%以上の腐植質を含む土壤、肥沃でかつ保水力、通気など物理的性質も優れ、作物栽培に適する。)ではあるが、小石が交っており、概して農作物育成には適したとは言えないようである。

また「地頭村川尻り方々落合大川同前ニ御座候」領家村でさえ、小平野を形成しているにもかかわらず、「砂地石ませり之所」とあるように石交りの砂土で、決して肥沃な土壤であったとは言えないようである(注1)。

しかし近世村落の全てがこのように劣悪な土地条件ばかりだった訳ではなく、「地位昂低乾湿一定セスト金水利稍便ニシテ水旱ノ両難稀ナリ」(縣数村「村誌」)といった中には水利の便が比較的良いがために自然災害の被害の稀な地域も見られる。近世における「水論」などにも明らかなように、「水」の確保、灌漑施設の有無は、農民には重要な問題であり、特に山間部においてはそれが顕著であった(注2)。

以上のような耕地立地条件のもとでいかなる農業生産が行われていたのか、次にその概況を見ていきたい。残存する三沢、縣数の「村誌」をみて注目されるのは、米および大麦がほぼ同量生産されており、主要な農作物となっている点である。三沢村は、米424.8石(糯米を含む)に対して、大麦425.32石、また縣数村は、米凡125.0石に対し、大麦凡130.0石を生産している。大麦が米と同程度の生産高を示し、また麦類のうち大麦が裸麦より圧倒的に多いのは、これを全国または備前等の農業生産構成と比較してみると、特異な傾向であることがうかがえるであろう。つまり、大麦の生産高が裸麦を上回っているのは、岡山県では美作および備中北部に集中し、これは県北半の山間部における特徴をなすものと言えるのである(注3)。

次に粟、黍、稗、大豆、蕎麦等の雑穀類も割合高い生産高を示しているが、他へ輸出する程の量もなく、農民の主食としての自給消費生産にとどまっていたようである。

一方、特有農産物では、三沢村ではその生産が葉煙草に集中している。「質美本國小田郡笠岡村全上房郡高梁等へ賣ク」とあり、主要な商品換金作物として栽培されていた。領家村の「村明細帳」(天明8年)には「た者(ば)こ」が畑作物としてあげられており、また備中町平川村の「村明細帳」(寛保3年)の中にも畑作物として明記されていることから(注4)、かなり広範域にわたって栽培されていたものと考えられる。そしてこの「たばこ」が川上郡山間部における商品貨幣経済浸透

表 4 - 4 - 1 農 業 生 産 条 件

村 名	地 味	耕 地 立 地	肥 料	畑 作 物
三 沢 村	其色一ナラズ 三四歩ハ真土 赤土混淆 六七歩ハ礫土ニ 小石ヲ交ヘ	土地高低一ナラズ 四五歩ハ高燥多クハ天 水受ノ地ナリ 水利ノ便ヲ得ズ 時々旱害ヲ被ル	肥常ニ乏シ	大麦, 小麦, 裸麦, 大豆, 小豆, 粟, 黍, 稗, 蕎麦, 甘薯, 実綿, 馬鈴薯, 藍葉 菜種, 葉蓼, 蚕豆, 蒟蒻, 胡麻, 牛蒡
領 家 村	砂地石ませり 之所	地頭村川尻り, 方々落合 大川同前ニ御座候	柴 草 炭くもし 雑こやし 柴(他より 買入)	大麦, 小麦, 稗, きび, 大豆, 小豆, 蕎麦, 粟, 茄子, 里いも, えんどふ, 牛蒡, 大角豆, えご, 大根, 煙草
膳 数 村	其色赤或ハ黒ニ シテ	地位昂低乾湿一定セスト 全水利稍便ニシテ水旱ノ 両難稀ナリ	肥常ニ乏シ	大麦, 小麦, 大豆, 粟, 黍, 稗, 小豆, 蕎麦, 甘薯, 馬鈴薯, 茶葉, 蚕豆, 柿, 栗, 蕨, 茄子

村 名	戸 数		牛	馬	村 高	史 料 名
	戸 数	人 数				
三 沢 村	本籍 132 社 18 寺 1 計 151	男 384 女 381 計 765	牡 37 牝 101 計 138	牡 2 牝 0 計 2		村 誌 (明治13年)
領 家 村					石 325.951	「備中国川上郡 領家村明細帳」 (天明8年)
数 村	本籍 69 社 8 計 77	男 182 女 193 計 375	牡 8 牝 37 計 45			村 誌 (明治期?)

(注) 史料欄記載の史料により作成した。

表 4-4-2 農業生產構成

村名 項目 産物		三 沢 村			備 考			蠶 数			村 考		
		数	量	備	考	数	量	備	考	数	量	備	考
普 通 農 産 物	米	375.5	石	質悪村ノ自用ニ供シ他ニ輸出セス	凡100.0	石	0	質美ナレトモ他方へ輸出セス	16290.614	石			
	もち米	49.3		"		25.0	0	"	1670.684				
	大麦	425.32		"		130.0	0	"	23298.49				
	小麦	32.2		"		14.5		"	1691.626				
	裸麦	11.0		"		-		"	559.586				
	粟	38.8		"		30.0	0	"	2363.259				
	黍	31.4		"		27.5	5	"	1407.369				
	稗	81.51		"		4.0	0	"	1497.308				
	大豆	30.0	0	"		3.5		"	1914.108				
	小豆	10.0	0	"		3.0		"					
	蕎麥	23.25		"		24.5		"	2472.708				
	蚕豆	15.0	0	"		5.0		"					
	豌豆	8.0	0	"		-		"					
	大角豆	5.0	0	"		-		"					
	胡麻	0.35		"		-		"					
	特 有 農 産 物	甘 薯	48512	斤	質悪本国後月郡井原村ヘヒサグ		?		質美ナレトモ他方へ輸出セス	1126526	斤		
馬鈴薯		17500				?		"	359605	斤			
苧 玉		900	貫	質悪本國小田郡笠岡村全上房郡高梁等へ繋ク		-			456.977	石			
菜 種		11.0	石	質悪村ノ自用ニ供シ他ニ輸出セス		-			46797	斤			
実 綿		1650	斤	"		-			80079	斤			
藍 葉		2315	斤	質悪本國小田郡笠岡村全上房郡高梁等へ繋ク		-							
葉煙草		21000	斤	質美		-			552319	斤			
茶		15	貫	質悪村ノ自用ニ供シ他ニ輸出セス		?							

(注) 1. 本表は、三沢村、鵜数村は各「村誌」(明治13年)、備中国川上郡五拾ヶ村は「明治前期産業発達史資料」別冊(2)より作成した。

2. 表中の一印は生産のないことを，？印は不明のことを示す。



表 4-4-3 明治10年農産物の価額比率(%)

農 産 物	全 国	備 前	川上郡五拾ヶ村
米, 糯米, 陸稻	61.1	69.9	43.7
大 麦	5.1	1.8	18.7
裸 麦	4.1	8.8	0.6

(注) 川上郡五拾ヶ村の価額比率は「明治前期産業発達史資料」より作成した。

の一端を担っていたであろうことは想像に難くない。

以上、明治期の史料で考察してきたことを今度は、天明8年(1788)の「領家村明細帳」に照らして、近世農業生産状況をみてみよう。田方はもちろん稲作が主で、種籾として、北国・弥六・沖飛かり(光)・千本・美作・阿せこし等を用いた。そしてこれを田方1反につき1斗8、9升の割合で苗代に蒔いた。土性に恵まれない「砂土」であった故、「当村者下所ゆへ稲株根つき不申候ニ付種籾大分入申候」とある。また畑作物としては、先の村誌とほぼ同様のものが栽培されており、大麦、小麦、大豆、粟、稗、曾(そ)ば、茄子、里いも、大角豆、苧種、大根、き飛、えんどふ、小豆、空豆、牛蒡、えごの普通農産物に加えて、特有農産物として「た者こ」があげられている。

注1) もっとも、「川上郡誌」は「領家川」についての記述の中で、「地味肥沃なる地頭領家の小平野は比によりて灌漑の利を受くること多大なり」と領家村の肥沃な土質を述べている。

注2) 「備中町史本編」、P180に次のような記述がある。「慶応2年(1866)の川上郡10カ村からの歎願書に「右村々の儀は井堰掛り少々の村方候て絶水相成り植付けなども不行届」であると書いているがそれは田があまり高所にあるため溜池から水を引くことができず、天水受の水で間にあわせたためである。」

注3) 京都大学人文科学研究所、1963年、続近世後進地域の農村構造—備前国津高郡加茂郷の場合—、P109、110を次に引用する。「明治10年において大麦が裸麦より多いのは(中略)備前には一郡もなく、備中では上房郡、川上郡、哲多郡、阿賀郡である。これらの諸郡は岡山県北半の山間に位置し、南部の瀬戸内海に面した備前および備中南部とは農業生産の発展度も性格もかなり異っている。」

注4) 備中町史本編、P181

さて以上のような農業生産条件のもとで、近世農民は農具、肥料の改良、開発によって作業能率、土地生産性の増大をはかっていったものと思われる。以下農具および肥料について考察していきたい。

#### (イ) 農 具

農具に関する近世史料は見い出せなかったが、近世にも使用されたとと思われる農具と全国の近世農書による一般的傾向を比較しながらその分化、用途について述べよう。

写真4-4-1は風呂鍬である。鍬は日常の農具として最も基本的なものである。用途としては耕耘作業のうち最も作業量が大で、辛労である耕起作業および田植え後の中耕に使用した。享保期以後田の耕起専用の打鍬として備中鍬が登場する。刃数によって三本鍬、四本鍬あるいは鍬能などと呼ば

れているが、以前の風呂鍬に比較して深耕が可能になり、労働能率が大いに高まったことが注目される。

畜力による耕耘用具には「ウシングワ」「マンガ」と呼ばれるものがあった。作業能率の高い点では鍬に及ぶべくもなく、特に麦刈後、短期間のうちに田植えまでの作業を終えなければならない二毛作地方においては畜耕が必要になるわけである。

ところでこの畜耕具は近世の川上地方においても果たして広く使用されていたのであろうか。前掲表4-4-1により明治期における三沢、膳数両村の牛馬所有状況をみると、三沢村は戸数132戸に対して牛138頭、馬2頭を、また膳数村は戸数69戸に対して牛45頭を所有している。数字上では各戸に1頭、あるいは3戸あたり2頭の割合で牛馬を所有していたことになり、一般に畜耕は可能であったと考え得る。だが、農民の階層性、耕地条件を加味して考えれば、「ウシングワ」「マンガ」の使用が近世のこの地方に一般的であったかどうかは疑問である。

近世における脱穀用具の主たるものは享保期以降、従来の扱箒にかわって登場した千歯扱きであろう。その能率は扱箒の2倍半、あるいは10倍と言われている。

脱穀に続く調整作業として籾摺り、選別がある。籾摺りには摺臼が用いられる。通常、摺臼と呼ばれているのは木臼であり、これが「百姓伝記」によれば、元禄以前にすでに土のひきうすである唐臼(土臼)への移行を示し、木臼はすたれたとある。選別用具は風選によるものと、穀粒の大きさによるものの二種類に分けることができる。前者は箕、唐箕、後者は篩(ふるい)、千石通、万石通、である。近世農書は箕を一般的な選別用具としてあげている。そして箕を用いて風選したものをさらに篩にかけて選別する。篩の円形の縁には竹を用い、網目には麻糸を用いたようである。二枚、またはそれ以上の傾斜した篩よりなる千石通、万石通の出現は大きな進歩であったと思われる。



写真4-4-1 風呂鍬

領家、大月艶太氏所有。台の部分(風呂)に鉄の鍬身を取りつけた。柄は桧の割木の節のないものを用いる。



写真4-4-2 ウシングワ

大月氏所有。これは近代的な「短床犁」である。耕度が深くなり、耕土の犁余り地のできる欠点を克服した点で、近世の「長床犁」よりすぐれている。



写真 4-4-3 ウシングワ



写真 4-4-4 マン ガ

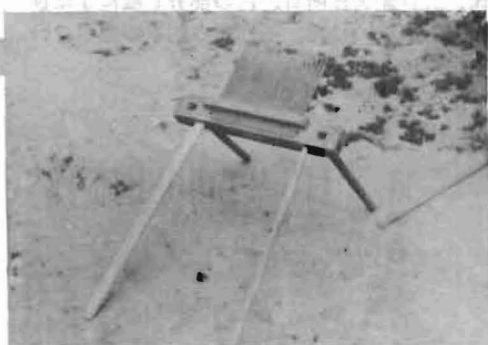


写真 4-4-5 千歯扱き



写真 4-4-6 唐 箕

#### (ロ) 肥 料

肥料は農業生産を行う上で地力の回復、維持のために不可欠のものである。特に二毛作の出現、普及以来、肥料の必要性はますます高まるばかりであった。

天明8年の「領家村明細帳」には肥料について次のような記述がある。

- 一 田畑共肥え山柴草入申候者反ニ付  
三百把程入申候其外炭くもし雑小屋し多  
入申候柴之義茂自山無御座取寄ニ而買調  
申候百姓少々持山ハ牛馬飼申候



写真 4-4-7 養

これによれば主として山の柴草が使用されていたようである。この柴草は一般に刈敷とよばれ、最も一般的な肥料であった。刈敷は山野の灌木状をなす闊葉樹の若芽、草などを田植え前に刈り取り、

それを水田に敷きつめ、牛馬あるいは人が踏みこんで肥料として用いたのでこの名がある。刈敷は自給肥料として村の共同採草地（入会地）から採取するのが普通であり、ためにこの肥料としての柴草に関して入会山争論（山論）に及ぶ事件が近世地方史料にはたびたび見うけられるのである。しかし領家村の場合、天明期には「柴之義茂自山無御座候（最）寄買調申候」とあり、百姓自身の持山がなく、柴を購入肥料としていたようである。それは明細帳に、「御林無御座候」と明記されているように、領家村が平坦地で大部分を構成していたことによるものと考えられる。

またこの柴草の購入先を考えるに、同明細帳に次のような手がかりとなる記述が見られる。

薪取場之義銘々自分草山内ニ而親木を伐たき申候又者成羽御領分臈数村布瀬村ニ而買調申候  
肥料とすべき柴草も薪と同様にこれらの村々から購入したものと推察できるのである。

そして百姓少々ある持山の草木は牛馬にこれを飼料として与えた。また牛馬から得られる糞尿、あるいは厩舎に敷きつめた敷草などを利用した厩肥も当然使用されたであろう。そのほか、「くもし」とよばれる落葉、排泄物等を積み重ねて腐熟させた堆肥、「炭くもし」というのは「くもし」を焼いて灰にして肥料としたものと考えられる。「雑小屋し」は人糞尿が主要なものであったと思われる。

また一般に金肥とよばれる干鰯、油粕類の購入肥料が明記されていれば、近世川上における商品作物の栽培状況、商品経済の浸透度がうかがえるのであるが、残念ながら明細帳にはその記載がない。つまり、近世においては明治13年の三沢村「村誌」にあるごとく、「小田郡笠岡村、上房郡高梁」などの相当広範囲にわたるひんばんな流通関係はいまだ成立していなく、「臈数村、布瀬村」など近村との交流にとどまっていたようである。

## (2) 農民の住宅構造

近世農民の階層性を把握する上での一つの手懸りとなるものとして、日常の「住生活」を具現した農民の住宅構造に着目する方法がある。当研究方法としては、故藤沢晋先生、中野美智子氏、平方英子氏の業績が既に残されている。すなわち、同論文によれば、農民の機能別住宅建棟構成およびこれと対応した住宅建坪数を、また住生活の中で最も中心的な場である母屋の間取構造と迎客、家族生活用施設の充実度、母屋の礎・畳数等を階層性把握の要素とし、それらを持高との相関で近世後期における住宅構造を類型化し、そこから階層性を導き出されているのである。近世後期においては、持高の低い貧農、下層農民の住宅構造は、住宅建棟構成・住宅建坪数ともに規模が小さく、母屋の間取構造も極めて簡略で、貧弱な構造に甘んじることを余儀なくされているのが、中農層から富農層に移行するに従って、しだいに大規模かつ充実した構造を示すようになる。そして、庄屋層に至ると、農民住宅では最高度に充実した住宅構造を持ち、職務上必要な「迎客用施設」まで備えた階層性を示すようになるのである。

ここでは、農民住宅構造に具現化された階層性が近世前期にも、もはや顕著に把握できるのかということを中心にして三沢村の残存史料から考察してゆきたい。次に、中野美智子先輩の指導のもとに筆者が直接川上町で取材した階層別住宅構造の代表的事例三点から、母屋構造にみられる階層性について述べてみよう。

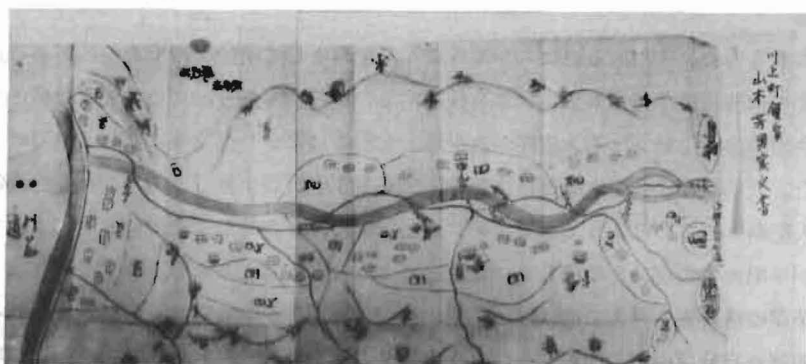


写真4-4-8 領家村絵図

川上町領家，山本芳男氏所蔵。代官万年七郎左衛門の支配期，天明4年（1784）頃のものである。家数は97軒と記されている。

以下にあげた史料は，「備中国川上郡之内三沢村家数人数牛馬改帳」（岡山県地方史研究連絡協議会刊）の一部である。

寛永貳拾壹年

備中国川上郡之内三沢村家数人数牛馬改帳

申ノ九月日

備中国川上郡 三沢村

一，高貳百貳拾五石五斗壹升五合

此人数 貳百五拾貳人

此わけ

一，高拾六石七斗四升貳合 庄屋助左衛門（印）

在所に而上

三間  
家 八間

貳間  
はり屋 六間

貳間  
馬屋 五間



此人数拾六人

内

助左衛門年五十八	女房年四拾三				
男子宫市年六ッ	長年十三	五郎作年卅	たま年廿	女子つる年十	下人助一郎廿三
まつ年廿五	かう春年八ッ	市蔵年廿	下女ふて年十七	助年十三	才まつ年十三
二郎年十一	かめ年十				
馬老正牛三正					
				以上	
(中略)					
一、高四石八斗四升七合	長二郎(印)				
宅間	宅間				
家	馬屋				
三間	式間				
此人数三人					
内					
長二郎年四十一	女房年卅四				
男子三五郎年十					
馬老正					
	以上				
(以下略)					

当該史料から、寛永21年(1644)の三沢村における各農民の持高、家族数、住宅建棟の種別および規模(住宅建坪数)、それに牛馬の所有状況を知り得る。住宅建棟の種別には、「家」、つまり母屋と、自給肥料としての草木を焼いた灰を貯蔵しておく「はい屋」、牛馬を飼育する厩舎としての「馬屋」の三種類が記載されている。

この農民住宅を構成している三要素の内、機能別住宅建棟構成に現れる階層性、および住宅建坪数に現れる階層性が、持高に応じて果たして相関を持っていたであろうか。

この三沢村人馬帳を持高順に並べ換えたのが表4-2-4である。持高構成についてみると、最高持高は庄屋助左衛門の16石7斗余で、以下才蔵の1石1斗余まで階層分化が見られる。考察対象とすべき戸数は、「ぜん宗新法寺」とある1寺社を除外し、下人はそれぞれ主人の所有にくみ入れたので、この場合、計34戸とした。

まず、機能別建棟の所有状況によって住宅を類別すると、(イ)「家」(母屋)のみ所有で、「はい屋」「馬屋」所有に至らないもの、(ロ)「家」の他に「はい屋」のみ所有しているもの、(ハ)「家」の他に「馬屋」のみ所有しているもの、(ニ)「家」の他、「はい屋」「馬屋」とも所有しているもの、という四類型に分類することができる。この四類型に考察対象とした34戸がどのように所属しているか、その割合を表4-2-5より見てみよう。(イ)は14戸・41.2%、(ロ)は5戸・14.7%、(ハ)は8戸・23.5%、(ニ)は7戸・20.6%となり、(イ)の家のみ住宅が40%程度、(ロ)、(ハ)、(ニ)の「はい屋」「馬屋」

表 4-4-4 寛永 21 年の三沢村における農民住宅の建棟および建坪構成

戸主名	持高	家(母屋)	はい屋	馬屋	人数	牛馬
庄屋 助左衛門	1 6 7 4 2 石	3 × 8 間	2 × 6 間	2 × 5 間	16 人	牛 3, 馬 1
源 二 郎	1 6 1 0 7	3 × 5	1 × 3		4	
源 七	1 1 2 2 8	3 × 6	1 × 2	1 × 3	8	牛 1
五郎右衛門	1 0 1 8 3	2 × 5	1 × 3	1 × 3	9	牛 1
弥 七 郎	9 6 1 1	3 × 6			6	
新 兵 衛	9 4 8	2.5 × 4		1 × 2	6	牛 1
喜 藏	7 3 2 5	3 × 5	1.5 × 3	2 × 3	9	
与三右衛門	7 1 6 9	2 × 5		1 × 2	4	牛 1
与 吉	6 7 1 1	2 × 5	1 × 2		3	牛 1
三郎右衛門	6 4 5 7	2 × 5	1 × 2		4	牛 1
吉 藏	6 3 0 2	2 × 3.5			4	
与 吉	6 2 0 2	2 × 5		1 × 2	4	牛 1
与 一 郎	6 0 0 4	2 × 5			4	
六郎兵衛	5 4 0 8	2 × 4			5	
長 二 郎	4 8 4 7	1 × 3		1 × 2	3	馬 1
新 三 郎	4 8 4 7	2 × 5			4	
二 郎 吉	4 8 0 5	2 × 5	1 × 3	2 × 3	9	牛 1
助 七	4 6 8 4	2 × 4	1 × 2		5	
久 三 郎	4 4 8	2 × 4			5	
権 七	4 3 5	2 × 3			4	
宗 兵 衛	4 1 6	2 × 3		1 × 2	5	牛 1
助 三 郎	3 7 1	2 × 5			4	
太郎兵衛	3 6 7	2 × 3			3	
作右衛門	3 4 4 1	2 × 3		1 × 2	4	牛 1
宗 兵 衛	3 4 3 9	2 × 3			6	
甚 七 郎	3 3 8 5	2 × 5		1 × 3	5	牛 1, 馬 1
又 五 郎	3 2 4 9	2 × 5		1 × 2	6	牛 1
惣 七 郎	3 2 4 1	2 × 5	1 × 2		4	
二郎兵衛	3 0 3 9	2 × 5			4	
平 二 郎	3	2 × 3	1 × 2		3	
ぜん宗 新 法 寺	2 8 1 1	1.5 × 3	1 × 2		3	
与 三 郎	2 4 4 9	2 × 3			4	



戸主名	持高	家(母屋)	はい屋	馬屋	人数	牛馬
ぜん宗 与右衛門	1.847石	2×3間		1×2	4人	牛1
二郎三郎	1.63	2×4			4	
才藏	1.112	2×3			3	
助左衛門下人 与七		2.5×3		1×2	5	馬1
〃 惣吉		2×5			6	
〃 二郎三郎		2×3		1.5×2	5	牛1
〃 助二郎		1×3			3	
〃 孫右衛門		2×5	1×2		9	
〃 源四郎		2×3			4	
弥七郎下人 久藏		1.5×3			3	
甚七郎下人 三四郎		2×3			3	
源二郎下人 源三郎		2×3			3	
与右衛門下人 与太郎		2×4			4	
孫右衛門下人 又助		2×5			7	
新兵衛下人 長介		2×3	1×2		4	
三郎右衛門下人五郎二郎		2×3			3	
源二郎下人 孫三		2×3			3	
与吉下人 又右衛門		2.5×5		1×2	5	馬1
与三右衛門下人 小四郎		2×4			3	
三郎右衛門下人 新七		3×5	2×3		4	

(注) 1. 本表は寛永21年(1644),「備中国川上郡之内三沢村家数人数牛馬改帳」より作成した。

2. 表中の空欄は所有していないことを示す。

の付属施設を備えている住宅が残り60%を占めていることが把握できる。

つぎにこの四類型を各戸の持高と対応させると、(イ)「家」のみ住宅は五石未満層に約7割の10戸が属しており、残りは五石以上十石未満層に4戸あるのみである。

また(ロ), (ハ)の住宅も(イ)とだいたい同様の傾向を示しているが、これが(ニ)の「家・はい屋・馬屋」所有の建棟構成になると、五戸未満層にはわずか1戸しか存在せず、他はすべて五石以上層に集中している。

以上のごとく建棟所有状況を持高階層との相関で見ると、「家」のみ、または「家」の他に「はい

表 4-4-5 三沢村近世前期農民住宅の階層性

住宅区分 持高区分	持高と建坪の相関						持高と建棟の相関				合 計
	10坪未満	10～20坪	20～30坪	30～40坪	40坪以上		(イ) 家のみ	(ロ) 家+はい屋	(ハ) 家+馬屋	(ニ) 家+はい屋+馬屋	
15～20石	戸	戸	戸	戸 △	戸 ①		戸	戸 1	戸	戸 2 (5.9)	
10～15石		①	①							2 (5.9)	
5～10石	2	1	1 ④ ③	△			4	1	2	3	10 (29.4)
5石 未満	4～5石 2	④ 1 △ ①					3	1	2	1 } 1	7
	3～4石 2	△ ④					4	2	3	6	9
	2～3石 1						1	2	1	20 (58.8)	1
	1～2石 2	④					2	1	3	3	3
	1石未満										
合 計	9 1 3 0 4 2 3 2 1 0 2 4 0 2 0 0 0 0 1	13戸	11戸	7戸	2戸	1戸	14	5	8	7	34 (100.0)

(注) 1. 本表は「備中国川上郡之内三沢村家数人数牛馬改帳」より作成した。

2. 表示の戸数で、数字のみは住宅建棟構成が「母屋のみ」、△印の数字は「母屋+はい屋」、□印の数字は「母屋+馬屋」、

○印の数字は「母屋+はい屋+馬屋」のものを示す。

屋」「馬屋」のいずれかを所有している農民は五石未満層が大多数を占め、「家」に加えて「はい家」「馬屋」の両方とも所有している階層になると、五石以上の持高を必要としている。そして五石以上十石未満層の住宅構造には先に類別した四類型がすべてみられ、中間的な位置にあったことがうかがえるのである。

以上の分析からここに大まかな建棟所有の階層性を見出すことができた。

次に「住宅建坪数」について見ると、(イ)「家」のみ住宅は「10坪未満」に9戸、「10～20坪」に4戸と集中している。(ロ)「家」+「はい家」住宅は、「10坪未満」に1戸、「10～20坪」に2戸、「20～30坪」には存在せず、「30～40坪」に2戸と分散している。(ハ)「家」+「馬屋」住宅も、「10坪未満」に3戸、「10～20坪」に3戸、「20～30坪」に2戸と分散傾向を示している。そして(ニ)の「家」+「はい屋」+「馬屋」住宅に至ると「10～20坪」に2戸、「20～30坪」4戸、それに庄屋助左衛門の下人の建坪も含めた116坪という膨大な建坪数の住宅が1戸存在する。(ロ)(ハ)については比較的広範囲に分布していると言えるが、(イ)の住宅で20坪以上の建坪数を所収することは困難で、しかも持高は10石未満層に限られている。(ニ)住宅は少なくとも15坪以上を必要とし、持高も5石以上を必要としている。これは建棟数が増加すればそれに伴い当然建坪数も増加する訳で、この建坪数における階層性が単に建棟構成の階層性によるものかどうかを調べるには、「家」の規模と、「はい屋」「馬屋」の付属建棟の規模の相関をみなければならないが、ここでは省略したい。

対象戸数に制限があるので持高による階層構成も大づかみなものしか得られず、従って考察も不十分なものとなってしまったが、近世前期三沢村における農民住宅構造が概観できたのではないかと思う。

### (3) 階層別住宅構造の事例

近世における農民住宅の母屋の構造に見られる階層性とはどのようなものであったのだろうか。ここでは川上町域で、現在に至るまで近世期の姿を比較的よくとどめている下層住宅、中層住宅、上層住宅の代表的三事例の母屋構造を中心として考察を進めていきたい。なお、対象とした住宅の持高は判明し得ず家人の記憶にたよって所有田畑を確認したにすぎないので、大まかな数値しかつかめなかった。

#### (a) 下層住宅の事例(七地所在)

この建物の成立年代は不詳だが、家人の話によれば、明治期に田畑は所有しておらず、小作をしていたそうである。近世においてもやはり同程度の階層に位置していたと考えてよいだろう。母屋の規模は、奥行4間、間口6間で建坪24坪である。屋根はワラブキで軒は低く、裏通りの両側面はベタ壁(土壁)で塗り込められていて、きわめて閉鎖的なつくりになっている。母屋に付属している納屋は現在瓦葺きに改築されているが、それが母屋と同時期のものかどうかは不明である。

間取りをみると、居住床部分は「ニワ」とよばれる14畳半のゴザ敷きの広間と、「オクノマ」(8畳)、「ナンド」(6畳)の二室から成っている。「ニワ」はスノコ天井で、中央にイロリを切

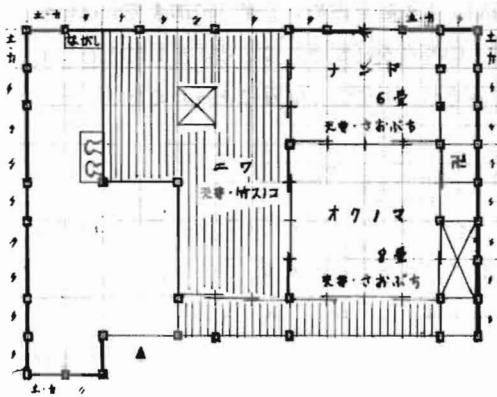


図 4-4-1 事例(a) 平面図

りは後補のもので、以前は土間にはいると、「オクノマ」が見通せる構造になっていた。

り、「ニワ」と一続きになっているクドで煮炊きしたものをここに運び、この周囲が家族生活の食事の場となった。あるいは冬になるとイロリの火が暖房となり、また土間のスノコ天井裏に運び上げたコンニャクをこの冬の間、クドとイロリの煙でいぶし保存の役割も果たしていた。このイロリは現在使用されていないが、ナベやチャガマをかけていたズザイ（自在鉤）が現在でも天井から吊るされており過去の名残りをとどめている。

「オクノマ」は8畳のさおぶち天井で、奥に仏壇がはめ込まれている。「ニワ」との障子のしき



写真 4-4-9 事例(a) の遠景正面



写真 4-4-10 事例(a) 表通り

さらに一室は寝室としての「ナンド」である。三方がベタ壁で家全体が暗いにもかかわらず、「ナンド」は北側に設けられた1間の障子が通風採光の救いとなっている。

「土間部分」にはさまざまな生活用具が雑然と並べられ、他に収納場所を持ち得ないこの階層にあっては、土間が「蔵」および「物置」としての機能を果たしていた。奥には鍋、水がめを備えた簡単な流しの設備が見られる。天井はスノコで、コンニャク玉を運び上げる



写真 4-4-1 1

事例(a) 裏通り

軒が低く垂れ下がり、畑がすぐ後にせまっているので、昼でもうす暗く、通風・採光ともに悪い。

ため、天井の一角が50cm四方位の四角形にくり抜かれている。生活上、不可欠の水は近くの共同井戸から持ち帰り、炊事・風呂に利用していた。

この住宅は、部屋部分が客室としての「オクノマ」と、家族の寝室である「ナンド」との二室に分化している点、また「ナンド」に明り窓がとりつけられている点を考えると、「下層住宅」のうちでもかなり整った構造であるということができよう。



写真 4-4-1 2

事例(a) の土間の梁組とスノコ天井



写真 4-4-1 3

事例(a) の縁



写真 4-4-14

事例(a)の土間部分

土間の半分が生活用具の置き場となっている。奥に簡単な「流し」がみられる。



写真 4-4-15

事例(a)の土間に設けられたクド

わざわざ土間におりていなくても、「ニワ」側からすわって煮炊きできた。現在はレンガ造りになっている。



写真 4-4-16

共同井戸



# (b) 中層住宅の事例（七地所在）

前述下層住宅の事例からわずか数十メートル離れた地点に位置する。家人の話によれば、家は以前の百姓家で2反程度の田を所有していたそうである。

母屋のはかに納屋、蔵を所有しており、現在は瓦屋根のものに建て替えられているが、これが果たして母屋と同時期のものかどうかは判然としないという話である。

母屋の規模は奥行3.5間、間口2.5間で、先の下層住宅の事例よりいく分大きくなっている。その差は「居住床部分」の部屋数にあらわれ、「オーデー」とよばれる「オクノマ」に相当する部屋（6畳）と、「ナンド」（5畳）に加えて10畳の「デー」（「ナカノマ」ともいう）が増室されている。

以前「デー」には11畳の広間（板張、蓆敷）に切っであると同様のイロリを設けていた。それは商品作物である葉タバコの乾燥（天日乾燥したものをこの部屋に吊しておく）や養蚕、つまりかい

この飼育を目的として使用したのだという。「デー」が10畳という普通の住宅では珍しい間取りとなっているのはそのためであろう。

「オーデー」には仏壇と床が設けられ、「ナンド」には1間の障子が入れられて通風採光がはかられており、この二室は下層住宅の構造となんら変わりがない。

「土間」にはクダが設置されているが、生活用具・収穫物の収納場所が母屋の外に機能分化しているの

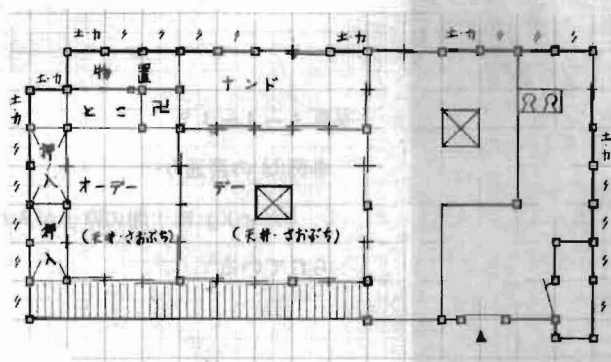


図4-4-2 事例(b)の平面図

全体に整然としてきている。

天井は土間部分が大和天井、部屋部分の三室はさおぶち天井である。

間取り構造において表通りが二室に増室された点と、三方は依然土壁であるが、明り窓が広間の北側に1ヶ所、土間部分に1ヶ所設けられ通風採光がはかられている点において、下層住宅より一歩進

んだ中層住宅の構造を呈しているといえよう。



写真4-4-17

事例(b)の遠景正面

周囲の畑では葉タバコが栽培されている。





写真 4-4-18

事例(b)の表通り

屋根は約10年前に葺きかえた  
もの



写真 4-4-19

事例(b)の裏通り

「ナンド」に1間の障子が入れ  
られている

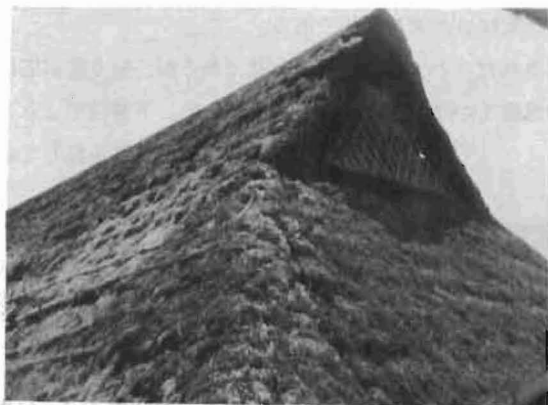


写真 4-4-20

事例(b)の破風  
はふ

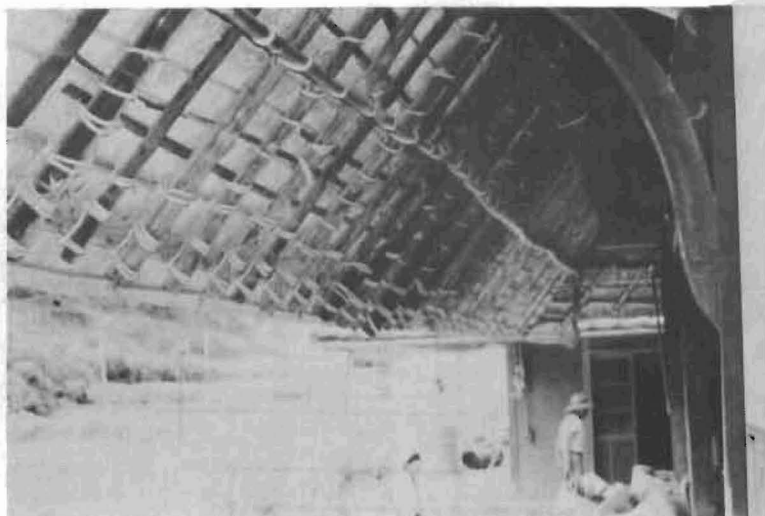


写真 4-4-21

事例(b) のサス組



写真 4-4-22 事例(b) , デー(ナカノマ)部分

「イロリ」を使用したため、壁がススで黒くよごれている。

#### (c) 上層住宅の事例(領家村所在)

平面図に示したように、奥行 5.5 間、間口 1.0 間という建坪 5.5 坪の母屋のはかに、木小屋、蔵、カギヤ、部屋座敷、料理部屋、納屋、牛小屋といった付属建物を周囲に配置し、屋敷全体を土塀で囲むという大規模なつくりである。明治期には山林をおよそ 50~60 町歩、田を 1~5 町所有していたという。戸主の常五郎という人は小作をさせていたとして連印する連体保証人だったそうである。

图 4-4-3 事例(c)平面图

まず母屋からみると、建築年代は明治2年以前ということで、屋根は現在トタンでおおっているが、四周に瓦庇をめぐらした中二階のあるりっぱな外観となっている。また方角が「辰巳向」（現在の南東方向）に建てられており、このつくりだと太陽が部屋にはいらず、月の光がよくはいるのだという。

間取りで特徴としてあげられるのは、表通りが「ミセノマ（店の間）」8畳、「ホトケノマ（仏の間）」6畳、「オクノマ」8畳の三室に増室され、また中層住宅では裏通りにおける「ナンド」が一室だけであったのに対し、ここでは「ナンド」8畳、「ナカナンド」6畳、「オクナンド」6畳の三室に分離して、それに「ケショウノマ（化粧の間）」3畳半が加わり、生活空間の機能分化が進められている点である。

「ミセノマ」は「客間」ともよび、普通一般の客をもてなす場合に使用した。「ホトケノマ」は文字通り仏壇が っており、このように仏壇のために6畳1間をあてることができるのは、やはり母屋の規模の大きさを、ひいては家勢の強さを示すものといえよう。

身分の上層の客は、「ミセノマ」には案内せず、内庭から直接「オクノマ」に導いた。「オクノマ」は迎客専用の客座敷で、それだけに2尺5寸の木床、付書院および天袋戸棚と違い棚を設けた脇床は書院造りの形式を踏んだ立派なものとなっている。そして客座敷の周辺も南から西に廻り縁をめぐらし、迎客専用の上便所が備えられている。「ホトケノマ」と「オクノマ」の天井は梁から針金などで吊ったさおぶちのつり天井である。

また「ナンド」は1間半以上もの明り窓とぬれ縁を設け、表通りの「ミセノマ」から裏通りが見通せるほど開放的になった。「ナカナンド」は主に家財道具の置き場として使用され、その奥に女性の化粧用の部屋として、「ケショウノマ」が備えられている。ここにも1間半の明り窓をとりつけ、これで裏通りは非常に通風採光がゆき届き、生活の場として申し分のない充実したものとなった。



写真4-4-23

事例(c)の遠景

母屋の向かって右側が納屋、左側が部屋座敷である。納屋の後方に白壁塗りの蔵が見える。

次に付属建物について少し述べよう。母屋北側の木小屋はまた裏納屋ともよばれ、風呂、イロリの燃料としての薪やまきを入れておいた。またその一角を柴小屋とし、山の柴草を刈り取ってきてここで腐熟させ、肥料として用いた。蔵は8~9坪ある白壁塗りの立派なものである。「カギヤ」というのは女性の妊娠期間中、別居のために作られた小屋のことである。一般には「忌小屋」などとよばれているもので、食事もわざわざこの部屋に運んでもらい、一人で食事をとったということである。特別の客の食事を準備するための料理部屋、それに部屋座敷、納屋、牛小屋と付属棟だけでもたいへんな規模であった。



写真 4-4-24

事例(c)の表通り



写真 4-4-25

事例(c)の裏通り

周囲に塀をめぐらし、広くゆったりした空間をとっているのので、通風採光がゆき届き、開放的な裏通りとなっている。右端に見えるのは木小屋である。



写真 4-4-26

事例(c)「オクノマ」の本床と付書院  
書院造りの形式を踏んだ、この家で  
最も立派な部屋となっている



写真 4-4-27

事例(c)「オクノマ」の脇床  
天袋戸棚と違い棚を設けている

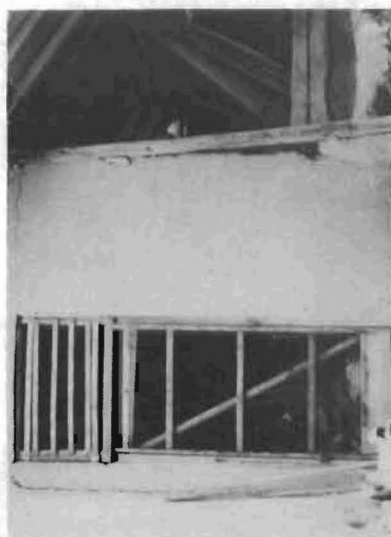


写真 4-4-28

事例(c)の「カギヤ」



写真 4-4-29 事例(c)「ホトケノマ」の神棚  
奥に「ナカナンド」、そして「ケショウノマ」のガラス戸が見えている

(中 島 英 喜)





## 5 農民の生活(2)

### (1) 「年貢収納」

年貢収納の実態を知る上での史料としては免状(年貢割付状)と皆済目録がその主要なものとなる。免状は村高・田畑の免・その年に納めるべき定米及び小物成等が記されており、また皆済目録においては実際に納めた米(銀)の正確な数字が把握できるのである。その意味では農民の生活の実態を正確につかもうとするならば、この両者の数字を突き合わせる必要があるといえる。

しかしここでは、史料的制約から年貢免状を中心に可能な限り各村の年貢収納状況の実態を追ってみたい。

表4-5-1 三沢村の貢租(寛永15～文久1)

年 代	村 高 a	諸引高 b	毛付高 a-b	定 米 c	用拾米 d	上納米 c-d	高 免 $\frac{c-d}{a}$	毛付免 $\frac{c-d}{a-b}$
	(石)	石	石	石	石	石	ツ	ツ
寛永15 (1638)	225.515		225.515	237.910		237.910	10.55	10.55
19	225.515		225.515	214.230		214.230	9.49	9.49
20	225.515		225.515	216.500		216.500	9.60	9.60
21	225.515		225.515	218.750		218.750	9.70	9.70
正保2 (1644)	225.515		225.515	219.880		219.880	9.75	9.75
3	222.515		225.515	263.070		263.070	11.67	11.67
4	245.860		245.860	275.363		275.363	11.20	11.20
慶安1 (1648)	245.860		245.860	280.280		280.280	11.40	11.40
2	245.860		245.860	285.200		285.200	11.60	11.60
3	245.860		245.860	280.280		280.280	11.40	11.40
4	245.860		245.860	280.280		280.280	11.40	11.40
承応1 (1652)	245.860		245.860	270.450		270.450	11.00	11.00
2	245.860		245.860	265.530		265.530	10.80	10.80
3	245.860		245.860	267.990		267.990	10.90	10.90
明暦1 (1655)	245.860		245.860	260.610		260.610	10.60	10.60
2	245.860		245.860	277.820		277.820	11.30	11.30
3	245.860		245.860	277.820		277.820	11.30	11.30
万治2 (1659)	258.129		258.129	321.680		321.680	11.26	11.26
3	258.129		258.129	368.100		368.100	14.26	14.26
4	644.393		644.393	368.600		368.600	5.72	5.72
寛文2 (1661)	644.393		644.393	367.800		367.800	5.70	5.70
3	644.393		644.393	363.300	334.19	329.881	4.97	4.97
4	644.393		644.393	360.530		360.530	5.59	5.59
5	644.393	0.928	643.470	358.180		358.180	5.56	5.57
6	644.393	0.928	643.470	357.890		357.890	5.55	5.56
7	644.393	0.928	643.470	332.200		332.200	5.16	5.16
8	644.393	0.928	643.470	323.397		323.397	5.02	5.03

年 代	村 高 a	諸引高 b	毛付高 a-b	定 米 c	用捨米 d	上納米 c-d	高 免 $\frac{c-d}{a}$	毛付免 $\frac{c-d}{a-b}$
	石	石	石	石	石	石	ツ	ツ
寛文 9	644.393	0.928	643.470	365.310		365.310	5.53	5.54
10	644.393	0.928	643.470	354.400		354.400	5.50	5.51
11	644.393	0.928	643.470	364.100		364.100	5.65	5.66
12	644.393	0.928	643.470	364.100		364.100	5.65	5.66
延宝 1 (1673)	548.089	0.928	547.161	302.000		302.000	5.51	5.52
2	644.369	69.321	575.048	302.270		302.270	4.69	4.96
7	646.059	63.246	572.813	310.830		310.830	4.81	5.43
8	646.987	63.246	572.813	310.830	1.963	308.867	4.77	5.39
9	646.987	66.08	580.907	309.570	※ 0.208	309.778	4.79	5.33
天和 2 (1681)	646.987	66.08	580.907	309.620		309.620	4.79	5.33
3	646.987	66.08	580.907	310.293		310.293	4.80	5.34
貞享 1	646.987	66.08	580.907	321.010		321.010	4.96	5.53
2	646.987	56.009	590.978	324.520		324.520	5.02	5.49
3	646.987	55.767	591.220	324.664		324.664	5.02	5.49
4	646.987	55.767	591.220	324.664	13.69	310.974	4.81	5.26
5	646.987	55.767	591.220	324.664		324.664	5.02	5.49
元禄 2 (1689)	646.987	53.491	593.496	326.018	52.057	273.961	4.23	4.61
3	646.987	53.491	593.496	326.018	※ 1.099	327.117	5.06	5.51
4	646.987			327.117	52.252	274.865	4.25	4.61
5	646.987	50.785	596.202	327.628		327.628	5.06	5.50
6	646.987			327.628	※ 0.589	328.217	5.07	
7	646.987	50.176	596.811	328.217		328.217	5.07	5.50
8	646.987	49.760	597.227	328.413		278.413	4.30	4.66
9	646.987	49.760	597.227	328.413		328.413	5.08	5.46
10	646.987	49.220	597.767	328.734	20.000	308.734	4.77	5.11
11	646.987	49.220	597.767	328.734	4.945	323.789	5.00	5.42
12	646.987	49.220	597.767	328.734	35.000	293.734	4.54	4.93
13	646.987	49.220	597.767	328.734	24.487	304.247	4.70	5.09
14	646.987	48.168	598.819	306.972	10.042	296.930	4.59	4.96
15	646.987	48.168	598.819	306.972	36.992	269.980	4.17	4.51
宝永 1 (1704)	646.987	46.152	600.835	306.994		306.994	4.74	5.11
2	646.987	45.621	601.366	307.112		307.112	4.75	5.11
3	646.987	45.621	601.366	307.112	※ 1.469	308.581	4.77	5.13
4	646.987	42.885	604.102	308.581		308.581	4.77	5.11
5	646.987	38.354	608.633	310.837	18.557	292.280	4.52	
6	646.987	73.081	573.906	292.279		292.279	4.52	5.09
7	646.987	70.105	576.882	293.713		293.713	4.54	5.09
8	646.987	66.058	580.829	295.890		295.890	4.57	5.09

年 代	村 高 a	諸引高 b	毛付高 a-b	定 米 c	用捨米 d	上納米 c-d	高 免 $\frac{c-d}{a}$	毛付免 $\frac{c-d}{a-b}$
	石	石	石	石	石	石	ツ	ツ
正徳 2 (1712)	64.6987	493.60	597.629	304.832		304.832	4.71	5.10
3	64.6987	62.178	584.809	297.953		297.953	4.61	5.09
4	64.6987	59.456	587.531	299.413		299.413	4.63	5.10
5	64.6987	59.456	587.531	299.413		299.413	4.63	5.10
6	64.6987	59.456	587.531	299.413		299.413	4.63	5.10
享保 2 (1717)	64.6987	540.34	592.953	302.324		302.324	4.67	5.10
3	64.6987	540.34	587.531	302.324		302.324	4.67	5.10
4	64.6987	46.951	600.036	306.128		306.128	4.73	5.10
5	64.6987	46.951	600.036	306.128		306.128	4.73	5.10
6	64.6987	46.951	600.036	306.128		306.128	4.73	5.10
元文 4 (1739)	64.6987	130.431	516.556	261.844	5.878	255.966	3.96	4.96
5	64.6987	156.556	490.431	261.966		261.966	4.05	5.34
寛保 1 (1741)	64.6987	103.858	543.129	276.115	6.000	270.115	4.17	4.97
2	64.6987	103.858	543.129	276.115		276.115	4.17	4.97
3	64.6987	103.858	543.129	276.115	6.368	269.747	4.17	4.97
延享 1 (1744)	64.6987	104.873	542.114	275.610	6.153	269.457	4.16	4.97
2	64.6987	105.159	541.828	275.456	9.744	265.712	4.11	4.90
3	64.6987	112.967	534.020	271.364	6.000	265.364	4.10	4.97
4	64.6987	112.967	534.020	271.364	6.000	265.364	4.10	4.97
5	64.6987	112.967	534.020	271.364	6.000	265.364	4.10	4.97
寛延 2 (1749)	64.6987	112.967	534.020	271.364	6.000	265.364	4.10	4.97
3	64.6987	112.967	534.020	271.364	6.000	265.364	4.15	5.02
4	64.6987	112.967	534.020	271.364	3.166	268.198	4.15	4.97
宝暦 2 (1752)	64.6987	107.360	539.627	274.197	6.000	268.197	4.15	4.97
3	64.6987	107.360	539.627	274.197	6.000	268.197	4.15	4.97
4	64.6987	107.360	539.627	274.197	6.000	268.197	4.15	4.97
5	64.6987	107.360	539.627	274.197	29.100	245.097	3.79	4.54
6	64.6987	107.360	539.627	274.197	5.600	268.597	4.15	4.98
7	64.7169	107.360	539.809	274.237	14.000	260.237	4.02	4.82
8	64.7169	107.360	539.809	274.237	10.000	264.237	4.08	4.90
9	64.7169	107.360	539.809	274.237	10.000	264.237	4.08	4.90
10	64.7169	107.360	539.809	274.237	9.343	264.894	4.09	4.91
11	64.7169	107.360	539.809	274.237	6.345	267.892	4.14	4.96
12	64.7169	107.360	539.809	274.237	9.672	264.565	4.09	4.90
13	64.7169	107.360	539.809	274.237	8.943	265.294	4.10	4.91
14	64.7169	107.360	539.809	274.237	7.443	266.794	4.12	4.94
明和 2 (1765)	64.7169	107.360	539.809	274.237	3.376	270.861	4.19	5.02
3	64.7169	107.360	539.809	274.237	8.376	265.861	4.11	4.93

年 代	村 高 a	諸引高 b	毛付高 a-b	定 米 c	用捨米 d	上納米 c-d	高 免 $\frac{c-d}{a}$	毛付免 $\frac{c-d}{a-b}$
	石	石	石	石	石	石	ツ	ツ
明和 4	647.169	1073.60	539.809	274.237	83.76	265.861	4.11	4.93
5	647.169	1073.60	539.809	274.237	76.72	266.565	4.12	4.94
6	647.169	1071.50	540.019	274.285	94.24	264.861	4.09	4.90
7	647.169	1071.50	540.019	274.285	41.063	233.222	3.60	4.32
8	647.169	1071.50	540.019	274.285	82.696	191.589	2.96	3.55
9	647.169	1071.50	540.019	274.285	93.76	264.909	4.09	4.91
安永 2 (1773)	647.169	1071.50	540.019	274.285	93.76	264.909	4.09	4.91
3	647.169	1071.50	540.019	274.285	153.76	258.909	4.00	4.79
4	647.169	1069.37	540.232	274.332	72.845	201.487	3.11	3.73
5	647.169	1069.37	540.232	274.332	153.76	258.958	4.00	4.79
6	647.169	1069.37	540.232	274.332	16.993	257.941	3.98	4.77
7	647.169	1069.37	540.232	274.332	24.721	249.611	3.86	4.62
8	647.169	1021.27	545.042	271.550	183.76	253.174	3.91	4.65
9	647.169	1021.27	545.042	271.550	57.046	214.504	3.31	3.94
天明 1 (1781)	647.169	1021.27	545.042	271.550	17.649	277.347	4.29	5.09
2	647.169	1149.18	532.251	270.099	183.76	252.323	3.90	4.74
3	647.169	1149.18	532.251	270.099	59.337	210.762	3.26	3.96
4	647.169	1106.19	536.550	272.407	13.941	258.456	3.99	4.82
5	647.169	1095.93	537.576	272.941	81.225	191.716	2.96	3.57
6	647.169	1095.93	537.576	272.941	112.085	160.856	2.49	2.99
7	647.169	1095.93	537.576	272.941	37.777	235.164	3.63	4.37
8	647.169	1098.78	537.291	272.788	69.981	202.807	3.13	3.77
寛政 1 (1789)	647.169	1091.48	538.021	273.180	36.757	236.423	3.65	4.39
2	647.169	1101.30	537.039	272.653	21.341	251.312	3.88	4.68
3	647.169	1101.30	537.039	272.653	32.876	239.777	3.70	4.46
4	647.169	1101.30	537.039	272.653	34.977	237.676	3.67	4.43
5	647.169	1098.63	537.306	272.799	31.376	269.423	4.16	5.01
6	647.169	1098.63	537.306	272.799	38.748	234.051	3.61	4.36
7	647.169	1101.63	537.003	272.637	31.298	241.539	3.73	4.50
8	647.169	1100.18	537.151	272.715	27.376	245.339	3.79	4.73
9	647.169	1100.18	537.151	272.715	39.376	233.439	3.61	4.35
10	647.169	1093.82	537.787	273.057	28.376	244.681	3.78	4.55
11	647.169	1093.82	537.787	273.057	48.659	224.398	3.47	4.17
12	647.169	1093.82	537.787	273.057	31.376	241.681	3.73	4.49
享和 1 (1801)	647.169	1093.82	537.787	273.057	31.436	241.621	3.73	4.49
2	647.169	1093.82	537.787	273.057	55.071	217.986	3.37	4.05
3	647.169	1093.82	537.787	273.057	32.376	240.681	3.71	4.48
文化 1 (1804)	647.169	1093.82	537.787	273.057	34.376	238.681	3.69	4.44

年 代	村 高 a	諸引高 b	毛付高 a-b	定 米 c	用捨米 d	上納米 c-d	高 免 $\frac{c-d}{a}$	毛付免 $\frac{c-d}{a-b}$
文化2	石 647.169	石 110.029	石 537.140	石 2727.14	石 43376	石 229338	ツ 3.54	ツ 4.27
3	647.169	110.626	536.543	272395	47770	224625	3.47	4.19
4	647.169	110.626	536.543	272395	69676	202719	3.13	3.78
5	647.169	110.258	536.911	272589	34.676	237.913	3.68	4.43
6	647.169	110.168	537.001	272637	34.676	237.961	3.68	4.43
7	647.169	109.708	537.461	272884	34.676	238.208	3.68	4.43
8	647.169	109.664	537.505	272908	34.676	238.232	3.68	4.43
9	647.169	104.300	542.869	270.467	34.676	235.791	3.64	4.34
10	647.169	114.277	532.892	270.478	34.676	235.802	3.64	4.42
11	647.169	112.112	535.057	271.614	43.995	237.719	3.67	4.44
12	647.169	111.048	536.121	272.162	34.676	237.486	3.67	4.43
13	647.169	111.048	536.121	272.162	34.676	237.486	3.67	4.43
14	647.169	109.397	537.772	273.049	34.676	238.373	3.68	4.43
15	647.169	109.788	537.381	272.839	34.676	238.163	3.68	4.43
文政2(1819)	647.169	109.788	537.381	272.839	34.676	238.163	3.68	4.43
3	647.169	109.788	537.381	272.839	34.676	238.163	3.68	4.43
4	647.169	109.788	537.381	272.839	34.676	238.163	3.68	4.43
5	647.169	109.788	537.381	272.839	34.676	238.163	3.68	4.43
6	647.169	109.788	537.381	272.839	34.676	238.163	3.68	4.43
7	647.169	109.788	537.381	272.839	34.676	238.163	3.68	4.43
8	647.169	109.788	537.381	272.839	34.676	238.163	3.68	4.43
9	647.169	109.788	537.381	272.839	272.839	272.839	4.22	5.08
10	647.169	144.918	502.251	254.019	254.019	254.019	3.93	5.06
11	647.169	144.918	492.251	254.019	254.019	254.019	3.93	5.16
12	647.169	136.783	510.380	258.387	258.387	258.387	3.99	5.06
13	647.169	128.210	518.959	262.959	262.959	262.959	4.06	5.07
天保2(1831)	647.169	119.261	527.908	267.752	267.752	267.752	4.14	5.07
3	647.169	113.813	533.356	270.677	270.677	270.677	4.18	5.07
4	647.169	109.382	537.787	207.677	207.677	207.677	3.21	3.86
5	647.169	111.511	535.658	271.914	271.914	271.914	4.20	5.08
6	647.169	110.906	536.263	272.239	272.239	272.239	4.21	5.08
7	647.169	110.595	536.574	272.406	272.406	272.406	4.21	5.08
8	647.169	110.345	536.824	272.540	272.540	272.540	4.21	5.08
9	647.169	110.345	536.824	272.540	272.540	272.540	4.21	5.08
10	647.385	110.477	536.908	272.555	272.555	272.555	4.21	5.08
11	647.385	110.477	536.908	272.559	272.559	272.559	4.21	5.08
12	647.385	112.781	534.604	271.322	271.322	271.322	4.19	5.08
13	647.385	113.478	533.907	270.957	270.957	270.957	4.19	5.07



年 代	村 高 a	諸引高 b	毛付高 a-b	定 米 c	用捨米 d	上納米 c-d	高 免 $\frac{c-d}{a}$	毛付免 $\frac{c-d}{a-b}$
	石	石	石	石	石	石	ツ	ツ
天保14	647.385	112.556	534.829	271.452		271.452	4.19	5.08
15	647.385	111.633	535.752	271.948		271.948	4.20	5.08
弘化2(1845)	647.385	111.633	535.752	271.948		271.948	4.20	5.08
3	647.385	111.567	535.818	271.963		271.963	4.20	5.08
4	647.385	111.108	536.277	272.209		272.209	4.20	5.08
嘉永1(1848)	647.385	111.108	536.277	272.209		272.209	4.20	5.08
2	647.385	111.108	536.277	272.209		272.209	4.20	5.08
3	647.385	113.572	533.813	270.892		270.892	4.18	5.07
4	647.385	113.108	534.277	271.194		271.194	4.19	5.07
5	647.385	112.688	534.697	271.371		271.371	4.19	5.08
6	648.281	121.205	527.076	267.000		267.000	4.12	5.07
7	648.281	121.205	527.076	267.000		267.000	4.12	5.07
安政2(1855)	648.281	120.799	527.482	267.218		267.218	4.12	5.07
3	648.281	116.012	532.269	269.783		269.783	4.16	5.07
4	648.281	115.591	532.690	270.009		270.009	4.16	5.07
5	648.281	112.911	535.370	271.448		271.448	4.19	5.07
6	648.281	112.911	535.370	271.448		271.448	4.19	5.07
万延1(1860)	648.281	112.037	536.244	271.912		271.912	4.19	5.07
文久1(1861)	648.281	112.757	535.524	271.526		271.526	4.19	5.07

三沢村については、寛永15年(1638)から万治3年(1660)までの天領の時期に村高が220石～250石であったのに対し、万治4年(1661)には644.393石となり、約2倍半にも増えている。これは万治元年、山崎豊治が成羽に入府した際に行なわれた検地によるものと考えられる。また定米も万治2年を境として100石近く加増されていることも注目される。「成羽史話」によれば、元禄13年(1700)本多中務大輔(姫路藩主)によって成羽山崎領の検地がなされたと記されているが、三沢村の場合、免状で見るとかぎりではその実証はできない。

免率を見た場合、元禄期田方5ツ9分5厘、畑方4ツ6分9厘であるが、宝永期以降、ほぼ田方5ツ3分7厘、畑方4ツ6分9厘で幕末に至っている。これは同支配である隣数村の田方5ツ1分6厘、畑方3ツ7分5厘と比べてかなり高い免率となっている。免状には「口米、夫米右之外也」とあり、附加税である口米・夫米が記されていないため、実際の免率はこれと比較して高くなるはずである。収穫量の6割近くに及ぶ高免率な定米の収納が、元禄期から幕末にかけてたびかさなる天災・飢饉を通して維持されたとするならば、それは非常に苛酷な年貢収奪であったといえる。

しかし、三沢村の耕地状況及び同支配下の隣接の隣数・羽山村の年貢収納形態からいって、免状通りの高い免率が維持されていたとは考えられない。

つまり、成羽藩の場合、これを用捨米という形で農民に還元したのである。免状にも元文期から文







政期にかけて用捨米の記述が見られる。これは、享保6年(1721)7月の大洪水以降、飢饉に対する救恤策として設けられたものが、なかば慣例的に引き継がれていったものと考えられる。つまり、その免率は、天明期まではかなりの変動がみられるが、寛政期以後は12%~13%台を維持し、これによって免率もほぼ4ツ6分~4ツ7分に落ち着くのである。

またその内訳をみると、三沢村内の笹丸組・矢平組・大段組・高原谷組・長通組・大屋敷組・野田組のそれぞれに対して用捨米が振り分けられているほか、村全体(村辻)としても用捨米がほどこされているのである。

ふたたび貢租変遷のグラフに目を向けてみると、文政8年(1825)を境にして免率がふたたび5割以上に上がっているが、これは免状から用捨米の記述が消えていることによっている。しかし、天保7年(1836)から弘化3年(1846)までの「御勘定日記」(皆済目録)によれば、用捨米の記述がみられ、その率も飢饉の時期をのぞきほぼ13%台を維持している。また同支配の願数村についてみた場合にも、幕末期は用捨米がほぼ一定率(これは三沢村と比較してかなり高く18%~20%台である)でほどこされていることなどから考えて、文政期以降もほぼ13%程度の用捨米率、4ツ7分程度の免率が幕末まで維持されたことが考えられる。またこのことは、免状の形式からみてもわかるように年貢割付状を出す時点では用捨米・口米・夫米などはそれに記さず、したがってかなりの高率の貢租となるのであるが、それを皆済する時点で、村況・その年の収穫状況を考えあわせた上で、あらためてその額を定めたものと考えられ、免状にみられる用捨米の記述(朱記)は後年書き添えられたものと考えられることができると思う。

表4-5-2 領家村の貢租(延宝7~正徳5)

年 代	村 高 (a)	諸引高 (b)	毛附高 (c)= (a)-(b)	取米高 (d)	高 免 ( $\frac{d}{a} \times 100$ )	毛附免 ( $\frac{d}{c} \times 100$ )	備 考
延宝7(1679)	338.42	105.166	233.254	119.792		51.4	永荒川成, 毛損
〃 8	〃	121.589	216.831	112.225		51.8	〃 水損
天和2(1682)	〃	98.351	240.069	121.962		50.8	〃
元禄2(1689)	319.20	75.154	251.397	108.877		43.3	御蔵屋敷, 山崩川成, 検見引
〃 4	〃	27.462	291.738	129.823		44.5	〃 〃 〃
〃 6	〃	16.166	303.034	142.426		47.0	〃 〃 〃
〃 7	〃	36.666	282.534	132.791		〃	〃 〃 〃
〃 8	〃	53.246	265.954	127.126		47.8	〃 〃 〃
〃 10	〃	68.02	258.531	122.036		47.2	〃 〃 〃
〃 11	〃	118.783	207.768	98.271		47.3	毛附高の内7.351新田分 〃 〃 〃 〃
〃 12	318.60	93.307	228.406	93.111		40.8	〃 〃 風水損皆無 新田内4.238, 山崩川成
〃 14	319.20	91.848	234.703	106.126		45.2	〃 〃 検見引, 7.351新田分
〃 16	318.60	88.456	237.495	105.569		44.5	〃 〃 〃 〃
正徳2(1712)	〃	106.834	214.879	87.665		40.8	〃 〃 水損皆無 新田内4.238, 山崩川成
〃 4	〃	106.623	215.09	90.273		42.0	〃 〃 検見引, 7.351新田分
〃 5	〃	92.449	229.264	99.687		43.5	〃 〃 〃 〃

七地村の貢租（元禄7～文政5）

年 代	村 高 (a)	諸引高 (b)	毛付高 (c)=(a)-(b)	定 米 (d)	付 加 税 (e) 口 米 夫 米	上納米 (f)=(d)+(e)	高 免 (f/g×100)	毛附免 (f/h×100)	備 考
元禄7 (1694)	699.444	25.815	673.629	284.259	8.528 4.197	296.984		4 4.1	御蔵屋敷引, 川成荒地, 当毛引
宝永7 (1710)	"	88.856	610.588	270.218	8.107 4.197	282.522		4 6.3	" "
正徳3 (1713)	"	67.440	632.004	281.354	8.441 4.197	293.992		4 6.5	" "
" 5 (1715)	"	73.357	626.087	278.359	8.351 4.197	290.907		4 6.5	" "
享保4 (1719)	701.162	59.396	641.766	287.701	8.631 4.207	300.539		4 6.8	
文政5 (1822)	"	151.592	549.570	234.1452	7.0244 4.207	239.8735		4 3.6	定米の内5.5031石は水につき用捨

地頭村の貢租

年 代	村 高	諸引高	毛付高	定 米	高 免	毛附免	備 考
元禄1 (1688)	719.952	59.599	660.353	322.017		4 8.8	永荒川成, 当, 辰毛損
" 6 (1693)	694.778	44.262	650.516	320.704		4 9.3	" 検見引

地頭村のうち八十石の貢租（元禄6～天保3）

年 代	村 高 (a)	諸引高 (b)	毛付高 (c)=(a)-(b)	定 米 (d)	付 加 税 (e) 口 米 夫 米	上納米 (f)=(d)+(e)	高 免 (f/g×100)	毛附免 (f/h×100)	備 考
元禄6 (1693)	82.526	3.828	78.698	38.798	1.164 0.495	40.457		5 1.4	川 成 , 検見引
" 7 (1694)	"	2.654	79.872	40.735	1.222 0.495	42.452		5 3.1	
元文2 (1737)	82.974	13.141	69.833	31.434	0.943 0.498	32.875		4 7.1	
寛延2 (1749)	"	12.856	70.118	30.2505	0.907 0.498	31.6555		4 5.1	
天保2 (1831)	"	20.898	62.076	26.9769	0.8093 0.4978	28.284		4 5.6	
" 3	"	20.463	62.511	27.2336	0.817 0.4978	27.5484		44.7	御 救 引

高山市村の貢租（文政12～弘化3）

年 代	村 高 (a)	諸引高 (b)	毛附高 (c)=(a)-(b)	取米高 (d)	加 米 (e)			御投引 (f)	残 米 (g)=(d)+(e)-(f)	毛附免 (f/g)×100	備 考
					口 米	夫 米	壹分米				
文政12 (1829)	134.864	51.26	83.604	25.2386	0.7586658	0.809184	1.34864		28.1503498	3 3.7	
天保 3 (1832)	134.874	48.151	86.723	25.9735	0.8818	0.8164	1.32442	1.32986	27.66626	3 1.9	
" 7	"	65.621	69.253	20.6709	0.62	0.8092	1.3487	3.8027	19.6461	2 8.4	川成荒地・検見引
弘化 3 (1846)	137.002	46.6875	90.3145	27.1695	0.8601	0.8766	1.3392		30.2444	3 3.5	

藤数村の貢租（宝暦2～明治4）

年 代	村 高 (a)	諸 引	毛附高 (c)=(a)-(b)	定 米 (d)	用捨米 (e)	用捨米率 (e/g)×100	上 納 米 (f)=(d)-(e)	毛附免 (f/g)×100	備 考
宝暦 2 (1752)	239.079	21.605	162.136	74.106	11.00	1 4.8	63.106	3 8.9	
" 3	"	"	"	"	15.00	2 0.2	59.106	3 6.4	田方不熟に付御用捨
" 4	"	"	"	"	13.00	1 7.5	61.106	3 7.7	
" 5	"	"	"	"	"	"	"	"	
" 6	"	"	"	"	17.00	2 2.9	57.106	3 5.2	
" 7	"	"	"	"	"	"	"	"	
" 8	"	"	"	"	"	"	"	"	
" 9	"	"	"	"	14.00	1 8.9	60.106	3 7.1	品々御用捨
文久 2 (1862)	"	"	171.194	"	12.954	1 7.4	61.391	3 5.9	
" 3	"	45.338	"	74.345	15.954	2 1.5	58.368	3 4.1	
元治 1 (1864)	"	"	171.135	74.322	12.823	1 7.3	61.500	3 5.9	
慶応 1 (1865)	"	"	171.035	74.323	"	1 7.2	61.566	3 6.1	
" 2	"	"	171.344	74.389	20.473	2 7.5	54.067	3 1.6	
" 3	"	"	"	74.540	12.823	1 7.2	61.717	3 6.0	
明治 1 (1868)	"	"	173.453	"	"	1 7.1	62.805	3 6.2	
" 2	"	"	175.001	76.628	29.643	3 8.8	46.751	2 6.7	当不熟に付御用捨
" 3	"	"	175.144	76.394	12.823	1 6.8	63.619	3 6.3	品々御用捨
" 4	"	"	"	76.442	"	"	63.645	"	
" 5	"	"	"	76.468	"	"	"	"	

他の村に目を向けてみることにしよう。

七地村・地頭村(八十石)・高山市村は、元禄7年(1694)以降同じ水谷氏の私領として、その支配をうけるのであるが、その三ヶ村の免率を比較した場合、七地村が4ツ6分、地頭村(八十石)が4ツ9分であるのに対し、高山市村の場合、3ツ2分とかなり低いことがわかる。これは七地村・地頭村(八十石)の場合、田高と畑高とがほぼ同じであるのに対し、高山市の場合、畑高が田高の5倍以上もあり、その上田・畑免も他の二村に比べてかなり低く付けられていることなどからして、この免率の差異は、高山市が極端な畑勝ちの村であることにくわえて地味も悪かったことに起因していると推察できる。

また領家村の場合、地頭村とならんで寛永19年(1642)以降嘉永6年(1853)まで天領(文化10年から天保10年まで一時作州津山藩松平氏の預領)であった。この間の貢租負担の状況をみると飢饉の年を除き平均4ツ6分5厘の免率であり、これは年貢率をみるかぎりでは、隣村の七地・地頭村のこの時期におけるものとはほぼ等しいものであったといえる。

次に、附加税である小物成についてみてみることにしよう。

まず天領である領家村の場合、元禄4年(1691)から正徳5年(1715)までの免状には、茶年貢(18.3匁)、楮年貢(61.46匁)、蠟漆年貢(12.36匁)、林年貢(8.67匁)、藪年貢(0.3匁)、草山年貢(9.4.45匁)の計195.54匁の小物成が課せられており、また天明8年(1788)の村明細帳によれば、上記の外、高瀬船運上25匁、口米987匁(定米1石に付米3升宛)、六尺給米0.652匁(高1石に付米2合宛)、御伝馬宿入用0.196匁(高1石に付米6匁宛)、御蔵前入用4889匁(高1石に付銀1分5厘宛)、口銀7.64匁(小物成銀100匁に付銀3匁宛)、廻米運賃(米壹石ニ付銀貳匁八分貳厘宛)の記述がみられ、結局計459.909匁が諸入用として課せられていたことが免状からもわかるのである。

また水谷氏の私領であった七地村の場合、村高を田畑高と小物成高とにわけ、この小物成高に対して税をかけているのである。たとえば文政5年(1822)では、田畑高701.162石、小物成高39.523石であり、この39.523石に対して399.23匁の小物成がかけられており、またこれは依拠の史料からその支配の間は同額であったと考えられる。

現川上町内の他の村については、史料的制約からその年貢収納の実態はつかめず、ここでは二ヶ村・佐屋村・高山村を支配していた旗本戸川氏(撫川陣屋)の年貢収納形態を慶応2年(1866)の「佐屋村免割算用帳」によってふれるだけでとどめる。

それには前書きとして下記の様に記されている。

- 一、田方 本 免 四ツ五分
- 一、畑方 本 免 貳ツ八分
- 一、田方 上中引 高壹石ニ付貳斗づつ

＜附加税＞

- 一、口 米 定米壹石ニ付三升づつ
- 一、夫壹米 高壹石ニ付貳升づつ

### <諸引>

- |         |                    |
|---------|--------------------|
| 一、御免間米引 | 上納米壹石ニ付壹斗壹升づつ      |
| 一、御 救 米 | 田畑御上様定米壹石ニ付五升貳合貳勺当 |

### <諸入用>

- |        |              |
|--------|--------------|
| 御高壹石ニ付 | 貳拾三匁五分       |
| 駄 賃    | 定米壹石ニ付壹匁三分五厘 |

これを具体的に個々についてみると、例えば、彦右衛門の場合田畑持高が1石6斗4升4合あり、その内田畑1斗8升に対して上中引として3升6合、永荒として2升4合が差引かれ、結局1石5斗8升4合の毛付高となっている。そしてその定米が4斗6升4合、口米として1升4合、夫壹米として3升3合の計5斗1升1合となり、さらにこれより諸引として、間米引5升6合、御救引2升3合が差引かれ計4斗3升2合（銀331匁7分8厘）の上納米となっている。定米と上納米を比べてみると3升2合（約7%）上納米が少なくなっており、他の場合もほぼこれと同率を示している。さらに諸入用として上銀2分2厘、諸入用38匁6分3厘、駄賃5分8厘、強目包1匁3分3厘の計40匁7分6厘が加えられ、上納米ともで372匁5分4厘となっている。いまこれを、上記の史料中の寅年御米御直段（御払米1石に付銀765匁、買米1石に付銀768匁）によって米に直してみると、4斗8升5合余りとなる。いまこれを毛付高1石5斗8升4合で割ってみると、30.6%余りとなり、これもまた他の場合とほぼ似かよった数字となっている。また上記諸入用では記されていないが、個人によっては、茸山運上の記述がみられる。これは、「川上郡誌」にも記されているが、佐屋村が比較的山林にめぐまれ、その副産物松茸・栗・五倍子等が多く取れ、換金物として、高山市などに出荷されていたことによると考えられる。

### (2) 「農民層の構成」

ここでは、主として近世後期における農民層の構成を、田畑名寄帳、検地帳、御免割帳に依って考察していくことにする。

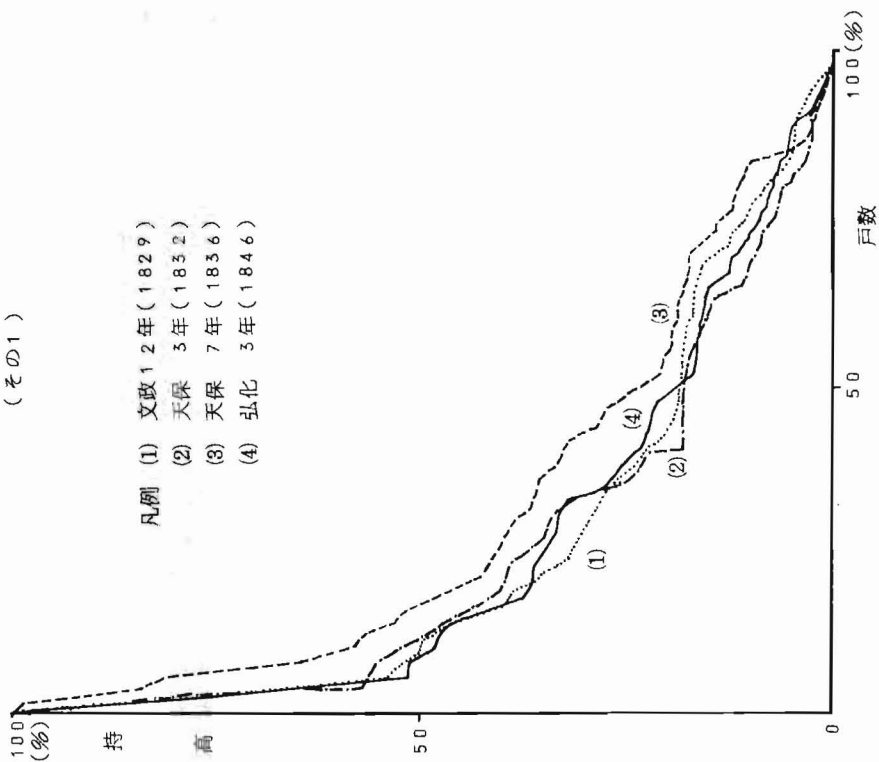
史料的制約によってその背景となる村内概況（耕地状況・農生産・戸口）の把握がきわめて困難であり、またその性格上、無高層の判明するのは領家村文政11年（1828）及び文政12年（1829）の高山市のみであった。しかし、そういったことを念頭においた上での考察であれば、大まかなとらえ方においてまちがいはないと思われる。

図4-5-2、4-5-3、4-5-4はそれぞれ高山市村、二ヶ、佐屋、高山村、三沢、地頭、領家村の農民層構成の概況をX軸に戸数、Y軸に持高をとって図中記載の各年次にわたり、ローレンツ曲線で把握しようとしたものである。

これによると、高山市村の場合、文政12年（1829）から慶応2年（1866）のわずか37年間の年次の把握にすぎないが、ほとんど階層分解はみられない。また天保7年（1836）については、最高高持とその次との差が一斗余りであったため一時逆転したものと考えられる。

また図4-5-3で二ヶ村・佐屋村・高山村の場合についてみると、近世期を通じ同領主支配

(その1)



(その2)

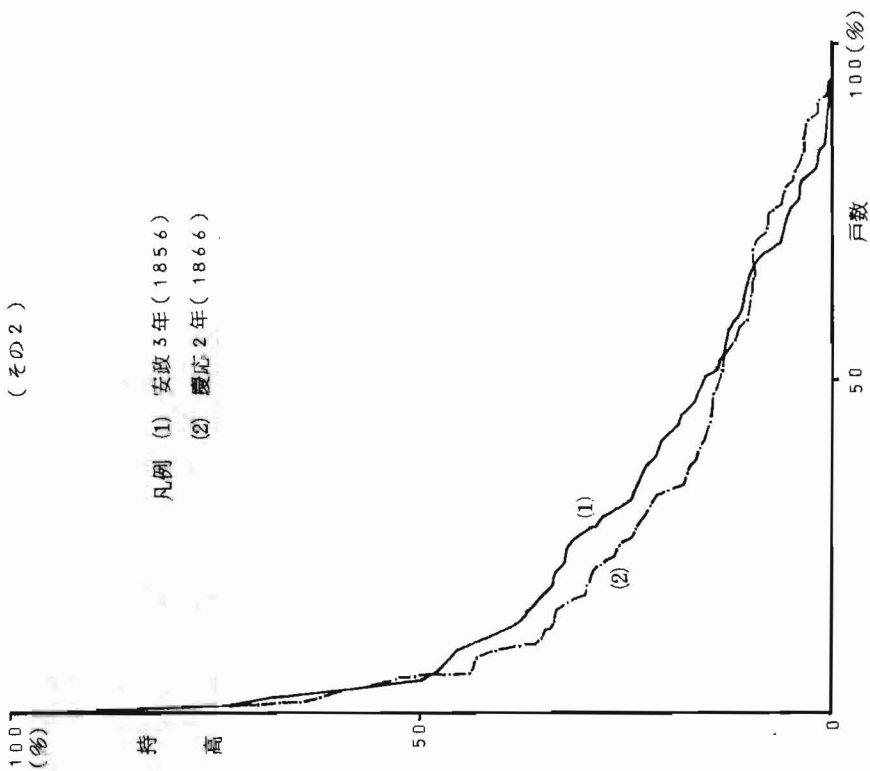


図4-5-2 高山市村の持高階層分布



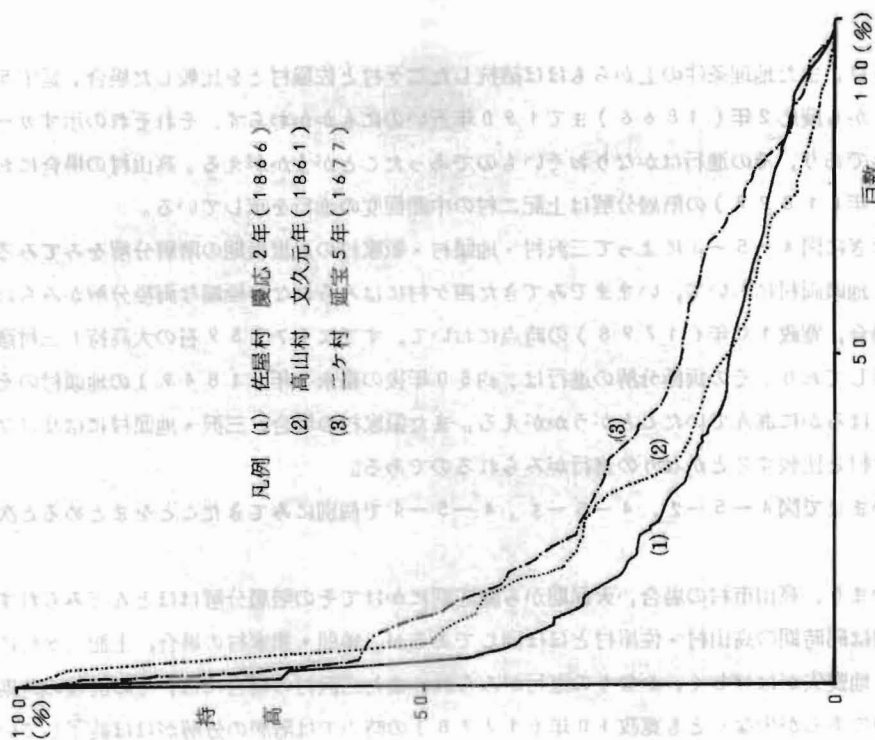


図 4-5-3 二ヶ村・高山村・佐屋村の持高階層分布

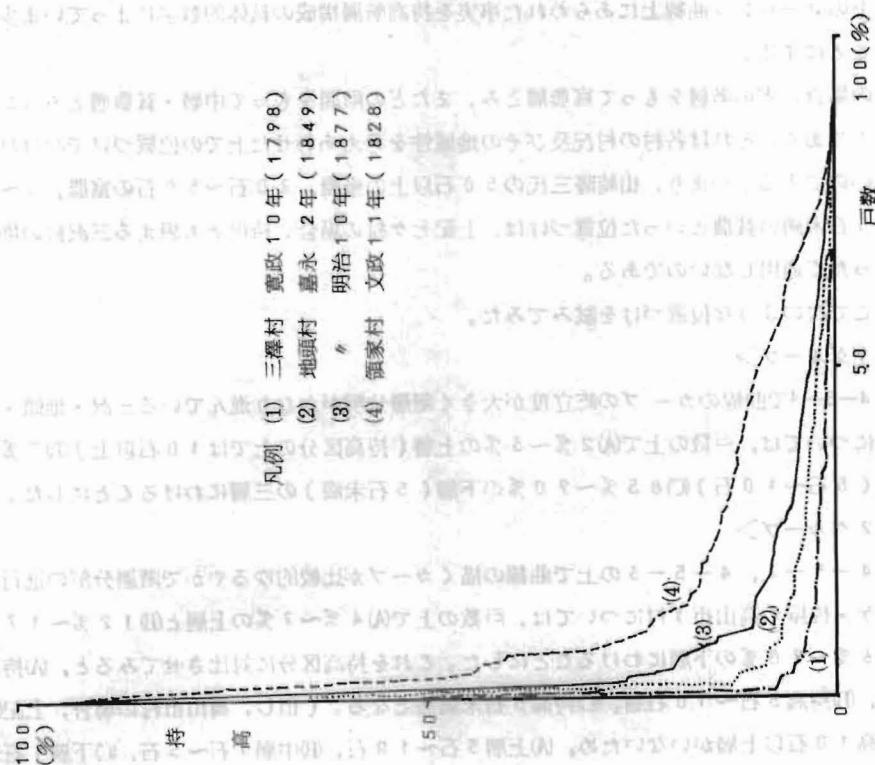


図 4-5-4 三澤村・地頭村・領家村の持高階層分布

をうけ、また地理条件の上からもほぼ拮抗した二ヶ村と佐屋村とを比較した場合、延宝5年(1677)から慶応2年(1866)まで190年近いのにもかかわらず、それぞれの示すカーブの差はわずかであり、その進行はかなりおそいものであったことがうかがえる。高山村の場合においても文政12年(1829)の階層分解は上記二村の中間程度の進行を示している。

つぎに図4-5-4によって三沢村・地頭村・領家村の近世後期の階層分解をみると、特に三沢・地頭両村において、いままでみてきた四ヶ村にはみられない極端な両極分解がみられる。三沢村の場合、寛政10年(1798)の時点において、すでに17239石の大高持(三村彦右衛門)が出現しており、その両極分解の進行は、約50年後の嘉永2年(1849)の地頭村のそれと比較してもはるかに進んでいたことがうかがえる。また領家村の場合、三沢・地頭村には及ばないが、他の四ヶ村と比較するとかなりの進行がみられるのである。

いままで図4-5-2, 4-5-3, 4-5-4で個別にみてきたことをまとめると次のようになる。

つまり、高山市村の場合、天保期から慶応期にかけてその階層分解はほとんどみられず、その進行状態は同時期の高山村・佐屋村とほぼ同じであるが、地頭・領家村の場合、上記三ヶ村に比べ中間層の土地喪失がはげしく、かなりの進行がみられ、また三沢村の場合には、その前後の時期については不明であるが少なくとも寛政10年(1798)の時点では階層の分解がほぼ終了していたことが考えられるのである。

以上のローレンツ曲線上にあらわれた事実を持高階層構成の具体的数字によっていまいし検討してゆくことにする。

その場合、どの階層をもって富農層とみ、またどの階層をもって中層・貧農層とみるかは必ずかしいことであり、それは各村の村況及びその地域性を考えあわせた上での位置づけでなければ意味をなさないのである。つまり、山崎隆三氏の50石以上の豪農、20石～50石の富農、5～20石の中農、5石未満の貧農といった位置づけは、上記七ヶ村の場合、特例とも思える三沢村の場合をのぞいてまったく通用しないのである。

そこで次のような位置づけを試みてみた。

#### <第1グループ>

図4-5-4で曲線のカーブの屹立度が大きく階層分解がかなり進んでいる三沢・地頭・領家村の三ヶ村については、戸数の上で(A)2%～3%の上層(持高区分の上では10石以上)(B)7%～12%の中層(5石～10石)(C)85%～90%の下層(5石未満)の三層にわけることとした。

#### <第2グループ>

図4-5-2, 4-5-3の上で曲線の描くカーブが比較的ゆるやかで階層分解の進行が遅い高山・二ヶ・佐屋(高山市)村については、戸数の上で(A)4%～7%の上層と(B)12%～17%の中農、(C)76%～90%の下層にわけることとした。これを持高区分に対比させてみると、(A)持高10石以上上層、(B)持高5石～10石層、(C)持高5石未満層となる。(但し、高山市村の場合、上記(A)上層に当る持高10石以上上層がいないため、(A)上層5石～10石、(B)中層1石～5石、(C)下層1石未満にわけ

た。)

上記の区分に従って、具体的に持高に対応させることによってまず第1・第2グループについて個別に検討し、その後両者をあわせた考察をしてゆくことにする。

まず第1グループについて領家村では、自村内持高合計が292石足らずで、その比率は97.7%、このうち(A)上層が戸数の上で2.7%、持高の上で16.8%、さらに(A1)として20~30石の高持1戸(0.9%)持高(7.3%)、(A2)10石~20石の高持2戸(1.8%)持高(1.8%)にわけることができる。また(B)中層では戸数(9.8%)持高(24.2%)、(C)下層では5石未満の高持が戸数の上で83.9%、持高の上で56.7%、それに無高戸数(3.6%)が加わる。

表4-5-3

＜第1グループ＞ 三沢村持高階層構成(寛政10)及び入作状況

村 名		三 沢 村			
年 代		寛 政 1 0 年 ( 1 7 9 8 )			
持 高 区 分		戸 数	戸数比率	持 高 合 計	持高比率
	100(石)以上	1	0.6	172.39	27.1
	50~100				
	30~50				
	20~30	1	0.6	270.69	4.3
	10~20	4	2.4	514.33	8.1
	5~10	19	11.8	1294.101	20.4
	1~5	89(1)	55.4	214.962(1.496)	33.8
分	1(石)未満	47(21)	29.2	19.5018(6.0701)	3.1
	無 高	不明			
高 合 計 (石)		161	100	6147.659	96.8
最高高持(石)		172.39			
他村入作(石)		22		756.61	(1.2)
寺社関係(石)		11		127.32	2
村 高 (石)			100	6350.64	100
史 料		三 沢 村 田 畑 名 寄 帳			
備 考		〔注〕三村彦右衛門、五百右衛門の持高を合わせると199459石にも達する。			

三沢村＜寛政10＞

村 名	戸数	持高(石)
二 賀	2	0.526
加 谷	3	1.8771
下黒忠	12	4.082
宗 安	3	0.475
福 松	2	0.606
計	22	7.5661

地頭村持高階層構成（嘉永2年）

村名	地頭（西組）				地頭（東組）				地頭村（東・西組）			
年代	嘉永2年（1849）				〃				〃			
	戸数	戸比率	持高合計	持比率	戸数	戸比率	持高合計	持比率	戸数	戸比率	持高合計	持比率
100石以上												
持	1		85.824		(1)		(81.78)		1(1)	0.5	85.824(81.78)	119(112)
50～100												
30～50												
20～30												
10～20	1		10.120		4		59.615		5	2.4	69.735	9.6
5～10	5(1)		33.187(7.404)		10(4)		65.714(26987)		15(5)	7.1	98.901(34391)	13.7(48)
1～5	24(5)		64.711(13.063)		79(10)		183.907(19915)		103(15)	48.8	248.1017(32978)	34.3(46)
1石未満	31(11)		12.1505(5.785)		56(19)		23.537(10008)		87(30)	41.2	35.6875(15793)	4.9(22)
無高	不明				不明				不明			
高合計(石)	62		205.9925		149		332.2567		211	100	538.2492	74.4
最高高持(%)	85.824				19.992(81.78)				85.824			
他村入作(%)	17		26.252		34		138.69		51		164.942	(22.8)
寺社関係(%)	4		16.734		1		1.502		5		18.236	2.5
その他(%)			1.982								1.982	0.3
村高(%)			250.9605				472.4487				723.4092	100
史料									地頭村田畑名寄帳（西，東組）			
備考	〔注〕その他は上地分，無主，村作を合計したもの				〔注〕持高合計の 内10.68石は飛地八十石の分				最高高持は三沢村横三郎の入作地(8178)			

地頭村持高階層構成（明治10）及び入作状況

村名	地頭村	
年代	明治 10 年	
	戸数	戸比率
100(石)以上	2	1.0
持高	1(1)	0.5
	4	2.1
	9	4.6
区分	31(3)	16.0
	92(9)	47.4
	55(8)	28.4
無高	不明	
高合計(石)	194	100
最高持高(石)	94,899	
他村入作(石)	21	
寺社関係(石)	2	
その他(石)		
村高(石)		100
史料	地頭村田畑名寄帳	
備考	〔注〕 その他は村請分	

＜入作状況内訳＞

A 地頭(西) <嘉永2>			B 地頭(東) <嘉永2>		
村名	戸数	持高(石)	村名	戸数	持高(石)
下大竹	8	8087	下大竹	7	4306
上大竹	5	9168	二賀家	12	10506
二賀	1	0602	領三	5	17581
小角	3	8395	沢井	5	99485
計	17	26252	下大井	1	06
			九名	2	241
			小屋ヶ市	1	2627
			成羽	1	1175
			計	34	13869

A+B 地頭(西,東) <嘉永2>		

A+B 地頭(西,東) <嘉永2>

村名	戸数	持高(石)
下大竹	15	12393
上大竹	5	9168
二賀	13	11108
小角	3	8395
領三	5	17581
沢井	5	99485
下大井	1	06
九名	2	241
小屋ケ市	1	2627
成羽	1	1175
計	51	164942

C 地頭 <明治10>

村名	戸数	持高(石)
二賀	7	20519
九名	1	0104
領三	13	60888
計	21	81511

村 名		領 家 村			
年 代		文 政 1 1 年 ( 1 8 2 8 )			
		戸 数	戸数比率	持 高 合 計	持高比率
持 高 区 分	100(石)以上				
	50 ~ 100				
	30 ~ 50				
	20 ~ 30	1	0.9	21.798	7.3
	10 ~ 20	2	1.8	28.4815	9.5
	5 ~ 10	11	9.8	72.7165	24.2
	1 ~ 5	60	53.5	155.0375	51.8
	1(石)未満 無 高	34 4	30.4 3.6	14.8795	4.9
高 合 計 (石)		108	100	291.913	97.7
そ の 他 (㍊)				6.73	2.3
村 高 (㍊)			100	298.643	100
史 料		領 家 村 名 寄 帳			
備 考		その他は寺社領を含む。			

＜第2グループ＞

高山市村持高階層構成（文政12～慶応2）

年 代	文 政 12 年（1829）				天 保 3 年（1832）				天 保 7 年（1836）			
	戸 数	戸 数 比 率	持 高 合 計	持 高 率	戸 数	戸 数 比 率	持 高 合 計	持 高 率	戸 数	戸 数 比 率	持 高 合 計	持 高 率
持 100(以上)												
持 50～100												
持 30～50												
持 20～30												
持 10～20	(1)		(13,385)				(12,225)					
区 5～10	2	3.7	12,746	9.5	3	5.8	17,898	13.3	4(1)	7.8	24,821(5,304)	18.5
区 1～5	35(9)	64.9	70,929(18,3145)	52.5	32(5)	61.5	65,4165(8,1705)	48.5	32(6)	62.8	71,7225(8,4685)	53.3
分 1(石未満)	16(13)	29.6	7,361(5,05)	5.5	17(13)	32.7	7,057(5,793)	5.2	15(11)	29.4	6,9775(4,883)	5.2
無 高	1	1.8			不明				不明			
合 計	54	100	91,036	67.5	52	100	90,3715	67.0	51	100	103,521	77.0
最高持(石)	6,945 (13,3385)				6,912 (12,225)				6,672			
他村入作	24		36,703	27.2	19		26,1885	19.4	18		18,6555	13.8
寺社関係	2		3,007		2		3,011				3,011	
その他			4,118				15,303				9,3395	
村 高		100	134,864	100		100	134,874	100		100	134,527	100
史 料	辰田畑御免割帳				申年免割帳				高山市村当年御免割帳			



年 代	弘 化 3 年 ( 1 8 4 6 )				安 政 3 年 ( 1 8 5 6 )				慶 応 2 年 ( 1 8 6 6 )			
	戸 数	戸 比 率	持 高 合 計	持 高 率	戸 数	戸 比 率	持 高 合 計	持 高 率	戸 数	戸 比 率	持 高 合 計	持 高 率
持 高 区 分	100 (石)以上 50 ~ 100 30 ~ 50 20 ~ 30 10 ~ 20 5 ~ 10 1 ~ 5 1 (石未満) 無 高											
	3 (1)	5.6	19,321(8,302)	14.1	3	3.9	17,995	13.0	3	3.8	19,84	14.7
	32 (7)	5.92	70,1815(0,7415)	51.2	41 (1)	5.40	91,6105(4,066)	66.4	43 (3)	5.37	87,3425(6,739)	64.5
	19 (14)	3.52	8,923(6,827)	6.5	32 (3)	4.21	14,442(0,434)	10.5	34 (5)	4.25	15,6311(1,142)	11.6
	不 明				不 明				不 明			
合 計	54	100	98,4255	71.8	76	100	124,0475	89.9	80	100	122,916	90.8
最 高 持 高 (石)	7,489 (8,302)				7,489				8,229			
他 村 入 作	23		25,8705	18.9	4		4.5	3.3	8		7,881	5.8
寺 社 関 係	2		3,011	9.3	2		3,011	2.3	2		3,011	3.4
そ の 他			9,695				6,383				1,5588	
村 高		100	137,002	100		100	137,9415	100		100	135,2644	100
史 料	午 御 免 割 帳				辰 年 免 割 帳				寅 年 免 割 帳			

村名	二ヶ村				佐屋			
年代	延宝5年(1677)				慶応2年(1866)			
	戸数	戸数比率	持高合計	持高比率	戸数	戸数比率	持高合計	持高比率
持	100(石)以上							
	50~100							
高	30~50							
	20~30							
区	10~20	5.9	35706	18.5	3	7.0	38196	23.7
	5~10	17.6	58603	30.4	5	11.6	38618	24.0
分	1~5	54.9	83713	43.3	23	53.5	6001	37.3
	1(石)未満	21.6	5247	2.7	12	27.9	465	2.9
	不明				不明			
高合計(石)	51	100	183272	94.9	43	100	141564	87.9
その他(%)			2798	5.1			12553	12.1
村一高(%)		100	193070	100		100	161117	100
史料	二ヶ村検地帳				寅年御免割帳			

高山村持高層構成

村 名		高 山 村 ( 前 組 )				高 山 村 ( 後 組 )				高 山 村 ( 前 , 後 )			
年 代		文 久 元 年 ( 1 8 6 1 )				〃				〃			
		戸 数	戸 比	持 高 率	持 高 合 計	持 高 率	持 高 合 計	持 高 率	持 高 合 計	戸 数	戸 比	持 高 率	持 高 合 計
持	100 石以上												
	50 ~ 100												
	30 ~ 50												
高	20 ~ 30												
	10 ~ 20	4			55.191		20.391		20.391	1	0.5		20.391
	5 ~ 10	14			88.536		42.441		42.441	7	3.5		97.632
区	1 ~ 5	73 (1)			182.33 (1,952)		126.035		126.035	33	16.5		214.5395
	1 石未満	8			3.525		160.4394 (29.75)		160.4394 (29.75)	133 (19)	66.5		342.7694 (31.702)
分	無 高						10.09 (5.525)		10.09 (5.525)	26 (21)	13.0		13.615 (5.525)
合	計	99			329.582		359.3649		359.3649	200	100		688.9469
最 高 持 石	18.613									20.391			
他 村 入 作 ( 〃 )	1				1.952		35.275		35.275	42			37.227
寺 社 関 係 ( 〃 )	10				29.315		0.144		0.144	11			29.459
そ の 他 ( 〃 )													
村 高 ( 〃 )					360.849		394.7839		394.7839				755.6329
史 料													酉 年 御 免 割 帳
備 考													

(注) 他村入作者の内2名は持高が記されていない。

＜入作状況＞

村 名	戸 数	持 高 (石)
高 山 市	1	1.9 5 2
計	1	1.9 5 2

＜高山村後組＞

村 名	戸 数	持 高 (石)
上 大 竹	13 (1)	9.3 4 9
下 大 竹	9	7.5 1 5
東 三 原	4	2.9 4 6
七 地	3	1.3 5 3
大 原	3 (1)	4.1 7 5
高 山 市	3	4.2 9 9
布 賀	2	4.1 2 5
二 賀	1	1.0 8
山 村	1	0.4 3 3
計	39 (2)	35.2 7 5

＜高山村前、後組＞

村 名	戸 数	持 高 (石)
上 大 竹	13 (1)	9.3 4 9
下 大 竹	9	7.5 1 5
東 三 原	4	2.9 4 6
七 地	3	1.3 5 3
大 原	3 (1)	4.1 7 5
高 山 市	4	6.2 5 1
布 賀	2	4.1 2 5
二 賀	1	1.0 8
山 村	1	0.4 3 3
計	40 (2)	37.2 2 7

地頭村の場合、嘉永2年(1849)の時点では西組と東組とに分かれており、その内訳は表4-5-3に示した通りであるが、それをあわせると自村内持高合計が538石余りで74.4%とかなり低い。これは同表によって、地頭村東組において入作者の持高が29%余りをしめ、しかも最高高持(入作者三沢町兼三郎)の持高が17%余りをしめているためである。一応いまはこれを除いて考えると、(A)上層が戸数の上で29%、持高で21.5%であり、さらに(A<sub>1</sub>)50石～100石の高持1戸(0.5%)、持高(11.9%)、(A<sub>2</sub>)10石～20石の高持5戸(2.4%)、持高(9.6%)、に分けることができる。(B)中層戸数比(7.1%)、持高比(13.7%)、(C)下層戸数比(9.0%)、持高比(39.2%)となる。また明治10年(1877)の場合をみると、嘉永2年(1849)と村高を比較した場合、315石余りふえているが、これは明治8年の地租改正によるものと考えられる。しかし一体それがどの程度の率なのかかわからないため、ここでは一応参考程度にとどめておく。これによると(A)(8.2%)(39.7%)、さらに(A<sub>1</sub>)として50石～100石の高持2戸(1%)、持高(14.1%)、(A<sub>2</sub>)10石～50石の高持14戸(7.2%)、持高(25.6%)に分けることができ、以下(B)(16.1%)(22.7%)、(C)(75.8%)(28.1%)となる。

さて問題の三沢村の場合、(A)上層が戸数の上で3.6%、持高の上で3.95%、さらに(A<sub>1</sub>)として100石以上(17239石)の大高持1戸(0.6%)、持高(27.1%)、(A<sub>2</sub>)10石～30石の高持5戸(3.0%)、持高(12.4%)にわかれ、つづいて(B)戸数比(11.8%)、持高比(20.4%)、(C)戸数比(84.6%)、持高比(36.9%)となる。

以上第1グループに属する三ヶ村の場合をみてきたが、つぎに第2グループの二ヶ、佐屋、高山、高山市村についてみてゆくことにする。

二ヶ村の場合(A)上層では戸数比(5.9%)、持高比(18.5%) (B)中層では戸数比(17.6%)、持高比(30.4%) (C)下層では戸数比(76.5%)、持高比(4.6%)であり、以下、佐屋村(A)(7.0%)(27%)、(B)(11.6%)(24.0%)、(C)(81.4%)(40.2%)、高山村(A)(4.0%)(15.6%)、(B)(16.5%)(28.4%)、(C)(79.5%)(47.2%)となる。また高山市においては、文政12年(1829)、天保3年(1832)の場合、先述の地頭村と同様に村内における最高高持が入作者であるため一応除外して天保7年(1836)から慶応2年(1866)についてみると、(A)戸数比(3.7%~7.8%)持高比(13.0%~18.5%)、(B)(53.7%~62.8%)(51.2%~66.4%)、(C)(29.4%~42.5%)(5.2%~11.6%)となる。

いままで細かい数字をならべてきたが、以上のことをまとめてみると、第1グループの二ヶ、佐屋、高山村においては、(B)中層の戸数比率が12%~18%程度に対して、第1グループの三ヶ村の場合7%~12%程度であり、中間層の土地喪失がみられる。また(A)上層についてみた場合、第2グループが戸数比率4%~7%であるのに対し、第1グループでは3%程度であるが、その持高比率を比べた場合、第2グループが19%平均であるのに対し、第1グループでは26%平均とかなり高く、この内、地頭、三沢村だけでみるならば36%と2倍近い差がみられる。こういった上層への土地集積がどこからなされたかを考えた場合、中間層からなされていることは上記の数字からうかがえるが、それと同程度に(C)下層からなされているともいえる。つまり、第1グループの地頭、三沢村と第2グループ及び領家村を比較した場合、戸数比率がそれぞれ75%~80%と85%~90%であるのに対し持高比率においてはそれぞれ47%、38%となっており、この差9%は(B)中層での差8%とほぼ同様となっているのである。三沢村の場合1ヶ年のみであり、それ以前の史料がないため自然隣村の地頭、領家村との比較になってしまうが、この(C)下層から(A)上層(A<sub>1</sub>)(A<sub>2</sub>)への土地集積の傾向はかなり著しいものであったことが推察される。

最後に高山市村についてみると、さきにもふれたが、文政12年(1829)、天保3年(1832)については最高高持が入作者(平川村半左衛門)であり、両年とも自村内持高合計は70%足らずで、この状態は少なくとも弘化3年(1846)まではつづいていたものと考えられる。安政3年(1856)、慶応2年(1866)においては90%に上がり、この比率は他村のそれとほぼ等しいものとなっている。

それでは一体、この20%以上の高はどこへいったのであろうか。

いま文政12年と慶応2年の各層の持高の比率をくらべてみると、文政12年(A)9.5%(B)52.5%(C)5.5%、慶応2年(A)14.7%(B)64.5%(C)11.6%となり、その差をみると、(A)上層で5%(B)中層では12%(C)下層で6%となり、特に(B)中層(持高1石~5石)に吸い上げられたことがわかる。高山市村の場合、飢饉の天保7年をのぞき、村内においては、上層、中層、下層とも比較的安定した状態であったことがわかる。そして、このことは高山市村が、その名の示すように中世期から、東城、上下、高梁、成羽、笠岡、矢掛、福山、府中などを市場圏にもつ商品取引場(地方市場)として、市場

町々の性格をもっていたことの裏づけともなる。

以上、現川上町内の7ヶ村について、農民層の構成の推移をローレンツ曲線及び農民の階層構成表によってみてきたが、一つ特色としてあげられることは、村によって入作率に極端な差がみられるということである。これは入作率の高い高山市村、地頭村への入作状況をみると、前者においては文政期から天保期前半にかけて、平川村の半左衛門が10石以上の入作地（平川村全体では25石-18%あまり）を持っており、また天保後期から弘化期にかけて東三原村からの入作が20石-14%あまりある。平川村の場合、近世全期を通じて天領であり、備中町史によれば、文化年間には平川家は334石の大高持として確固たる地位を確立しており、その農民層分解は、ほぼ終焉に近づいているのである。また後者の地頭村についても同様、隣村の三沢村の横三郎の入作地が81石あまり（三沢村全体では14%程度）ある。

このことから、比較的早い時期に階層の分解がすすんでいた平川村、三沢村などの大高持が隣村のその分解のおそい村々へ入作者として土地集積の手をのばしていったものと考えられる。

しかし、この問題は、特に高山市村のような特殊な条件をもつ他地域の事例が稀少なため筆者の今後の研究課題としたい。

### (3) 「山論」

特に近世農民にとって土地（田畑）はその生きる糧であり、田畑の耕作を通して生きてきたのであった。それだけにその手入は必須のものであり、また事実農民はそのためにあらゆる努力を払ってきたのである。

地力回復のための肥料として一般に用いられたのは緑肥であり、山野（株場）から採取する若枝、下草の類であった。特に、田植前に山野から苅り取り水田に敷込むものについては、苅敷（一番草）とよばれその量も多く、例えば領家村の場合「田畑共肥之爲山之柴草入申候者反ニ付三百把程入申候（略）」（領家村明細帳天明八年）とある如く、反当り三百把前後の柴草を敷込むことによって田地の培養につとめたのである。

こういった多量の下草を苅り取るべき株場が村の内側に存在するものであればまだしも、それが村境に位置するものであった場合、それをめぐる争い（山論）がしばしば起こってくることになる。

ここでは、この「草」をめぐる問題について、安永9年～10年（1780～1781）にかけておこった領家村（天領）と七地村（水谷氏知行所）の持山境をめぐる争論を安永10年（1781）の「済口證文」（七地村亀川巖氏所蔵）によって考察してみたい。

この一件は、七地村の百姓の持山である長塔山に、以前から毎年両村立会いのもとで札を立て、両村の境目を決めていたが、その立て札を領家村の者が取り捨てたことに端を発している。

以下、七地村側の申し立てをみると、

安永9年5月中

「右山（長塔山）之内本平与申所者當村之株場ニ御座候處、領家村之者共入込株苅取候ニ付見咎メ候得者株ヲ捨置逃去り候」

同年6月16日

「(領家村の者ども)大勢罷越大木之分伐荒シ候ニ付仁右衛門并隣家之甚助兩人罷出相咎メ候處、村役人之申付ニ而伐取候由ニ相喝候」

これは、長峯山が、七地村の田畑さらに(甚助・仁右衛門)の屋敷続きの持山であったため、このことを領家村の村役人に糺したところ「一向取合不申」であった。

同年6月23日

「字花内与申山續ニ當村百姓浅平持山之内江大勢罷越殊刈取居候」

これに対して浅平が見咎めたところ、領家村の三五郎が鎌を投げつけたのである。幸いに怪我はなかったが、今度は確たる証拠があるため領家村としても三五郎を七地村に引き渡しその処分をまかせたのである。しかし、そのことをもって領家村は笠岡代官所(代官武嶋左膳)へ訴え、またその御検使が理不尽な者であったため七地村としても再三にわたる領家村の横暴を寺社奉行太田備後守様へ訴訟に及んだのであった。

その間の事情を史料でみると、

「(略)理不尽成取斗仕候義も有之、勿論右ニ付免式角掛ケ合罷有候内之仕業等も甚難心得事共も有之、其上夏以来与り種々難渋を仕義ニ付而者全ク當村持山を可奪取企ミ与奉存候間無是非去戌年九月中太田備後守様江(略)御訴訟奉申上候」

と記されている。こうしてこの一件は江戸評定所で争われたのであるが、そこでの領家村の申し立てをみると、

「領家村之儀者四方共隣村之境者峯限ニ而反別百八拾八町九百廿貳歩御検地帳ニ御記シ有之、年々御年貢御上納仕他村入會与申儀者決而無御座此度七地村ニ而申上候義者決而無御座(中略)殊ニ立石之儀者百姓丹三郎持山ニ而訴訟方七地村之内字八拾石与申所之百姓江数年来預ケ置壺ケ年ニ山手銀四匁宛年々丹三郎江受取殊刈取明白之場所ニ御座候處 困窮之領家村与見掠地所を可奪取巧与乍恐奉存七地村領家村境之儀者何連茂峯通り境ニ而紛鋪義壺ケ所も無之(以下略)」

と述べ、さらに七地村の者が自村持山に入り込み殊を刈り取って困ると逆に訴えており、また山境について、

「山之儀も往古与相守り来候通峯限り境相守以来領家村持山江入込狼藉不仕候様被為仰付被下置旨」を願い出ているのである。

結局この一件は、賀陽郡伊尻野村利平次の取扱もあって安政10年(1781)正月に解決したのであったが、その経過からわかる如く、訴訟は江戸評定所にまで及んだのであり、このことからしても殊場が七地村・領家村両村にとっていかなるものであったかがうかがえよう。

また領家村の場合、先述の天明8年(1788)の村明細帳によれば、「柴之義茂自山無御座最寄与買調申候、百姓少々持山ハ牛馬飼申候」とあり、これは百姓の持山がほとんどなく緑肥を他村から買っていたことを意味しており、これによって領家村の場合、緑肥の採取は天明8年までには減少もしくは皆無となっていたと考えてよいであろう。猶、両村間のこの争いは嘉永7年(1854)の史料「奉差上済口證文之事」(領家村山本芳男家文書)にもみうけられる。(上野保穂)



## 第5章 地方自治の展開

### 1 川上町の沿革

#### イ 明治維新から岡山県の成立まで

明治維新(1867年)当時の町村は、旧幕時代そのままの、自然に発達したいわゆる自然集落を基礎として成立したものであり、それは、ほぼ現在の大字あるいは字に相当するものであった。図5-1-1は、現在、川上町に含まれる地域の大字あるいは字の境界を示したものであるが、これらは、ほぼ維新当時、村と呼ばれていた地域(吉木、瓢箪を除く)と考えられる。



図5-1-1 明治維新当時の川上町

これらの村は、それぞれ、領家村が福山藩、三沢村、下大竹村、上大竹村、大原村が、成羽藩、式ヶ村、佐屋村、高山村が撫川の旗本戸川氏、七地村、高山市村が布賀の旗本水谷氏の所領であり、地頭は、福山藩と布賀によって分割統治されていた。

明治元年(1868年)4月21日、明治政府は新政府の中央集権の確立を目的として、府藩県の設置を決める太政官布告を出した。これは、東京・大阪・京都に府、旧藩府の直轄地に県を設置し、藩は従前通りとするものであった。この布告によって、旧幕領地である地頭村(布賀の方)、七地村、式ヶ村、佐屋村、高山村、高山市村が倉敷県の管轄となり、他は、そのまま藩が設置された。

政府は、さらに近代的な中央集権機構をつくるため、版籍奉還を経て、明治4年(1871年)

7月，廃藩置県を断行した。これによって藩が廃され，県が設置されたが，当初は単に藩の呼称を廃止して，県と称したのみにとどまった。従って，領家村，地頭村（福山の方）が福山県に，三沢村，下大竹村，上大竹村，大原村が成羽県となった。

その後，行政上の必要から県の合併がおこなわれ，明治4年11月15日，現在の川上町の地域はすべて深津県に吸収された。明治5年（1872年）6月7日，深津県は小田県と改称され，さらに明治8年（1875年）12月10日，小田県は，岡山県に合併され，川上町はすべて岡山県に吸収されることになった。

明治9年（1876年）4月18日，北条県を廃し，備後6郡を広島県に編入し，現在の岡山県が成立した。

#### ロ 大区小区制の実施

明治4年（1871年）4月4日，戸籍法が公布され，翌明治5年（1872年）2月1日を期して実施されることになったが，この戸籍法に伴う戸籍事務を行うために，数ヶ町村をもって区を画す，いわゆる大区小区制が実施された。これにともなって，明治5年3月，深津県も区の画定を完了し，現在の川上町の地域は図5-1-2のように区画された。

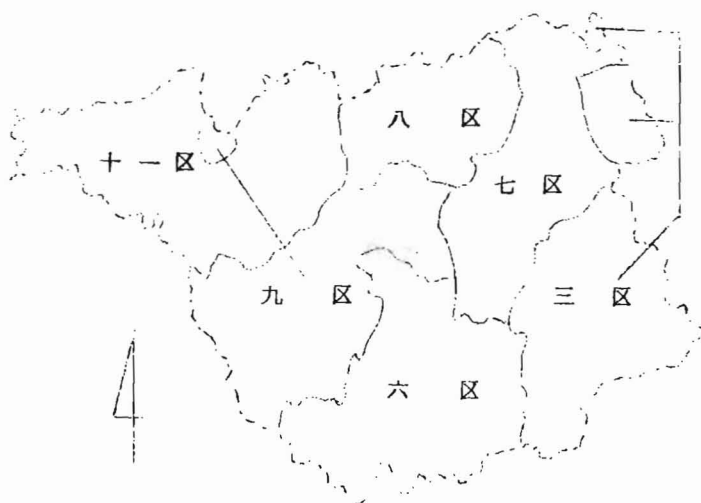


図5-1-2 大区小区制施行後の川上町

#### 深津県第九大区

- 小三区・・・三沢村（吉木・脚数も含む）
- 六区・・・二ヶ村，佐屋村
- 七区・・・地頭村，領家村
- 八区・・・七地村
- 九区・・・上大竹村，下大竹村，大原村
- 十一区・・・高山村，高山市村

当初、区は戸籍事務のためにのみ編成されたものであったが、区ごとに戸長・副戸長が設置されたとともに、実質上、地方行政上の区画となった。このような区は、後年設置された会議所または会所、あるいは区務所戸長役場等の管轄下となったが、行政単位たるその性格を失わず、明治11年(1878年)の郡区町村編成法の施行まで及んだ。

戸籍法の実施に伴う戸籍事務のために、大区小区制が実施されたということは、既存の町村規模が自治行政を担当するには弱小であることを意味し、同時に、町村合併の必要性が、潜在的に認められていたことを意味していた。このようなことから、戸籍法の公布を契機に、政府も積極的に町村合併を促進したため、後年の抑制措置にもかかわらず、かなりの町村合併が見られた。現在の川上町の地域でも、明治9年(1876年)10月31日、式ヶ村と佐屋村が合併して仁賀村に、明治10年(1877年)7月28日、七地村と北隣の布瀬村が合併して七瀬村となっている。(しかし、七瀬村は明治14年(1881年)9月2日にもとのように分村している。)

#### ハ 郡区町村編制法の公布

明治11年(1878年)、郡区町村編制法の制定、実施によって、大区小区制によって行政単位としての性質を失っていた町村が、行政上の基礎単位として復活することとなった。この郡区町村編制法は、府県内の行政区画を郡・区・町村の三段階に分け、明治初年以來の地方制度の欠陥を是正しようとするものであった。すなわち、これは、現実の社会的・経済的關係に古い伝統を持つ町村の実態を無視したため、幾多の障害を生じつつあった大区小区制の是正措置としてとられたもので、明治初年以來の急激な地方行政改革は、整理の段階に入った。

#### ニ 市制町村制の施行と町村合併

明治21年(1888年)4月17日に公布された市制・町村制は、市町村に自治権を与えてその法人格を認め、健全な地方自治の発達を図ることを目的としていた。したがって、この新しい制度の実施に先だって、新制度の施行に耐えうる強力な地方自治団体をつくるという構想のもとに、大規模な町村合併がおこなわれた。

岡山県においては、明治21年5月、市制町村制実施取調掛を県庁内におき、同時に取調委員を任命して、町村合併に関する内務大臣の訓令及び、町村郡市区画標準等を内示し、合併見込案の提出を指示した。県は、これら各郡区長の調査報告に検討を加え、市制町村制実施取調委員等の実施調査の結果をも考慮に入れた上で、新市町村区域画定策を作製した。この画定案を各郡区長、戸長その他の關係に諮問し、さらに最終的な調整を加えた上で、明治22年(1889年)1月、新市町村区域画定書、すなわち、町村合併計画書が作成された。

この町村合併計画書にしたがって、現在の川上町の地域には、明治22年6月1日、手荘村、大賀村、高山村が合併成立した。手荘村は、地頭村、領家村、三沢村、七地村、隠数村の内字本村(図5-1-1の隠数)・佐々木村の内字吉木(図5-1-1の吉木)が、大賀村は仁賀村・上大竹村・下大竹村が、高山村は高山村・大原村・高山市村が合併して成立したものであった。新町村編成理由としては、主として、財政力の貧弱さと、生活圏の一致が上げられている。この明治22年の合併によって成立した行政区画は、以後昭和29年4月1日の川上町成立まで続いた。(手荘

村は、昭和25年4月1日、町制を施行して手荘町となった。)



図5-1-3 明治22年6月1日以降の川上町

#### ホ 川上町の成立

##### ① 国および県の動き

昭和22年(1947年)5月3日の地方自治法施行以後、地方公共団体においては、行政上の自治が強められたが、その一方で町村の規模が新制度下において負担すべき義務に比較してあまりに弱小であり、町村合併が急務となっていたが、昭和28年(1953年)9月1日公布された町村合併促進法の施行にともなって町村合併は一段と促進された。

県は、町村合併促進法成立後、その趣旨の徹底を地方事務所を中心としてはかっていたが、次に昭和28年11月24日、町村合併促進審議会を設置した。町村合併促進審議会は、昭和29年(1954年)1月、各町村からの「町村実態調査表」や各地方事務所からの報告を基礎として、町村合併計画を策定した。

これにより、手荘町、大賀村、高山村の合併が計画された。

##### ② 関係町村の動き

数年前から、各町村は、町村財政の現状にかんがみ、適正規模町村による強力な財政による自治行政を希求していたが、地方事務所を通じての県の指導幹施や町村合併促進法の公布、施行を契機に、町村の合併が具体化されてきた。

昭和28年8月28日、川上郡町村長会において、高梁地方事務所長から示された川上郡町村合併案をもとに、関係町村で協議を重ねた結果、昭和29年2月17日、手荘町・大賀村・高山村の3ヶ町村で合併を推進することに決定し、川上郡南部地区町村合併協議会を設置した。当初、日里村を含む4ヶ町村の合併が関係町村で計画されていたが、日里村は最終的に不参加となり、3ヶ町村のみによる合併となった。川上郡南部地区町村合併協議会は合併に関する諸事項を検討し、同時

に、住民の意見を調整していたが、昭和29年3月11日手荘町議会、高山村議会で合併が議決され、翌3月12日には、大賀村議会においても議決された。これによって、3ヶ町村は、同日合併申請書を知事に提出し、3月15日、県議会の議決を経て、昭和29年4月1日、新川上町が誕生した。

### ③ 合併に関する紛争

旧大賀村佐屋地区(図5-1-1)は、旧大賀村の南端にあって、旧後月郡明治村に隣接した人口約260人の部落であったが、隣接する旧明治村大字佐屋とは道一筋をもって界する吉備高原特有の平坦な分水嶺上の部落であり隣村とは同一の生活圏内にあった。そのためこの部落は、明治9年10月式ヶ村と合併して仁賀村となって以来、明治末期、大正末期及び昭和23年と、すでに3回分村運動を起していたが、その都度、村議会は、これを否決あるいは保留していた。しかし、昭和28年町村合併促進法が施行されると、町村合併の世論が高まるにつれて、部落大会を開き、分村委員を選出し、昭和29年2月27日、請願書を議会に提出して再び分村を要求した。さらに川上郡南部地区町村合併協議会長、高梁事務局長、岡山県知事に対して分村陳情をおこなった。大賀村議会は、この請願書を受理し、審議したが、分村を認めれば、他の地区の動揺をきたすと顧慮して決定を保留し、地区代表との話合、村長・正副議長は地方事務所長・地元県議員の幹施による慰留交渉を行なったが、合併に至るまで、交渉は妥結するに至らなかった。昭和29年3月12日、大賀村議会における合併の議決は、佐屋地区出身議員1名の反対のまま、満場一致の議決をみることができなかった。

しかし、新川上町の成立後、1ヶ月後には後月郡明治村も芳井町と合併したため、佐屋地区の分村要求の声も漸次平穏となり、合併後の僻遠地道路開設等の事業施行によって、問題は一段落し、現在に至っている。

（今井 史 苗）

## 2 町政の変遷

### イ 明治22年町村制施行まで

① 明治5年、大区小区制の施行により、大区に区長・副区長、小区に戸長、各村に保長が置かれることとなった。小田県においては、明治6年癸酉12月「正副戸長並保長諸緒方職務制限」を制定公布し、各々の職務を規定している。正副戸長の職務は次の通りである。

一 正租雑税を取立上納の期限を不怠様専ら其責に任する事

一 官林を保護する事

但、損木或は山焼等有之節は速に上申可到事

一 溝川筋を浚疏する事

一 区内節義・篤行の模範となるべき者は検査の上速に上申可到事

一 道路堤防橋梁修繕を不怠事

一 区内若し不良の徒有之は厚く教諭を加はへ遊子逸惰之者無之家業出精益淳良の風儀に移り候様  
兼て注意可到事

一 区内課寡孤独廢疾の者等総て窮乏の者には精々扶助の術策を盡し、自然届兼たる時は之を県庁  
へ上申する事

但、棄児養育等を処分する事

一 死生嫁娶等人口の出入は戸籍の制規に照し厳密に可取調事

但、訴訟等を始め総て公裁に属する件へは関涉せざる事

一 徴兵年齢の検査学校生徒の取調を始め、学費に給する等の事を掌る事

一 獵銃税を始め車馬供婢税等一切其他芸娼妓并芝居相撲等諸興行物の税金無遅延取纏め候事

一 隣区親和互に扶助保護して聊かも隔絶在へからざる事

但、区内時々立回り万事取締りを厳にする事

一 保長并諸締方勤惰正否を糺し其進退申請する事

一 諸御布告諸規則類一區中不洩様懇諭篤達し、且配下の諸願何届を受次聊も下情を壅蔽する等の  
權威ケ間敷儀有之間敷事

但、諸罰則に悖戾する者は速に之を上申する事

一 管内十七郡を十七大区に分けて、一大区一名ずつ惣代として各区正副戸長より一月更番に庁下  
へ相結め御布告類の伝達を始め各区に関する大小の事件を悉く受次配達する事

但、庁下諸総代の給料は民費にて、一日五十錢を給する事

一 給料各小区区戸長十三石

副戸長十一石 (以下略)

また、保長職分については、「正副戸長の指揮を受け区内の事務は勿論道路堤防橋梁等の修繕を専ら注意する事」と規定している。明治7年、大区小区を管轄するものとして会議所が設けられた。

## ② 戸長役場の設置

三国統一の後、明治10年11月8日、岡山県は県内各会議所並区戸長、保甲長を悉く廃止し、区務所及び戸長役場を設置し、区務所に区長1名、戸長役場に戸長2名、各町村に副戸長を置いた。副戸長の職制を見ると、「常に町村に在て実地の諸務を担当し、戸長役場へ往来細大協議し、人民の諸申牒を審案連署することを掌る」と規定されており、人民の諸願は、すべてこの副戸長によって取扱われ、戸長役場に差出されていたことがわかる。

## ③ 郡区町村制施行下

廢藩置縣後の地方制度において、町村は、現実の社会的經濟的生活關係の場として、固い結束をなしていたにもかかわらず、小区の中に埋没するものであり、様々な無理が生じていた。その打開策として、明治11年9月20日、郡区町村編成法が制定され、再び町村が行政の単位として前に出てきた。

④ 郡区には郡長・区長各1名、毎町村に戸長各1名が置かれることとなり、役所開設までは、当分副戸長が事務を取り扱うことが指示された。明治11年12月3日丙達第98号が川上郡



各村に配布され、「今般町村の公選を以て戸長申付候に付従前の副戸長相廢し候条、自今総て戸長の指揮を可受比旨布達候事」により、新たに戸長によって町村の事務がなされていくこととなった。

#### ⑤ 戸長公選

丙第98号達により、戸長は公選となった。明治11年に公布された戸長選挙規則の概要は次の様である。まず、「町村戸長は該町村会の公選を以て、県令認下の上之を命す。但、戸長は町村会議会の任ありとす。」「戸長は任期を4年とす。」「戸長に選ばるべき者は町村会議員に選ばれるべき権あるものにして、方正廉直及筆算等に差支なく、其職務概目に掲ぐる事務の任に堪ゆる者たるべし」とあり、戸長は町村会議員が選挙された後、その町村会議員の公選によって選挙される。明治12年5月5日普達甲第69号により、この明治11年の規則は廃止され、新しく選挙規則が定められた。それによれば、「町村戸長は該町村の公選を以て県分認可の上之を命す。」「戸長を選挙すべき者は該町村居住の戸主及満1年以上全戸寄留の戸主たるべし。」と変化している。しかし、この公選制度も明治16年2月15日岡山県甲達第15号達をもって廃止され、戸長は県分が選任することとなった。

#### ⑥ 連合戸長役場

甲第15号は、戸長役場区域並戸長以下配置方の改正も指示し、従来町村においていた戸長を町村の大小に応じて、数町村に1名、また戸町役場毎に用掛1名を置き、戸長の補助代理をさせることにした。

#### ⑦ 戸長職務の概目は次のとおりである。

- 一 布告布達を町村内に示す事
  - 二 地租及諸税を取纏め上納する事
  - 三 戸籍の事
  - 四 徴兵下調の事
  - 五 地所建物船舶買入書入並に売買に奥書加印の事
  - 六 地券台帳の事
  - 七 迷子捨児及行旅病人変死其他事変のあるときは警察署に報知のこと。
  - 八 火災又は非常の難に遭ひ目下窮迫の者を具状する事
  - 九 孝子節妻其他篤行の者を具状する事
  - 十 町村の幼童就学勧誘の事
  - 十一 町村内の人民の印影簿を整置する事
  - 十二 諸帳簿保存管守の事
  - 十三 官費府県費に係る河湾道路堤防橋梁其他修繕保存すべき物に就き利害を具状する事
- 右の外府県知事県令又は郡区長により命令する所の事務は規則又は命令に依て従事すべき事（以下略）

#### □ 町村制施行後の村議会

#### ① 町村議会



明治9年以来、10年12年13年14年17年18年と県布達の町村会規則は、何度も発布、廃止、改正がくり返されてきたが、明治21年4月17日、中央政府により法律第1号市制町村制が公布せられた。

㉑ この法律第1号町村制によって、組織及び選挙の様子を見てみよう。

「町村会議員は其町村の選挙人其被選挙権のある者より之を選挙す。其定員は其町村の人口に準し・・・以下略」とあり、明治22年の町村合併後、手荘村、大賀村、高山村の場合いずれもその定員は12人である。次に、「選挙権を有する町村公民は総て被選挙権を有す。」とあるが、この選挙権を有する町村公民とは「帝国臣民にして、公権を有する独立の男子2年以来町村の住民となり其町村の負担を分任し、及其町村内において地租を納め若しくは、直接国税2円以上を納める者」であり、「満25歳以上にして一戸を構へる者」である。また被選挙権についてだが、「1.所属府県郡の官吏、2.有給の町村吏員、3.検察官及警察官吏、4.神官僧侶及其他諸宗教師、5.小学校教員」は公民でもその権利がなかった。「選挙人は分て2級と為す」のごとく、等級選挙であり、「議員は名誉職とす。其任期は6年とし、毎3年各級に於て其半数を選挙」と規定している。

㉒ 職務権限及び処務規程

町村会の議決すべき概目は次の通りである。

- 一 町村条例及規則を設け並に改正する事
- 二 町村費を以て支弁す可き事業
- 三 歳入出予算を定め予算外の支出及予算超過の支出を認定する事
- 四 決算報告を認定する事
- 五 法律勅令に定むるものを除くの外、使用料、手数料、町村税及夫役現品の賦課徴収の法を定むる事
- 六 町村有不動産の売買交換譲渡並質入書入を為す事
- 七 其本財産の処分に関する事
- 八 歳入出予算を以て定むるものを除くの外新たに義務の負担を為し、及権利の棄却を為す事
- 九 町村有の財産及営造物の管理方法を定むる事
- 十 町村吏員の身元保証金を徴し並基金額を定むる事
- 十一 町村に係る訴訟及和解に関する事

㉓ 「明治22年度村会議決書、川上郡手荘村役場」資料より当時の村議会で設けられた条例を見てみよう。

名誉村長助役条例議決 条例第壹号

第壹条 本村ハ制第五十二条但書ニ依リ助役ノ定員ヲ式名トス

第貳条 制第五十六条第一項ニ依リ本村助役ノ内壹名ヲ有給吏員トス

但、年額七拾式円ヲ給ス

第參条 助役ノ席次ハ名誉職助役ヲ以テ上席トス

とあり、このように手荘村では、村長は名誉職、助役2名のうち1名は有給としている。なお、同

年の大賀村の議決書によれば、「有給村長助役条例」を議決し、「村長ニ年額八拾円以上百貳拾円以下、助役ニ年額四拾円以上六拾円以下ヲ給ス」としており、各村、各々独自に条例を出し、とり決めているのがわかう。

常設委員条例議決 条例第貳号

制第六拾五条及第七拾四条ニ依リ勸業・教育・救済・衛生・土木・村有財産管理事務ニ関スル常設委員ノ組織及職務権限ヲ定ムルコト左ノ如シ

第壹条 本村常設委員ノ定員ヲ拾貳名トス

第貳条 常設委員ノ撰挙ハ村會議員ヨリ六名、公民中撰挙権ヲ有スル者ヨリ六名ヲ特撰スルモノトス

但、議員ヨリ撰出スルモノ議員ヲ退クトキハ委員タルノ資格モ共ニ消滅スベシ

第參条 委員ノ任期ハ三年トス

但、欠員ノ生ジタルトキハ補欠撰挙ヲ行フモノトス

第四条 委員ハ委員会ヲ開キ左ノ事項ヲ審査若クハ評決ス

村会ニ附セラルヘキ委任ニ関スル議案下調ノ事

委任事項ノ報告及決算報告下調ノ事

第五条 委員ハ左ノ事務ヲ分掌シ其施行ノ任ヲ分担スル者トス

勸業事務・教育事務・救済事務・衛生事務・村有財産管理事務・土木事務

第六条 委員長ハ村長又ハ助役ヲ以テ之レヲ任シ委員会ハ委員長ノ招集スベキモノトス

第七条 常設委員ニハ一名ニ付年金壹円以上五円以下ノ報酬ヲ給ス

(以下略)

このように7条例を設けており、当時の委員会の組織や職務の様子がうかがわれる。また次には、「手荘村会會議細則議決」として、村議会の会期・席次・議事進行・発言・採決などの点について、きめ細かな規則が6条定められており、さらに「収入役及書記任用ニ関スル規則」「区長設置規則」と続いている。これは、大賀村・高山村においても同様で各村会は、町村制に基いて種々の条例・規則の制定、その他職務を成しとげていき、村議会の運営・組織・機構等除々に確実なものにしていったことであろう。

④ 次に村會議員の出身階層をみてみよう。

ここで任意に、「明治26年度地方税戸数割前期賦課戸別等級表、大賀村」をとり出して、表にした。この表から、ほとんどの議員が上級階層の出身であることがわかう。

ところで、明治21年度の町村制は、その後も改正が加えられ、大正10年には、選挙権および被選挙権の資格要件が、直接市町村税を納める者となり、大正15年には納税要件が撤廃された。また等級選挙制度も大正10年には、平等選挙となり、大正15年に廃止された。こうして参政権も大きく拡張した。

表5-2-1

戸 別 等 級	議 員 数	村 内 全 数
1 ～ 5 (等)	6 (人)	7 (人)
6 ～ 10	3	17
11 ～ 15	3	47
16 ～ 20	1	67
21 ～ 25		136
26 ～ 30		131
31 ～ 35		127
36 ～ 37		39
	13	571

<注>

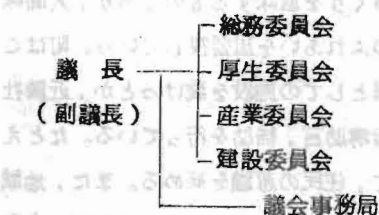
村内全数には議員を含む

#### ハ 現在の町政

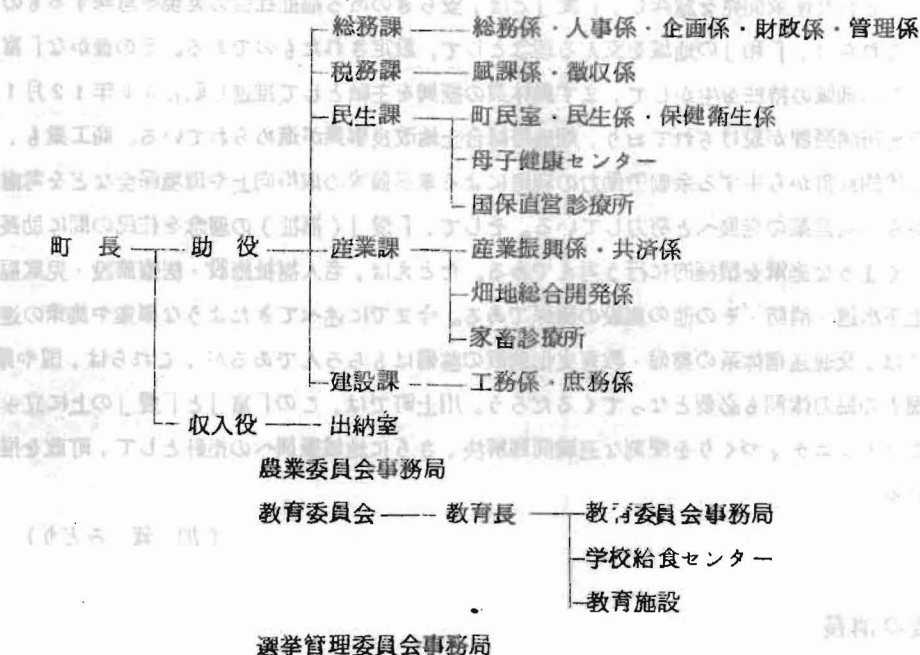
① 昭和29年4月1日合併により、新川上町が誕生した。町役場は手荘村大字地頭1819-1に設けられ、大賀・高山両村役場に支所が設けられた。昭和29年5月7日には、町議会議長・副議長・教育委員の選挙、そして川上町議会会議規則が実施されたのをはじめとして、急速に新町の行政組織も整えられていき、現在に至っている。

## ② 行政組織

### 議決機関（定員18名）



### 執行機関



なお、町の行政事務の補助機関として、各部落単位に部落連絡員、愛員委員等を委嘱している。また納税者の自主組織として、納税貯蓄組合を設置し納税意識の高揚と税完納に活動している。

### ③ 現在の問題 —— 過疎問題を中心として

#### ④ 過疎の実状

近年のめざましい高度経済成長により、川上町においても、商工業の振興・産業の推進など住民の所得増加への努力がなされることによって、生活水準は著しく向上した。しかし、反面、その陰には、町の主産業である農業は兼業化し、農村人口は都市へと流出、労働力の婦女子化、高齢化、農地の荒廃などの問題が起ってきている。そして、精神面においても、心より物へ価値を置くような考え方がはびこり、人々の交流もしいに人間的要素・連帯感などが失われていく状況にある。そのために、従来の農村社会のあり方が崩壊しようとしており、今後の川上町政に大きな問

題を投げかけている。

#### ⑤ 「和」のコミュニティづくり

川上町では、この問題解決のため、「和」、「富」、「愛」という3つの理念を町政の推進の基本にうち出している。「和」とは心のふれあう近隣社会づくりを意味するものであり、人間味あふれる快適な生活環境樹立への指針として、地域住民の心のふれあいを重要視している。町はこのコミュニティづくりの具体的な施策としては、住民交流の場としての施設を設けるとか、近隣社会と町との接触ができるような総合的な窓口を設けるなど、指導助言、補助を行っている。たとえば、『川上町「和」の地域づくり指針』という冊子を発行して、住民の意識を高める。また、地域住民の計画による「和」の地域施設整備の事業費には補助金を交付するなどである。そして、「富」とは、調和のとれた産業開発を意味し、「愛」とは、安らぎのある福祉社会の実現を意味するものであるが、これらは、「和」の地域を支える理念として、設定されたものである。その豊かな「富」づくりは、この地域の特性を生かして、まず農林業の振興を主軸として推進し昭和48年12月1日には、畑地帯開発課が設けられており、畑地帯総合土地改良事業が進められている。商工業も、農林業の近代的経営から生ずる余剰労働力の利用による兼業農家の取得向上や環境保全などを考慮に入れながら地場産業の発展へと努力している。そして、「愛」(福祉)の理念を住民の間に助長・育成していくような施策を積極的に行う考えである。たとえば、老人福祉施設・医療施設・児童福祉施設・上下水道・消防・その他の施設の確保である。今までに述べてきたような事業や施策の達成のためには、交通通信体系の整備・教育文化施設の整備はもちろんであるが、これらは、国や県及び広域圏との協力体制も必要となってくるだろう。川上町では、この「富」と「愛」の上に立った「和」のコミュニティづくりを深刻な過疎問題解決、さらに地域振興への指針として、町政を推し進めている。

(加賀みどり)

### 3 財政の消長

#### イ 町村制実施以前の財政〔明治18—22年(1885—89)〕

この期の収支規模・類型を領家村のものでみてみよう。